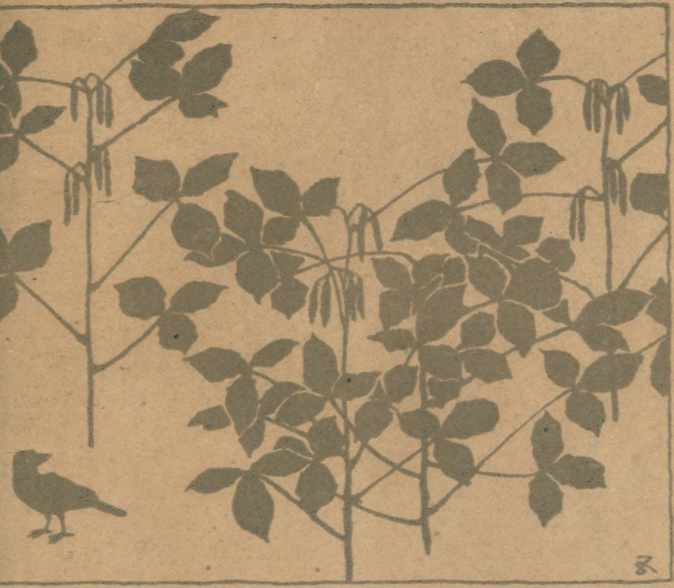




（岡山製本）

大正四年七月二十日印刷
大正四年七月廿三日發行

有朋堂文庫
近代歌謠集（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

つらゝよりつらきと云ひつらねたる詞づかひいとめでたし、さてこのあたり忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかなといふ歌の心ばへあり味ふべし（原註）

慕景集、道灌、山かづらいや年のはの末かけて霞む方より春や立つらん（原註）

せきかねて落つる涙もやがて氷柱（つらゝ）となる寒夜の物うさはさるものにて、戀に堪へかねし身のつらさには、なか〳〵命はをしからず、今は死なましと思へど、死にては吾妄執の恨みを負ひて其男のまた死なん事もいとをし、さるにてもいかにせん、誠に戀しう思ふ人は後生の罪深くも、吾をば思ひもくれぬことの悲しさにわびはてゝ、げに物憂き世ぞと今は思ひすて、悟（さとり）の道に入りて迷ひをも明（あき）らめたりといへる意を夜の明くるによせていふ也、山かづらは曉がた山の端にたな引く雲をいふ事なれば、卽（やがて）明方のことを知らせ、又うきよといふに憂夜（うきよ）の意を帶（もた）せて、はじめより人を待つとて、物うき夜（よる）のさまをいひもて來つるを、明方のことにて結（むす）めしなるべし、まことによく文法を立て、さて優艶なる詞の中に深意をこめだる妙作、かゝる類（たぐひ）の歌の上等にぞ定め居（おか）まし

やといつそせきかねて

さなきだにとは又上をうけて、さやうなくてさへといふ也、心も遠き夜半の鐘とは男を待つとてとやかくの物思ひに氣どほくおちいるばかりなるに、まして遠寺の鐘聲の身にしみて聞ゆるが悲しきと也、枕にひゞくはやがてその鐘の音を兼ねてまた霰の音にいひ連けたり、さて霰の音はら〳〵と鳴るが、もしや男の來る音かと、耳を立てゝ聞けども、さるにてもあらねばなか〳〵悲しくてこらへかねて泣くなり、但しせきかねては涙の落つるを堰きかぬるよしなれど、俗に泣きぬべく胸のふたがるをせきがくる、或はせきあげて泣くなどいへるせきの意をも兼たり、このあたり句句みな上下鎖りつゞけたれば、句を裁ちわけて聞き、又寄せ合せて其意を解すべきなり凡そ世の戀する人は四季にわたりていつとても思ひのやすき時はなき事なれど、寒夜には殊に戀情のまさるよし雜歌にも多くよむ事也、さればかくせちなる思ひをいはんとて、寒夜のさまをとりたてていひたる尤もあはれ深し

おつる涙のつらゝより、つらき命はをしからねども、戀しき人は罪ふかく、思はぬことの悲しさに、すてた憂世のやまかづら

らかりし思ひのあまりに、女のあやとなく疑ひ思ふ也、こは下條におのが男を待ちし形狀を語り出でんとて、しばらくその大概をいへる也

をしのをどりに物おもひばの

是よりかの男を寒夜に待ちしさまをいはんとて、まづ其男の爲に物思ふよしを鴛によせていへり、思ひ羽は彼の鳥の尾の方に少し卷揚りたる羽をいへり、凡そ夫婦の中らひを鴛鴦に比ふることは詩歌に例多し、鴛鴦は諸鳥の中にても尤も睦まじきものなれば、番はなれてはいたく戀慕へる心を、やがて我身に擬へていふなり

こほるふすまになく音もさぞな

上をうけて思ひ羽の氷るといふより、衾にとつゞきたり（但し水鳥の歌に氷の衾波枕などいへること多し）あはれ池なるをし鳥のつがひ離れてや氷れる衾に鳴く音のするは、さぞな悲しかるらんと、閨中より女のきくさまなり

さなきだに、心も遠き夜半の鐘、きくもさびしき獨寢の、枕にひゞく霰のおとも、もし

也、裏の意は一旦人間の色慾に迷ひしも、よしなき事なりと思ひ捨てゝ佛の道に入りぬれば、何の思ひもなき淸き心かなと聞かるゝ也、元來さる意を譬喩せし句なれば、此歌序の總括に假り用ひたるなり

ほんにむかしのむかしの事よ

ほんにとはまことにと言はんが如し、實に思ひ返せば往昔の事にてありしよと、我身若かりし頃色情に絆されて女の愚痴なりし事を懺悔しいづる也、さてむかしのむかしのと打返しいへるは、其昔の程遠くなりし事を強くきかせたる也、但しことよといへるよの辭を熟あぢはへみれば、其身今は迷ひを悟りたるものの、何とかやさすがにつゝましく思ふ女の心より、ひたすら昔の事に推しやりゆだぬる由に聞ゆる也

わが待つ人はわれを待ちけん

此二つの句は其昔わが契りて待りし人の來もせずなりしはいかなる事ぞ、もしや彼方にとり違へて此方よりゆくかと我を男の待ちてやありけんと、男の來ずていとつ

雪

此歌をかく名づけしは、初句に花も雪もといへるを花をば除きて雪といふのみを撮みとりたるにて、かつ歌中にいへる寒夜のさまをも思はせしならん、すべてかゝる類の歌の名はその發端なる詞、或は半なる、また終なる詞を摘出して名づけたるが多し、こはあるが中にもいとたやすく名づけて意味を含めたるも感たし 又按に此歌一首の意をきゝ得て思ひみれば戀慕の情にわびはて、憂世を悟り佛の道に入りて心の清くなりし事をも思はせたるにもあらんか、猶考ふべし

花も雪も、拂へば清き、たもとかな

こは俳諧の片歌に名だたりしが加賀の千代が句なりといへり 一説にやがて此歌は千代が作りしとも、又何がしの遊女の身まかりたる後、追善の爲に何がしの文章家の作りしともいへり、猶尋ぬべし 此句の表の意は凡そ花も雪も皆いと美しく愛たき物ながら、移ろひやすく消えやすくて、いづれも頼み難き無常のものなれば、愛翫執著すべからず、この兩箇のもの散りかゝるとも拂ひ捨つる時は、其色に染ぬ淸淨なる袂よと

さばかり事を—さばかりの事をの誤脱か

は秋風辭に棹歌を發す歡樂極りて哀情多しといふを取れり、心のむすぼほれてわびしきまゝに、ありし昔かの男と合彈といふ事せし三阮をとりて此歌をしらべて、我鬱悶の思ひを遣ると也、さをの歌といひて又うたかたと言ひかけたるは、うたかたは水の沫の事にて、此沫の如くあはれはかなき世の中、誠に頼みがたき事よと、かへすがへす思ひしみたる女の痴情をいへる也、短き一首の中にかゝる事どもをよく言ひかまへて、句毎に甚深の義を含ませたる、誠に奇々妙々の作といふべし、ある人貞操のかたに疎しとて咎むめれど、そは人情にうとし、此歌は只閨怨のせちにあはれなるさまを云ひて、勸懲のためには作れるならねばことなる害なし、さばかり事をとりたてて難とせんは、毛を吹きて疵を求むとやいはまし

てかよはせ用ふること多し、やう〳〵とは次第々々に也、此段すべての言ふ心は、わが思ふ男は今いづくにいかにして住むやらん、いとこそ戀しけれ、昔契りし言の如くならば住みなれし難波津にて彼の人の家にゆき、しどけなき遊女の癖の改りがたきも、思ふ夫に叱り戒められて、やう〳〵と貧しき家の世わたるたづきをも習ひ、世帶といふ事に馴れなば、遊女は男にあふ時枕のはづるばかりなるふるまひをば恥としていたく愼む事なるを、かゝる恥しき事も心のまゝにて、いかなる手なべ水くむ窶(やつし)しきわざも中々嬉しかるべきものを、今は思ひもかけぬ世界に沈みて、其人とて戀ふる事だに心にまかせず、昔の苦界にも遙に劣りたる事よと、まゝならぬ憂世を歎く也

花も紅葉(もみぢ)もみつゝぎの、手馴(てなれ)の棹のうたかた

花も紅葉も云々とは、今富める家の妻となりて、月雪花紅葉も見つゞきつゝ限りなき榮花(えいぐわ)をきはむれども、只我心一つにて樂しからずと也、扨見續(みつゞき)を三繼(みつぎ)にかけてつぎ棹の三阮(さみせん)の事をいふ也、手馴の棹とは則ち朝夕ひきならせるさみせん也、さをの歌

まりに、硯よすゞりと此硯をよびかけて思ひを語る也、なしぢの松の淡路島通ふ千鳥とは其硯箱の蒔繪也、この衢(ちきり)はかの日ぶみ書きしそのかみのまゝなるを、われは何故かくやつれはてゝ、寢覺がちなる物思ひはするらんとなり、金葉集に兼昌、淡路島かよふ千鳥の鳴く聲に幾夜ねざめぬ須磨の關守といふ歌をつらね たるなれば、寢覺がちをふくませたる事論(ろ)なし

月はいづくに江も名にしるき、藻にみがかるゝ玉がしは、ひからさんしてやう／＼と、世帶なれたる枕さへ、はづれ次第も嬉しいものを

月とはかの男をさす也、江も名にしるきは難波江をさす也、玉がしはとは水底の石也、千載集（俊頼朝臣）難波江の藻にうづもるゝ玉がしは顯れてだに人を戀ひばや、此歌の意を下(した)に含ませて、今はぬしある身なればあらはには戀しとだにも言ひえぬ苦しさをいふ也、扨本歌にうづもるゝとあるを、みがかるゝに替へて、ひからさんしてといはん序におきたるもの也、ひかるは叱(しか)る也、ひ°とし°と同韻なるが故に俗は誤り

落黄葉

此歌のすべての意いかなる故とも知りがたけれど、思ふに遊女の遊里にありし時、深くかたらひける男の有りけるが、其男は此遊女が爲に業を傾けて、終にゆくへなくなりて、遠き國などにうつろひ住みたるが、只かのはじめの男の事のみ忘れがたくて、此歌に思ひをのべしといふ心ばへにて作れるなるべし、ちりもみぢといふ名は此世に秋風の立ちぬるよしを含ませたる名なるべし、且秋風辭なる草木黄落といふ字をはつかに取れるなり、そは歌の中にも棹歌などいふ事をかつ〴〵取れるにて思ふべし

ありし日ぶみの、硯よすぐり、なしぢの松のあはぢ島、かよふ千鳥はやつれもせいで

ありし日ぶみとは遊里にありし時、かの男に日々かよはせしふみ也、其時に用ひし硯を今も持たるが、是に向ふごとに、ありし其世の事どもを思ひ出し、堪へ難きあ

三阮知里毛美地
歌曲遊幾
解

京猪熊通三條上ル二丁目
若江屋
馬場吉右衛門板開

跋

這唱歌世間に萬々あれども、てにをはちがひ、句の先後等ありしを、吉田氏此道にふける
あまり、かれこれかよはして抄して自盡く筆をそへ、ふところにのみせられしをこひうけ、
梓にちりばめて、えぞが千島のますら男、筑紫の海の海士の子等まで、ひろく傳へんと、
元祿七きのえ戌のとし神無月の比功畢

葉林軒

夫琴を桐君桐孫絃桐落霞雲和清角ともあまた名あり、調べ覺え知りて雲井の調又は二上り三下り品々は習ひて知るべし、糸數はむかふより一とかぞへ十一調といひ、十二を音といひ、十三を琴といふ也、いまだりんぜつもさだかならず、五三四のすがゝきもまだ糸なれぬ女の童も、すべて琴によりそへば、ならひなくて琴音調十とひき、元より此道の達人も第一これをしらぶる事齋宮の女御の

琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけん

とよみし歌、糸三すぢのうちにこもりて、自然に彈ずる事、誠に琴に通ひし名歌なるべしと、筆をそふるも毛を吹くにちかし

雲井曲

○人目忍ぶの中なれば、思ひは胸にみちのくの、千賀(ちか)の鹽竈名のみにて、隔てゝ身をぞこがるゝ

○忘るゝやわすらるゝ我身のうへは思はれで、あだ名たつ憂き人の、末の世いかゞあるべき

○たまさかに逢ふとても、猶ぬれまさる袂かな、明日のわかれをかねてより、思ふ泪を先立てて

○雨のうちのつれ〴〵、昔を思ふ折から、哀をそへて草の戸を、たゝくや松の小(さ)夜(よ)風(かぜ)

○身は浮舟のかぢを絶え、よるべも更に荒磯の、岩うつ浪の音(おと)につれて、千々にくだくる心かな

しのぶもちかの鹽竈もいづれもみちのくの名所なり

右近の歌、忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな

たまさかに逢ふ夜はあれど別路の泪のかずぞいやまさりけり

此段の唱歌内に心をふくみ思ふ泪をさきだてゝと言葉のこせし事心底面白し

俊成歌に、昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥

詩にも盧山雨夜草庵中などともあり

浮舟のよるべも更にあら磯のうらみて暮らす我思ひかな

べなつかしきありさま

○黄昏時(たそがれどき)のまぎれに、ほの〴〵見えて咲けるは、小家(こいへ)がちなる軒のつまに、餘り
てかゝる夕顔

○武藏野も更科(さらしな)も、須磨や明石の面影も、移して爰にみる月の、ながめはいつも
廣澤

○夢にばかり夜な〳〵思ふ人を、陸奥(みちのく)の勿來(なこそ)の關を誰がすゑて、現(うつゝ)にことも通は
ず

○戀ひ〳〵て戀ひ〳〵て、戀しき人をまつち山、待つらんものを行きて見ん、ゆ
きていざや逢ひ見ん

○あかしかねたる霜夜(しもよ)の、床(とこ)もさびしき嵐の音はそよ〳〵さら〳〵、降るは霰の
玉笹

は旅扇の兩端三枚づつを包めり櫻の薄樣裏すはう染にやこきかたとは紫にて色取たるにや
是は源氏六の宮にとりかへさせ給ふ扇の繪也、此扇に源氏、世にしらぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへてと書きおき給へり花の宴の卷にあり

たそがれは夕暮也前に須磨の曲にあり光源氏忍びありきの折ふし夕顔の宿のあたりの事也洛陽五條に夕顔の古迹今にあり

皆々月の名所をさしていへり、武藏野は月の入るべき山もなし草よりいでて草にこそ入れ
更科須磨明石の歌あぐるに及ばず、廣澤は山城の國嵯峨にあり

みちのくは奥州の事也勿來の關もみちのく也戀ひわびて昨日もけふも見ゆべきに勿來の關をたれかすゑけんとよみし歌あり

こぬ人を何かこたんまつち山待つとせしまに夜ぞふけにける

後京極攝政の歌に、きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん



黒きあかきのませとは月のよかげのませがきの事也

季經歌に、あはれにぞ鳴きあかすなるきり〴〵す我のみかくはしぼる袖かな、あけぬ夜の別れになれてきり〴〵す秋のならひを何うらむらん

敦忠歌に、逢ふことのたえてしなくば中々に人をも身をもうらみざらまし

白樂天詩也、三五夜中新月色、二千里外故人心

源氏六條の御息所へ通ひ給ふ時五條あたりに夕顔の咲き亂れたる小家あり源氏御車よせて何の花ぞと尋ねさせ給へば内よりいたうかうばしき白き扇に花おきて奉りければ源氏歌に、よりてこそそれかとも見めたそがれにほの〴〵見ゆる花の夕顔とあり夕顔の卷にみゆ

源氏抄に曰、三重がさね

花の色々

○きり〴〵す夜すがら何を恨みてすだくぞ、我も思ひにたへかねて、いとゞ心の亂るゝ

○なか〳〵に人をば恨むまじやうらみじ、とにかくに數ならぬ憂身(うきみ)のほどぞ悲しき

○三五夜中(やちう)の新月(しんげつ)くまなきぞおもしろや、千里(ちさと)の外(ほか)の人までも、さぞやながめあかさん

○深更(しんかう)に月さえて、車の音のきこゆるは、五條あたりのあばらやの、夕顔をしるべに

扇子(あふぎ)曲

○あふぎは櫻の三重(みへ)がさね、かすめる月を繪にかきて、水にうつろふ心ばへ、う



源氏紫の上の方にて人々あつめ唐國の船作らせ池にうかめ御遊びの時兵部卿宮青柳を歌ひ給ふ唱歌なり、青柳の片糸によりておけや鶯のぬふといふ笠はおけや梅の花笠、是催馬樂の歌也胡蝶乙女の巻に見ゆ

○青柳の片糸によりて鳴けやうぐひす、鶯の縫ふてふ笠は梅が枝の花笠

四季

春の景氣なり、百敷や大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ大宮人は禁中人也

○春は梅にうぐひす、杜鵑花や藤にやまぶき、櫻かざす宮人は、花に心うつせり

註に及ばず夏の景氣なり此段のつゞき源氏物語又は清少納言枕草子などに見えたり

○夏は卯の花たちばなあやめ蓮なでしこ、風吹けばすゞしくて、水に心うつせり

右同斷秋の景氣なり

○秋は紅葉鹿の音、千種の花に松蟲、雁なきてゆふべの、月に心うつせり

右同斷冬の景氣なり

○冬はまづ初霜あられ霙こがらし寒夜のあけぼの、雪に心うつせり

須磨曲

須磨明石更科いづれも月の名所をさしていへり歌のするに及ばず多くあり須磨も明石も津の國更科信濃の國也

○須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、更科の月とともにながめていざやあかさん

大方の春に心をよせしかど月見る時はいづれともなしとよめり

○春によせし心の、いつしか秋にうつるは、黑きあかきの籬のうちに、よしある

桐壺

○桐壺の更衣の比翼連理の契も、定めなき世のならひとて、夢のあひだぞはかなき

桐壺の更衣とは源氏の御母なり顔かたち名高ききこえありて御門殊にときめかせ給へばかたへの女御更衣をそねみ給ふゆゑ源氏三歳になり給ふ時御母桐壺更衣かくれさせ給ふ事也桐壺の巻にあり

○みじか夜の夢さめて、面影もなつむしの、身よりあまる思ひをば、いかで人に知らせん

大和物語に式部卿のみこに螢奉るとて、包めどもかくれぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

○秋の夜もふけゆき、月は西にかたぶく、松風や波のおと、鹿の聲ぞさびしき

光源氏須磨のありさまを寫したる唱歌也

○道しるべせし小君のなかだちに、ひかれて行くへ迷ふ空蟬の、衣の薫ぞゆかしき

源氏伊豫介が娘を戀ひ給ひて娘の弟に十二三なる童のありしを賴みて忍び入り給ふにかの娘西のかたといふ繼娘と並び臥してゐられけるが源氏忍び給ふを聞きつけ夜の衣ばかり殘し蟬のもぬけの如くにてすべり隱れぬ源氏かくと知り給はて思はず繼娘にあひて人たがひし給ふといふ事あり空蟬の卷に見えたり小君とは伊豫介が娘の弟童の事なり

○誰そや今宵小夜ふけて、柴の扃をたゝくは、尾上おろしの音信か、水雞のつぐる聲々

金葉集に雅光歌、夜もすがらはかなく叩く水雞こそさせりともなき柴のかりやをとよめる歌の心也尾上とは峯の事なりくひなとは夏の水鳥也鳴く聲木をたゝく音に似たり



○下卷

薄衣

○數ならぬ身にはただ思ひのなくてあれかし、人並々のうすごろも、袖に泪の悲しき

數ならぬ身をば忍ぶの摺衣うらみてかはる涙なりけり、數ならぬ身には思ひのなかれかし人なみなみにぬるゝ袖かなと源氏東屋の巻に引歌あり

○浮岩て思ひねの、枕にかはす面影を、それかとて語らんと思へば、夢ぞさめける

あこがれて夜半の夢の面影はかなくさめてのこり多き感深し

○白雪の深雪のつもる、年は經ると飽くまじや、もろともに寢みだれ髪の顔ばせ

白雪の深雪とはつもるといはん序也逢ふ夜の心地は千夜を一夜となぞらへても飽くまじき情深くこそ

○ひく人はそれ〴〵にあまたあれども、爪琴のもとの心かはらずは、琴柱に落ちよ秋風

琴によそへ女のひかばおちよといふ心をいへり、歌枕に、もとのめを迎ふるとて、いにしへの野中の清水ぬるけれども、もとの心を知る人ぞ汲む

○柏木の右衛門の鞠を、とんと蹴たれば、鞠は枝にとまりけれど、梅ははらりほろりと

六條の院の庭にて鞠ありし時右衛門の督參りて女三の宮を見そめ文通はし小侍従がはからひにて忍び逢ひし事源氏若菜又は柏木の巻に見えたり　梅ははらりほろりとは女三の宮おち給ひて戀の叶ひたるをいへり

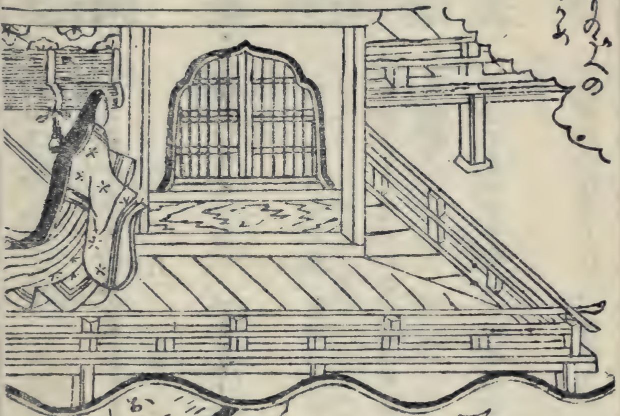
○さりとては強顔、ひかふる君が袂のあやにくに、靡かぬは手飼の虎の引綱

六條院の庭にて鞠ありし時猫かけ入りて猫綱にて簾あがり女三の宮御姿右衛門の督見そめての事也女三の宮は源氏御妃なれば心のまゝならず右衛門の督後には戀やみになりて死にけり　あやにくとは心のまゝならずしていよ〳〵思ひいたましむるをいへり

はれ深し　　しぼる

○檐をめぐる點滴ことの音にたとへて、七年の夜の雨かつて知らぬ夢の世

もろこしの陸務觀といふ人蜀の都に七年が間君に仕へて其後隱居して夜の雨の軒をめぐり落つる音の琴の音に似たる面白さを感じ早く隱居をせずして七年が間此面白さを聞かずしてくらしゝ事を悔みて云ひし事陸放翁が詩にあり。



源氏御兄朱雀院の姫宮加茂のいつきにそなはり給ふ儀式を源氏北の方葵の上物見に御出あり又源氏の通ひ給ふ六條の院御息所も忍び出給ふに御車のたて所を御供人爭ひて御息所の御車を打損じなどして車爭ひといふ事なり御息所此怨深くして物の怪となり葵の上を取り殺し給ふと也葵の巻にあり

○あふひの上(うへ)のときめき、加茂の物見の折から車あらそひ、つれなきは深きうらみなるべし

雲上　むさしのの曲ともいふ

雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれの内ぞゆかしきと小町があふむ返しの歌なり

○雲の上のながめは、ありし昔(むかし)に變(かは)らねど、見し玉だれの内ぞ、たゞなつかしやゆかしき

をちかへり鳴くともきけ時鳥今いくかかはさみだれの空、時鳥なくや五月の短夜もひとりしぬれば明しかねつゝとよめり

○おもしろや五月雨(さつきあめ)、花橘のにほへり、時鳥おとづれて短夜(みじかよ)なれど寝られぬ

忘草忍草一草二名也忘草生ふる野邊とは見らめどこは忍ぶなり後もたのまんと業平よめり伊勢物語にみゆ

○なかなかにはじめより馴れずば物を思はじ、忘れは草の名にあれど、しのぶは人の面影(おもかげ)

基任歌、せきかねていかにねし夜の泪より枕の戀のしられそめけんといふ歌也

○思ひあまりせきかね、恨みぬる夜の涙は床(とこ)すさまじや、ひとりたゞ枕に戀ぞしらする

むさし野月の名所なり歌あまた見えたり旅寝心あ

○武藏野に行きくれて、月をながめて草枕、戀しき人を夢に見て、うたゝ寝の袖

〇芳野川の花いかだ、竿さすひまもあらじな、岩間高き山風に、四方に散れる花の香

よしの川浪さへ花のにほひにて影みる峯は香風ぞ吹く

雪朝　なひの曲ともいふ

〇雪のあしたの嵐は、梢の花の散るふぜい、名殘をしきはとにかくに、待ちえし君が歸るさ

待ちえし君が歸るさの名殘をしきは梢の雪花のちるが如しとたとへていへり

〇あさましや我身は雲井の雁の夕ぎりおとしめらるゝおもひをば、いつの世にかは忘れん

葵の御腹に生れさせ給ふ夕霧の大將は源氏の御子にて御年十二の頃伯父の内大臣の娘をこひ給ひて終に聟になり給ひし事あり雲井の雁とは内大臣の娘夕霧の北の方なり乙女の卷にあり

〇まどろめば面影を、しげ〳〵とみじか夜に、時鳥おとづれて、初音に夢ぞさめける

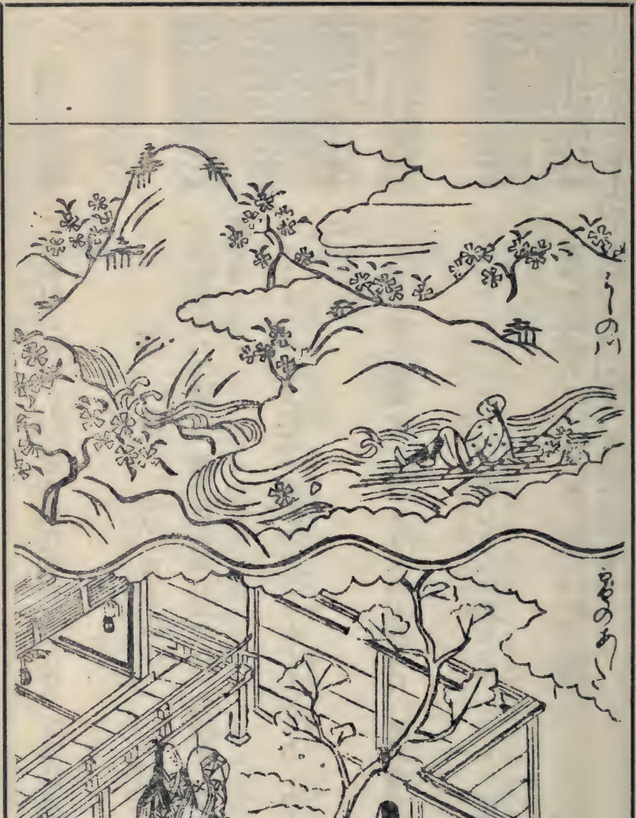
待ちかねてまどろむ夜半の時鳥ゆめならで聞く初聲もがな

〇ながむればいとゞだに戀しき人の戀しきに、くもらば曇れ秋の夜の、月にうらみはあらじな

ながむれば戀しき人の戀しきに曇らばくもれ秋の夜の月

〇峯の松風通ふか、谷の水のながれか、寢覺にきけば松風は琴の音にたがはず

齋宮女御、琴の音に峯の嵐の通ふらしいづれの緒よりしらべそめけん子期伯牙が琴をきくに子期が心水の如く淸き時は琴の音流るゝ水の如くとほめたる事あり


うしの川
宮のあ

○秋の山の錦は、立田姫や織りけん、時雨ふるたびごとに、色のますぞあやしき

秋の山の錦とは紅葉の事也立田姫とは秋の色をそめます造化神なり春の神をさほ姫と申す也歌に、立田姫今や梢の唐錦もりはへ秋の色にしぐるゝ

薄雪　　しのゝめの曲ともいふ

○うらめしやわが縁うす雪の契か、消えにし人の形見とて、涙ばかりや残るらん

かたみとてあだに消えにし薄雪のわれにもかゝるうき涙かな

○比翼連理のかたらひも、變ればかはる世のならひ、さりとては怨むまじ、昔はなさけありしを

天にあらば比翼の鳥地にあらば連理の枝ともろこし玄宗皇帝房中のさゝめ言にの給ひし言葉なり長恨歌にあり

○若紫を手につみて、深き心の色ます、長き契を結びしも、草のゆかりと知るべし

源氏繼母の藤壺の宮をこひ忍び給ふにつけて藤壺の御姪に紫の上と申すありける顏形藤壺に似させ給ひし故に物のゆかりを紫草のゆかりといふ事なればよそへての歌にもよみ給ひし也御いとけなき時迎へさせ給ひ御年十五の時より四十五までかたらひ給ふと也前にある太平組心づくし組にもあり詳しくは若紫の巻にみえたり

○しのゝめの籬に露をふくむあさがほ、玉のかづら嬋娟に、かゝるや花のおもかげ

しのゝめとはあけぼのの事也つれ〴〵草に「みかきが原の露わけいでん有明の空」の心なり柏木の衛門女三の宮をこひ忍ぶ時の心なり

○代々の人のながめし月を、まことの形見ぞと、おもへば〳〵涙玉をつらぬく

大空は戀しき人の形見かは物思ふ毎にながめしつらんよりあひて鳴くなる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなん、源氏御法の巻の引歌也

ども水上はかはらじと心底のあだならぬ事にたとへていへり

たそがれは日ぐれ也そらだきとは客のためならで常にたくたき物也萩の戸は禁中に萩うゑられし坪なり歌に萩の戸の花のしたなるみかは水千とせの秋の影ぞうつれる

注に及ばずめでたき祝の唱歌也

源氏わらはやみし給ひし時北山にて紫の上見そめ給ひ二條院の西の對に渡し奉りて通ひ給ふ事也

貧女賦に曰、愁腸欲斷、閑窓有月之時といふ心をやはらげていへり

源氏須磨に流され給ふ時明石の入道源氏を聟にとり奉りたく思ひて住吉にまゐりて祈り娘に箏ひかせ聞かせ奉りければ源氏もゆかしく思召し終に文通はせて契り給ふ事明石の巻にみゆ

さん命かは

○契りし宵の黄昏(たそがれ)しるべ深きそらだき、とめ入る方(かた)の萩の戸を、開くや袖のうつり香

太平　たいへいらくともいふ

○天下泰平長久に、治まる御代の松風、雛鶴はちとせふる、谷の流れに龜あそぶ

○人しれぬ契は淺からぬ物思ひ、つゝむとすれど紫の、色にいづるぞはかなき

○はかなくも限なき月をいかで恨みし、とにかくに我袖にたえぬ泪の夕ぐれ

○花の宴の夕ぐれ、朧月夜に引く袖、定かならざる契こそ心はあさく見えける

○住吉の宮どころ、かき鳴らす琴の音(ね)、神のめぐみに逢ひそめて、過ぎし昔をかたらん



○三穂(みほ)の松風(まつかぜ)吹きたえて、沖つ浪もあらじな、水にうつろふ月ともに、ながめにつゞく富士山(ふじさん)

風もなく浪も動かず波動かねば月も又水や空月や水とも見もわかず通ひすめる秋の夜の月ともに富士の山一入おもしろき景氣なり

心盡　小ぐるまの曲ともいふ

○心づくしの秋風に、須磨の浦わを浪枕、衣(ころも)かたしき獨寢て、夢もむすばぬ夜な夜な

源氏須磨の浦へ流され給ひて内侍のかみ又紫の上の事など思召しての心也

○故里(ふるさと)をはる〲と隔て、爰にすみだ川、都鳥にこと問はん、君はありやなしやと

業平あづまへ下る時武藏の國と下總の國との堺隅田川といふ所にて嘴と足との赤き鳥を見て渡守にとへばこれなん都鳥といへば、名にしおはゞいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやとよみし歌の心なり伊勢物語にみえたり

○夏の夜のあけぼの、夢をさます子規(ほとゝぎす)、白妙にみゆるは、月にさゆる卯の花

時鳥なきつる方を眺むれば只有明の月ぞ殘れるとよみし歌の心なり時鳥卯の花色白ければ月にさちすかといへり

○霧にたゝずむ小車(をぐるま)、やつして立てるをぐるま、人目忍ぶの契こそ更けてねやの通ひ路

霧にたゝずむもやつして立てるも小車何れも忍路の有樣なり

○飛鳥川(あすかがは)の水上(みなかみ)を、硯の水にせき入れて、書く言の葉は盡くまじか、けふを暮ら

飛鳥川は大和國の名所也一夜の間に淵も瀨となれ

言葉のこしたる面白し

秦の始皇燕の荊軻がしんぶやうに手ごめにあひ給ふ時后の琴の曲なり七尺の屏風を越え羅綾の袂を引きちぎり給へと敎へし事也此唱歌にて命たすかり給ふ事史記にみえたり

春風のふくにつけてや鶯もうかれて梅が枝に巣をくへ

源氏中川のあたりへ忍びておはしましゝに御覽じしりたる所ありてよみて入れ給ひける歌に、橘の香をかつかしみ時鳥花ちる里を尋ねてぞとふといふ歌の心なり

思ひねの夢のあひだに逢ひ見しもさめては元のつらさなりけり

源氏朧月夜の内侍のかみ犯し給ふ咎によりて須磨に流され給ひ友千鳥のなく聲をきゝて都よりもたせ給ふ琴を引き給ふ事須磨の巻にあり

伊勢物語にしらま弓ま弓つき弓年をへてといふ歌によりての唱歌なり翁といはん爲の序の詞也、院の歌に、思ひきや年のつもるは忘られて戀に命のたへんものとは

ければ

○七尺の屏風もをどらばなどか越えざらん、羅綾のたもとも引かばなどか切れざらん

梅枝　ちどりの曲ともいふ

○梅がえだにこそ鶯は巣をくへ、風ふかばいかにせん、花にやどる鶯

○花散里のつれ〴〵、たえ〴〵の琴の音、花橘のそでの香に山ほとゝぎす音づる

○思ひ寝のゆめのま、枕に契るあけがた、さめては元のつらさにて、涙の外はあらじな

○小夜ふけて鳴くちどり、何を思ひあかしね、浮世を須磨の恨みにて我とひとしき涙かな

○しらま弓の眞弓の反るべきにそらいで、八十の翁の戀に腰をそらいた



○上巻

蕗といふ草を富貴に通はせ茗荷といふ草を冥加に通はせていへり富貴自在徳とは人世の望む所に冥加あらせ給へとなり

きんぎよくとは箏の曲なり花風樂柳花苑共に曲の名なり是も源氏紅葉の賀の次の年南殿の花盛に殿上人ども水遊びありて源氏の小舅頭の中將春の鶯囀るといふ題を賜はり歌よみ給ひ其後柳花苑といふ曲を舞ひ給ふことあり此心なり此時源氏柳花苑今少しうちずして同じ曲をまひ給ふとかや詳しく花の宴の巻に見えたり

二十五絃彈夜月、不絶清怨却飛來といふ事をやはらげていへり三體詩に見えたり
空色によそへる琴の柱をばつらなる雁と思ひけるかな、仲實のよめり

保胤が作りし詩、長生殿裏春秋富、不老門前日月遲、長生殿不老門とは禁裏を祝し奉りての詞也月の影おそしとは餘かさならず老せぬ事也

源氏花の宴の夜弘徽殿の三の口にたゝずみ給ふ時内より内侍六の君の聲として朧月夜にしく物ぞなきとの給ふを源氏面白くおぼしなして言ひより給ふと也弘徽殿とは東宮の御母女御の住み給ふ御殿なりほそどのとは廊下なり六の君はこうきでん女御の御妹也委しく花の宴にあり

たそやこのさしたる門を叩きしは忍ぶの山の奥のかよひぢ約束なければと

草路

ゐでんらくともいふ

○蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在徳ありて、冥加あらせ給へや

○春の花のきんぎよく花風樂に柳花苑、柳くわえんの鶯は、同じ曲をさへづる

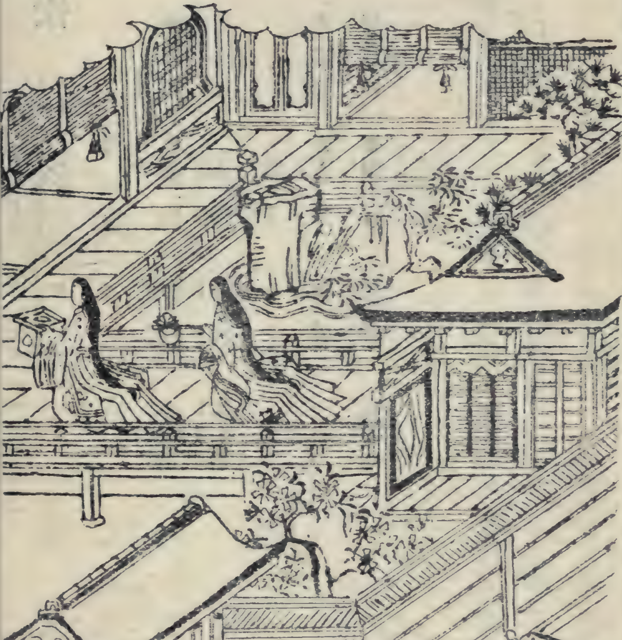
○月の前のしらべは、夜さむを告ぐる秋かぜ、雲井のかりがねは琴柱に落つるこゐごゐ

○長生殿の裏には春秋をとめり、不老門のまへには月のかげおそし

○弘徽殿のほそどのにたゝずむは誰々、おぼろ月夜の内侍のかみ、光る源氏の大將

○誰ぞや此夜中にさしたるかどをたゝくは、たゝくともよも明けじ、宵の約束な





松月鈔

目録

表七組
●草路　梅枝　心盡
太平　薄雪　雪朝
雲上

裏二組
●薄衣　桐壺

極意四組
●四季　須磨曲　扇子曲
雲井曲

其後八橋検校といふ、此八橋筑紫樂（つくしがく）といふ琴をひき出だし、其外おほく琴の祕曲を述作せしより世にひろまれり、上古は五絃そののち二十五絃にてありしとかや、誠に帝舜は琴を彈じて天下を治め給ふといへば、めでたき器（うつはもの）にこそあめれ

皇帝―黃帝の誤なるべし

清見原天皇―天武帝

琴濫觴

抑琴の昔をたづぬるに、神農氏はじめて桐をけづりて琴に作り、糸を縄にして絃とせり、古書にも記せり、又皇帝はじめて宮商角徵羽の五音とゝのへて、琴を作り五絃をならべ、此琴を清角と名づくともあり、末世につたはりて、相如、卓文、伯牙、蔡邕これをもてあそんで、其曲を操どれり、わが朝にては伊弉諾伊弉册の尊の御時、猿女の君の祖天鈿女の命天の香弓をたてならべ、絃をならして木々の合を打つて安樂の聲をそなふと、神書に見えたり、其後人の世になりては清見原天皇祕曲をたんじ給ひて、天人あまくだり舞をかなでける、是五節のはじめなり、其後此器をかきならし、此曲をもてあそべる人かぞふるにいとまなし、近き比武州にある座頭花洛に登り、寺尾檢校の城下が下にて勾當に任じ、山住と名づく、其後山住を改めて上永檢校に職して名を城談といへり、又

序

もののの音はめでたきものなり、天地をうごかし目に見えぬ鬼神も感ぜしむるぞかし、やつがれつたなきつれぐの をり、檐をめぐる點滴に思ひをのべ、松吹く風も誰がしらべならんと心をすまし、うたふもまふも法のこゝろ讃佛乘の因とたのしみ侍るに、いでや組の歌ども心のゆくかぎり、童女の便にせまほしく、これが鈔かき出て、うそむく窓の月松に殘してかたみともなれかしと、松月鈔と名づくる物ならし

洛下堀川吉田氏

邑　琴　子

松月鈔

ふしぐ〳〵おほき呉竹の世にしあれど、月に嘯き花にむかひてかきならし、ふり行く窓の雪紅葉、色になるてふたはれ島にはあらで、歳比こゝろひかれぬ、さはあれど聞きなれ手なれしことの葉は、ひたすらくりことのやうに覺えければ、何がしの檢校の許にてよりく〳〵手をかへ品かはりたるとなへ歌、ひとつふたつより數まさりぬれば、あつめて巻々となし函底にひめ置きぬるを、剞劂氏のこふにまかせて、かいやりぬることにはなれり

靜雲閣主人書

○正德三年版に書は靜雲閣主人の六字なし

姉小路通堀川東へ入ろ町
丹波屋茂兵衞版

若みどり終

あさまだき―早朝、淺間嶽

すぼほれて、けぶりくらべんあさまだき、身は消えかへる朝わかれ、今しばしとや又の逢瀬を思はずば、たれか見棄てゝかへるべき、さはさりながら今朝はなど、わきて名殘のをしきぞや、わが心から罪ふかき、輪廻はめぐりくるわの內、ひとりも洩れぬ歎きぞと、いさめいさむる袖の雨、ぬれてほすまはなかりけり

寝のいれごこち、逢はでいなせしその夜半は、外へもよりておはすかや、またこと戀を思ふかと、少しは妬む心もあり、道のほど内の首尾などやと思ふ心から、さても其夜のねぐるしさ、とやあらんかくや渡らせ給ふかと、勤むる客を外になし、しのぎかねたる有様は、これも因果のうちならめ、そのほかよろづ氣くばりの切なる事を思ふに、そこひの無いのがましならめと、又くひしむる命毛の、末はかしくと書きとゞむ

(十一)かるやま

ふれ〳〵こゆき丹波のこゆき、京やの仁左が自慢せし、庭の松さへ白妙の、おのづから風が飲まする酒ふけて、枕かるやま蒲團に肌もつけあへず、心よき夢二つ三つ、七八十四五すつとんと、とんとうちこむ色里に、そなたならではよい〳〵よい、外にはないというた言葉のよい〳〵よい、その嬉しさにこの年月のうき勤め、慰むよすがもありけらし、されど小夜衣かず〳〵性のわるいは粋からおこる、うそにも惚れたとさ、にくからじ、のちの世かけてたはぶれの、ひと夜ふた夜のたまくらに、長き闇路や黒髪の、亂れ心のむ

しやほんに—しやは接頭辭

ひたひぼ—下紐の訛

しやらどけ—自然にゆるみほどけるをいふ

涙まじりの薄墨に、あとさきわかでかくばかり、あかでも思ふ思ひきや、くゆるわらはが胸の火は、いつか消えなん消ゆるとも、あだし此身は君にさて、まかせ置きにし卷文に、心のたけをわりなくも、あかしや須磨のうらなきは、あらゆる神にかけまくも、いつはりならばしやほんに、わけて見せたき胸のくも、通ふ心に何とかと、思ふ心がもればげに、人や咎めん悲しやと、思ふにあまる涙河、ながれうき身の習ひかな

㊈しろりんず

白き綸子のひたひぼも、しやらどけぞするよしなやな、色にいづるや紅梅の、うら吹きかへししどけなく、待ちわびし今宵やいとゞながく〳〵し、いや待てしばし鐘のねの、響くかず〳〵かぞふれば、はや明方の鳥のこゑ、かはい〳〵と鳴くからす、なれも心のあるならば、今のつらさを告げて知らせてくれよかし、さても命はよう夜あけのからすえ

㊉とらが石

それはその〳〵いとしさは、寢ても覺めても忘られぬ、只そのまゝの移香と、しとゝ添

一河のながれ面白や、ちとせも延ぶる菊水に、むかふを見ればなまめかし、さげ髮は昔とて、今やうの投島田、ゆくへも知らぬ空炷の、わが玉の緒もあこがれて、辿る道芝しば〳〵に、袖と〳〵も多生の緣、眞葛が原に見殘して、たよりもとめて玉章と、思ひつどけてうたゝ寢に、ゆふべを告ぐる鐘のこゑ、あすをも知らぬ身のゆくへ、せめて心をはかれがし

㊆なが月

花の錦の下ひぼも、解けてなか〳〵よしなやな、見そめずば今の思ひはあらじをと、尙もゆかしさまさり草、もしや君が音づれも、こよや今宵は長月よ、さても命はあるものを、怨みながらも待つ人を、もしやそれかと見れば、君にはあらね月かげの、庭に茂りし萩すゝき、涼しき風のはつと吹きくる其音に、蟲のこゑ〴〵音をとめて、いとゞさびしき秋の夜を、まつま久しと立ちいでて、まがきにより添ひたまひけり

㊇おとづれ

無明の酒—酒は人の明智をくらますよりいふ
分里—色里

鹽竈、桐が谷、楊貴妃—いづれも櫻の名

⑤はつせ河

無明の酒の醉ひ心、沈む思ひのはつせ川、深き流れのせきとめて、心づくしの亂髮、ゆふかひも無くそのまゝに、かの分里にかよひきて、いねもやられぬ肱枕、昔にかへりつく〴〵と、あるとき島原や伏見の夢を思ひでに、浮れそめにしをりもあり、今は又かゝる世に時とともに衰へて、かずならざりし浮れ女に、二世とむすばん常陸帶、さてよい中さだめなき身の物がたり、女はいとゞ打ちしをれ、ながらへて憂き事を聞くもよしなし死出の山、つれてこえんと立ちいでて、ふりあけ見れば音羽山、祇園林もそなたぞと、かなたこなたを辿れども、人目つゝみのしげければ、ありし所にたちかへり、夜あけ烏ともろともに、浮名をながす下河原

⑥今やう

よゝごとの花の盛はいろ〳〵に、まづ鹽竈は薄色の、白きに飽かぬ桐が谷、名も楊貴妃はあけぼのに、淺黃櫻の品よわく、ゆきかふ人のかず〳〵の、一樹のかげに宿りして、

じめの嘘も皆まこと、とかく只戀路には僞もなく誠もなく、緣のあるのが誠ぞや、その外よろづ戀ばなし、うさもつらさも取り置いてさ、すいた男の噂して、ともに樂む茶碗酒

㈣あだなさけ

あだなさけ夜毎にかはる飛鳥川、ながれの身こそはかなけれ、皆いつはりの此里を、まことぞと思ひてや、すべて男のうかれくる、よるべ定めぬうすちぎり、あすは又新枕かはる習ひの世の中、ゆふべにはをのこたちもとよりも尙茶碗酒、醉ひすぎにけりいぎたなく、ふけゆく月に別路の、近きを厭ふ心にや、亂れみだるゝ黑髮の、末ながかれと睦言に、ほどなく告ぐる門あきの、立ちわかれ行く道芝に、朽ちてかひなし名にのみ立ちて、うき身ながらの〳〵はしばしら〳〵、げに〳〵ぬるゝ我袂、うちも寢られぬ駕のうち、いづれ思ひはかず〳〵の、品こそかはれ戀のみち、さりとては又逢ふまでの首尾を思ひのやるせなく、風も身に入る朝ぼらけ

いつしていひ—ゆふしてゆひの訛か
時ならん—時ならぬの訛
しもく町—撞木町

○此唄近松の遊君三世相の文句なり

㊁すきやてぬぐひ

横雲のしのゝめ烏いはば聞け、氣の毒の山こえかねしに、わけよき人のしなぐ〲にて、鬼一口をまぬがれて、それ程までにほかもなく、辿り〳〵て道芝の、時しも秋の最中とて、山田の稲葉刈りしほに、竹のまろやの賤の女が、笛おもしろき月かげに、鳴くねかはいや小男鹿の、みだれ心か黒髪の、よれる綱とて大象も、つながるゝならひかや、たまよの姫を戀ひそめし、いつしていひもいたづらに、行くさき暗き戀の山、又めづらかに時ならん、ほとゝぎすの一聲か、かすかにしやみの聞ゆるは、こゝはいづくぞ覺束な、さればにや心から世を墨染の、森近きすくせの里と答へけり、なにしもく町とかや、ついてをかしき事ながら、憂きが中にも物問はん、指切髪切入痣、よねの癖とていぎたなく、いつも常磐の心して、たれか情をむげにせんとはと口吟み行く程に、とある在所につき給ふ

㊂戀ばなし

はじめより勤めばかりで逢ふ客と、たえずかさなる色衣、つひのよるべとなる時は、は

○正德三年版には此前に左の一章を増補せり

かよひぢ

忍び〳〵の通路に、松はつれなや氣の毒や、たより求めてやる文に、必ず來んとの返り事、嬉しさどうもたまられず、宵より寢屋に引籠り、待てどくらせど其人の、そよとばかりの音づれも、はや九つの鐘が鳴る、扨も思はぬさはりあり、今宵の逢瀬は叶はぬな、よし〳〵かこつもやぼらしや、いつそ夢こそましならめ、まつらひうつ（まつつじうらの誤か）樂みに、戀しゆかしきねやの内

半太夫ぶし

㈠うつぼぶね

あしたの嵐ゆふべの雨、松帆の浦のうつぼ舟、身をうきものと思ひたえ、命もがなと慕ふまことも大ぬさの、かず〳〵慾のいつはりに、習へる人の心にも、つい馴れなじむ手枕に、ちどの社のゆふだすき、かけて縺れしさゝめにも、どうで女房にもちやさんすまい、わしは勤めのまゝならぬ、よひ〳〵ごとの亂髮、そら恐しや氣にそまぬ、殿にそひねの枕には、鐘もいとはじ鳥もなけ、うれししのゝめ朝酒に、うきを忘るゝその風情、こはい夢みる心なり、かうしたつらい月日にも、指折りをりつゝかた樣に、逢ふが嬉しゆてうか〳〵と、どうした事の緣ぢややら、忘るゝひまはないわいな、深き情の床の海、波こすとも末の松、かはらぬ色をたのむによ、君と結びし下ひぼを、ひとりは解かじ玉のをの、絶ゆるなげきはありともと、思ひしづめるありさまに、ふたりの袖やしぼるらん

若みどり第五巻

半太夫ぶし

としたおどろき騷ぐ、にしめかたをば見て食ひたい飲みたい、すぎすぎやうじ獨活蒟蒻鍋燒、にしめかたをば見て食ひたい飲みたい、すぎ杉楊枝うどこんにやくつとせ

㊾ながと

ありや長門でたながと、小倉の色紙は直がさがる、小倉の色紙は直がさがる、すんと亂れた山の井アヒノテきよだしたく、いこくみちのくねさめくい

おなじく

出た高尾薄雲松山玉川酒の燗、ずんとみだれた白糸アヒノテうけだしたく、にしをちとせもうしろ帶

小倉の色紙―小倉といふ遊女をさす

出た―此に列擧したる遊女のうけ出されて後帶となりしと也

すもとる—相撲取る

轡虫—廓を出られぬ遊女に喩ふ

うちまゐりて申しませう、何を諸事も諸譯その通り

⑪むじやうのあらし

橋場のけぶり無常の嵐も小便くさきにこまつた、いつも夜食のいでたちは、朱椀朱をしきあつふてき、さて又煮物の蓋とれば、いつも椎茸蒲鉾の、色の黒きは辨慶が、上下ぬいで禮にくる、せんたくはしの八角を、金剛杖とも名づけた、いつの時代の燒物やらすもとる力でもむしられぬ、もうない

⑫あきのむし

秋もなかばに過ぎゆく時は、なかばも〳〵過ぎゆくときは、野邊の蟲めがな、驚きさわぐ、轡蟲こそつらけれ、かうろぎ〳〵身は簑蟲ぢや、ちとでんでん蟲なめくぢり、轡蟲こそつらけれ、かうろぎ〳〵身はみの蟲ぢや、ちとでん〳〵むし

おなじく

既に日待と聞えしとき、日待々々ときこえし時は、腹の蟲めがな、ぐらあいたいた、なん

らはけ四五十はいのこがし、南無三ねうちの取りちがへ、五つ伊勢もどりのおみやげは、あめに〳〵一にどんぶり、二にあかへさう、三に高麗瀬戸の染付、うつぢんのやはたどの、たくみにたくんだこさくに傳右、そのうちまゐりて申譯はかめ諸事も諸譯もへをしにかいた

おなじく

かけいで給ふはどこ〳〵ぞ、上は一條今出川、二條堀川三條室町四條四めんのあなたなる耳塚過ぎてぼくせん寺、伏見の里につき給ふ、こゝに五つの話がござる、一にいつくはほんごのみぞにつきこんだ、二つ不埒なせつちで、すとんと腹きつた、三つみつい法師は墨染姿にさまをかへ、茶碗朝酒くわいちうときや〳〵、おりやそりやかちぎねふくとんび、四つよしのはおぬすのけんとしうて白無垢さくらのぼかし、南無三ねじりをとりをつた、五つ今川にみうらがござる、一におはらひなく〳〵一に物さしよ、三にかけはり瀬戸の染飯、宇津のやの十團子、附木で作つた印籠巾著、とゝさまかゝさま息災か、その

のつとう—祝詞（のつと）
氣をとりあぎやる—氣絶すること
くるわ—くつわの誤か
ござせない—ござんせぬ

枕そこ〳〵にとりて、おさうまあさうよ アヒノテ むかひ山伏のつとう讀みやる、はしのおんばは氣をとりあぎやる、すのこ佛は來迎めさる、裏のおばゝはちやんなまいだ〳〵夜が明けた、それで寢もせで迷うたえ

㊈すがゝきかはり

今時ふられぬ床のうち、御くらゐ諸譯もらちがない、ねぬけの女らう身あがり紋日はとむねか、又してお茶をひき質まで置きはて札ばかり、古金買も我を折つた、遣手の穿鑿うるさし、くるわは物思ひ、此里のがれたや、料理にかまはぬ茶漬に燒味噌心がけ、こゝらはよい燗一つと、納戸をうろ〳〵さがせども、朝酒のまうにも貧なる揚屋でござせない

㊉五つのうはさ

こゝに五つのうはさがござる、一にいと茶碗に大きな事ができました、二つ不埒は返事も聞かいで賣りきつた、三にさがみさぶは編笠姿にさまをかへ、かけゐ懷中棧敷からの見物、ありやこりや四五杯ふくとんひ、四つよしだは手前の評議とりまぎれ、しらてし

くふべいか—くふべきか
やんやをや—やんや八百屋か

はやりたし、のう君さんま、あつたものぢやないはさて、手はかゝずえ

㈤なくかはづ

出口田中に鳴くかはづ、何がなるぞと問うたれば、曾我殿原がなるとの、なぜに、女らうも買はいでつい通る、これびんばふめ

㈥なかやま

白いなかやま紬を鳶色に染めこんで、よるは八丈と見せかけた、今時その手をくふべいか、じやりばの名主で受けつけない、をゝよいわいな

㈦たか尾

似合ひ〳〵の小末社つれて、惡所々々かやんやをやにもまさる、それ〳〵それ〳〵どうらく大臣うつけにたはけに茗荷の子勘當とんのと

㈧むかひ山

のちのあしたの殘の衣は、きくか御池に名も東川、世話も情もひつとりおいて、蒲團木

ちやーちや屋の衍か

りて、つく〴〵土手をながむれば、土手の番太は棒をつく、お寺の法師は鐘をつく、こちの馴染は嘘をつく、さて又われらがかず〳〵の作りし罪もおそろしや、のちの世たのむ南無あみだ、ぶつ〳〵いうて歸るさに、つき當りまはりて胸をつく

㊃しまだゆひ

年のよはひは六十ばかりの、しんふつて白髪の髪をだてにゆひ、繩手のちやに腰をかけ、頭巾と杖をそばに置き、何とも物をいはずして、山寺の春は山しなの家來どもや弟子どもが、けふはせち明日はせちというてをれば、知らぬかかつてらちはない ヤアこれにつけてげんとくかたへ文をさやりたし、のうせつ〳〵ぢや、すます物ではないはさて、りはかゝぬえ

おなじく

年のよはひは二八ばかりのぢやうらうの、丈なる髪を島田にゆひ、揚屋の椽に腰をかけ、硯と紙と手にもちて、何とも物をいはずして、只さめざめと泣きゐたり、思ふかたへの文

さわぎ

㈠てんがちや屋

さかひてんが茶屋くら〳〵とござれさ、こふやおまんでお茶もめき〳〵、をゝといやらざがごぜにかましよさ、いやながごぜや、こちや知らぬ、さんせうめき〳〵

をゝといやらざ云々―唯々と言はずば鬼に噛まさう、がごぜは昔奈良の元興寺に鬼すみしより小兒をおどす詞となれり

㈡すがゝきのうた

みよしのかをるは花咲や、道芝奥州吾妻ちかいそけと、唐土みちとせ生野の道、の〳〵、みゆきはまゝならず名所は住の江須磨明石、夕霧ふもとちのせちさと、吹きくる風に亂るゝ初花小紫若松にむらさめことうらや雲をさんごの几帳はこゝのへの橘逢ふ夜のかよひぢ、三浦をうか〳〵ながむれど、えにしの菊川はちよのうてなに似たよねない

㈢まがき

籬のもとに立ち忍び、來ぬ人を〳〵待つ身のうらみ言はんため、やくやもすそをかいと

おかた―妻君
ゆて―湯手拭

おなじく

伊勢まつんぢよさてよふさ日本の伽羅よ、いくよさとめてもとめあかぬ

㊆せんだいうた

仙臺のお花畑のけしの花びんごえ

おなじく

八重に一重はこゝのへのびんごえ

おなじく

これのおかたはゆてのかぶりやうから、帯のしやうまで、しよへら〳〵とびんごえ

たまと—たもとの誤か

それれ—それ

おちよ—落ちよう

まとかたしき夢はなし

㊄こそでがへし

戀しその夜は小袖をかへし、寝ては夢路あかす夢さへわれにせかせて見ゆる、さめてひとりはあぢきなや

㊅さつま

やれ人のよめ子とは、帆かけの舟にそんれは〱みては樂なさうで、さま〱がござるよの、あさしようがえ

おなじく

とばのながまちを夜ふけて通りや、そんれは〱琴やしやみのねでさまうかといの、あさしようがえ

おなじく

薩摩わきもとに御番所なくば、つれておちよものわがつまをえ

㈢さをしか

さを鹿がつま戀ひかねな、夜もすがらいよえ、峯をやわけつゝやの、さて里へおり、紅葉ふみわけかへろとさ、かへろとさ、かへろとさ、かへろとさ、鳴く音さびしき夕まぐれ、さのみやなげいそやの、さてなればかりともに亂るゝ萩の露、しつぼりと〳〵しつぼりと、ならぬ戀路に身をやつす

㈣むもれ木

うきことを誰に語らん行くへなき淸水ながるゝ妹背川、せきとゞむべき身ならねば、よそに契をあだ人の、ありし情の言の葉を、千々に思へばうさつらさ、身はむもれ木のうかりける、葉末に蟬のきんの聲、をりしも人をおもひ出て、いとゞさびしき床のうち、時しも秋の夕まぐれ、雲の旗手の絶間より、洩れてさやけき月かげに、百合のひともと手折りし人の、花のかをりをそのきぬ〴〵に、幾夜とめてもとめあかぬ、あゝうつゝなきたち姿、小褄ふりよきしな〴〵に、われ馴れそめて通路は、ぬる夜もわかで手枕の、た

三　下り

㈠さかひのおはま

男山路に花をみなめしが咲いてある、ある人のながめしは色か情か、ほだしのほにてない、さだめて〳〵ひん一花と、世の名に立つほどに、戀草だねのゆかりかや

㈡はうかそう

おもしろの君がみ國や、千代をふるとも盡きせじ松がえは、鶴のやどりとなるてふ、民の竈のけぶりに野邊の霞もうす〳〵と、梅はありやと來鳴く鶯、やどらば宿れわが軒端の梅、あしたはくれの春風、春の花は雨にしをりて、夏のあやめは風にかをれる、秋の尾花は露に亂るゝ、冬野の枝は時雨に色づく、野山は木の葉にうもるゝ、げにまこと忘れたりとよ、月影は流れにうかみて、月と日の二つの光世々をてらして、今にたえせぬ惠みかな

てづつ—拙劣
散らざ—散らずば
ござせ—ござんせ

宮川すぎて鈴鹿のまちに、しぐれ〱を厭はぬ人は、さだめて戀の歌よむことはてづつでござろ、八十の翁さへ戀に腰をそらした

㉓八重むめ

花に嵐もよいけの浮世、散らざ櫻もあき心、あき心、ちらざ櫻もあき心、梅がさけがしいよ八重梅が、枝を手折るふりして、必ずござせと樣をまねくえ、必ずござせと樣をまねくえ、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも、夢に浮名はさんさよも立たじ、よしなやさそふ世ぢやの、稀にあふ夜はうつゝか夢か、まれにあふ夜は語るまもなき、さんさ鳥のこゑ、よしなやさ浮世ぢやの

㉔だて小袖

やまと大路の賑ふ袖は、都女郎衆のだて小袖こづまそろへてはんなりと雪のうちよりはや咲きそむる、花の振袖をるやとめ袖よ、身せば角袖、いよたで袖は、いつも廓のぢよん〱〱ぢよん女郎衆、ぢよん〱〱ぢよん女郎衆、それさ〱袖ふれさ、それさ〱袖ふれさ、御代のさかりは千年萬年〱〱〱丸袖、君の召したはいづみのつぼ袖

のしほやのしたにこそ

おなじく

よい〳〵〳〵鳥はら〳〵と膝を枕になき寢入り、なきね入り、さりとはなき寢入り、膝をまくらになきねいり

おなじく

よい〳〵〳〵南無あみだぶつ、死ねばお寺樣の諸事世話になる、世話になる、さりとは世話になる、死ねばお寺さまの諸事世話になる

㊁しらつゆ

おくは白露宿るは月かげ、すめる心の逢瀨の床、別れの床にはぬるゝが袖、袂にのこるの、殘るかたみの淚川、わたりて見ればげにや浮世は浮寢の夢、うきねの夢には思ひの淵、身はしづむとも、よしや吉野の妹背山

㊂みや川

白人—遊女の一種、
かげま—男娼
とさま—父樣
かゝ—母
立君—辻君に同じ

㊾おつぶら馬のかはり

問うつ問はれつ隔てぬ中に、つらや聞かんせわしが身のうさを、姉は白人わしや茶屋づとめ、つぎの弟にかげまをさせて、とさま駕かきかゝ臼ひきて、一の妹に立君させて、五條あたりの月見せて、よいこのさんさ、はなれ〴〵の憂きつとめ

㊿かぶぶし

よい〳〵あの浦島があけて悔しき玉手箱、たまてばこ、さりとは玉手箱、あけて悔しきたまてばこ

おなじく

よい〳〵あいそめ川に水に一筆かきつばた、かきつばた、さりとはかきつばた、水に一筆かきつばた

おなじく

よい〳〵浪華に萠ゆる蘆の鹽屋のしたにこそ、したにこそ、さりとは下にこそ、蘆

人は今さら浪花のうらみ、よしもあしきも世のならひ、さりとはえ、さても色に引かる

る、よしもあしきも世のならひ、さりとは

㊆夜ぶか船

おなじく

舟をだしやらば夜ぶかにだしやれ、帆影見ゆればなつかしや

おなじく

故鄕戀しやわがつまゆかし、柴のいほりもなつかしや

おなじく

あふよなければ我身に今は、末の別れもなつかしや

㊇かごしま

舟は千艘いろと萬艘入らうと、まんまよなさ、唐津さだゑもんどの舟はこんないさ

おなじく

歌のよみては都よなさ、諸國諸大名もまねたがるは

わけ―情人

やる、ひんとさんとはいやと言はれぬ、どうもいはれぬ袖をひかれて中二階、これも旦那の御利生かの、あがればさん〳〵、戻ればさん〳〵、なんひんさんさつさ、三六十八番ほかのお客はいやらしうござる、あすは必ず暮れぬさきからござれの、客のすきまに必ず逢ひましよ

㊄はなをり

やさし娘のをりかけて、薪めせ〳〵都のとのご、戀にきんきんきましよば、をはらしづ原矢背の里、柴めさぬか、露ふみわけて戀にきん〳〵きましよば、をはら賤原矢背の里、柴めさぬか

㊅五　月　雨

なさけつたなき廓のすまひ、いかな夜も〳〵ほととぎす五月雨え、さてもわけと添寝の末を思へば袖ぬるゝ今さら

おなじく

なしうち—無し、梨打烏帽子

きりもの—著物

子、こゆびゑぼしは若殿の、姿は又となしうちに、ゑぼしのひぼをこむらさき、しやんと結んで立烏帽子、伊勢の禰宜衆はひだりへ右へ、右へ左へひだりへ折烏帽子、萬歳樂十文きんのゑぼしは、君が代の波もしづかに風折烏帽子と召された

(十三) おつゞら馬

さても見事のおつゞら馬よ、うへにや氈しきからしまの蒲團、ふとんばりして小姓衆をのせて、そなた下りか、おりや今のぼる、文をやろにもことづけしよにも、こゝは箱根の山中なれば、筆にや事かく、硯墨はもたず、もしも水口おとまりならば、札の辻から四五軒目の茶屋で、馬も息災其身も無事で、やがてのぼろというてたもれ、ゑいこのさんさ

(十四) こゝろすゞし

やまと橋からよぶ言の葉の、唄のなかばにさす盃は、つゞくやま衆はおさんどの、だてをしたやのきりもの著かへ、なん〳〵てもしじらおり〳〵、裾ははら〳〵ほろをばさぎ

桐や〳〵、しづか三國すがはら在原、はなのみふねにちよはしや、うき橋そりやかくやまよ〳〵、ここにしまつえに高間や〳〵、薄雲和國いづみに逢坂、ゐづつ高尾ちよとさて〳〵巴に菊川や

(十一)まくらづくし

君もゆたかに幾夜久しき長枕、春はまづさく花枕、さて〳〵見事に咲きそむる、花にまけじのこよねを見たか、不慮になさけを新枕、思ひ忘れぬありしそひ寝の袖枕、夏は涼しき籠枕、うたゝ寝まくら人まくら、ちよつと膝をば御免なれ、さて〳〵御免なれ、そりやかりまくら ア、そりやかり枕、さいはひ枕小まくら、秋はもみぢ葉峯の嵐にくるくる〳〵、やつくる〳〵くるりとかへして、も一つかへして枕かへしの品もよや、冬は霜夜としのぎて通ふ、又の逢瀬もまつが根まくら、君のたまくら千夜もかはらじ

霜夜と―霜夜をの衍か

(十二)ゐぼしをり

あけて暦の似たる文字はきのえさる、まづ初庚申のあそびには、そろへて好きに赤烏帽

なゆそ—ないそ（勿泣）の訛・おそて—おそくて

おもて—思うて

かしばかき—かしはざき（柏崎）の誤か

が悪くいふにさ、あのかびたんめ茶屋のそうびやうゑ、誓文あき風が

㈧なる川

酒は酒屋に茶は茶屋に、ぢよろは木辻のなる川に、木辻のぢよらうは木辻のなる川に

おなじく

なゆそなゝないそ五月にやもどる、おそて六月中頃に

㈨ながたな

長い刀をさいたとおもて、尻のまくりやる、やせ尻を、やせじりをな、尻をからぎやる、やせ尻を

㈩せきのこまん

里のよね衆は色よいもの、まづ太夫はかしばかき夕霧さんごに花さきチ、かをる道芝たかはし長門大橋もろこしを揃へて、それ〴〵琴浦わめきだせ山の井、よんよしをか八重

このほしたて―このぼうさての誤か

しりよはせをて―尻はし折て

あはでぬる夜は夢こそ頼め、打つなつま戸をよるの雨、しようがえ

おなじく

大工どのより鍛冶屋がにくい、寝屋のかきがね鍛冶が打つ、しようがえ

㊆むら田

酒はのん飲みたし、のん飲むことはなんならず、おさかおはんがはやしを見て、おとんど通る、おはりはおとこにお中の町、こずはこく町のはん恥しらず、やれこのほしたてよい此とのごでござる、ずんど恥をしらぬはあほうほう、むら田はんびやうゐを見たか、いかななんぼう夜も日もなんぼうなんぼう〳〵、やれしりよはせをて、なんぼうかちで通ふたゝいきおほのかけられおはやるかくしいなばを見たかやまふしふきりやうねんななんぼうあいだになんぼう〳〵なんぼうやどのもめやい、なんぼう見られぬにくいつら、向ひ饅頭屋にもさ、半兵衛やれこりやぜいをつくとの、うそをつくとの、つく〳〵つゝてんこじ、有ること無い事ふんだいた、ありもせう無いにぢようらくどくさ、それで人

むすばれん—むすばれぬの訛

てうじて—長じてにて、すぐれての意か

兼もじ—兼好をさす

なさじ今さらに色なつかし

㈥しよがえぶし

あまりあつさに門まで出たりや、お寺若衆に引きとめられて、のきやれはなしやれ、帶きらしやんな、帶の切れたは結びもなるが、緣の切れたはむすばれん

おなじく

むかひ通りやるお若衆さまに、あまり言葉がいよかけたさに、のもしこれもしこれもしのもし、のもし落つるは鼻紙がしよんがえのんや、鼻紙がのもしおつるは、鼻紙がしよんがえ

おなじく

東坡山谷淵明李白晉の七賢白樂天も、ずんとてうじてあいせしといの、それはもろこし我朝にては心よし田の兼もじ樣も、酒を飲めとてゆるされた、しよんがえ

おなじく

はで立つ名や逢うての浮名、いづれ思ひのたねならん

㊄はんぢよ

おくり別れて又たち歸る、寐屋はありしに變らぬものを、いとゞさびしさ勝りてひとりのかみの草枕、まだふかき夜、それはさりしたとへよ、かくと答へしわが中、今はかたみの手馴れ草、うきおもひえ

おなじく

いつかあきなんこの身のうさを、里の習に身はまゝならぬ、まことまじりに作りし罪のかず〳〵おそろしや、神かけてえ、それは誰がなすわざ、戀にこがれてよしなや、ありし情もいつはりの今さらにえ

おなじく

かはす枕に問ふほとゝぎす、常に聞くよりあはれも深く、心あらばと慕へとか、名もなつ野の草がくれ、はやしら〳〵、それは首尾の名殘と起きて別れのたもとも、引きはは

見とて—見たくて

三保の松原それからさきは志賀の浦わの一つ松、ずんとよい氣な姫小松、まつ夜は〳〵君をまつ夜は、遠山松の山坂こえて〳〵、見とてきた野の七本松よ、ほんに必ずあを葉の松、のこるきぬ〴〵きぬかけ松よ、嵐まつ風さら〳〵、どつこいさら〳〵さつさつと、うつては濱松の音はざゞんざ

㈣かよひぢ

人しれぬわが通路の關守は、よひ〳〵ごとにうちも寢で、戀の流れのしがらみとなりて、人目の關しげき忍ぶの山のつゆ涙、かゝれとてしもうばたまの、よる〳〵ごとに仇枕、ひとりかた敷く衣の關、ゆふべ〳〵に蜑人の、ぬれて刈りほすわたつみの、みるをあふにてやみて只、それとばかりに勿來の關、霞が關のかごとにも、秋風ぞふく白川の、人目の關ははかるとも、世にあふ坂の關の戸を、わけてなか〳〵許さねば、あまる思ひはわれながら、猶せきかねて胸は富士、袖は淸見が關なれや、けぶりも波も立たぬ日ぞなき、戀にしな〴〵さはりがござる、忍ぶ其夜の月影ひとつ、別れおそしと鳴く鳥の聲、あ

二上り

㊀しふをどり

さても見事の由井蒲原や、やんれそれかえ富士のお山をうしろにして、やんれそれかえ、三保の松ばら〳〵、てんと前にみる

㊁てる月

月は武藏野よびだしのぢよろを三日月、だてな道中そでの月、たれを待つ宵あの顔つき、年は十五や腰つき足つきさえたこわつき何ゆふ月よ、かつら男よいとしかござれ、かはいかござれ、いざよひ月にたはむれあそべ、えい〳〵あそべ、えい〳〵えい〳〵えい〳〵、てる〳〵月てる〳〵月を見たらば、なんとよござるまいかの、てる〳〵月てる〳〵月の、おもかげ月を見あかし飲みあかす

㊂まつばら

一　さかひのおはな　二　はうかそう　三　さをしか
四　むもれぎ　五　こそでかへし　六　さつま
七　せんだい

さわぎ

一　てんがちや屋　二　すががき　三　まがき
四　しまだゆひ　五　なくかはづ　六　ながやま
七　たか尾　八　むかひがは　九　すががきかはり
十　五つのうはさ　十一　無常のあらし　十二　あきのむし
十三　ながと

若みどり 第四巻

二上り

三下り

をや聞かずやほとゝぎす、なくさへ心にまかせぬ

おなじく

こひを四條のいく世繩手にまどはるゝ、祇園八坂のかりの枕も世の中、ちよのかごとを
あだになすな下川原、うつろひやすき人心

おなじく

いかに此身はあだには朽ちじ戀衣、せめて問へがし思ひこがるゝうき涙、つらや命のあ
るもよしなし今さらに、消ゆるばかりをひとすぢ

すちよ—棄てよう

けふ—今日、狭布

ぬ中をとだえの橋柱、知らずやかゝる思ひ

おなじく

嵐烈しき秋の林にたゞもみぢ、色にいでずは散りも亂れもあるまいに、もはや浮名をたつ田川にながして、氣の毒しぐれまたぬるゝ

おなじく

いかに此身はうすき勤めの身ぢやとても、あまりつれなや、よそに心がにくやの、もはや由なし思ひすちよとは思へど、ひたすら戀がせめくる

おなじく

なごり盡きせぬ寝屋の朝酒うつゝなや、さらばさらばと聲もたえゆく野田の原、送りかへせばひえの山風身にしみて、菜種の花もうらがなし

おなじく

ねやもさびしき糸のしらべのあかつき、首尾をおもへばあはで心の細布、けふのたより、

かぞふよしかけうよの誤か

夢もながれて涙川、しがらみかけてせかうよ

おなじく

かはす手枕たえぬ逢ふ夜の中川さはり、うき橋かゝるつらさはたれ故、よしや流れに朽ちは果つともひと筋を、あだにはせまじ戀草

おなじく

袖に年ふるしぐれ立田の思ひ川、ぬれてもみぢの色もながれの果てしなや、何を怨みにたへて契のうすごほりなく〳〵こひはわたらじ

おなじく

けさの初風身にしむほどはなつかし、比は文月たが通はせのふみづき、七々のゆふべの星のいくよの思ひ川、鵲はしをかぞふよ

おなじく

こひのみちのく限り知られぬ身のうさ、それといはでの關守ゆるせ通路、よそに洩らさ

べの聲はいよしもうはがれて、別れも近しうさつらさ

おなじく

通ひなれにし土手のなごりの一里、末を頼みてふかなさけもありとの、今はつれなしよそになか〱身をつくす、聞くさへしんき氣のどく

おなじく

袖のもみぢ葉ほかに見えねどくれなゐ、胸のしぐれにぬれぬ木かげのあれがし、狩の男の笛もたよりのはしならば、鹿もろともに此身を

おなじく

夢もむすばぬ寝屋の戸ぼその月影、まつ夜ながらにいとしゆかしき秋風、伽羅のかをりのよそにもれ行くうすけぶり、心づくしのうき袖

おなじく

人のつらさに懲りぬ心のいつまでうきは、玉の緒たえぬばかりに呉竹、いく夜ふしみの

おなじく

人目つゝめば色にはださで、心までくるわが涙、そでには落ちずいくたびか、心までくるわがなみだ

おなじく

ねやの空炷うきねの床に、きては枕にそよ〳〵と

おなじく

阿波の鳴門に身は沈むとも、君の仰せはそむくまじ、とは思へども世の中の、人の心はあすか川

おなじく

あすか川とはゆめ〳〵知らで、語りすてたよ恥かしや

(卅五)くどき

ながめえならぬ雪のあしたの遠山、いづれしろたへ風も身にしむ野田の原、れんぼしら

心つくしに書きたる文を、誰をたよりにさんさ待つ、よしなの思ひ

おなじく

うらみながらも又うちながむ、月はゆかりのさんさうき人に、よしなの思ひ

おなじく

ひとりふせやに月さへさして、誰をたよりにさんさ待つ、よしなの思ひ

㊸むこ川

むこ川のあたりに菊のいろ〳〵きよく牡丹たゞこれむぎわら一りん一もと

おなじく

ほり川を渡れば見ゆる一里、さんごあづまぢみちしばすみのえことうら

㊹かぶぶし

人目しのべばあふ夜もたえて、今はたよりの文ばかり、とは思へどもこれもまた、心だにさへかはらずば

さんご云々―三五、東路、道芝、住の江、琴浦、いづれも妓名

中おきの石ー中の字不用なるべし

やれすー破簾

身やすしー身はやすしの衍か

れば、げに思ひはいとゞ猶ます鏡、くもらぬ月を見るたびに、心つくしの秋の風、身にしみ〴〵と新枕せし、過ぎにし夜はのその睦言もむかしになりて、今すてられし身は中おきの石、かわくまもなく明暮は思ひに沈むえ

(卌)ありまぶし

われは旅のものぢやいな、目かけてたもれ、岩にさがり藤たよりなや

おなじく

しんき篠竹な、やれすのすだれ、かけて思ひはわれひとり

おなじく

引手あまたにな、此身のつとめ、つらや思はぬわがしよざい

おなじく

よひに結んでな、おしたに疊む、土手の番する身やすし

(卌)さんさぶし

かいござんせー「かい」は「つい」の衍か
身しる雨ー身をしる雨の衍か
まつゑーまつ夜の衍か
そんなたーそなた

見もし見えんと待つ夜はふけて、鐘のひゞきもひとつ松かいござんせと契つた待つよの〳〵心づかひは海川あさし、山坂こえて〳〵身しる雨にしよんぼとぬれて、ぬれかゝつたが因果であろと、ありしきぬ〴〵うらみし事も、氣にあたろとはさらさら思はず、さら〳〵さら〳〵さつ〳〵と、うつては砧まつ風のみだれえ

㊴こしば

けさはゆふべの昔となりて、はかなやひとりこしばの垣に、うかれよる瀬のよい〳〵水しもあらば、限りあらしのよい〳〵まつゑの袖の、殘るみよしのうはかをり

おなじく

おもひこがれて雨夜の月に、うちもやられず枕の添寢、そんなたならではよい〳〵、ほかには無いと、いうた言葉のよい〳〵その嬉しさに、あうて悔しやはづかしや

㊵はんちよ

君がかたみのこの手馴れぐさ、今はたれにかのう夕顏の、花を書きたる扇の繪をながむ

ならぬ日もわけていはれぬふた思ひ

㉗もちろん

かはす枕に勿論へだてはなか川の、水もらさじこれ結びしも、こぬ夜あまたに怨みをかさねてさよ衣、夢さへうとき曉に、なごりを惜みてやかたねのつらさは、しつかり氣の毒や、せめては玉の緒の、うきには絶えなば絶えよ、たのしみはうき草の根をたえて、あふせを待つまでよ

おなじく

月の光は勿論しなしたものなれど、あはれをもよほす皆人の、うきやつらさの昔を思ひの十寸かゞみ、くもらぬ空もかきくもり、袂の涙はかわかぬわけぢやに、しつかり氣の毒や、せめては山のはに、しばしは殘りて見えよがし、まだ夜はわかいに、さりとてはどうもならぬにえ

㉘松ばらのかはり

㉓ちぐさ

秋は千草の色ともなしに、思ひそめたよかの一本の、ゆかしなつかしうらみの涙爭ふむらしぐれ、このゆふべえ、ひとり枕ひきよせ、おふさきるさに亂れて尾花あらそふ黑髮のいとせめてえ

㉔あさがへり

けさの別れの鳥のねつらや、ほんにつらや、つらや亂るゝウウ亂るゝ、さりとは亂るゝ、ねんく寢みだれ亂れみだるゝ黑髮の、ゆふかひなしや心誓文いくちたび

㉕せうし

思ひくがさまぐござる、いちに身あがりかさなるつらさ、しんき晴らしの煙草のけぶり、首尾のつまらぬくれぐも氣の毒

㉖ちやのみ時のかはり

ねんのあひだは浮き沈む身の、今しばしぞやかならず末かならず賴むはこの行末、つね

おなじく

こひの伊達衣に染めたる色はなに〳〵、木賊ひわもみ紅梅〳〵、べに樺くち葉に桃色、ゆふべの色はくれなゐ、紫はあけぼの、四五りん櫻のちらし紋、そらいろ月のおぼろぞめ、御所ぞめは見ごとえ

おなじく

嵯峨のあたりに爭ふ秋のかず〳〵、淺茅生になくきみかうろぎ〳〵、かうろぎ鈴蟲松蟲はたおり、くれなゐくゞる小男鹿、雲わけてかりがね琴柱におつる萩の葉、あゝ穗に出てまねく花すゝき、すてられぬゆふべは

おなじく

かよふ千鳥の須磨のうら葉のかず〳〵、夜もすがらなく袖かけぢや、かけぢや音に聞くさへうるさや、仇波枕もしらぬひとりね、くみわけてとへがし汐干の石のいつしか、あそれとも見えぬ此身はすて小舟こがるゝ

うら葉―浦回（うらわ）の誤か

過ぎし其夜に松もろともに、かはす手枕ゆめもむすばず、鳥のなくさへにくまるゝ、さてよい中

おなじく

人のこゝろはあすか川なみ、かけし妹背も今はかはる瀬今はかはる世、うす契たのまれず

おなじく

たとひ逢はずと文をばかよへ、文は妹背の人のうらなき人の、うらなき色みする一筆もえ

㉒はるのやま〳〵

春の山々に咲いたる花はなに〳〵、櫻梨桃かいだう〳〵、かいだうつゝじや山吹つばき、吉野の山は白雲若かいでは高雄、たよ〳〵なびく青柳たをりて折りて、一枝家苞は見事え

歸るあしたの待つくれもなくて、よねとさゝとにこの身をなして、なんぼさわぐとも限りはあらじ、そちでそちで鳥も鐘もえ、鳴るとも鳴くとも

⑳あさ草

淺草川の早き小舟をうはきの波にうちまかせ、まつち山の松の嵐に、その夜の夢をさまされ、別れぢのさら〳〵しさ、首尾といふ字のうつゝなさ、誓文々々らちも亂れて、忘れぐさの一花心え

おなじく

にくいことを聞いたよすがも、御身のたのしみならば、よしそれとてもえ

㉑たまのさかづき

さよの寢覺にことゝふ嵐、常にきくよりわきてさびしき、つれて山路のほとゝぎす鳴きわたる

おなじく

あだに亂るゝ袂の露を、深き思ひの草葉によせて、ほんにこがるゝ涙のつゆと、色をくらべんその宮城野の、萩の下露あめにもまして、忍びがたなき戀の山

(十八)あさづまぶね

又寢ものうや吹きくる春風、袂にのこる梅が香も、あゝよそになし、せめてうつらばまならずとも〳〵、夢の通路かぎり知られぬわが憂き涙、枕もきけきぬぐ〳〵

(十九)江戸ぶし

初手にござつても諸譯さへよくばござせあがらさんせ、おさゝでもおもしやれ、なんぼふづくるとも逢はせはせまい、そちで〳〵そんな事はえ、やぼめに〳〵

おなじく

ひよんな人さまに馴れまして、今はほかの勤めも身にそまぬとおもしやる、それは習ひのきしやうの下がき、そちで〳〵そんな事はえ、やぼめに〳〵

おなじく

おもしやれ―御申しあれ
ふづくる―憤る

ふじあま―ふじあさまの衍か

おなじく

おもひ餘りて通はす文をさ、あまりつれなやヲ、手にふれぬ、あれはせうしめき〳〵、なるまいな、いたとさ〳〵、こひのヲ、しかけがあれば、ちかいめき〳〵

(十六)にしきぎのかはり

えだ〳〵につれなくさそふ嵐につれて、空にしられぬ雪ふるころは、いとゞ亂るゝ花ごろも、心も空にうかれそめては、たゞ花ゆゑと、胸に〳〵むねにたく火はふじあまかやたえやらね

おなじく

たび〳〵の袂におつる心の涙、鐘の鳴るとき日の入るころは、いとゞ亂るゝ戀衣、のうやれ〳〵さてものう怨みかねてはたゞわれからと、あまの〳〵あまの刈藻にすむ蟲かいの、常になく

(十七)いせのくしだかはり

しはおはれみくれよがし、はかなの此身を

㊈夜あふ

戀はあやにくさはりがちに、おもはくはならぬ、せくは心よ、あふ夜の首尾は氣の毒、ぬるゝ〳〵なんぼ忍びても、袂の色はもる〳〵、もれて亂れてよそにさ、だん〳〵ものうい我身

㊉あさがほ

戀をつがねし花壇のまくら、もちろん〳〵、あけて朝顏らんのかほ、よき花の露すてぬはばんかい大もんおほもんをかし、をのこのはまりの色も爲もんがかへるはしごにたるき目元ころしや花のあみ

㊉さかひ

こゝは都の島原口よさ、惡所倒しのチヽたれ〳〵も、あれはせうしめき〳〵なるまいな、いたりやさ、きたりやさ、うかすウヽチヽ、酒のとがあれば、さんしよめき〳〵

山みえざる―山もみえざるの誤なるべし

誓文くされ―此誓に違はば我身も腐れとの意

に暮らしてけふあすか川、かはる習ひの有馬山、いなといはれぬ稲舟の、のぼりつめたるわが戀の、山みえざる雁がねに、通はす文もたまづさも、どうでたよりはしやさんすまい、つひにとだえの中とはなりて、いつかならべん長枕

おなじく

戀の淵瀬に此身をしづめ、末はよる瀬のありもやせんと、思ふ心に月日をかさね、いやな人にもあひそめ川の、ながれはかなきうき身をば、せめてあはれと問ふ人も、あらば嬉しさいかばかり、客の見えざるそのうちに、皆いつはりの玉章も、どうで起請もかゝねばならぬ、そら恐しき誓文くされ、思ひまはせば遣瀬なや

⑫うらわかみ

じたいわれらは信濃の國の、雪の下草うらわか身をば、不慮に悪所に身を買ひとられ、いとなみ多き流れの身とて、淺ましうこざる、いやな人にもあはにや、そりやならぬ、諸譯よいにはかうした事で氣の毒、つらいは〳〵うきつとめ、勿論かなや、さりとては少

月をみんとて薄雲みれば、空に知られぬみゆきの降るは、櫻ちりしく花むらさきのえ、色も深きこむらさきえ、靡くは青柳、うき身ながらもこひ渡るたまかづら、その名も高尾はもろこしまでもえ、もろこしまでもえ

おなじく

あふと見し夜のあかつきがたに、鐘のひゞきに驚かされて、名残をしのその夜の夢かえ、せめてまくらこちよれ、かたみの枕え、さめてうつゝか面影に立つとの、いとゞ思ひに亂るゝ頃はえ、みだるゝわれがえ

(十)しほや

よひに逢うてもうきことばかり、明日のなん〳〵なじみは、思へばつらきよに朝わかれえ

(十一)どうでのかはり

晝はきえつゝもの思ひ川、末は逢瀬のありもやせんと、既にはかなき心をつくし、あだ

よそにはとかゝへ―よそにはとかでの誤なるべし

通ひくるまのたそがれ見れば、くるまの〳〵たそがれ見れば、包むつらさは袂の螢、思ひ消えてはまたよる〳〵に燃ゆる、晝は消えつゝ猶よる〳〵に燃ゆるゑ

㈧しがらみ

おなじく

かけし情のいつしかかはる、今はうらみの〳〵まさり草〳〵、よひ〳〵ぬるゝ我袂

思ひいづればうきことばかり、よしや思はじ〳〵、かりの世に〳〵、よひ〳〵ぬるゝわが袂

㈨もろこし

梅のはつざき手折りしよりも、色を八入に身を染めなして、通ふ道芝つゆふみわけてゑ、せめて夢になりともえ、逢瀬をまつ島とやま花さくわけよい寐屋のうち、むすぶ下ひぼよそにはとかゝへその人ゆゑにゑ

おなじく

わかとこ—我床か又は別れとての誤か

思ひ思はるなる—誤脱あるべし

きぬ〴〵のわかとこ定めて〳〵定めてなんなく涙の川ともならば、逢瀬のたよりとも、のうさりとは

㊅ほとんどぶし

ながれはかなきほとんど憂きつとめ、よる〳〵夜ごとにいつしかかはす枕もいたづらに、戀のいとまもあれしばしは、つかのまもかず〳〵いやはや思ひに袖は涙の川竹や

おなじく

雨のふる夜もほとんど忍びきて、しら〳〵しら〳〵明けがた、鳥のなく音と別れきて、思ひ思はるなる命もをしからず、稲舟こがれて一夜も君にあはねばなら柴の

㊆かよひぐるま

思ひそめ川袖うちぬれて、そめがは〳〵袖うちぬれて、浮名ばかりは世に流るとも、たえぬ逢瀬をまつばかり

おなじく

なされた、身は淺草の土手の霜とも消えなば消えよ、大事かさ、首尾といふ字が大切ぢや

おなじく

世にこゝに忘れがたきは、まれに逢ふ夜のかへるさ、あはぬ昔はものかはと、またねの床のつらさに、ひたすら袖は朽ちねども、うきとつらきを三瀬川、戀といふ字にひかれては、消ゆる命か勿論ぢや、あひをへだつる中垣よりも、忍ぶ夜ごとのさはりありとも、つきせぬえにしが大切ぢや

おなじく

うき人のおもはくを飛鳥川にたとへた、それをいかにと問うたれば、そのかねごとのいつしかに、かはる淵瀬をなげいた、あまの捨舟よるとなく、ひとりこがるゝつらさに身はあさましや、袖の湊にしづまば沈め、大事かさ、流れよる瀬をたよりに

㊄たまくら

かはす枕に程なく八こゑも告げわたる〳〵、あかつきのその別路はうさやつらや、はや

いと―いとゞの衍か

はまちりに―はもちりての誤か

うらみた八こゑにせかれて―うちみた八聲鳥にせかれての誤脱か

逢坂の關―淸少納言「夜をこめて鳥の空音ははかるとも上に逢坂の關は許さじ」

㊂松はゆたかのかはり

秋の夕ぐれ音もさやかにつく鐘の、いと身にしむ野あらしに、聲をそろへて鳴く蟲は、こうろぎはたおりきり〴〵す、誰まつ蟲やくつわむし、草葉々々そだちの夜つゆなれて、猶鈴蟲のなくこゑは、ちりりん〳〵ちる柳、あふちかづらのはまちりに、ちり〳〵ちつてあとなく亂れゆく、秋を袂にしばしとゞめん

㊃ふかくさ

待つ宵のおもはくとつらきさらばは物かは、ゆゑをいかにと尋ぬるに、そのきぬ〴〵を敷妙に、かねのかず〳〵うらみた八こゑにせかれてわかれ路の、よしやそれとも見送つたよに逢坂の、關のそら音をはからば許せ、だいじかさ、首尾といふ字が大切ぢや

おなじく

深草のたはれをのこが、ひとり戀路をはじめて、わけをいかにと問うたれば、小野のあだしにうつほれて、文のかず〳〵くどいた、憂きにかまけて面やせて、色にそむ身とみ

とをすーともすの誤か

ふぢべー藤枝の誤なるべし、遊女の名なり

端歌

㈠わか水

春はいつしもよい若水のながれ汲みそめ、たえずめでたい屠蘇の酒、たれもしづけきあの顔つき、大は正月きさらぎ、彌生は小のはじめ、丁月は大よ、さつきみな月小でもとをす螢火やさし、七八月は大こそよけれ、月のながめに咲く菊月や、そのきくの花小でも色のめづらしや、さてかみなし月〳〵、霜月師走みな大の、かずもめでたい年のくれ

㈡はるのはな

はるは花さき名も高橋の、かけし情はかよひくるわの道すがら、たれも目につくあの花桐、月は三五やながめに飽かぬは、だてな道中ながとの君や、色もふぢべの亂れて靡く姿をよそに、見てのみ戀ふる高間の山の、峯の白雲葛城山と、その柏木の衣紋のしなはしほらしや、さて上著の袖や袂の風に、散らすな花のきりしまを、君が庭木といつまでも

若みどり　第三巻

端歌目錄

色をもふかき—色香もふかきの衍か

さる、しんき晴らしの煙草もよそに、せめて夢にと又引きよする、ながき枕のそのかひもなき、契る言の葉わすれもせずは、戀ひん心の色をも深き、袖のけしきは身をしる雨の、ゆかしなつかし、とは思へどもいかでかはせん、此里のみの露と消えなんうきたまのをよ、定めなき身はあゝもの悲し、時しも秋の空ふく風よ、あはれかはゆき鳴くさを鹿の、いづち行くらん、つま戀ひかねし忍ぶ繩手のかよひぢ見れど、をちこち人の音さへたえて、殘るありあけ薄雲外山みゆるあけのゝ頃にもなれば、いとゞさびしさまさりて猶も物を思へとわが黒髪の、亂れ心はその人に

あだな草、今は中々思ひ草、しきなみ草のおとづれたえて、問はぬいほりのにはき草の、つゆの姿をさま〴〵と、おのが葉色にこそめ草、身はすて草とよし朽つるとも、わが戀草にさく花の、えんにあはでも果つべきかはと、亂れ草なる心の糸を、むすび直すや戀衣

㊻ながき夜

長き夜すがら寝られぬまゝに、過ぎし事のみつく〴〵ひとり、枕ばかりに物こそ思へ、心つくしよ、よしなやいつそ思ひみだれて物ぐるしきも、つらや此身のまゝならぬ世に、引く手あまたのつとめの憂きに、ありし逢瀬の睦言も、うそのかず〴〵空恐しく、くゆる心は今さらなれど、せめてのがるゝ身にしもあらば、心すみぞめすぐよのさとに、いとまなく〳〵只ひとりのみ、きのふは今日の昔とだにも、思ひ暮らしてあしやのすまひ、心なきともあはれを問ひて、人の袂もわが袖も、しばし涙に色みえぬ

㊼ねざめ

別れぬる夜のうきねの床に、ふけゆく月のつれなく見えて、ひとり寝ざめにつらさぞま

ふかえ―深江

柏のふた面、とにかく物を思へとや、いはでの山の岩つゝじ、嵐の山の峯のたかまつ、しぐれにさへも染まで幾年すごすらん、げに春毎に咲きそろふ、大きりしまや小きりしま牡丹つゝじの色とほき、さつま千よの花がたみ、夏山かけてかをりくる、其花車あいらしき、いとくれなゐにとびいりまんよ、まがきつゝじの花のつゆ、手にやむすびて我袖に、暮れゆく春をしばしとゞめん

㊺みだれぐさ

春ごとにまづ萌えいづる若草の、色もことなる深見草、すゞくれ草のふき靡き、月もろともに雲見草、葉も散りくるやかはた草、たれに見よとてかたみ草、のこせし人にたむけ草、こふる思ひもふかえの、身は浮草の根をたえて、さそふ流れに岸根の草の、みだれ亂るもことわり草や、ゆふべ〳〵のそのひかり草、風あり草のしな弱く、濱名の橋のとほながめ、早くも野べのはつみ草、みやびやかなる面影を、忘れもやらで戀ひわたる、心も深きかけ川の、あふせもがなと祈りしに、いく千代見草かひもなく、あだに朽ちぬる

沖の島―置くにかく
あふしま―大島

るじと頼む花のつゆ、袖にこぼれて沖の島、ばら〳〵鳥の聲そへて、きりにむまなくあさぼらけ、宇治の川島まきの島、小島が崎に吹きかをる、風しなやかにうち靡き、つひにはめぐりあひの島、あふしまごとの別れ路に、いく袖ぬらす水島に、うつるも曇る春の夜の、おぼろ月夜にしくものぞなき

㊸ちらし

げにのどかなる春の日に、霞のうちにしのばしき、にほひ含みて梅の花、八重も千よも今がさかりよ、折りたやの枝なを、みごとによう咲いた、やれそでの名によせて、引けさ折れさ、散らぬまにちらぬまに

㊹つゝじづくし

さなきだに春風ゆかしみ吉野の、里にながるゝ櫻川、花とは見えし谷々の、雪こそにほへくれなゐしぼりやへ紫やこむらさき、ゆかりの水の吉野川、おぼろの月のひま〳〵に、せめて一本折り入りつゝじ、花のなさけのその奥を、たづね尋ねて奈良坂や、兒手

したゞみ—舌訛、細螺

淡路島—泡にかけていふ

を貝、色にいでたよ紫の、ゆかりと聞けば撫子の、したゞみていふ言の葉の、あとは空しきうつせ貝、身をかへて行くこのもとに、なみまがしはのふたおもて、うらうつ貝もあらばこそ、荒磯貝によるふながひ、呼ぶ聲たかきあまがひも、しばし待てとはまてがひの、こぬはあはびの片思ひ、なまなか棄てん身なし貝、とは思へどもわれ貝の、われても末はみぞがひに、落ちあはんとの約束を、かたし貝とはよもなさじ、ちくさの貝の錦貝、色どる秋のうらばとて、小貝こさゞいいがひ取る、月もふけゆく法螺貝の、峯に入るこそなごりなれ

（四二）しまづくし

ほの〴〵とまづ明けそむる初空に、かゝる霞ののどやかに、三重七重八重九重までも同じころものしま模樣、きてうしほ汲む田子のしま、春日につれてひとしほに、猶色ふかき松島や、雄島の浦にうちよする、波にもまれて浮島の、岩根につもる淡路島、通ふ千鳥の聲までも、春めく水にこぐ舟の、中に敷寝の苫が島、たびのやどりの夜もすがら、あ

れ汲みて心にいつまでも、たえすなたえなえ

(四〇)わかのうら

常磐なる若松の色うるはしく、つゞく榮えはゆたかにて、幾代へぬらん住吉の、神のめぐみぞありがたき、みつの浦波しづかにも、天照らす日ののどかにて、都の富士の名高さよ、もろこし船のとほながめ、げに面白の風景や、須磨や明石や和歌の浦、千里も見ゆる月かげに、友どちよりて汲みかはす、命ものぶる菊酒に、つきせぬ代こそめでたき

(四一)かせんがひ

あとなつかしき世の中に、色を好める源氏貝、あるひは百貝歌仙貝、わかくさゆふのすだれがひ、戀わすれ貝すみよしの、濱の蛤しゞみとる、汐干の春の花貝は、たが袖のにほひぞと、問はゞや梅の花貝も、闇はあやなし色貝を、好む心のみやこがひ、家づと貝を手ごとにや、折りてかざらん櫻貝、空にしられずふる雪も、つみな隱しそいたや貝、軒端にすだつ雀貝、恐れななしそ烏貝も、いのとおしやる聲きけば、いとゞ思ひのます

の浦の誤字なるべし、みつ（御津）は難波の古名なり

うさ言—うは言の衍か

りの夕暮おもしろ、おもしろや人の思ひのつもりては、戀のしづくと流れいづる横堀川の水、いろに溺れ〳〵て名を流し、身はうつせみのうつゝなく、もぬけのからとやつれても、更にえ捨てぬ戀のみち、思ひ暮らしてうか〳〵と、うたゝねむりのうつゝなく、うさ言の葉にうくばかり、われ死なば難波にすてよ横堀の、川の水ともなりやせん、もしとつゞけて覺めたる夢の、われにはづかし

九九　そめ川

ゐでの玉川水せきとめて、岸の蛙の聲よどむなる、淀の川瀬の水車、めぐりくるまの川波まくら、ありしゆかりにあひそめ川の、深きえにしもかはればかはる飛鳥川の淵瀬、よしや吉野の川うつ波に、身をつくしても何にかはせん、歌ひたはむれ遊ぶがよいわいの、たれか殘らんよの中川に、かけて渡せる橋のうへより、文とりおとし、水にふたりの名取川、よしや君ゆゑ立つ名の何かをしかろの、裾ひたし通ひゆくその川波に、つきさし下す舟の佐保川、さむけき夜半を厭はであかすわが衣川、名さへゆかしき加茂川の、なが

夏の風、いとゞ涼しきたそがれに、山ほとゝぎす音づれて、猶し昔のなつかしく、今更にぬるゝ袂もうらめしや、ふけて寝屋もる月かげに、鐘の音さへかすかにて、ひとりぬる夜の枕もうくや床のうち、いつのまにかはうつろひて、涙つゆちる秋の野の、草の葉ごとにしら〳〵と、のこる荻萩霜折れて、山もあらはに松ばかり、身は数ならぬ美濃のお山のゆふしぐれ、思ひとしふるかひもなや、けさの明方ひとしほつらや、いつもわかるゝ君なれど、さりとてはさりとては

（卅八）こひのきやうか

よしやわざくれ只世の中は、一夜ならではなかりけり、きのふは過ぎし昔なり、あすは知られぬよそにして、定めないものましかの、なるほど〳〵布はなるほど白くなるほど、娘は黒む、笠買うてたもれや、あゝこれの近江菅笠を、やあゝこれのたつ田の川の清き流れに盃を、うかめてともに飲めや〳〵、酒は酒屋に茶は茶屋に、ぢよろは木辻のなる川に、とかく浮世は戀とたからと、さつてははんじよと〳〵、みづの浦難波あだ

木辻—奈良の遊廓
みづの浦—みつ

なをなつかしみ—野をなつかしみの誤なるべし

野あき—野わきの衍なるべし

都の富士—叡山

えいづる、なをなつかしみ一夜草、胡蝶や夢をむすぶらん、花散里のなごりとて、藤のうら葉にさきそむる、若紫のすり衣、しのぶに餘る袖のいろ、世を空蟬のなきくらし、螢より猶身をこがす、葵ぐさの名のみにて、あはぬ日おほくしんぞ戀ひわたる、夢の浮橋とだえしてな、明けやすき夜もすがら、ひとりぬるまぞ久しき、いとゞさびしき床のうち、うらむる小唄に涙の袖しぼる、つらいは〳〵のうつらいは我心、戀しき人を幻に、思ひあかして身をつくし、かけし命はかげろふか、朝顏の露よりも猶はかなしや、野あきせしあかつきに、蓬生になく蟲のこゑ、まつ蟲すゞ蟲きり〴〵す、いとゞ寝られぬ秋の夜に、うつや拍子の唐衣、袖の涙はしぐれども、そらさだめなき薄曇、高根のみ雪ふり積り、都の富士のながめには、あづまやかひぞなかるらん

卅七 そでの香

梅がえに鳴く鶯の、聲もろともに皆人の、心の花もいろ〳〵に、うき立つ春の糸櫻、霞のうちに香をとめて、たが袖ふれし昔ぞと、忍ぶに飽かぬけしきかな、あやめにそよぐ

あらしおもしろの―あらおもしろの衍か

白かに―しづかにの誤か

草、秋は桔梗かるかやをみなめし、冬は時雨にまなくも、紅葉ちりじく嵐山、あらしおもしろの冬空や、雲のあなたの春風に、おちくる花のおのづから、梢に知らぬ色なして、散るは吹雪かわが袖に、しばし宿るゝ、常ならぬこれもえにしと思川、心の氷うちとけて、枕にさはる風もなく、夢もゆたかに夜は白かに

㊺まつがえ

國もゆたかに靡く世の中を、治まれるためしには、松に小松の生ひそひて、枝に枝葉に葉のさかえ、ゆたかなる君がめぐみの時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや、げに仰ぎても猶あまりある、我國の春こそいとゞめでたけれ

㊻よ町

世々のながめは春秋に、いづれおろかはなけれども、光源氏のおもひ人、よまちにうつす心こそ、わきていはれぬけしきなれ、春はまづ咲く梅が枝に、初音ゆかしき鶯の、おのが塒に宿木は、つきせぬ花のえんとかや、こぞのかたみの雪間より、若菜さわらび萌

を咎むるかへこと葉、げにそれ〴〵にながめつゝ、過ぎゆきこせば揚屋町、とある宿屋にたち入れば、かず〳〵にもてはやし、飲めや歌へのさかもりに、はやしのよめになりぬべし

(卌三)わかれぢ

見送るゝ中々つらきわかれ路に、月まちてとは何故に、とゞめて今の物思ひ、やるかたもなき小車の、しゞのはしがきかきつめて、百夜もちよとありてのみ、うきまろ寝する心地して、ひとよはのその程を、明かしかねたるわが寝屋の、ひまさへ殊につれなくて、何をたよりに有明の、月毛の駒にかた手綱、引きとゞめてもとゞめても、盡きせぬ君が手枕の、かはるならひの世ならずは、やがてあをぞや語ろぞや、只とにかくに月と日と、緣と命をたのみにて、又くるゝ夜のあるものと、心たのしむ朝ぼらけ

(卌四)むめあした

梅のあしたの匂ひを、櫻の匂ひを、くれてゆく春ともろとも送りこし、夏は橘あやめ

たえならん—たねならんの誤か

人に命は—人の命はの衍か

よりのちは誰とかは、とりかはすべきこの盃と、二つにわりてふたりが中に、残る卯月の五日の朝の、露の玉のを絶えてもあとに、残る浮名は皆人の、袖の涙のたえならん

(卅二)そでのつゆ

定めなきゆふべ〳〵のそなたの空に、けぶりも立つやあだし野の、あはれはかなき世のことわりと、思ひ知られていくたびか、心までくるわが涙、人に命はあすをも知らぬ、けふも通はんあの里へ、定めなきとは思ひはしれど、袖にしぐれのひととほり、ぬれて木蔭にたちよりて、しんきばらしの煙草とともに、やすむそなたはひかた道、えもん橋こえて行けば、出口の茶屋の店、音もしどろに引くさみせんに、汲むやしだいにあの酒のゑひ、ねむりこけたる客もあり、いびきまじりにたが寝言、あくびがちなる長唄も、なかばはよそに歌はする、ほかの噂とり〳〵に、無理の口説のそら泣きは、かぶろの時より習ふらん、身あがり多きぢようらうの、一方ならぬ物おもひ、かさなる年のきりまして、涙にしづむ格子もあり、店のよねしゆはしたなく、文のかず〳〵書きちらし、人

酒宴にあをざめて、あくびまじりで歸るらん

(卅)みつせ川

まゝにならぬは浮世の中と、思ひすてゝも猶すてられぬ、金がうき身のかたきとなりて、これぞ命のはてならん、消えもはてなば殘りて人のあとで恨みん事もやありと、思ひのたけを語れば君も、同じ心のうさつらさ、にくや靡けと横吹く嵐、それさへあるに西國船の、さそふながれにまかせんと、仰せも重きたらちねの、恩を思へばいもせ川、ふかきそ樣とみづからが、あひの中川みづまして、遠きわたりとなら柴の、露と消えなん心ぞならば、もろとも三途の川の瀨を、手に手をとりて越さんといへば、男よろこび言の葉の、いつはりなくば後ほどと、まづその時のいとまごひ、立ちわかれゆく夜は何時ぞ、八つ七つもはや過ぎて、六つのちまたも近くなる、夜明烏やふじこやの、回向の鐘ともろともに、死出の旅だちかいどり姿、おなじ所にいであひて、これぞこの世の見をさめと、たがひに顏を見あはせて、いざや最期のさかづきと、男にさせばいたゞいて、今

そ樣―そなたさま

わすれて―わすられての誤なるべし

の、わたりもたえて櫻かざしてこの下かげの、露にぬれつゝぬれてけふも又、かへるの道のたそがれ見れば、さてもやさしや螢の蟲は、しのぶ繩手に火をとほす、しやうがえ、うさやつらさにこの身をなして、心づくしのかよひぢなれど、秋のこのまを洩れくる月に、ながめやさしき白菊の、ふけて砧の音きけば、よそにも人を戀ひぬらん、われはそれにはひきかへて、人目の關のしげければ、かく忍べどもかひぞなき、なれどさだめぬうき世こそ、頼むかげぞひとすぢに、よしや命をかぎりにて、通ひかよへば今ははや、まことの色にうちとけて、君もろともに千代はへぬべき

㉚つくもがみ

まだ夜はふかし床のうち、深き思ひのかず〲を、かさねてきつゝかたらんと、心うかるゝをりふしに、はや門あきと告げくれば、今はの心つくもがみ、尼寺のかねの音に、かぞへてぞ行く横雲の、ねむさを包むぢよらうの、又ぞとばかりゆひのこす、面影さらにわすれて、わがたましひも殘るらん、月も出口へゆく空に、提灯しらけ供人の、よひの

梅の香の—「梅のかをりの」の誤か

がれ〳〵てゆく水の、かげさへ清き鴨川に、やつれはてたよわが顔かたち、かくは見棄てそよしなやな、三尺袖を年がよりたら何振ろに、せうがえな、ふれやふれふるづまいとし、われふるづまをえ、あとにみぞろが池波に、ひよ〳〵と鳴くはひよどり、小池にすむはをしどり、はんま千鳥かちりりんな〳〵ちりりん〳〵、ちつとしてさてゐりくりゐんぢよの、岩間々々をつたふ、にしは田のあぜ、あぶない、がてんぢや、あぶないあぶない、あぶのてならぬえ、細道あぜ道をくどり〳〵、くどつて松の嵐にさつ〳〵と、たぎりて落つる鞍馬川、戀の淵瀬とたどれども、猶も思ひはうしのとき、つきだす鐘ともろともに、貴舟の社につき給ふ

㉙みちしば

いくよ久しくかはらぬ松の枝葉さかえて、色もことなる若緑、戸ざさぬ御代はつきもせぬ、げに春なれや朝凪に、霞こめたる山もとの、梅の香のえならぬも、よそにやこゝに吹きこせば、いとゞ心もあこがれて、ゆかしき里はあれ〳〵と、ゆくとへだて はなか川

蜘蛛のいに云々ー下句「ふた道かくる人はたのまじ」

夜ふけゆく鐘のころ、つま戸をたゝく野嵐は、もしやそれかと立ちいでて、見れど戀しきその人に、あらで身にしむ風の音、庭の秋菊にほひきて、いとゞゆかしさまさりくる、人をしのぶるものうさを、あはれとだにも問はぬはつらや、もはやこぬ夜とまつ夜のしぐれ、濡れにぞぬれしわが袂、告げてわたるや群烏、はやしのゝめも明けゆけば、又の逢瀬をたのしみて、涙ながらの寢屋のうち

(廿八)きぶねまうで

蜘蛛のいに荒れたる駒はつなぐとも、ふたみちかくるあだ人を、いかに頼まんあだし野の、あだしこの身はまゝならで、月日ほどへて昔のわけを、思ふもぬるゝ我袖の、涙にたへぬあだ波の、よる〳〵ごとに立ちいでて、ふりあげ見れば大原や、おむろに近き小鹽山、たどすの森の木の間わけ、通ひくるまのたそがれ見れば、くるまの〳〵、たそがれみれば、包むつらさと袂にあまる、わけをゆふぜん左のかひな、もゝにすけさま命とほりしそのむつごとも、いつしかかはる淵瀨をなげいた、あまのすて舟われひとり、こ

の關よ、つもる思ひのやるかたなさよ、書きすさみたる文字の關、いよしもの關

㊅はるくさ

雪きえてしなぐいづる春草の、あをくとしてつゆも雫もひとしほに、猶うき立つや袖の色、わきてゆかしき鶯の、こゑもゆたかに囀りて、あをやぎの若葉にそよぐ風の音、いとしろやかに治まりなびく人心、たゞわれとなく打ちとけて、たゞたはむれ遊ぶうちこそは、げにまことかなたれも皆知るも知らぬももろとも、其名をしたふ櫻花、八重やひとへに咲きみだれ、かすみにつゝむ山々の、けしきはいとゞしほらしや、あらぬながめは千代までも、かはらぬものは松が枝に、みどりはいつも面影の、のこりて久しきひとふしを、限りないこそおもしろや

㊆寢屋の月

待つ夜ながらの月をながめてうらみわび、思へばぬるゝ袖のつゆ、かわくまもなき夜をひとりこがるゝ床のうち、それさへあるに蟲の音の、かれぐなればあはれさまさる、霜

いとしろやかー
いとしづやかの
誤か

馴れてそめて―馴れそめての衍か
なその―よそのの衍か
ひたひぼ―したひぼの訛

と、思へどぬるゝしろ小袖、ありしなさけをそのまゝに、又のえにしを待つばかりに

㉔川づくし

戀とおもひを笹舟に、のせて戀慕に迷ふその追風や、しのび車の音なし川よ、文字白河や關守つらく、こよひならずはあすか川、鳰川生田川にもきて大井河、君もろともに世にすみだ川、うき名取川いとひはせねど、あだな立田の河波たゝば、中やたえなんいやよよし吉野の川、この身はとても燃ゆるおもひのその富士川や、けぶり絶えせぬごげんはとかくいつも菊川、うらなきわけをひとへに思ふ衣川、さて見よかしのえ

㉕せきづくし

かごとばかりにあひ馴れてそめて、今はなか〳〵鶯の關、つゝむつらさのいはでの關よ、戀に朽ちなんなこその關よ、いく夜ねざめぬ須磨のせき、なその見るめもせきの名かへて、いつ逢坂のせきともならば、とけて心のひたひぼの關、明くるあしたのわかれの床よ、せめてかたみのころもでの關、かはす袂になごりも盡きぬ、いかで涙をおさへ

ともし―とめしの誤か
とめき―留木、伽羅のこと

科あけぼの富士龍田、そりやかをりくる、そりやこそかをりらん橘に蘭奢待、秋は白露もみぢ白く、ちり／＼／＼やつちり／＼、ちらりとふりては、さつてもふりつむ雪のあしたの面白や、冬の霜夜をしな／″＼かはる、伽羅のけぶりも命の君に、いくよとめてもとめあかぬ

㉓はつあらし

さらば／＼と聲もたえゆくのだの原、おくりかへせばいとゞ身にしむ初嵐、菜種の花もうらがれ、憂いもつらいもこの身になして、名殘つきせぬこれもしの、せめてこち寄れうつりの衣に、ともしとめきのかをりは又の逢瀬までにと、袖うちかけて茶屋の朝酒けしきもにくや、店にそむけてかく玉章の、筆のかず／＼巻きかへし、柱がくれにゐがくれもせで、馴れししやみせんつれうたひ、逢ふは嬉しや別れはつらし、あはぬ日數をかぞへ／＼、いつはせめて夢にとすつとん／＼、末の松山波はこさじと契りても、首尾はまかせぬ心ばかりかすつとん／＼、とんどもたれてひとしほに、忍ぶ涙を漏らさじもの

ひきろやのエイ思ひきろやの戀のみち

㉑はなくどき

年のうちより咲く梅の、花のかをりもふりも、いとしほらしき野べの風さへそよ〳〵そよと、心して吹く櫻のもとに、うしとかきおくその言の葉の、あゝなつかしき若紫のはな、かきつばたあやめにかゝる夕顔の、露の袂におちて尾花が末に影やどす月、桔梗かるかや萩をみなめし、色を爭ふ山々の、もみぢ皆ちりはてゝ、かれ〴〵のこる冬の草木のものわびしげに、庭の水仙雪や霜にうもれ、いとゞあはれのます夕暮に、鐘も音なくえだ〳〵の鳥のねをなくなえ

㉒かうづくし

日影のどかに源氏くわげつの香くらべ、春は名にあふ花のえん、梅鶯のくらべ馬、ひとりこがるゝ柴舟みすり、にくやへだつる朝霞、かをりわすれぬありしまたねの床のうち、初音ゆかしきほとゝぎす、しのゝめ薄雲ありあけに、ちよとつきいでは姥捨や、更

⑲はなもり

色にめでつゝかをりをしのび、さかり惜みてゆふ花垣の、ひまをもとめて枝折る人を、とがめとがむる身は花守の、露の袂をうちはらふにも、いとまあらしの又さそひきて、むげに散らせる花の枝、かをりなりともせめては庭に、のこせ春風、又春にあふは久しき世のためし、思ひわびても怨みても、どうてあらしの心はあらし、いらぬなげきと思へども、いかなる花のえんぢややら、わするゝひまも中々に、あるにかひなきすて船の、こがれこがれて春ふかく、しのぶ心をそれぞとも、問はで櫻も色も香も、ともに散りしく花の庭

⑳まつらぎぬた

八重の潮路にまつら舟、風のたよりも秋ふけ〳〵て、うちもねられぬ砧の音に、ちたび碎くるエイ千たびくだくる袖の露、嵐山みねのもみぢ葉はら〳〵ほろ、波のよる〳〵まつら舟、風のたよりも秋ふけ〳〵て、うちもねられぬ砧のおとに、ちたび碎くるエイちたび碎くる袖のつゆ、嵐山みねのもみぢ葉はら〳〵ほろ、芭蕉の葉の露ふりすつる、思

りんだうけ—龍膽花

いろものでーいろもれての誤か

人やとがめぬー人やとがめんの訛

ふせやおふるーふせやにおふるの誤か

れ手にもち月の、野べにかをるはらん／＼、刈萱りんだうけ荻萩鶏頭をみなめし、男山べにすむ月の、光めでたや月の都になんよさァ、かくれないよさァ、須磨明石さらしな不破の關屋の月かげに、ひと夜かりねの夢うちさます、そのあかつきの鐘のねは、千里もひゞくえ

㊅もりづくし

ゆく水ににしきつれだつ山川の、風にはら／＼たまこぼす、朝な夕なのつゆの森、あまり／＼てわが袖に、たえぬ雫のもりふかく、忍ぶもりのかひもなく、物やおもふと人のとふまで、あだに袂のいろもので、人やとがめぬはづかしの、森のしたべにおく露も、みなくれなゐの玉とのみ、見えてこずゑにいとしるく、ともしつれたるもみぢ葉の、あたら醉ひをば吹きさます、こがらしの森秋さびて、いとゞさびしき園原や、ふせやおふるはゝその森、ゆくかりがねの羽風より、こぼすは露か雨のもり、はれて思ひもゆふぐれも、いと面白くすむそらに、いり日やいづる月かげの、光めでたき秋の夜や

○原本別冊になりたれど卷數をこゝにしるさず

すめる御代―住む、澄む

散ればこそ―伊勢物語「ちればこそいとゞ櫻はめでたけれ浮世に何か久しかるべき」

若みどり第二卷

㊅ひなづる

ひなづるがその枝々に巢をくひて、君もゆたかにわれもゆたかに、すめる御代とて久方の、ひかりのどけき春の日に、しづ心なく花のちるらん、げに散ればこそ〳〵、いとゞ櫻はめでたけれ、ちらずはまたの春霞、たれかしのばん鶯の、谷よりいづる聲さして、野の末山の奧までも、おなじめぐみにあひたけの、よはひちとせまつもなん、君にひかれて萬世やへん

㊆月づくし

月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つに物おもふ、袖の淚に照りもせず、曇りもやらぬおぼろ夜の、月には色のそれとも見えぬ、梅のひともと手折りて君に、まゐらせそろと書くふみ月の、うれしかへしを待つよひの、月の夜すがらさかづきを、ひとりたはむ

ちとぜも吹きてあふ夜の床に、みだれさかづきかずくに、又むつごとのうすなまり、ちとせ八千代のえにしをこめて、松はすみの江、かすみは外山、立田高尾のもみぢによすが、色といふ字に引かれては、きゆる命は勿論ぢや、忍ぶ夜ごとのそのかよひぢに、うらみろうさい別れざけ、まぶの男は一しほゆかし、ながと手まくら吸ひつけ煙草、袖はたまがは身はうき舟の、かよる思ひをいく世の中に、まよふ心は花そめ川の、色にいでじとつゝむにあまる、物や思ふと人のとふまで

わけある里—色里
きやう—伽羅の誤か

と、二世と結びし常陸帶、かけし言葉もいつはりの、あだになり行くうすなさけ、われ世にしらぬ身と成りて、今ぞさめぬる夢うつゝ、まよひの雲もうちはれて、こと問ふ風もたえ〴〵に、ふきて涼しきよはの空、ひとりふせやの月かげに、みわたす野邊の草花は、げにいろ〳〵に咲きみだれ、たえぬ詠はおもしろや

⑮はなの香

初春の花の都のけしきかな、蟬の小川のかげきよき、たえず流るゝ水の泡、うたかた人にこと問はん、わけある里の風俗は、きゝつゝ行けばしな〴〵や、きやうのかをりのかをるはしんぞ、むかしも今もおなじ世に、名もなつかしきうぐひすの、初音やさしきをりからに、よしの三芳のはなさくに、うかるゝ心どこ〳〵ぞ、まづ武藏野の夕間暮、月をながめておす舟の、波のよる〳〵たれまつち山、よゝのみさをのこがるらん、また歸りきてしゆじやかみち、若紫やこむらさき、花むらさきのあけぼのに、うつろひやすき人心、みかささしあふ一しぐれ、晴れゆく空や道芝に、入日のなごりくれなゐの、野か

おもひ馴れにし夕暮に、あゝうつゝなや戀衣、われかのけしきに立ちうかれ、涙もよほすはじめおもへ、不思議に人にあひ馴れそめて、只いつまでと契りしに、移ればかはる人心、うはのそらなる風さへも、まつに音づるならひあり、もはやとだえの中とはなりて、つらさに餘るそのゆかしさを、せめて見んとてかたしく袖の、うちぬる夢もはやさめて、うらみ數々窓うつ雨に、まだたきのころうすげぶり、ふけゆく鐘も身にしみ〴〵と、月もさゆるや秋のそら（アヒノテ）今は身にしる愛別離苦の、うさを思へばなか〳〵に、庭のむらはぎうら枯れて、露もちりゆく初嵐、さりとはさびしをりからや、はかなき蟲のなく聲に、みだれ心のいとせめて

（十四）おもひ川

世の中はうつろふ色に身をせめて、うらみも絶えぬ思ひ川、流るゝ水も湯となるや、猶こり須磨のうら波に、たつや心の水けぶり、くるしみ深きゆくすゑと、思ふ心をすてぐさの、いほりのまがきのゆふべの空に、またしいまはの身なれども、過ぎし昔はその人

ゆくかふてふ―ゆきかふ蝶の誤か又はゆく香蝶か

きりよく―氣力

(十二)かきね

人しろはな吹きあへぬ入日の山、かへす日影のいとざくら、空にしられぬ菜の花の雲、波のうね〱ゆくかふてふの、袖をそれかと招くもくるし、思ひ亂れて垣根の柳、きりよくなうしてたゆたふ姿、藤のうら葉にやまほとゝぎす、まつ日はいなのたづきも知らず、ゆくへもとめん花たちばなの、後の心にむかしをしのぶ、いなの笹原わすらりよものか、露に涙につもり〱て、思ひの泉わきてながれのうき名取川、しづみはてなであらはれわたる、瀬々の岩波くだけ〱て物思ふ心、たぞやくひなの胸とゞろかし、あともとゞめぬ稲妻の、影かよふたもとにはら〱〱と、星のこぼれに身をしる雨の、月につれなくくらぶの山の、松のひゞきに砧のこだま、窓に落ちくるかりがねの、俤さそへ戀しき人の、よそにかよひの道のべの雪、あとなつかしや住みすていほの、庭のおち葉に千草をとりて、ともに人めもかれゆくや、嵐こがらし枕さだめん

(十三)うすげぶり

おくるべ―おくるえの誤か

のやまとの橋をくもぢにかけて思ひを

（十一）やまかづら

まゝにならぬはたが身にも、ありとのそれをたよりに憂き身をおくるべ、この年月をつゆか涙が、くるわの雨の袖はかわかず、身は沖の石、人をまつをのうらみぞまさる、ありし言の葉みないつはりの、いつか誠の色しあらば、しんぞ嬉しさなにしかまさる、あだし此身と人こそ思へ、人に心はかはらぬものを、よしやよしなき言の葉の、末をそれとたのむ心につらさぞまさる、今はなか〳〵おもはじものと、思ひかへせどまた戀しさに、亂れみだるゝ枕のなみだ、月にそむけて行くほとゝぎす、いとゞこがるゝ人はともなれば、せめて夢にとかとりの衣の、よするまもなく聲々つぐる、鐘にきえゆく空ともなりて、野べの千草の青きがうへに、おもひおきたる涙のつゆと、あこがれいづる魂かと見ゆる、水のしらべの亂れの糸におなじ心かむすほれやすき、とかくたまのを絶えなばたえよ、峯もあらはのやまかづら

かば歸りくるかに

㈩うきくさ

此ゆふべふりくる雨は星合の、そらめせしまに恨みてのみや、牛のくるま河瀨をめぐる末はいろびとむれつゝ遊ぶ、風のかよひも西ひがし、岸のうき草たれ待つなくに、つきぬ言葉のうき世うたてのまひあしもなる神の、とゞろ〳〵と雲井に近き峯の松さへたもとにうつる、月の宮川戀風そよと、しぐれつゞきの軒端のともし、色の名寄を問ふまでもなく、知るも知らぬもながめにあかず、千鳥すがれて明けわたるそら、たれこめかごをかゝげてぞ見る雪も、五條の坂なか〳〵に、ふりみふらずみ白妙の、瀧も三筋のながれはたえず、死なざやむまい三年坂を、ゆくも歸るもあふ夜とわかれ、うちもねななん關の戸もりの、やさし八坂のなりよしむすめ、ふりよし小ぢよろ、花にはそめで眞葛のながめ柳かへでにおほろとくだる、たけのしたうらふすかとすれば、あくる一聲山ほとゝぎす、雨のなごりの卯の花に、いる月はもちろん繩手の螢、思ひ亂れて通はゞよしや、から

何かいとはん君がため、野にいでて刈るあやめ草、あやめもわかで待つ戀の、山路にかかるうき雲や、ふる村雨のおとにのみ、こひすてふ名はたつた川、水せきとめてこひの淵、かはらじとこそ結びしに、せきもる夜半の夢とほく、へだつる人の心より、かはるならひの夜こそつらけれ

㊈あさぎ

蚊帳にもれてのこる月、うはの空だきすがりたる、袖と〱はかさゝぎに、かよはす中の亂れがみ、とる手あやなにしめかへし、しめかけ〱岩こすなみだ、あこがれいづる玉かと消えて、うき名たつとも命にかへて、なんのをしかろぞ、露にぬれたる一枝花よもみぢよ、色にいでてもうらみじ、問はぬつらさぞやるかたもなき、しのび車の通路なれて、人めよくらんこひぢの關は、治まれるをもつらしとよみし、賤があさぎぬ淺からざりし思ひの數のつもりし淵に、身をすてゝこそよる瀬もあれと、うつり香そひて立ちわかれゆくいまのくるしさ、われかのけしき、またの日までを祈りてまたん、待つとしき

れば、けしきまことにおもしろや、山よりおつる白波は、糸をみだせる如くにて、岸にたゞよふゑんするは、藍をそむかとうたがはれ、なにはの梅も春ならで、にほひも更に、更に匂ひもあらずして、南には住吉天王寺、戀しき人にあふさかや、はしもとに宿をもとめ塚、こひゆゑ命を失ひし、二人の人のはかどころ、男山すむ月の岩清水にややどるらん、末は山崎たから寺、秋の山のもみぢの色、稻葉をわたる風の音、物すさまじきふぜいなり、鳥羽の戀塚はやすぎて、浮世はうしの小車の、めぐり〳〵て今こゝに、淸水寺にぞつき給ふ

㈧ありしよ

春すぎて夏きにけらししろたへの、ころもにまがふ卯の花や、はつ時鳥こゑにほやかにおとづれて、のこるや袖にありし夜の、ゆかりをしめてつゝみおく、よるの螢のひかりをよそに、たゞ洩らさじと人めを深くしのぶ戀、もの思ふかととふ人さへも、涙の川の岸におふるうき戀草の、花になるともあふこひならば、岩根ふみかさなる山にまよふとも、

ゑんするー淵水か

しらむ―調ぶ

㊅一字のだい

そも〲定家の一字の題に、春はまづかすみ鶯梅柳、蕨櫻に桃や梨、きゞす雲雀にかはづなく、すみれ山吹つゝじ藤、夏にもなればあふひ草、ほとゝぎすさみだれくひなの鳥にたちばな螢や、せみにあふぎはちすいづみや、秋はまたをぎ萩つゆのすゝき、蘭しか雁蟲にきりの月、鶉やかしきに菊や蔦もみぢに、冬は又しぐれのしものうすごほり、霰みぞれに雪鴨鷹ふすましいとぞ書かれたる

㊆清水まうで

やゝ住みなれししづが屋を、涙とともに立ちいづる、心のうちこそあはれなれ、まづ書寫でらをふしをがみ、ゆくに姫路をはや過ぎて、こひしき人にあふたの森よえ、あふたの森に鳴きあかす、烏鷺とはあれとかや、波のなるをの松風に、きんのねをやしらむらん、兵庫にはやくつき島や、舟のとまりの湊川、秋の千草のはなぐまや、生田昆陽野になく蟲の、こゑもさびしく打つきぬた、巻きかへしてはくりかへし、この布引のたき見

川風なほさむし—古今「都いでてけふみかの原泉川川風さむし衣かせ山」

みよしのゝ—新古今「み吉野の山の秋風さよふけて故郷さむく衣うつなり」

ち、かをる風もかろしや夏ごろも、麻のさごろもうちはへて、袖もすゞしくゆく水の、かの八橋のかきつばた、その句のかみにおきむすぶ、むかし男のからごろも、きつゝなれにし七夕の、いほはたごろもかさねても、秋の川風なほさむし、ころもかせ山こよひはこゝに、たびねのころもうすくとも、一夜あかしてみよしのゝ、山もさむみて衣うつ、つまどの雨もしん〳〵と、なほしも冬の夜さむき、ころもやうすきかたそぎの、行きあひのまにおく霜を、うちはらひても拂ひても、おもきがうへの小夜衣、かさねてたえぬ契かな

㊄はつはる

春たつといふばかりにやみよしのゝ、山もかすみも里々の、けしきもいづれたゞならん、けさの朝日に聲にほふ、初鶯のやどるてふ、梅の花笠たれにかも、きせてかへさん雨もなく、まして逢ふ夜のつまどうちおどろかすべき風もなく、花のさかりは千よ萬よ、まん〳〵よもよろづ代までも、たえずかはらず君が代の、花の色こそめでたけれ

呼ばふを—「を」の字無用か

ふうきねにさよごろも、もしもたよりの夢もやと、まくら樂むねやのうち

㊂さゞれいし

さゞれ石いはほとなりて、ふた葉の松もおひそひて、千代のはじめは千代のはじめはおもしろや、君が世の久しき國やよつの海、岸うつ波もしづかにて、ちとせを呼ばふをひなづるが、すぐなる枝に巣をくひて、めぐみも深き玉川の、ながれの末のわれらさへ、心うきよの龜あまた、よろづ世までもいく千代を、げにをさまれるしるしとて、君にひかるゝ松がえに、立ちよるかげはいつもたゞ、老いてもくちぬ常磐木の、たれかいひけん水茎の、ひさしき御代より祝ひそめ、たかき屋にのぼりて見ればけぶり立つ、民のかまどもにぎはひて、ならべるかどのめでたさよ

㊃ころもづくし

君が代はあまの羽衣まれにきて、なづともつきぬ花衣、その色ごろもこひ衣、かいまみしかの春日野の、若紫のすりごろも、ゆかりの末をこひつゝ、思ひいるさのやまもみ

えさかふる千代の春

㈡新もしほぐさ

はる草のやがても萌ゆる春日野に、あさるきゞすも若草の、色香にうつりこひごころも、その袖の香のみち〳〵て、君がそのなのにぎはしき、さくらづくしや梅づくし、つゞじづくしにかうづくし、吹く春風も心して、めでたき花のえんにいま、逢ふてふ松のわかみどり、いく春ごとに祝ひきて、ことぶきうたふ春駒の、よはひ久しきさゞれいし、苔むす野べの末までも、げにあをやかに夏草の、しげみにもるゝこひ草や、うき名ながるゝ川竹の、さゝのをざさ一夜なりとも、うれしき君がたまくらを、待つよひふくるかねのこゑ、みだれ亂るゝくだかけや、はやしのゝめの別れぢに、まだ袖ぬらすあまの川、あき草におくつゆの玉、つらぬきとめぬたなばたの、わかれの涙いくとしか、つもり〳〵てこひづくし、あだし枕のたはむれも、けふはかはりてそれとなく、狩野にのこる冬草の、さびしきまゝに手を折りて、逢ひみしことをかぞへ歌、かきあつめたるもしほ草、よて

長歌

(一)ことぶき

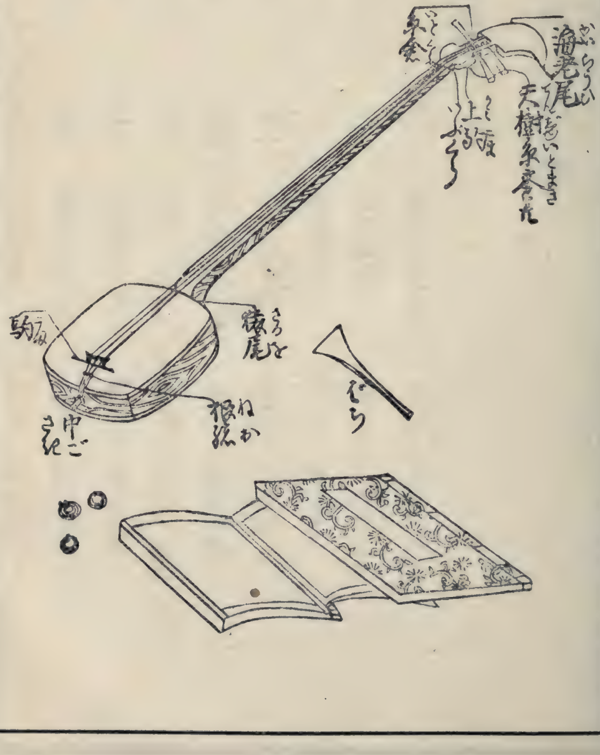
はつ春のそらものどかにいづる日の、したつみくにのかど〳〵に、よそほひしるく立ちならぶ松と竹との色いつまでも、わかの浦わのかたをなみ、あしべをわたるひなづるの、ちとせのえにしを結ぶなる、にひさかづきの曲水、君がめぐみのうるほひ深く、けさわけいりし蓬萊の、みねの霞を汲みそめて、つきせぬ御代のかみかぜや、伊勢えびほだはらたちばなの、かをりゆたかに民もなほ、ほながに榮えすみよしの、波もしづかになる枝の、かやゝかちぐりかず〳〵の、いつの世よりかことぶきそめて、春ごとにたえずめでたき屠蘇のさけ、梅の花がき八重がさね、きつれてござれいつもながらの清水まうで、祇園八坂の花の色、これやよしのゝ花よりも紅葉よりも、こひしき人は見たいもの、とがをばわれにおふせて、花のころはござれの、伊勢さんぐ〳〵、息災延命長久とさか

廿八　きぶね
廿九　みちしば
三十　つくもがみ
卅一　三瀬川
卅二　袖のつゆ
卅三　わかれぢ
卅四　梅あした
卅五　まつがえ
卅六　よ町
卅七　そでのか
卅八　戀のきやうか
卅九　そめ川
四十　わかのうら
四十一　かせんがひ
四十二　島づくし
四十三　ちらし
四十四　つゝじづくし
四十五　みだれ草
四十六　ながき夜
四十七　ねざめ

若みどり　第一巻

長歌目録

三味線之図



つらなりあひぬれば、筆を添ふる事になれりけり

愚北條持入道大狂園醉序

寶永三の戌の卯の花月の中の日

若みどり序

去ぬる比秀松軒の主、此糸筋の術を得られし餘り、道のすきものを招き、本手端手長歌等の證歌を集めて五緘とし、松の葉と題して世に慰み草のたねをまかれしより、此林に遊ぶ人人ことの葉の露の玉を拾ふ翫び草となれり、されどもかの國が所縁殘りし歌舞妓臺にかなでぬる種々のうたひものを始め、拍子取をかしきたぐひは、わざともらしぬるを、扇徳といふ男、調子合せてかき集め、落葉集と名づけて、櫻にいのちながうす、しかれば此兩部にこそ、品は盡きぬらんとおもふ人もあるべかゝめれ、さはあれど濱の眞砂の數々もれたる名曲端手新曲、かつ又、きのふのむかし、けふの今やう、時めきわたる長歌などいや生ひしげり、根にひかれ、糸による名歌、花の曙月の夕々に積りぬ、靜雲閣のあるじその闕けたるを補ひ廢れたるを興さしめんとて、野川檢校の作に、みづからのをもまじへて又いつ巻となし、若緑と名づく、柾のかづらながく引きつたへて、餘音嫋々と絶えざらましとなり、功なれりといつつべし、余不思議にかの松の葉、落葉より、此若緑の三大部の席に

若みどり

ゐつゝや庄兵衛　板

寶永庚寅七年　書林

九月吉祥日　万木治兵衛　行

あの君や、ふるやこづまはかはいよえ、えいや〳〵えいやえ、このやこのさんさのえ

「なには入江のよね舟を見たか、えいとんなえいえいえ、えいとんな、あゝ播磨の米が千石、淡路の米が千石萬石、舟方が納めた、月の夜ばしりにや、しもの〳〵下の關の睦言も忘れた、あゝえいとんな、えいえいえい、えいとんな、ひらいてさ、追風でさ、おも梶とりかぢ難波入江のはんじよえ

有馬のふぢ狐會右水木辰之介所作、松の葉に見えたり、此集にのするにおよばず

人もないぞよ、夢の世に假寢の母が手枕よ、乳房をしぼりひとりかこちし有様は、見るに袂も濡れぬべし、又起きあがりて走りめぐりてつまに取りつき、のう悲しや、もはや別れの、あれ堪へがたや、刄の罪に修羅の太鼓さらばといへば、しばしとゞむる袖ふりはなせば、目にこそ見えぬ踏む足元は、猛火のけむり、こは悲しやと、又ゆくさきも炎のけぶりにむせんで恐しや、われは邪淫の流れのうき身、汲みながす酒は三途の大河となり、起請神罰冥罰あたつて此身をくだく、とむらひ給へお僧さま

㈣地搗踊　山下座

二上リやれおひかけはやさぬか、さアさおひかけ中の綱、しめてみよ、よいやさ、やれ我が戀はさ細谷川の丸木ばし、ふみかへされては、ぬるんるよ袖かや、おひかけ中の綱、しめてよ、そろうたやれ中の綱はえ、えやさえやさ、このさんさのえ

「鳥に恨みは逢ふ夜の時よ、うたへ今宵のひとり寢に、さんよえさ

「あのや小山に戀風が吹くとの、身をも投げかけゆすらば落ちよかの、さてもつれなの

ろつゝたしよの
しろつゝなしよ
の衍なるべし

怨めしや、われに死ねとの御事か、死ねならく〵いつそ死ねなら死にましよか、あなたへ靡けばこなたの怨み、思ひと戀とくるまのく〵、兩の輪になる、くるく〵く〵ねもせで迷うた、やんれありつる姿は繪にかける、我はうたゝ寢うつゝたしよの

(四二)ふみこと葉

高島尾上

二上リ一ふでと書きそむるはなつかしさのまゝ、とはせまゐらせ候べく候、わかれより程あらず候へど、思ひねにするひとり寢は、心も澄みて目もさえて、たばこ戀草伽となるねやの内、かはる色なく御くらし、やがてあをぞや語ろぞや、筆にまかせぬ物思ひ、只あひましてく〵、のこる言の葉かへすがき

(四三)定家怨靈

高島尾上
竹中藤三

三下リ淺ましや涙は生死の海の波、死にくるしみをうけ重ね、くらやみより暗きに赴く恩愛の、うすき契の袂には、涙をつゝむ春雨に、つぼめる花の水ばなれ、離れもやらぬ愛念の、添寢の床に夢もなく、ふたりが中の泪川、つながぬ舟はとまれども、誰かとゞまる

二上リおなじ浮世にかけて頼まん常陸帶、とりかはしたる二世の帶、三重にまはるも戀、身はかげろふの有るか無きかに捨てられて、泪のしぐれ松がえに、見えつ隱れつ戀の關、まよひ〳〵あるくもたれゆゑぞ、逢はんと思ふわが男、人に逢はれてはづかしや、戀に瘦せたる二重の帶三重まはる、ふたへの帶が二重の帶が三重まはる、さりとはかはす誓紙の血汐の文字、猛火と成て思ひのきづな切ても切れず、離れもやらぬ我思ひ、しめつゆるめつ、ゆるめつしめつ、ふたり寢の夢ばかりなる手枕に、ふして形はなかりけり

（四）思ひの繪姿

賀茂川野鑑
山下才三郎
高島尾上

三下リ世の中の人の心は、うつろひ易き物としれ、君と我とが長枕、夜毎にかはす睦言の、人こそ知らね神かけて、あしき心はあゝしんき、無いにてんと怨めしや、あゝまゝならぬ君 二上リ「さまはな久しやいつ逢うたまゝぞ、おれもな忘れた逢うたよさを忘れた、おれも〳〵な忘れた、逢うたよさを、思ひいづればなつかしや、まだはだ馴れし移香の、ふたり寢顏のつや〳〵〳〵と、なでしこ今は答へかね、君の御えりしかと取り、これのう

のり—乘、法

二上り三つの車にのりの道、火宅の門をやいでぬらん、夢かうつゝかおぼろ夜の、月毛の駒に片手綱、ひきとゞむれば春の雪、とけて亂れし我思ひ、あまりて憎い此人を、たれに添はせんねたましや、袖にながるゝ血の涙、色と情のふた思ひ、深き心は常々に、語りあかせし戀草の、もえ出でそめし面影に、すがりつけば八重櫻、風にみだれし亂髪、ゆひがひなくも殺されて、身はあだし野の霜露と、消えにし事のうらめしと、泣くより外の事ぞなき、咲いた櫻になぜ駒つなぐよの、えいさ駒が勇めば花がちる、いさめば駒がよの、えいさ駒がいさめば花がちる、あゝ淺ましや、堪へがたや、煩惱邪淫の身のくるしみは、鐵石たつ事一由旬、あだと情の心の鬼、のぼれと責むる劍の山、くるり〳〵くる〳〵と追ひ立てらるれば、岩根にとりつき〳〵のぼりて見れば、下より猛火ふき上る、こは情なや悲しやな、助け給へと夕ぐれの、月は霞にかきくもり、聲ばかりして失せにけり

(四七) 時雨の松

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

きいのぢ―紀伊の路に來をかく

かりがね、それは越路我は又あづまから出て、こがれ〳〵こがるゝ子ゆゑに狂ふがをかしいか、なんのをかしかろ、をかしゆはないが、我も御身にあひたうて見たうて、ぞつく〳〵と尋ねし國はどこ〳〵、せんようだうに山陽道、音戸の瀨戸に播磨灘、舟路はるかにきいのぢや、玉津島吹上かいつくばうて、ひつつくばうて、尋ね〳〵あるいた、我らも狂ひめぐつた、いとし我子の目につくばねの、峯としらねど筑紫のはて〳〵はてまで、をどりいではしり出で、くに〴〵さと〴〵伊勢の津尾張の津、近江に大津草津今津海津鹽津、とつ〳〵攝津の國には大物の、尼が崎からあまになれとて文よこいた、あなたこなたと狂ひめぐりて、人目もしらで尋ぬる我を、なんだろつよの、ひこたろつよの、そのよな事きゝや、きん〳〵氣がわるい、りんとはねられ、しやんとゆてたもれ、あか月の烏はん鳴かいで、たるきのはなをしつかりてう、えいやつとふまいた、なごりなさけなの世の中や

(卌九)三つの車

大和屋甚兵衛
淺尾重次郎
筒井吉十郎

飽かぬ別れ云々—新古今小侍従の歌、上句「待宵にふけゆく鐘の聲きけば」

ぬれたるとりなりも、しつぼりしつたりわにの岬に舟とめて、苫もる雫もろともに、涙であかす舟のうち、これや誠に瀟湘の夜の雨ともいひつべし、やう〳〵はれる雲ぎれに、苫おしのけて見あぐれば、あれ石山の秋の月、湖水にうつりあきらけき、須磨も明石もよそならず、これや誠に洞庭の秋の月、こゝにうつしてみづうみの、更くるも知らず眺めいる、ふけゆく鐘の音きけば、飽かぬ別れの鳥は物かは、鳥もなき鐘も聞ゆる三井寺の、時をたがへずつく數は、はやあけ六つの明けわたる、東近江や西近江、大津の町もとく起きて、おのがさま〴〵手わざする、是ぞ山市の晴嵐と、夢のやうなるそのうちに、四季折々のたはむれを、今目のまへに見する事、これ龍神のめぐみなり

㊽狂亂　荻野澤之丞　西國兵五郎

本調子きちがひに物問はう〳〵、薄化粧にやなぎがほ、髪はおどろに亂したれども、花紫のゆかり有、ふぜい床しき物狂ひ、いかなる人にてましますぞ、問うて何しよ、おとやつてなにしよ、われは親より子ゆゑに迷ふ、まだ父しらぬ撫子の、花は根にかへる〳〵

遠方—遠浦の誤か

笄とらしよ〱、これぞ平沙の落鴈と、語りて舟にのりうつる、のういかに船頭殿、こなたに高き御山は、いかなる所なりけるぞ、あれこそ比良の暮雪とて、これよりは冬げしき、峯に降りつむ白雪の、ちらり〱とふり來る雪に、四方のな梢ものうよ白妙に枝もたわむやしつはりと、つもれる道を踏み迷ふ、木こり山がつ柴刈が、笠も薪もうづもれて、さむさうにござる、火桶やりたや炭そへて〱、比も師走の暮なれば、穗長ゆづりは門松を、めせ〱めされ候へと、あきなふ風情げにまことに、これ江天の暮雪なり、むかふを見れば堅田の浦のあま小舟、つりして歸るありさまを、見るに我身もいとなみの、つりの糸さへしなへてもつれて、竿もたずにひくは〱〱、ひいてしやくる所を、釣つた所のおもしろや、入日の影ともろともに、風にまかせて帆をあぐる、この召されたる舟こそは、遠方の歸帆もまのあたり、あれ唐崎の一つ松 本調子「老若貴賤布引のひきわけられぬ宮まゐり、いかなる上手の筆なりとも是にはいかでか勝るべき、日もはや西に入相の、提灯とぼす小夜嵐、ふきくろ雲に雨おこり、村雨しきりに降りくれば、濡れに


石山
秋月
堅田
落雁
粟津
晴嵐

せきせよ―夕照か

にけり

㉗近江八景

水木辰之助

本調子 舟をだしやらば夜深にだしやれ、えい〳〵帆影見ゆればなつかしや、戀にはのんえい、それわか枝もいよえい、えいや〳〵と入るや矢走のわたし舟、波はへいたを叩きあげ、たゝく白波あら男波、しづかに漕げやそろ〳〵押せよ、いそいで漕げやさつ〳〵と押せよ、浮きぬ沈みぬ行く舟の、汀をみれば瀬田のはし、漁村のせきせよまのあたり、ゆきゝも絶えぬ旅人の、上れば下るあひの土山雨がふる、うたふ小歌のから尻に、乘り打ちさせぬ關所也、足もとまらず行く舟の、次第々々にそのさきは、いかなる所と尋ぬれば、あれは堅田の落雁ぞや、いざや名所を語るべし、おりてしばし濱あそび、あがらせ給へ人々よ、入江々々の蘆の葉に、そより〳〵と吹き來る風は、夏のしるべか涼しさよ 三下リ「磯におり居る雁金の、おのが友よびあそぶにぞ、ねらひより追うてまはれば、はつと立つや、ひら〳〵とむれるる雲に竿に成て通る、あとながら先へ先ながあとなら、

いはれぬ—結はれぬ、言はれぬ

そうとめ—早乙女

きないて—著なして

さ何がさ

(廿六)柴刈風流

上村今吉彌
袖島市彌

本調子山がつの薪を折て、かず〳〵の思ふまゝにはいはれぬや、ことさら風を厭ふなる柴に櫻を折りそへて、柴かる女のいやしき身にも〳〵、沈や麝香はもたねども、匂うて來るはたき物、ちやうりやうふりやう、ひやらにひやらろ、ひやらろにるろう、るりちやるろ、戀といへるくせもの〳〵かんな、身はやつれそろ、にくや〳〵つらや怨めしや、月には雲に花には嵐、嵐つれなやよぎて吹け、忍ぶ夜のあらし、さても〳〵いや〳〵山田におりしそうとめの、しかも近江のなりよい笠を、しやんときないで拍子を揃へ三下リ「田うゑるは面白いが、ぐる〳〵まはりがうかないさあうかない、十七八は寢ごいもの、梅の木のさがりの枝を枕におよりたか、およりまうせさあいよ〳〵〳〵え、此へ〳〵しよんぼり〳〵と植ゑた袖、よその袂は田うゑにぬるゝ、たれゆゑぬるゝわが袂、打ちながめ、あゝ賤の女の重荷の柴も苦にやならぬ、歩むほどなき道すがら、とある所に著き

きつそう―吉相か
しゝあひ―肉付
きりよの云々―きりよは切節也
慶長頃の小唄、「竹のきりよの溜り水淸まず濁らず出ず入らず」を用ふ

なく苦患をうくる故、無間地獄と名づけたり、あら恐しや〳〵、阿毘大地獄の苦みは鐵石をたつ事一由旬四方にして劍をひつしと並べ、科ある者を追ひのぼし、苛責する罪人科を歎くといへども、叶はぬは地獄の習ひにて、岩石せなに結ひつけられ、劍の峯よりつきおとされ、骨は微塵にくだかれて、なげき悲む淺ましや、苦樂の境は說くも說かれず言ふも言はれず、風ふけば吹け我が庵の佛の照らすたえぬともしび

㉟名馬揃　　竹島幸十郎

本調子あつぱれ御馬ざうらふや、よき馬のきつそうや、をつさまむかうよこはたばり、ししあひ骨ぶしよめのふし、おゝ作りつけたる如くなり、尾は千反の布をはへて、百丈の瀧の落つるに異ならず、右の眼左の眼、振分髮にちらり〳〵ちら〳〵ちらと「鞭はなに〳〵紫竹寒竹唐竹若竹、本から末から根から葉から、竹のきり〳〵なきり〳〵きんきりよの、やれ溜り水、淸まず濁らず出ず入らす、人の心もそれによそへて、何も柳にさらり〳〵ともやらせて、かるいがよござんす、思ひはづふりづふ〳〵〳〵とも、しづんだ

んぼうがへしに水車、磯打つ波のまくり切り、つらぬきねぢ首人つぶて、死人の山をつかん事、只とる山のほとゝぎすと、勇みに勇みし有様は、めいぼく太子はくた王、我朝にては將門純友人鹿の荒れしもかくやらんと、恐れぬものこそなかりけり

かごう—家業か

（廿四）山居之僧　荒木與次兵衛

誹歌 あまりに山を遠く來て雲又我里を埋む、皆これ人間妄執の雲霧のひきは返さじ梓弓、やすからぬ身の假の世を、思ひすつるに身こそやすけれ、我はなまじひに弓馬の家に生れきて、かごうを捨てゝうもんに入る月を東に里を見て、けはしき山路なければ、岩根にとりつき〳〵〳〵苔路をふんで薪をこり、水音すごく底ふかく、谷にさがり水むすび、その雪山の昔を問へば、唯一心のおきどころ、背かばまさに三惡道はのがるまじ、多き地獄の其中に無間地獄の苦みは、ねんねつたる炎の中に、まつさかさまに落つる事は、三つはのそや下より猛火吹きあぐる、たとへば數千丈の谷よりもまくりたて〳〵、吹きまはす嵐にひとしく、とがはうへより落つれば、さあ〳〵さつ〳〵と吹きあげて、ひま

術と－術をの衍か

らんびらんぐわい－亂飛亂廻か

の櫓十三ヶ所、脇の櫓九所、二重三重櫓を上げ、北のおもてを見てあれば、鞍おき馬の數しらず、それぞといはゞ引き出さんと、用心きびしくみえにけり、扨又うしろの要害は、おもては山高うして一片の雲のごとし、谷深うして飛ぶ鳥だにもかけりがたし、山峯一丈さがつて、空壕ほつてうむ〳〵つゞらをりなる難所なる、東の方のをさきには、川を要害とし、青黛がすみ滑かに足そばだつに便なし、此關所をこえん事、韓信が術とまなび、富婁那の辯にてたばかるとも、さて中々思ひもよるまじき、されども武藏が智慧のほど百千萬に碎きなば、やはか通らでおくべきか、それにも運命つき弓の、たくみし智略もあらはれて、さしもの大勢前後さうより取り卷かば、かげろふ稻妻水の月、むでにはいかで取らるべき、かしこにおつぷせひつ組んでうつ取るべし、或はうづまき千騎が中かけ破りさし通し、十方無盡のすて刀、さつとひゞいては互に言葉をかけかはし、是ぞ軍の花ざかり、吉野龍田の花もみぢ、嵐につるゝ青侍、にぐる奴原おつさますて切り、むかうてかゝるは唐竹わり、らんびらんぐわい虎ばしり、まくのそうだてさうのこて、と

衣の裾のたかからげ、やぶれ笠腰につけ、ちよこ〳〵はしりて出られしが、又立ちかへり、文覺は北條殿に打ちむかひ、これにも承引なきならば、我生きながら魔障と成て、高野こがは金峯山白山立山富士のだけ、此山々の天狗ども、さつ〳〵と招きよせ、車軸の雨に劍をまぜ、ひさうを非々想天までたゝきあげ、海にうかまば六代七代八大龍王、山神水神江河のうろくづ、八方よりも祟をなさせ、例の天狗の空礫、一時が間に打ちひしぎ、みかたのせいうん日輪月輪じやうふを吹きやらはげ〳〵暫時に本望とげん事、なんの子細のあるべきと、をんどりあがりはねあがり、勇みに勇んで申せしは、たのもしとも中々申すばかりはなかりける

㊸とがし城

竹島幸左衛門
同　幸重郎

本調子さる間武藏坊熊井太郎只一すぢに思ひ切り、さしも大勢まちかけし富樫が城へ入たるは、人に變りておほえたり、山伏の法なればれいしぜんぼうを讀むべきに、武藏何とか思ひけん、高念佛を唱へつゝ、大門よりつつと入る、富樫が城の體を見るに、おもて

かぜんぼう一懺法

朝野間の浦にて生害あり、其首やがて六波羅の川原にこそはかけられしを、愚僧ひそかに盗みとり、菩提の道に修行者の首にかけたる頭陀袋、あけぬくれぬとせし程に、はや三歳の光陰は矢よりも早きものゝふの守りの神ともなし給へと、しやれたるかうべを取りいだし、助殿にたてまつれば、扨は疑ひあらがねの、つちにかばねは朽つれども、名は末代にありあけの、月の都に攻めのぼり、たえて久しき白旗を、み山おろしに吹きなびかせ、おごる平家を平げんと、頼朝今は勇まれしが、いや待てしばし難儀あり、院宣りやうしなくしては、諸軍の催促あるべからずと、助殿あぐみはて給ひ、我に頼むと有りし時、それこそ易き事どもと、卽時に津の國經の島牢の御所にかけつけて、みつよし卿を頼みつゝ、院宣りやうしを請ひうけて、又たちかへる浦波の〱磯をつたひ山をこえ、蛭が小島になりしかば、院宣の取りいだし、兵衛殿にいたゞかせ、それより義兵をあげ給ひ、源氏の御代となす事も、ひとへに愚僧が恩ならずや、せめて廿日は待ち給へ、鎌倉にはせくだり、此一そうをせんまでは、必ず〱頼むによな、北條殿といひすてゝ、

ふる塚へかへらん、いさみ〳〵歸らん、おれが思ひはつゝむに餘る〳〵、もぢのふくさに紅梅小袖、つゝめど〳〵なにと包めど色にでて、人目はづかしやるせなや

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

(卅一)傾城善の綱

二上リ筒非筒〳〵の水は濁らねど、かはせし人はおぼろ月、入るかたもなき我が思ひ、只かはらじと一筋に、ねてもさめてもいとしさの、餘りてもれて憎うなる、墨と硯はこい中なれど、人が水さしや薄くなる、しんきえしんき〳〵、水さしや人が〳〵水さしや薄くなる、しんきえ、其一念のつきそひて、影にたゝずみあゝ日なたに、おほいくる〳〵くる〳〵〳〵と苦しき胸のほむらの火、湧きくる水にのう消えもせず、かすかにへだつ淺ましや、少しはそれと思ひしれ、足元はよろ〳〵よろ〳〵〳〵と、弱りはてたる釣瓶のしづく、落ちて形はなかりけり

(卅二)文覺上人

竹島幸左衛門

本調子そのとき文覺膝おし立て、はづかしながらそれがしは、源氏譜代の侍なり、先年義

みちくら―みてぐらの訛

くゞりど―くゞれどの誤か

びあがりてはまろびふし、雲にうちのり波を蹴たて〳〵飛行するこそすさまじけれ本調子恐しやみちくらに三十番神まし〳〵て、罔兩鬼神はけがらはし、出でよ〳〵と責めたまふ、つらにくやねたましや、思ふ人をばいたづらにとらで、あまさへ神々のせめをかうむる惡鬼の通力、力もたよ〳〵よろ〳〵〳〵と足弱車のめぐり〳〵て又とるべしと、呼ばはる聲もかすかに聞え〳〵松風ばかりや殘るらん

(卌)廿四孝狐會

山下又四郎

三下リ見そめまいもの、うか〳〵〳〵とうかれ心かうば玉の、よるならで晝はこがるゝわが思ひ、ねてもさめても忘れもやらで音をぞなく〳〵、君を思へばなんな〳〵しのすゝきや、尾花の中をくゞり〳〵くゞつた、なんぼくゞりにくい、くゞり〳〵〳〵どやるまいぞ〳〵、どつこいそつこいやるまいぞ、さまを見かけてはしりこきり〳〵〳〵ここきりきり〳〵や、月の夜もゆく闇もゆく、雨か霰か露か木の葉か、はらり〳〵〳〵しどろもどろとあの山越えて此山こえて、けさのきぬ〴〵あらはれさうな〳〵、いのよもどろに我

のうき世の夢なれや、經文まじりになまふだなも〱なまふだ、語るまもなきねやのうち、はやきぬ〲に引き別れ、首尾さへあらば重ねてと、さらば〱〱やと、裾や袂にとりつけば、戀しき人の面影は、見えつかくれつまぼろしか、消えてあとなき夕間暮

○謠曲鐵輪の文に本づく

㉙女仙人怨靈　　山下又四郎

三下リそれ三界は夢なれや、みつの車にのりの道、火宅の門をや出でぬらん、月は東の山よりいでて、西の山の端にかくれつゝ、世上の無常はかくのごとし、何の上にも報いあり、浮む事なきみづからは、邪淫の惡鬼と身は成て、えい〱さつても〱未來えい〱くる〱〱といやつきそひて、我に憂かりし其人の、生きて此世にましまさば、水くらき澤邊の螢のかげよりも、我が思ひも胸の火は火燄となつて此身をやく、無念や腹立やと、しもつと振りあげおひめぐり、髮をくる〱〱〱と手にからまいて、打つやうつ宇津の山邊の夢の世に、めぐりくる〱因果は今ぞ思ひしらずや思ひしれと、と

しもつと―しもとの訛

(廿八)女仙人

多門生左衞門
出來島小三郎
山本歌門

二上りそちが思へばこちも思ふよ、いづれ思ひは變りはせねど、いつもながらの御げんも絶えて、今は中々逢ふ事ならぬ、なぜな、いつはりがちなる心と知らで、つらきながらも籬に立てば、つての文さへやれさて叶はぬ浮世ぢやえ、よし〳〵かこつもやぼらしや、いつそ死んだがましならめ、扨は叶はぬ浮世やと、思ひつめたる其氣色、身につまされていとしさまさる、たとひ萬里を隔つとまゝよ、かはる心が〳〵なけれども、あひとて見たうて語りたうて來たおれに、なぜにそなたは顔ふりやる、さても〳〵そなたはげに戀のかたきよと、怨めしさうに打ちながめ、すがりついては泣くばかり、一樹の蔭の一やどり、又は一河の流れの身、枕ならべし睦言も、假の浮世のならひぞや、あはれはかなきみづからは、たま〳〵受けがたき人身の受けたれど、ためしすくなき川竹の、流れの身となる悲しさよ、さきの世の報いまで思ひやられて悲しやな、少しあはれとおほしめし、機嫌なほしてのうこれ〳〵ちと笑ひ顔が見とござる、戀も口説もひとさかり、假

答へぬふる塚の、夢かうつゝかまぼろしか、我子戀しや

㊆傾城佛の原

岩井左源太
上村吉三郎

二上リいつの間にかは秋風の、吹くや越路の山こえて、彼の三國のわけある里へ悪性通ひのつらにくや、ひさげの水は湯となれど、まだ覺めやらぬ我思ひ、つらしねたまし、あら腹立やと、すがりついては泣くばかり、おれとそなたはなん〳〵七つ八つ十で殿御を見そめてほれて、人こそ知らね振分髮の、そなたならでは誰にか見せん、此黒髮を今はあだなる亂髮、みだれ心かあゝ〳〵〳〵あひた見たさに來たぞ、やれつらや〳〵と思ひはすれど、まだ棄てられぬ、憎さ餘りていとしさまさる、扨も命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死んで又きて、その〳〵そのさきの世で思ひ知らしよぞ、思ひしれ、袖の港の戀の淵、わたりくらべん涙川、戀の一念盃の、かげくらきよに瞋恚の毒蛇、くる〳〵〳〵くるり〳〵廓通ひもふつゝりと思ひきれ〳〵ねたましや、あら腹だちやと立たるは、あはれにも又おそろしや

よ母よと戀ひこがれ、晝はひめもす夜はまた、夜明の烏ともろともに、まどろみもせず泣きあかす、目もくれ心きえ〲と、身も世もあらぬ不便さに、母のきてうに渡さんと、さてこそ室津へまゐる也

(廿六)彌陀たのむ

芳澤あやめ
今村粂之介

三下リ彌陀たのむ人は雨夜の月なれや、雲はれねどと西へ行く、なまみだ〲、いとしわが子もせめてさて、彌陀の御國へゆくなどと、便りのあらばいかばかり、嬉しかるべき我が心、そなたいとしけりや、のうやれわが子もいとし、それなぜに、いつそ子もなけりや、なけりやこそ思ひもないよさ、よしやよしなや、迷うたりのうさて、なまみだ〲〲〲〲、鐘のひゞきに夜はなん時ぞ、八つでもあろかいや、のうあれ〲夜があけるやら、はや晨朝の回向の鐘のあら有がたや、いざや我子の菩提のために、なまみだ〲宵にや和讃夜中にや法華經、南無地藏大菩薩〲、心が亂れての、しどろんもどろん〲、そなたへは行かぬか、こなたへは行かぬかと、そばなる人に問へど〲

をさあい—幼兒

む風に褄も袂もふは〱と、吹きあげて我とは見えぬ水かゞみ、うつす姿は月影の、曇りみ晴れみ行く雲の、空さだめなき山々の、木々の梢に鳴く鳥は、山がらこがら〱四十から、ひわや鵯鳥めうない雀、鳴子ひく音におどろかされて、數の小鳥がむら立ちさわぐ、にくやにくや小鳥が我をおどすはつらにくや、えいこのえいこのえいこのえいこの〱えいこのえ、簑とたのむよいや又笠と、笠とたのむは小池のはすの葉、かくは草かりたすく男はよいやさ、えいこの〱〱〱えいこのえ、木の葉の雫はら〱はら、風にもまれて秋の小蝶のたはぶれて、峯の小松にしなだれかゝる蔦かづら、よれつもつれつ、離れがたなき我が思ひ

㉕傾城花筏

葉山岡右衛門
蔦山四郎兵衛

二上リ本調子 語るにつけて悲しきは、此をさあいが身のうへなり、父は播磨のなにがしとて、人に知られしものゝふに、母は室津の上臈のはて、かりに難波に住居して、此子をまうけ給ひしに、過ぎつる秋の末つかた、我に此子をあづけおく、いたはしやをさあいは、父



ばかりの音信も、はや九つの鐘がなる、扨も思はぬさはりあり、今宵のあふせはやれさて叶はぬな、よし／＼かこつもやぼらしや、いつそ夢こそましならめ、枕一つを樂みて、戀し床しきねやのうち

㉓稻荷塚四ッ門　　中村七三郎

二上リ翠帳紅閨に枕ならぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つもんの跡夢もなし、さるにてもわがつまの、秋よりさきに必ずと、あだし言葉の人心、そなたの空よとながむれど、それぞと問ひし人もなし、夏もはやすぎまどの、秋風ひやゝかに吹きおちて、よしや思へばこれとても、逢ふは別れなるべし、世をも人をも怨むまじ、たゞ身のほどを思ひつゞけて、我ひとりまろねの床こそさびしけれ

㉔稻荷塚狐會　　中村七三郎

二上リ亂菊や小菊白菊小手鞠や寒菊、君をまつ夜はくる／＼／＼と車菊、よしやなけど慕へども、秋の朝空霧とぢて、露なき草にこがくれの、杖をたのみに休らへば、身にし

く苦患をうくるなり、阿毘大地獄の苦みは、鐵石をたつ事一由旬、つるぎをひつしと植ゑならべ、罪人を追ひまはし岩石せなに結ひつけられて、峯よりどうどつきおとさるれば、骨は微塵にくだかれて、風に木の葉のごとくなり、助け給へや人々よ、懺悔に罪も消えうせて、願ひのまゝにやすく\と、ぐせいの舟の川岸に、到りいたらせたび給へとて、泪ぐみてぞ語りける

㉓松茸狩　中村七三郎

本調子稻舟のおすに押されぬ梶まくら、ねもせで長き夜のつらさ、語りなぐさむ片糸の、折敷御座のかたく\に、ねられねばこそ夢もみず、さそはれ出て道のべの、千々の草葉に鳴く蟲も、思ひみだれて糸すゝき、せめてそれかと我とふものは、荻の上葉にみだれく\て風そよぐ、餘所にもおくや袖の露、どれく\月のうつろふ影見えて、殘る松さへ嵐につれて、いとゞ心はのうさんさ物わびし、道しるべせよしのぶ草、しげき思ひは秋霧の、あだ名たつともいとはじな、宵よりねやに引きこもり、待てど暮らせど其人の、そよと

非想非々想天―三界の最高世界にて、有頂天に同じ

をこうろぎ轡蟲、忍ぶ夜さむは松蟲も、荻が上葉にねもしなん、猶ゆくさきは姫小松、浪華の蘆に初鴈の、おのが友よぶ聲そへて、詠めつきせぬ道すがら、身にしむ風に空はれて、いくち初茸うらわかき、すゝきにつなぐ賤わらは、磯のみるめもはづかしと、思ひつゞけて行くほどに、松の木蔭に物とはん

(廿)行平地獄物語　　中村七三郎

本調子 語るに罪も消えぬべし、語るにつけて恐しや、苛責のせめも音たかく、ふりあぐる鐵杖は、天地もひゞくばかりなり、罪をあらはす淨玻璃の鏡に惡をうつせば、八萬奈落あきらかに、天をうつせば非想非々想天まで隈なく見えたり、扨又大地をかゞみみれば、まづは地獄道罪をあらはす罪人の苛責、打つや鐵杖の數々こと〴〵く見えたり、こはそもいかにと立ちされば、紅蓮大紅蓮の氷にとぢられて、あたりを見れば猛火大地にみち〳〵たり、無間地獄の苦みは、ねつ〳〵たる炎の中へ、まつさかさまに落つる事みつばのそや、下より猛火ふき上る、とがはうへより落つる所をさつ〳〵と吹きあげて、隙な

しんく—眞紅

住吉の云々—詞花「君が代の久しかるべき例にや神もうゑけん住吉の松」

られぬ身ぞつらや、心からなる我涙、とは思へどもうらめしや、血筋はしんくの網をはり、戀を結ぶの神心、わが身の戀はいかでかは、にくしと思ひ給ふらん、あら怨めしや其人の、思ひ亂るゝ新枕、誰かとくべき常陸帶、思ふもつらしねたましと、蚊帳のうちへ入りぬれば、こは悲しやとはしり出、わな〳〵ふるうておはします、のう情を知らぬ姫君や、たとひ何くへ迯げ給ふとも、此戀あだになすべきか、思ひ知らせん腹立ちやと、蚊帳の外をくる〳〵くるり〳〵くるり〳〵と、苦しげにつく息は猛火と成て此身をこがす、あゝ曲もなき御姿と、蚊帳につゝみしつかといだき、虚空にむかつてつく息は、鬼ともなれ蛇ともなれ、我ながら我姿、人目はづかし淺ましと、思へど切られぬ輪廻のきづな、あはれにも又おそろしや

⑳行平道行　中村七三郎

本調子げにいく秋をふべき御代なれ、住吉のかねてうゑおく松の千とせはつきまじ、時しも秋の夕まぐれ、里の砧に月さえて、千々の草葉になく蟲の、聲もすゞしき鈴蟲や、君

る風は戀風か、あだし野の草葉における露の身なれど、身なれど、是も、これも假なる世の勤め、とかく世の中につらいものはなに〳〵、忍ぶ妻戸に、妻戸に忍ぶ、忍ぶ妻戸に鐘のこゑよんの

禪僧の戀するはまづ文をやりて見て、やりかけ〳〵やりて見て、きたろにやだいてもねしよねもし、こずばあはせの片褄片袖を打敷いて、此怨みねにもねしよね、波のたちるも何故ぞ、假なる宿に心とめずば浮世もあらじ、別路もあらし吹く花よ紅葉よ月雪のふる事もあらよしなや、假の浮世に

⑲男道成寺蚊屋之段

中村七三郎
山本歌門

二上り君こふる泪をうくる盃に、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、中に流るゝ妹背川、思ひこがるゝ短夜は、とても寢られぬうき枕、蚊屋のひとへの薄月もるゝ〳〵、洩れてさびしき夜すがら、共になかるゝほとゝぎす、包みかねてはくい〳〵と、くひなの鳥の物おもふ、今宵ばかりはうす情、さのみつらくはのたまひそ、いつの月日に見そめてさても、思ひ切

三度、けぶりくらべん淺間山、あれ御覽ぜよ淺ましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、のうつるぎの山の上に戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ぢのぼれば、思ひは胸を碎く、こはそもいかにおそろしや、花の姿もよわ〳〵と、かしこに立ちゆかんとすれば、ここに消え、あるか無きかの春の夜の、おぼろ月夜にはかなくも、消えて形はなかりけり

㊆關東小六青葉　芳澤菖蒲

三下リこは情なきしわざかな、さのみ人にはつらかりそ、悲みのなんだ眼にさへぎり、西も東も白波の、よるべ定めぬうたかたの、いつそ泡とも消えもせで、こがれこがるゝ身の行くへ、青葉々々とよべども濱の、濱の松風音ばかり、松風濱の〳〵まつかぜ音ばかり、そよとばかりの便りもがなと、怨みなげくぞあはれなる

㊇同小六自然居士　中村七三郎

二上リよせては岸をどうとは打、あま雲迷ふ鳴神の、とゞろ〳〵と鳴る時は、小笹の竹のさゝらをすり、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらり〳〵ざら〳〵ざつと、吹きく





て南無あみだ、聲のうちよりまぼろしに迷ひ出、さも苦しげによろ〳〵と歩みより、あらなさけなや母上さま、のんどが乾きて苦しきに、水をたむけてたび給へ、苦しやとたえ入るやうにぞ泣きゐたり、夫婦は夢の心ちして、げに道理なり、いとほしとうつは物に水を入れ、よらんとすれば忽ちに猛火さかんに燃えあがる、母はあまりの悲しさに、抱きとらんと立ちよれば、不思議や俄に風ふき來り、眼くらんで降りくる雨の音は、そも篠を束ねてさら〳〵と、雨か涙か陸路にどうど伏しまろび、木神にひゞく聲ばかり、あら悲しや堪へがたや、助けてたべのう父母と、叫ぶこゑの聞ゆれば、夫婦はいとゞ悲しくて、八聲の鳥の音をたて、人間の水は南星は北にたんだくも、あまの海づらよき雲の立ちそふ聲もかすかに聞え、夢かのうつゝか、夢かまぼろしの世ぞ哀なる

(十六)傾城淺間嶽

中村七三郎
岩井左源太

二上リ 怨みも戀ものこりねと、もしや心の變りやせんと、思ふ疑ひはらさんための誓紙をば、なぜにけぶりとなし給ふ、うらめしや胸のほむらは夜に三度、こちのおもひは日に

りやうじん―兩陣か

りまはれば芹生の里、沈や麝香はもたねども、匂うてくるはたきもの、おはらぎ〳〵買はい〳〵、黒木めされの、柴めさいの、ちやうりよふりよひうやらに、ひやらろひやらろに、るろるりちやらるろう、心うかれてさつても〳〵おもしろや〳〵、りやうじんたがひに心を合せ、菊のせいをみかたになせば、菊の蕾をさつと開かせ、をんどりあがりとびあがり、手重の菊の勇みをなし、あつぱれてん〳〵てがらやと、褒めぬ者こそなかりけり

㊄名護屋山三

中村七三郎
花井東妻
子役

端歌　泣く泪雨とふらなん三瀬川、水まさりなば歸りきて、此有樣を見給へのう、夫婦は目もくれ心きえ、こはそも夢かと立ちよれば、妄執の雲のへだたりて、今まで見えしは姿もなし、是は夢かやうつゝかと、夫婦たがひに手をとりて、わつと泣いては抱きつき、呆れはててぞゐたりける

二上リ「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無あみだ〳〵、袖の港の波風も、聲そへ

よわと、しどろもどろの志賀の里、須磨の若木の櫻花、嵐につれてちるは〳〵、散りくるの、ちりくる〳〵、をしき櫻はちりはつる、思ひ明石の浦過ぎて、室の泊に身をよせて、海漫々と見わたせば、こなたは四國の淡路がた、波にもまれてゆく鷗、浮いつ沈んづ、しづんづ浮いつ、ばつとたつてはひらり〳〵、ひら〳〵〳〵とおるゝ有様は、たとへていはんかたもなし、便り求めてゆく程に、七重八島の壇の浦、眞砂をはつと拂ふ風のまは、笠かぶりかたむけて身をかこち、人まつ澤に腰をかけ、旅の休息なされける、異國は知らず我朝に、ためしまれなる所存やと、ほめぬ者こそなかりけり

(十四)花軍　竹島幸左衛門

三下リ優曇華の花のひらくを待ちかねて、ちらすな花のあるじをば、こがれ〳〵てつれて都へ、やれのぼらんと、おとにきりころ〳〵音に聞えしをはらの里は、菊の名所とたよりを求め、杖にすがりて數へてみれば、白菊の紅粉菊の小手鞠寒菊きくきり〳〵きり〳〵まはる水車くるり、澄まず濁らずよほほんにさ、くん〳〵くん〳〵〳〵まはる車菊、まは

したけき—「し」の字不用なるべし

ころり、つるゑりつるろ、男鶴女鶴よるのつん〱鶴めが、つま思うて鳴くねにいざやくらべん、くらべこし、暮れかゝりては浦々の、沖の釣舟我さきにと、入江々々に歸りしは遠浦の歸帆是なるべし、遙に見えしは一の谷、まことにいにしへ源平のいくさ、亂れし跡も有明の月に白むは劍のひかり、水にうつるは冑の星、うちあひさしちがふる軍勢の其有樣、ひくは潮に滿つるは又、八重の潮路のはる〲と、西海四海波の上、たつたみかけ〱ほつかけ〱たゝかひしは、はな〲しくこそ聞えける、あらおもしろのながめやと、勇みに勇んで行くほどに、明石の浦にぞつきにけり

⑬鎌足道行

竹島幸左衛門

本調子此手柏のふたおもて、いつか竝べん長枕に、かれてゆくや只ひとり、勅諚おもき御意を得て、四國の浦へといそがるゝ、心のうちこそたのもしき、はや山城に井手の里、月の横川の峯つゞき、ゆんではひらのめては愛宕の山おろし、峯のけぶりの一むすび、袖打ちはらふいにしへを、思ひいだせば故郷の空もなつかしや、したけき心もよわ〱〱

すやうでいつくにばつくに寝られぬ、誓文のつゝ立て申すべい、弓矢八幡腰骨こみぢに打て、かばねはかきにさらすとも、きのうらににによ、あぶないこんだとさ、かはりはてたよ、しよだいなや

⑬西國八景

竹島幸左衛門

本調子 別れてなくね高砂や、室津に通ふ市人は、山市の晴嵐今こゝに、うつしぬるかと面白や、それより沖のあま小舟八十島かけてこぎいづる、こなたは尾上鐘の音に、霜にさえつゝ聞ゆるは、遠寺の晩鐘あはれなる、一村雨の降りくれば苫もる雫に身をそばめ、こがれたゞよふ其風情、これや誠に瀟湘の夜の雨よとおもほゆれ、ゐじまがさきは雲はれて、猶洞庭の秋の月、心を慰むたよりとなり、夜もほの〲とあけゝれば、いとゞ舟長力を得、梶とり直し帆あげて、波に漂ひこがれゆく、淡路の島の朝霧に、むれゐてあそぶ雁金の、われは故郷の戀しさに、常世のさむさいかなれば、ふる里すてゝきたるやと、問はばや平沙の落雁に、そふがいにしへ思はるれ、沖のつん釣舟なる艪拍子の、音はから

さむさ—さむきか
すちよ—棄てよう

瀬川、せど川のさはの〲さむさ嵐にひよつとうかれて、川原おもてに浮名をさらす、思はじ〲とんとすちよ、そも戀は何のむくいぞ〲

(十一)公時酒の醉　竹島幸左衛門

二上り峯の松風通ひきて、琴のしらべと疑はる、一の人大臣はしよだいない人で、え踊らぬ我に踊れとおしやる、踊でふりを見せまゐらしよ〲、くわんこや〲くわんこ〲くわんこや、てれつくに〲からりちんに、ちんからり、しやつき、しや〲しやつき〲しやつきしや、ここをあけさい、明けずばもどろ〲、忍ぶ其夜の通路に、必ずござせとさ、さまの佛みやまの奥を通りて見れば、いたいけしたる花あり、荻萩すゝき刈萱紫苑りんだう、數の花折りせたらおうてせおうて、藁で髪をゆうて、腰に鎌さいて、ついつくばうて、かいつくばうて、つい〲とりなりは柴刈るをの子のなりふりは、みめのわるいしやつつらで、そばにころりころ〲り〲〲〲ころ〲りともねたるは毬栗頬髭天神鬚、けさ打ちおろしのあら筵、がんきやすりこめはだついつくやうで、さ

流れ子―流れ木の誤か

端歌あら淺ましやつれなやな、われからなせる思ひのたね、みの末世、一代教主の如來も生死のおきてはのがれ給はず

本調子池水に底の心は通へども、岩にせかれて落ちあはぬ、あきてはかなき浮世ぞと、思ひすてゝも棄てられぬ

三下リ昔の人の戀せしは、命も絶えよと戀をする、さて中ごろの戀の道、草木もなびけと戀をする二上リ「我は思へどそなたはつらや、磯の流れ子のかた思ひ、さはりせうがのやれ片思ひ、磯のながれ子の片思ひ、さはりせうがの　端歌「とは思へども、いとど戀しき折々は、人目も恥もつゝまれず、せめてねやもる月だにも、別れをいそぐ遠寺の鐘や梢のあらしは物ずごやの

二上リ「戀の山ぬるも寢られず、目もあはぬ、身の狂亂は誰ゆゑぞ、問ふにつらさのます鏡、いつまでかくは長らへて、憂きは數そふ習ひにて、身は捨草のいたづらに、あら怨めしや〳〵、心もなげに立ちのほる〳〵、くゆるけぶりはほの〴〵と、あとには戀の淵

すれば悪龍追かけ、兼てたくみし事なれば、持ちたるつるぎを取り直し、乳の下をかき切り玉をおしこめ、つるぎをすてゝぞ臥したりけり、龍宮の習ひに死人の忌めば、あたりに近づく悪龍なし、約束の繩をうごかせば、人々よろこび引きあげ、玉は面向不背の唐あの御ほぞんの眉間にこめしぞ拜ませ給へや旅の姫、二月堂には觀世音、牛王は彌陀佛はん木の御板、井筒のいのりに鈴錫杖はから〱〱ちんから〱〱、唐獅子のふむらん拍子やしんたん〱たん〱たのむや、たん〱たりき他力功力のたき文珠、わかさみかさにわかさやと、しやすいの印をぞ結ぶなり、結ぶや誓の常陸帶、鹿島の御神當社にうつるや、高きお山は本社のいらか、麓にとゞろき猿澤、しやかつた八大龍王龍燈さゝげ、池の青波けたて〱雲にのり、大地をかつぱと踏むひやうしの御神、惣じて奈良は七堂伽藍八百八禰宜九重十重都の礎、社のかずが一萬八千、通り者めが褒めておいたる名所舊跡、たがひにとうつ問はれつつ、春日の宮居に著き給ふ

嵐三右衛門
市川香織
芳澤菖蒲

面向不背の唐—誤脱あるべし

しやかつた—沙羯羅の訛

㈩吉田小女郎

後生前生—後生善所か

し、今も雲井にすむ月の、久方のあまくだります宮の神杉木の間すかしにながめ有、とはせたまへや教へ申さん、うれしや扨は尋ね申さん、あれ〳〵は名に負ふ奈良坂や、此手を合せて伏し拜む、東大寺には大佛の釋迦はやり彌陀は導く一筋に、後生前生のみ寺とかや、おうそれそこの高根はつゞら山、のりかけ馬のかち路の道をゆけば、左へ戻れば右へよほいほ、すぐに通へば一里十八町、まはらば三里よほいほ、それをば行きすぎ花の初瀨の山つゞき、興福寺と申せしは、藤氏の御願所にて、大織冠な御身をやつし、面向不背の玉を取らんとおぼしめし、いやしき海士の磯まくら、妹背ことばの末かけて、女も命すて小舟、こげやえいさら、八十島鷗のたつよの、たたせ給ふは志度寺の觀音、なむや薩埵の力を合せてたびたまへとて、大悲の利劍の額にあて、龍宮の中へ飛び入れば、空は一つに雲の波けぶりの波をかきわけかづきあげ、又どう〳〵落ちくる男波のひまを、つつとくゞるや唐紅の綱は腰縄命のきづなしつかとひかへよ、御船のうちにも心得、えい〳〵えいとゝも綱の、のぶるを便りに走り入り、かの寶珠を盜み取て、にげんと

もひ、たゞ逢ひましてく、のこる言の葉かへすがき

⑻多賀御傳來孫嫡子

松本重巻
大和山甚左衞門

二上りうつゝ男の姿にまがふ、さらば面影はなれもやらで、わが身一つのうき思ひ、おなじ思ひにしづみし中も、いとゞ忘れぬねやの內、いざ床とらん春の夜に、こちよれ枕長枕、かたりあかさん朧月、煙草引きよせ飮む睦言に、おれもそなたも知らぬ昔がよいわえ、とても知るなら根から底から知れかしな、いつの物日に馴れくそめてきそはじめ、わけある戀の種まきそめて、中よしかみよし心よし、ふたりまろ寢にころりとしたもましぢやえ、明方の鐘はつく數の響に、あたら夢を忘るえ、あけもんのしらせはお歸りと起され、あたら床をわかるえ、おそいくのお歸りと起され、あたら床をわかるえ、をしやねたまし春の風

⑼奈良名所盡

竹中吉三郎
山村勘三郎

本調子三笠山名に高く、もろこしにても仲麿が、ふりさけ見ればとよみし名所のそのむか





つもるうら—つもるうらみの誤か

㊅契情誓の湖

大和山甚左衛門
山下亀之丞

三下リ花はちりても春は咲く、死してかへらぬ死出の山、迷ふ戀路の、むごやつらやどうよくや、ようは殺した、その苦しさを今ぞ語らん泪川、いとし男のその言の葉を、かはいく〳〵といつはりごとを、誠と思ひ、おりや一筋につらい勤めも、それはその〳〵そりや苦にならで、廓離れて罪なき花を、いつか〳〵と氣のせくことも、皆仇花とちりゆくこの身、今くる花に目がくれて、ようは樂む心のにくさ、とかく死んだがさりとは因果、死んで花實のさかぬとは、花實の死んで、死んで花實のさかぬとは、我身のうへに白雪のこる、つもるうらは戀の山

㊆富士禪定

高島尾上
金子十郎左衛門

二上リ一筆と書きそむるは、なつかしさのまゝ、道より問はせまゐらせ候べく候、わかれより程はあらず候へど、思ひねにする獨寢は、心もすみて目もさえて、たばこ戀草伽となる寢屋のうち、かはる色なき御くらし、やがてあをぞや語ろぞや、筆にまかせぬ物お

しさみしや寢屋の、今は枕に香ばかり殘るうき思ひ、猶うらめしき鐘のこゑ、した行く水の思ひ川、底の心を白糸の、亂れて物を思へとや、鳥がうたへばもいのとおしやるさのえ、月夜がらすはさ、いつも鳴くよ、しやうがえ、もいのとおしやるさのえ、月夜烏はさ、いつもなくよ、しやうがえ、しばしとまりてくれよかし

㊄契情多賀の大祓

岩井玉之江
中村四郎五郎
津川半太夫

三下リ又とだに賴まぬ中のわかれみちを、今はの空の山かづら、ことばでからむ葛の葉の、怨みかこちて甲斐ぞなき、水に繪をかく男氣を、賴む力ぞたよりなき、狂ひかけだす心の駒よ、とめてくれかし情のあらば、情たづなや緣の綱、たぐり寄せばや引きよせて、だいて寢た夜は花をやろ、ねた夜は花を、だいて寢た夜は花をやろ、解けぬ思ひのあだ男、のう柏木ばかりはいとしうて、うちには水がつくかいの、死ねなら死ねと、假名がきに讀めるやうには言ひもせで、あだに取られし命ぞと、たぶさにすがりむしりつき、くひつきつめり淚ぐみ、疊たゝいて泣くばかり

そんなた―そなた
あはぬ―泡にかく

つくる油火とろ〳〵影法師、こゝにつつくり面影みする、啌のかず〳〵つく男、ねてはびつくりする夢を見せてなりとも、あゝあのしやうわる〳〵性のわるいは粋から起る、口にまかせて目で殺す、女心のはかなさよ、空誓文にのせられて、啌にも惚れたといふことは、餘りうれしゆてにくからし、かみをすきたて百しやうわけ、戀をしこなす男つき、そんなたならでは外にはないとさ、いうた詞のよい〳〵うれしさに、逢うて悔しやはづかしや

㊃淀川所作

山下亀之丞
澤村長十郎
岩井左源太郎

春の夜の夢おどろかすくたかけの、そのきぬ〴〵の物思ひ、又あふ事もいつかはと、深き心にかこち草、根引にせんといひかはす、身は捨草のすてられて、ながれし此身は淀川の、何をたよりに浮草の、波にゆらるゝようたかたの、あはぬは君がなさけなや、ねたましや、それは若草身をうらみ草、なんのそなたにあいだてはなし、飽きもあかれもせぬ中なれど、うけ出す金の蔓に離れてつたなき我身、せめてあはれと思へかし、送りかへ

しらかみ――しらなみの誤か

ふたうる茶屋――不動の茶屋の誤か

程なくこれやこの、宮川筋をのぼりつゝ、はやたつ風呂のゆかたがけ、さすがをなごの京めいて、ちよこ〳〵いそぐゆたかさよ、東にむかへば清水寺、大悲の誓ありがたや、枯木に雪の花もさく、たれ松原の橋すぎて、加茂のながれの水せい〳〵、ゐせきに遊ぶ友千鳥、はつと立つてはひらり〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵飛びつれ〳〵とびつくとびゆく有様、たとへて云はんかたもなし、つゞく川風かみあらひ、さす手引く手にしなはこばなしこひばなし、比良の雪風も肌さむござる、裾も小褄もちよとからげて、しやんとからげ、さん〳〵さゞなみ男波にもまれ、女波にもまれ、あそぶしらかみさんさ〳〵ちらし聲をかしくもいさぎよや、西は法輪愛宕山、みこし高山峨々たるは三國一のひえおろし、わが念願をはらさせ給へと、一心に祈誓かけ、歩み〳〵て今ははや、ふたうる茶屋にぞつき給ふ

㈢傾城因幡の松

瀧川六三郎
藤村半太夫
坂田藤十郎

二上リだまされて思ふことをば寢言いふ、わがつらい男にくひつきはぎりする、其心の罪

㊀契情夜明烏

袖崎歌流
澤村長十郎

二上リ今は昔とのむけぶり草、何を便りに身は浮草の、浮いて流れの情なや、嘘もかざりも一座ながれの面憎や、ようも〳〵書いたぞ起請文、たゝく煙管に咎もなや、しや〳〵り飲み〳〵流す涙の袂をひかへ、誓文くされ、神ぞこれにはあの言譯が、はてまづ聞けば恥しらずいきちくしやう、ふたりが中の起請を見よ、まづ一つそのはうさまと二世三世、死なばもろとも後世までも夫婦の契約致すこと、また一つ外の男に假枕、かはす詞のそのしな〴〵を、つゝまずあかし申すべし、こゝに誠の一つあり、かさねて嘘にも勤めにも起請血判のおし申すまじき事と、書いておいたはこりやどうぢや、人には嘘をばつくとまゝ、せめて神には恥ぢよかし

㊁大坂上りの道行

中村千彌

本調子だてなとりなりつい思ひたつ旅姿、人目を包む笠ふかぐ〵とおもはゆく、五條の橋のしもばしら、思ひいだせば故郷浪華もなつかしやと、いとゞ心はよわ〳〵と、ゆけば

四十三　定家怨靈

四十四　地つき踊

松の落葉　卷第六　中興當流所作

目　錄

あんのん—安穩

爰は箱根のな山中なれば、筆にやこと缺く、硯墨はもたぬ、もしも水口なおとまりならば、札の辻から四五間めの茶屋で、馬も息災其身も無事に、やがてのぼろと言うてたもれ、えいこのさんさ

（四八）姫小松

二上ッやら〳〵めでたや〳〵、天下泰平國土あんのん、治まる御代は天長地久千歳樂萬歳樂、民もゆたかに住吉さまの、岸の姫松しつてん天に、大悲の風ふかば、地には黃金の花がさこ、ありやよいよしのめでたいな

はやり歌終

住吉屋—墨にかく

せんしき—氈敷き

な目をむきだして、叱り升屋というてたもれ、えいこのこいや、思ひしづみし身は河内屋の、浮名かきけす住吉屋、波の枕に鹿島屋たてゝ、京屋伏見屋讃岐屋までも、くるりくるりとうられてめぐる、便りござらばあの三笠屋で、一つまゐれとな手にするたさ

㊹法性寺の入道

二上リ法性寺の入道さきの關白だしよ大臣、うなぜうせをつた、やれたゝきだされるな
「祇園町のまん中が、海なら川ならよござんしよ、魚をつる篠竹の、やれさまを釣りまつしよ
「猿丸太夫奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の、うななぜ鳴きをつた、たゝきだされるな
關の小刀銘はなけねど、綾もたちますたちます錦もたちます、金襴緞子は申すに及ばす、瓜もわります西瓜もわります、うななぜわりをつた、やれたゝきだされるな

㊺おつゞら馬

二上リさても見事なおつゞら馬よ、下にやせんしきからじまの蒲團、ふとんばりしてな

わくや—業がわくとの意にかく
かはすまい—かはるまいの誤か

鵜の鳥が

小鮒いよこのくはへて小鮒、くはへてぶりしやりと

㊸大坂茶屋名よせ

二上りえい〳〵えい〳〵えい〳〵繋がぬ船は波にゆられて身は捨小舟、よるべ定めぬ港やの、二階座敷でひくしやみせんの、音はてんつる〳〵、天満屋たゞ屋水の流れに吉野屋みれば、いつも格子に花橘屋、ゆかり求めてお名をば菊屋、それをたづねて北島屋、文のかずよむかみたや紙屋、尼崎屋で身はぬれ衣、色がくろけりや大黒屋ぢやと、人が名たつりや少しはわくや、さきにゐびすやあしや但島屋で、こがれ扇屋あの姫路屋で、たがひちん〳〵ちがひの、お手うちちがひのお手枕、じつかはす枕に契をこめて、かはすまいとて起請まで書いて、のぼりつめたる坂本屋、たれが思ひもあの太子屋の、花の振袖年や若松屋、つらい勤めは身にしみ〴〵と、はやり小歌のその一ふしも聞てなりとも月日を松屋、額のこさんはな綿屋のつとめ、戀がござれば勤めのさはり、内のかゝたや

本調子 沖の石とはおろかの沙汰よ、乾くまもなきわが涙、まもなきな、まもなき乾く、乾くまもなき我涙

(四一)さうだんべい

二上リ そなた待つ夜の往來を、細く長かれとろ〱と、さうだんべい、至極と聞きわけた

「内裏ぢよろしゆは水の月、手にも取られず見たばかり、さうだんべい、至極ときゝわけた

至極―至極道理

(四二)五尺手拭

本調子 五尺いよこの手ぬぐひ、五尺手ぬぐひ中そめて

「おれにいよこのくりよより、おれにくりよより宿におけ

「宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立たぬ

「佐渡といよこの越後は、佐渡と越後はすぢむかひ

「橋をいよこのかきよやれ橋を、かきよやれ船橋を、橋のいよこの下には、橋の下には

じらけ―地酒の誤か

とうらい―都來、十をいふ

る道、心も空も影くらく、波うちよする辛崎の、松の木蔭につき給ふ

㊳むこ川

二上リむこ川に住居する茶吉殿わいの、年が十五なら、心は月のまん中よさ〱、年が〱十五なら、心は月のまんなかよさ

㊴かんふうらん替り

二上リ大酒亂、冷酒飲んでみや、長酒のみ、じらけも一つ飲んでみや、たんたらふく二日ゑひ、後悔くすりに金盥

「やんしううすむいろまりやんけんたにこたまさんちゑまさんな、はらりと酒の燗、おなじこと梅の花、とうらいきうご五うりうすう

「かせ山うす雲江口白菊坂田花崎唐崎ぢや、若松小紫でん〱り几帳錦木琴浦玉の井だてみよし

㊵沖の石

り、ふたりが中に降るなみだ、川の水嵩もまさるべし、道ゆく人の聲たかく、京や大坂の心中の、ことの葉草のとりどりを、きくに心もくれはどり、あやなやきのふまでも、よそに言ひしが明日よりは、我も噂のかずに入り、世にうたはれん、歌はゞ歌へうたふも舞ふも法の聲、實に思へどもなげけども、身も世も思ふまゝならず、いつを今日とて今日までも、心ののびし夜半もなく、思ひの色につらかりしに、どうした事の緣ぢややら、忘るゝひまもないはいの、放ちはやらじと泣き居たり、歌も多きにあの歌を、歌ふはたぞや聞くは我、過ぎにし人もわれわれも、一つ思ひとすがりつき、月の影さへとゞまらで、心もなつの夜のならひ、命をおはゆる鳥のこゑ、明けなばつらやからさきの、濱で死なんと手を引て、志賀のさゞ波さよ烏、あすは我身をゑじきぞや、まことに今年はこなさんも、廿五歲の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄だたり、緣の深さのしるしかや、神や佛にかけおきし、現世の願を今こゝで、未來へ回向し後の世も、猶し一つはちすぞと、つまぐる珠數の百八に、涙の玉のかずそひて、盡きせぬあはれ盡き



五月雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田の落し水〱

（三六）いかな客衆

本調子いかな客衆よりも、髭の角さまおいとし、お歸りのあとを見れば、鬢附一貝鼻毛拔、小栗の草子をおかれた、これが花かやたどし今宵のつとめか、物日〱の口ふさげ、世にこくにせはしらしいは晦日ごとの夕暮、白いお手にて出だされた、なによおわしを、二百いだされた

（三七）辛崎心中

二上り此世の名殘り夜もなごり、死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づつにきえてゆく、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふればあかつきの、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の鐘のひゞきの聞き納め、寂滅爲樂とひゞくなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、北斗はさえて影うつる、星の妹背の天の川、わたせる橋を鵲の橋と契りていつまでも、我とそなたは女夫星、かならず添ふとすがりよ

秋田—飽きたにかく

花—花代

おわし—おあしの訛

辛崎心中—目錄には曾根崎心中とあり

ないそなゝいそ—泣きそな泣きそ
おそて—おそくても

㉒つんと坊

本調子つんとぼがさ〳〵え、ちやのおまへのそりはしを、あんまいぎやたら〳〵のほんほほあゝつんとぼがさ、いやおりやつんどすいたよさ

㉓蔦の葉

三下リ落ちよ〳〵とおとしておいて、壁に蔦の葉のき心、つたの葉〳〵かべに〳〵つたの葉のきごころ

㉔さけはさかや

二上リ酒は酒屋に茶は茶屋に、ぢよろは木辻の鳴川に「ないそなゝいそ五月にや戻る、おそて六月中頃に

㉕おもてみやれ

三下リおもてみやれの、せけんまいよものか、忍びながよづんまのよふたあゝ心、よづまのよしのび〳〵ながよづまのよふた心

やよそにうつろふ濡衣なれど、色ふかくも思ひそめたえ

㉙御馬屋關介

二上リだてを好みやる、御馬屋の關助くるやら馬も、馬もいなゝきくつわもなるに、次郎よ太郎よ、どこに〳〵、さて馬どゝんどつゝんとつつないだ、お寺の寺の柹の木に、づんぼろぼ〳〵とゝんとつゝんとつないだ

㉚かだの粟島

二上リ加太の粟島をえい〳〵えい〳〵えい〳〵な、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、なにというて又をがむえ、君とねじやかをえい〳〵えい〳〵な、いうて又拜むよえ、だいたらしめたらさ、猶よかろえ

㉛さまは天人

二上リさまは天人それ〳〵とんとろり乙女のすがた、雲の通路ちらと見た、とんとろり少女のすがた、雲の通路ちらと見た、とんとろり

長門印籠—此國の名産なり
ぐわい—具合

はつらき御心、物のむくいは物ごとに、小野の小町の身は市原のしやれすがた、あなめあなめと吹く風に、熱のさめたる末を見よ

㉗わすれがたき

二上リ忘れがたきは彼人さまの、過ぎしたよりにこされし文を、たとひ三千年あはずとまよ、親と〳〵の結びし縁を、なんのとかりよう、其下紐をうらがどかいで、解く者はおんぢやるまい、あとの亥猪にこされし文は、いつ〳〵よりもかはいらしや、のう〳〵えいこのさんさ、富士の裾野にな一もとすゝき、やれ枯れしはいつか我戀ほにいでて、亂れ合はうといふ事か、えいこのさんさ、岩のはざまにな、やれたまり水、ひとりすませといふ事か、君としめよてぬる手枕は、長門印籠ぢやなけれども、ぐわいがよかろとほめられた、ほめたも道理、今の世に又とあるまい御女郎

㉘つらい〳〵

二上リつらい〳〵と思ひはすれど、顔が見たさにあこがれきたを、それと知らぬえ、よし

あが身―わが身の誤か

しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、男しばらく泪をながし、馴染もないに嬉しやな、なんのあが身に別れて、おれが何をたのみに行かうぞいの、そなたふりすてゆく身でもなし、今宵爰にていざ死なんとて、つひにふさをば刺殺しつゝ、ともに其身もな野邊の露

(二六)下の關節

本調子 思案橋とん〳〵〳〵こえてな、お宿にござんす〳〵か、そこせい〳〵、三里へだてし波のうへ、色と情を小舟にのせて、くるは誰ゆゑ、そさまゆゑ

「北山ばら〳〵ば、時雨ながら笠持てこい、降りてきた、そこせい〳〵、雨はふるとも、ぬるゝとも、只おそろしきかざし風、とかういふ間に晴れてゆく

「淺黄はざつとした、いやよな、望みがござんす〳〵る、そこせい〳〵、こがら山から四十から、から松たけのいくちよも戀に、うき茶の葉の色に

「一夜はちよつとの間これなびけな、あんまり〳〵どうよくな、そこせい〳〵、さりと

氣でせい―「男は氣でせい」といふ俗言あり

鹽ふませたら―奉公の苦勞をさすること

山も見えざる―前途の見定めなきこと

本調子 するなざいしよのくせ聞けば、まづ土手町はけしからぬ、雨のゆふべは面白や、また氣をかへて島原と、ゆけば禿がはしたなく、はやり詞の口合に、あゝけたゝまし祇園町へと立ち歸り、もんじが門で誰やらが、氣でせい〳〵と石かけに、はやる口合まあさうよ、それは一升がなんぼする、はてさういやるがいやぢやいの。

㊄心中江戸三界

二上リト本調子 江戸へやりつゝ鹽ふませたら、末がよかろと皆いひ合せ、既に談合極りければ、そちに逢ふのも今日明日ばかり、まめでつとみやや、わづらやんなや、いとまごひぢやと涙で語る、ふさは聞くよりこは何事ぞ、わしは勤めを明日やめうともまゝな身なれど、こなさんに逢ふがうれしゆて、うか〳〵勤めまするに、どうよくな、江戸三界へゆかんして、いつ戻らんす事ぢややら、山も見えざる假初に、つい馴れなじみ、わしをさて、どうせ女房にもちやさんすまい、いらぬものぢやと思へども、どうした事の縁ぢややら、忘るゝひまもないわいな、それをふりすてゆかうとは、やりやしませんぞ、手にかけて殺

㈢心中しゆん

本調子まゝにならぬは浮世ぢやものと、思ひまはせどまた捨てられぬ、いつそ露とはきはめたけれど、あとでそなたが怨みんものと、思ひはかりて語るといへば、しゆんは聞きつゝよう言はんした、わしも氣の毒語るにつけて、にくい平ざがよこしま戀慕、それさへあるにちか〳〵に、西國がたへやらんとは、親のまゝなる悲しさは、これが浮世のならひとや、とてもこなさん死なんす身なら、わしはかうぢやと囁きければ、吉左うなづき、さあらぬていに暇ごひして立ち別れゆく、夜は何時ぞ、八つの過ぎかや七つのかしら、六つの巷も三途の川も、死出のたびたつかいどり姿、心細くもあと見かへりて、のうよしさまか、待ちかねさんしよ、首尾をつくろひ此脇差を盗みまするにひまどりました、いざや最期の水さかづきを、一つ二つにはやふしごやの、回向の鐘に南無あみだ、南無あみだ佛ときえてあしたは卯月の五日、せみの小川に名をながす、思ひと戀とえ

㈣はてくせ揃

わらが—われらがの誤か
ならに—ならぶの誤か
身今更に—身の今更にの誤脱か
てうし—調子、銚子
ひきもの—引敷物

㈢三瀬川

本調子 西は堀川中小川、沅湘日夜ひんがしに流るゝ水の賀茂川や、わらがための三瀬川、げにくはしも三本木、比は卯月といふしでの、ぼんでんすごく立てならに小家の燈火きえのこる、影をたよりてふみ迷ふ、かしこ爰よと定めえぬ、いつそふたりが中の島、かくれゆく身今更に、わすれぬ顔を今一度、見つゝ見られぬ薄月夜、しばし入間の水かゞみ、川をへだてゝほの聞ゆ、ばちもしどろに引く三味線の、てうしくといふ聲きけば、飲み白けたる風情して、夜もはやいたく更けぬらん、わけと鳴きゆく時鳥、誠冥途の鳥ならば、地獄のありさま語れきこ、聞くともいかでかはらめや、今宵かぎりの憂き契、ひじきものには薄羽織、はおらでしくも短さよ 三下リ「どしおり帯の長枕、おきて見さんせな、後の世もあをに今しばしぞや、又寝のとこくにもぬるゝは袖、東が白む、白むか鳥も告げわたる、はねをかはさんためしにや、つまとくを引きむすび、ともに假寝の夢すがた

⑲おもひ草

本調子長い刀をほしや〳〵とさして、逢れぬ中を文にて通ふ、いつそ此身はもみくしやにして、死なば野中の身は朝露と、きえてはかなく成りゆくものを、何が殘りて罪とは成るぞ〳〵

⑳庄屋の庄左

二上リおとんとん〳〵とろさくやれなかそめてこんにもせい、中さへよくば鍋買うて所帶しよ、それがそこへいてることか、庄屋の庄三どのはつちやはづかしや

㉑つく物揃

本調子籬がもとに立ち出でて、こぬ人を〳〵まつ身のうらみ言はんため、やく〳〵や裳裾をかいとりて、土手をつく〴〵見渡せば、土手の番太は棒をつく、お寺の法師は鐘をつく、こちの馴染は嘘をつく、さて又われらは數々のつくりし罪のおそろしや、後の世たのむ南無あみだぶつ〳〵、ゆいて歸るさに、ゆきやあたりまはりて胸をつく





ぬをーぬのをの誤ならん

めてより取付て、おんかたつたり〳〵、かほどのかたりは漢家本朝に、又と二人はあるまいとて、金かすものこそなかりけり

㊅うらのせどのや

裏の背戸のやでぎしり〳〵とぎしめく程に、なんぢやと思うて、走りでて見れば、なんでもしやり〳〵、おんぢやれめされ、さしまさぬか、夏帷子のぬをおしやり〳〵さらす、おんぢやれめされ、さしまさぬか

㊆旅の日暮

二上リいうて歎くはおろかでござる、言はで思ふはのう身をこがすといの、旅は日暮が物憂いものよ、忘れた戀を又おもひだす

㊇鬼が出る

本調子おくりかへせば比叡の山風身にしみて、菜種の花もいろ〳〵

「鬼がでる跡より子鬼がいくらともなく、によき〳〵とある所につき給ふ

こすろー狡猾、湖水

だいつーどいつ

く力もあらばこそ、太屋の屋賃もなさどれば、怒り切つてたてよ〱と、あたまくだしにしかられて、男ならば正八幡大菩薩まつぞやしばし、おなしあれ、伏見のごほうはいつものごとく、とうにすまさばなにかせん、たてたは此月申の日よ、車は少し御免なれ、眞實おんになすならば、錢は一文なけれども、天王寺で醤油つくらせ、炭賣しても大事もない、四國の米は讃岐で一石おなじく一石三斗なり、筑紫の彦三はいつものごとく大屋して、きどくにめうとは方便なり、丹後に成相きれいにもんたて、大ぜいくらすとうけたまはる、日吉は山王廿一じやが、親は白髭左ちんばでこするな男、父をふんぬくぞんめいなり、みやうぎ町には願人坊で、てはらきる湯殿のゆかたは見ぬまに失せたが、だいつが取つた、手元がみたい、見付けたぞ、おひくる時は一厘にげ二厘にげ、第三にあたつては奴に頭を切りわられ、惣じて身の創は一萬三千餘創なり、たとへ定業かぎりの質物なりとも、今一度うけさせたび給へと、せりかけ〱祈りけり、質屋も納受したりけん、五兩二つにさつとわれ、二兩二分にぞ成りにけり、三人のどろぼども、ゆんで

五智の如來のめぐみもあろと、戀の重荷を乘掛馬に、はなれがたなき我が思ひ

㊹おもやこそ

二上リおもやこそくれ思はでこよか、千夜萬夜は寢てこそよけれ、かけてよいのは小竿に小袖、かけてわるいはうす情〱

「君をまつ夜はのほんほ、ほんに〱さ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほ、ほんにほんにさ

㊺替り榮閑神おろし

本調子かざらるゝ、百色の道具を竝べければ、たゞしまひものの如くなり、五通の手形の五本立てならべ、元よりせいすけ三國にかくれなき神變奇異の智慧者なれば、旦那のえんにさしあがつて、まづ泣事をぞ申しける、金子三兩〱かし給へ、かみへのぼるも路銀なければ、てんと白癩ごとうのつまりは下界におつる、伊勢にしんだいかためたれども、雨にふられ風に吹かれ、月まち日まちに、あまつさへ大にちにあひ、淺ましや火吹

ごとう―悟道か

(十一)さまが便り

三下リあらいたはしや、百合若さまは〳〵、知らぬ他國にすてられて、橋の欄干に腰打ちかけて〳〵、そより〳〵と吹きくる風は、さまが便りか、なつかしや〳〵

「鳩が豆くふ八兵衛どの、鳩が〳〵、お花出ておへ、竿打ちかたけ、よやりひやりに出ておやれ〳〵、ちやつと出ておやれ、よやりひやりにでておやれ

(十二)間之山念佛

二上リうき事を思へばいとゞ胸の火の、消えやすき身といひながら、輪廻のきづなに繋がれて、南無阿彌陀〳〵〳〵

「夢のうちなる夢の世を、悟らぬ事のはかなさよ、なむあみだ〳〵、野邊よりあなたの伴とては、胎藏界の曼荼羅と血脈一つに珠數一連、なむあみだ〳〵〳〵

(十三)伊勢之櫛田

二上リ伊勢の櫛田のまん中程で、深き思ひのやれ紫帽子、ほんにくどくかそりや眞實か、

り、とこやみの夜店となりけるを、八百萬の末社たち、おろせが宿にてこれをなげき、神樂をもつて文作袖をひるがへせば、又常闇のけも晴れて、ともしび光りかゝやきて、これより色里繁榮じ、末の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや

「思ひきれとや、きりやまのあさぎりこめて、やつきり〳〵やへぎりや、をはらたかくらたませしは式部奥州小倉山背山都路唐崎や、くれはやしほの道とせに、うらの揚卷つりはせで、いその勝山わけのぼる、麓の野邊の萩原が、敷きとねし夜のねたましく、荻の上風ふきはらひ、あくるわびしき葛城や、高間高崎のせを川あふえ、大きしあふよどや、此おふ國の君たちに、替らで通ふ人々に、きたるまじきはあゝくるしの、災難が祟をなすとも、今よりは諸客は成就、揚屋は滿足全盛と、うやまつてぞ申しける

文作―趣向工夫をこらすこと

たませしは―玉柏の誤か

あふえ大きしあふよど―大江大岸大淀か

㊉手杵

二上ッ市べ頭に弟はふたり、もちの米がな、やれ小豆がな、山に手杵を見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、山に手杵をみておいた、しよがいな

天職—太夫につゞ遊女天神をいふ
僭上大臣—天照大神にかく

㈦鹽屋長次郎

二上リしほや長次郎はこいさばにのせてのうさ、起きにやとん〳〵どんどろめけば、夜のめもよねられず、あさせうがいな

㈧茶　摘

二上リくもの御來迎はさゞ右衛門が拜むえ、其子無事郎ともあじことはするなえ、のちはさゞ右衛門がみせかはりえ

「となり藪からによき〳〵出たは、こぞの竹の子のこの〳〵ま竹、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、をどろとまゝよ、はねきろとまゝよ、いとし殿御とこちや寢たがよい、袖をしきねの新枕

㈨替リ祭文

本調子祓ひ淸め奉るの、色は根本太夫職、さては天職姿なり、まんづ江口のはじめより、君といふ字をかきそめて、世々の末にはよねと君かえ、僭上大臣閨の戸ぼそにひきこも

㈤四季よほん節

本調子さそふ嵐にちりゆく花の、よほん〳〵え、よほん〳〵え、せめてしばしは香ばかり袖には殘れ、よほん〳〵え、よほん〳〵え

「軒の橘枕にかゝる、よほん〳〵え、よほん〳〵え、小夜の寢覺にことゝふ山ほとゝぎす、よほん〳〵え、よほん〳〵え

「ところ關屋の月さへつらや、よほん〳〵え、よほん〳〵え、鹿の鳴くねに、いよしも哀をそふる、よほん〳〵え、よほん〳〵え

「雪にならはで思ひはつもる、よほん〳〵え、よほん〳〵え、消ゆる思ひになどかは解けぬは君の、よほん〳〵え、よほん〳〵え

㈥しうとめ

二上ッおれがしうとめはきぶいぞ〳〵、あの松山の葉をよめ、あの松山の葉をよめば、そなたは天なる星をよめ、しうとめをどり一をどり

㈠花見車

本調子　花見車をひきやるはよいが〱、御所の女郎衆の袖引くな、やれ袖ひくな〱、御所のぢよろしゆの袖ひくな

㈡五條車

本調子　五條あたりを車が通る、のほんえ、たぞと夕顔に、さんさ花車、のほんえ、花車くるまのほんのほんえ

㈢咲いた櫻

本調子　咲いた櫻になぜ駒つなぐ、のほんえ、駒が勇めば、のほん〱ほんほのんいよ〱花がちる〱

㈣吉田小女郎

本調子　吉田通れば二階からちいよと招く、しかも鹿子のずんど振袖が、なんきみちよいとしよ

十九　おもひ草
二十　庄屋の庄左
二十一　つく物揃
二十二　三瀨川
二十三　心中しゆん
二十四　はてくせ揃
二十五　心中江戸三界
二十六　しもの關ぶし
二十七　わすれがたき
二十八　つらい〱
二十九　御馬屋關助
三　十　かだの粟島
三十一　さまは天人
三十二　つんと坊
三十三　蔦の葉
三十四　酒はさかや
三十五　おもてみやれ
三十六　いかなきやく衆
三十七　曾根崎心中
三十八　むこ川
三十九　替りかんふうらん
四　十　沖の石
四十一　さうだんべい
四十二　五尺手拭

松の落葉　巻第五　古來中興當流はやり歌

目録

しちくでごしー紫竹出格子

ゆふぎり、こざつま、いき、小太夫ー遊女の名

せぢよやまんぢよー千町萬町の意なるべし

さまに尋ねあはう、これさ紺の暖簾によの字と書て、しちくでごしでかくれなや、えいそれをばゆき過ぎ、花のかのさまに尋ねあはう、これさ〳〵

㊈ふくとん踊

二上リ情ゆふぎりぽつとりとりおことな、あよんはずむなあふくとん〳〵、こざつまいき小太夫ふくとんふく〳〵、ふくとん〳〵〳〵〳〵

㊉さふら踊

二上リやんらめでたや、やんらたのしやさつさせぢよやまんぢよの鳥追がまゐりもものふくとくとのむこがきたやれこりやつまだてよ、そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵やつこりやつまだてよ、御代のさかりのまん中、まん〳〵まんなか中で、ひとりの御代繼

古今踊歌百番　終

ごんん文字—御親切

〳〵えい〳〵〳〵

(九六)二木踊

にほく戀しやな、世にある時は引けど靡かぬな、きよくもなや、とは思へども〳〵、善太どの〳〵情にへだてはない物を、せめて一夜のなさけのあらば、今の嬉しきごしん文字、忘れまじつきせまじ、此世はさておきのちの世も、これさて〳〵よいやさ忘れまじ

(九七)まん丸踊

二上りまんまるござれ〳〵、十五夜の月の輪の如く、はり〳〵輪の如く、よいとんなとん〳〵、十五夜のよさり〳〵つな挽女郎にうつぼれた、はり〳〵うつぼれた、まん〳〵丸やの七左が手管はがつてんか、おしつけ押へてやらかはいのみ船や、でかしだ〳〵これさ

(九八)今度屋踊

二上りこんどやござらばようやよほいほぞんこしの町へゆけば、左へもどれば右へえよよほいほ、すぐに通へば一里十八丁まはらば三里よ、ほいほ、それをば行きすぎ花のかの

のうほんえ、ていこや〱ていこ〱、ていこやといふたやつはがつてんか、おうさゝ〱がつてんぢや、打ちもせい、ちよんも一つせい、ちよん〱ちよちよんと打つたやつに、はる〱とでようた、ちよちよちよんのちよ

(九四)ほい〱踊

二上リこちのちんちくちを、ほい〱譽むるではないが、とつと奥山のむぎでものが有るとの、親子なかに五六本というてかりてこいとの、人がかりてないとの、それ〱見たか、それ見たか、こんぜうながな子をもてば、人につい〱つい〱つい〱とられて、事をかゝした、ほい〱のほい

(九五)のんやほゝ踊

二上リ戀とくれ〱のんやほゝ〱、おしやおん〱おしやおしやれ〱のんやほゝ〱とは思うたさうゝできたのや、おんは〱えい〱〱、裏の背戸のやのんやほゝ、おしやおん〱おしやおしやれ〱のんやほゝ〱とは思うたさうゝできたのや、おんは

ぬかざりえ

(九一)芋之子踊

二上リ芋の其子のそだちを見たかえ、さつては子寶めでたいな、子は四十八よの、末ひろがりてやら〳〵やら〳〵そんれはえ〳〵、やら〳〵やら〳〵めでたしやん〳〵、一座はざらりと竝べて、一度によんだお名はえ、おとよけさよたつまつゆるまつだんだらいなごにかいつくぼう、ひつつくぼう、かいつくひつつつく、火打袋にしやん〳〵おめでたいよの

(九二)小川踊

二上リ水を汲みやらばようや よやよ小川でくみやれ、小川小石川ころびよてころび〳〵ころびかゝるとよえ、君はさい鳥さし、わりや鵙の鳥、無念至極やおとされたとよえ

(九三)ていこや踊

二上リ戀をしやらば火燵でしやれ、火燵痴話箱さんさかくれござらぬ、のうほんえ、えゝ

ちよき〳〵ござれの〳〵ちよきりこ〳〵ちよきり〳〵〳〵ちよきり〳〵ちよともぶんだした、むな木かまつかせ山家おくよりよこだきにと、やれ〳〵でつくりすわつた楠

㊈伊勢みやめぐり踊

二上リさてもえいしやさ、見事な天照神の、けふ吉日の宮めぐり、あとさき揃うたら、さあまはれ〳〵やまはまはれ風車、まはれ〳〵ばきん氣の藥、根から葉からそこしん實から、浮氣がましましぢや、それさくるり〳〵くるり〳〵くる〳〵〳〵〳〵それはえ春はどつこい伊勢參宮

氣の藥―保養になること

㊉菖蒲刈踊

二上リ千代を〳〵かさねてえいえてこい、また毎年のあやめかり、所は名に負ふ廣澤の、池の〳〵菖蒲をちよん〳〵きり〳〵〳〵ちよつきりと、家づとにひつ束ねかい束ねてかついた、今年や世の中なかの〳〵よい〳〵よい〳〵〳〵なつかの〳〵なつかの節供の大かざり、惡魔外道を打拂ひ、淸めたてまつるの〳〵。千年も萬年も萬々年もお家はつきせ

引きようて—引合うて

しゆんぜう—俊芿

鉢の子—鐵鉢

むばもじ—姥文字にて姥といふこと

や〱こつちの〱よい殿え、おれとそなたは二重の帯よ、そなたはそちらへくるりとまはりや、おれはこちらへくるりとまはろ、手さきを揃へてとん〱、とん〱やととんとどん、殿さまの二重帯しめてくゝして、しつくり〱力帯、むすびとめたら猶よかろえ

(八〇)蟹川踊

二上リ蟹川を渡るとて、戀の文を落した、蟹らは知らぬ川なし、する〱出る月をえ、てはお手を引きようて、しんとろ〱とろ〱〱とろ〱とろ〱〱〱たら〱おりで休んだ、おれはそなたを忘れまい〱

(八一)しゆんぜう坊踊

二上リ大和でんまどつこい、してから〱都がとまりで、おんぢやり申せよさ、のうようほんにほんにお釋迦の堂供養、しゆんぜう法師のあとをつぎ、檜のお笠で鉢の子手に持ち、都の町を殊勝らしう通れば〱あれのむばもじ妹どもかゝも姉も妹もちよき〱

よろづの虫に第一の藥ぢや

(八五)手合相撲踊

二上リよいく〳〵お待ちやれ、やつとんとろく〳〵とろく〳〵と御前かゝりに振りいだす男、して〳〵ん立がみ力自慢ゆりかけく〳〵幸嵐にきりく〳〵、やつきりく〳〵きりりとまはつて、しつかと結んだ力帶、一夜なれく〳〵帶買うて取らしよ、それふれさく〳〵、帶買うてとらしよ、解けて亂れて、やんれく〳〵それく〳〵く〳〵男勇んでさ、すゝんでさく〳〵繻子の鬢つきや、ととんとろく〳〵く〳〵やととんく〳〵く〳〵とろく〳〵見とれてやさ男、國でかくれない、さつても見事なでつかい男え

(八六)藤内太郎冠者踊

二上リ藤内太郎冠者次郎冠者でござる、日本一の御きげんに立て舞をぞ舞うたりける、ふりをそろへてどりやどこの、そりやそこでの、さらば舞へ太郎冠者えい次郎冠者、さまと並ばゝひゝなの殿よ、並べて顏をく〳〵、顏をならべてにゝにつとも笑うた、こつちの

すぐち―兎唇
けべすぢもと―首筋元
えんど―江戸
じよさい云々―和中散を定齋藥ともいふより言ひかけたる也

らねども、思ひわすれぬ娘ざかりをすいてきた、これが誠に拙僧本意でござるよの、是非ない人目はづかし色いろがよいアヒノテ「一錢二錢や法捨をたのむと夕暮に、すぐちが談義はかによらい、けべすぢもとをやしろうてなよすのけんかんへれそでつかんでへめころせ、おゝよよとろしや

㊸堺の濱踊

二上リ堺の濱にありやこりや流れ枯木がすてゝある、或人の申されしは、目や節やえんどや木曾や都にやない、定めて〳〵きんきめこまかにござる程に、唐木でござるべんよの、さんがれ

㊹梅の木踊

二上リ昔より賣りはじめそろ、梅の木村の和中散、君の病は思ひか戀か、よその藥はじよさいでござる、こちの家にはじよさいとてはござらぬ、じんじやくむねむしこはり腹、酒の二日ゑひにはよねや若衆の、やとゝんとん〳〵寢顔でのまんせの、のまんせの〳〵、

あさつき—葱の類にて葉の細きもの、麥葱

こりやきとうとなるわいのなるぞ

(八十)もんつくつ踊

二上リ今津海津に朝通ひさ〱、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〱、もんつくつ〱
朝がよひさ、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〱もんつくつ〱朝がよひさ

(八一)都の町青物踊

二上リ都町々に賣つたる物は何々なんぞ、青菜小なもみ大根〱〱、柚や生薑や茗荷の
子、唐辛やほうれんさう、白瓜から瓜あこだ瓜、西瓜のさねは赤ざね黑ざねもござんす、
四五寸伸びたるあさつき、さつてもいうた、よくいうた、まつたけは見事ぢや

(八二)拙僧踊

頭まるめて浮世を輕く、拙僧本意にあらねども、門々でもらひまする鉢の米の情に親を
はごくむ旦那、一重にせつそ本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子とおぼしめし、み
す〱それがしを佛菩薩の化身とて、もろ〱の亡者をとむらふ旦那、せつそ本意にあ

二上リゐじま岬に帆を巻きかけてどっこい　わかれの小手まねき、君にまはらば、さつさ押寄せ漕ぎよせならばよえ、それ〱姉のおまきはもんやと契る、妹おなべはよきちとしよげろ、はてそなたをどつこいをどつこい、おん〱思はゞさつこりや碇をぶつこめ、まつかぜ押寄せ漕ぎよせ〱ならばよえ、はりはどつこい、あみでせまつかぜ

(七八)暦　踊

二上リやたて〱めでたや、こちのやの寶ぢや、元服よしの色男、つゞく日數をかろくかたげて、暦大經師、こよみ二十の殿御に、十九のおんおかた、十九のおん〱おかた、やれさてしつくりと〱、くり〱くり〱しつくりと〱、嫁入聟取復日大みやう、やら〱めでた

(七九)但馬小女郎

二上リたじま小ぢよろありやこりやといのにのぎよのふだわいの、みれば其日のやつこりやきとうとなるわいの、ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、みれば其日のやつ

やたて〱―やさて〱の誤か

復日―結婚嫁娶に厭ふ日なり

大みやう―大明日は唐の大明暦に載する所の大吉日なり

うとしよ

（七五）どうらく踊

本調子いとし殿御は破魔弓はじめさ、あのどうらくめ、むかひこよねが羽をつくにの、手鞠つくにの、よいつく〳〵〳〵にはつてんひつわがふらくとぶつつけた、まねく袂に文や玉章、袖の内はふみや玉章、あのどうらくめ、むかひこよねはさ、やれこりや羽をつくにの、手鞠つくにの、つく〳〵〳〵にはつてんひつ和合樂とぶつつけた、まねく手元に文や玉章、袖の内は文や玉章見たか

（七六）唐人踊

二上りいきにて〳〵、すいちや、ゐんちや、すいちや、すいふいちやういさらこわいめさはんやさそうわ〳〵ううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうつ〳〵うあう〳〵

（七七）ゐじま踊

みのこひし—美濃を簑にかく

らふく〳〵たんたらふくつるてんふくつんゆふはかうし小まつのをのしんべどの「さつこのしよへ返し

(七三)彌之介踊

えい〳〵〳〵是からさきはおさき手をふる長刀〳〵、おさき手をふるなが刀、さんやれ〳〵「えい〳〵〳〵是からさきは宮城野に咲く萩の花〳〵。宮城野にさく萩の花、さんやれ〳〵えい〳〵〳〵、彌之助〳〵、さむそにござる、火桶やりたや炭そへて〳〵、火桶やりたや炭そへて、さんやれさんやれ

(七四)美濃國てしやこ踊

本調子 美濃の國にて妻もちおいて、さつこの、いよこの、九重の花の都にすまひすれば、てしやこ、雨はふらねどみの〳〵、どつこい〳〵みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこ、てしやこ〳〵てしやてしやことしよ、まだ〳〵雨はなんな降らないにさ、みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやてしやこ

〱ぞんぞりこの芋よ、負うたもいとし抱いたもいとし、肩くまの小女郎は猶そつこで猶いとし、ぞんぞりこあすはとう

(七一)牛まど踊

本調子牛窓のえ觀音堂のそばでえ、どつこい是はきいたぞや、けさのやときをうつ、どううつのう、はてのう時の太鼓はのほほん〱おででんがら〱、おででんがら〱おでゝんがらでん〱からりの、でんがらりのおででんがら、音も聞えてさらりつともえいよえいよえ、どううつのう、はてのう時の太鼓はのほほん〱おででんがら〱おでゝんがら〱おででんがらでん〱からりの、でんがらりのおででんから、天下うち納めおめでたいよの

(七二)三國玉屋踊

二上リ三國玉屋の新兵衛を見たか、三國一のやさ男、まるで〱繻子の鬢つき刷毛長につりびん〱、なぜにこ鶴は出てまたぬぞ、さつこのしよ、きけばたらふくつるてん〱た

いさむ春駒引きつれ千疋もつないで自慢での、しやなら〳〵しやなら〳〵れんな紅裏たれだ、さまだ、ばかやつた、づきんちやちりちり〳〵ンちん〳〵ちんなとりなりで、おつとまかせの、よい〳〵〳〵、ふりよしや〳〵、ぬらりひよ、たれもかれもめつけんしよ、こゝもとでえい

(六九)荒木弓踊

君は長押のや荒木の弓よ、挽手あまたおほせのあらば、はつと答へてよん所はりよやひよや〳〵はりよや〳〵、はり〳〵はり〳〵弓張月のさまは三日月よい〳〵、どつこいよい〳〵、どつこいよいこざる、せめて今宵は有明のさ「はつと答へてよん所へ返し

(七〇)ぞんぞりこ踊

本調子 麻の中にも三度はねたが、麻が物いはにや名も立たぬ、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ〳〵、ぞんぞりこの芋よ、どの子がいとし、負うたもいとし、だいたもいとし、肩くまの小女郎は猶どつこい猶いとし、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ

二上リ本町二丁目をとん〳〵とん〳〵とことん、とことん〳〵とんとことん〳〵通りたうはないが、糸屋娘は二十一はたち、やつしつし〳〵、姉にのぞみは少しもないが、妹見る目はしんとろ〳〵、とんと親を見る目は猿まなこえ、さる〳〵さる〳〵さる〳〵さるまなこえ「姉にのぞみ返し

㊅㊆珍內花笠踊

二上リさても見事にそろたり〳〵、そつこで振出せお手まはり、大事のまへのゐやひごしすんよしふりよしなりもよし、みよし吉野の花よりも、えい〳〵紅葉よりも、えい〳〵えいこの〳〵、こつちの〳〵いまがする事を珍內が見つけた、でつかい事をいうたりな、いふぞ珍內ない〳〵ない〳〵ない〳〵酒盛ろぞ、珍內さけは下戸なりなさけでないぞ、そこらを是非とも〳〵そこらを〳〵〳〵是非ともおつひしけ、やごゐでまつかせ、やごゐてふりやれ、やつとん〳〵〳〵殿のおたちにおとも花やか

㊅㊇春駒踊



(六四)しててん奴踊

二上リ五丁さきから振出す肩の、ゆきの長いはお國の小姓、色はまつ〳〵黒、くろいがどこやらがよい、しづかに見ゆるやつこの〳〵〳〵管槍をひろどれば、なん尺〳〵なンほ〳〵なん尺なん〳〵〳〵ほのなん尺、こゝころつけてさあまゐろ、しててん奴が手のうち〳〵、しててん奴がしてょん手の内〳〵、しててん〳〵から〳〵〳〵〳〵してょん奴がすりさげ男、國にかくれない大介萬五郎、おょそれ〳〵〳〵かくれない

(六五)世繼踊

二上リお江戸がよひに世繼が出來た、やつとうお名は加賀に菊酒、お江戸のまん鉢ずんど飲めばよござんす、吉六酌とれ、がつてんだ、金銀の盃におさへた、まつかせ〳〵、つぎめぢや〳〵よつつぎ〳〵〳〵、よつぎつぎめはめでたいな、顏に色ますこれはんじやう〳〵え

(六六)糸屋娘踊

者の花聟ぢや、えい〱〱えい子寶のこのさいはひ心にまかせてめでたいな

(六二)地福踊

二上リ さてもめでたやな、めでたや〱えい世の中のよね俵、心やすくもだかへた、地ふくできすけが納めた俵を、御倉にずつしりとつめたか〱よねが袖、のつしりとろりとにやひます、色ます〱色ますこよねが目につく〱、そりやえい〱こと〱えいこと聞きます、ます〱うつちの寶ます、黄金のますでよねはかるんよの、めでたき御代はたんだにこ〱やかによねのお山

(六三)君はしんぞ踊

二上リ 君はしんぞの乘り心、さよいよえい〱君とわれと、われと君と引き寄せてはよるよるさゝ、をとこは花の都入、づに乘つた、乘つてきた〱舟のや宿の娘は小手まねき、えい袖をかざしておもてのくゞりのくろゝの穴から〱から〱から〱そこしんから〱顔が見たさに戸あけて、そこせいちやうど一ぱい君はよいさけ

文をへて―文をえてか

よせきてはやの、片男波にぞ乗りくる舟の、ろは一丁の勢ひ〳〵、きほひにきほうて漕ぎよせた、しんとろとろ〳〵〳〵とろりん〳〵とろ〳〵〳〵おつとろ艪櫂にさ、船歌あれから是までいさぎよござる〳〵いもせ鹽濱

(六十)釣舟踊

二上リ沖にこがるゝ女舟を見たか、おつと梶を枕にろかいをさ、たつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵、女波よすれば男波もよする、とかくや男波はやよいここいこゝ〳〵今宵はどち枕、おつと梶を枕にろかいをさ、たつる〳〵たつる〳〵波たつる〳〵、女波よすれば男波もよする、とかくや男波はやよいここいこゝ〳〵、今宵はどちまくら

(六二)三番叟踊

二上リよろこびの文をへてちやうどまゐつた聟殿、勇みて末廣扇御祝儀にしよぎつく足元見あふぎも一つ見、あふぎ〳〵さしあふぎ、鷺足する〳〵張肱あふぎで拔足そろへて〳〵そろへてふく〳〵ふくぢや〳〵ちやうじや〳〵ふく〳〵ふく〳〵、男は大だい福長

加賀笠よ〳〵— 原本「加賀笠よ〳〵よ」とあり、此類の書方此書に多ければ改め省く

しつとん〳〵しつとん〳〵しつとん、しとょん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからからろの音がした、花の繪島や、やんれおせやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵〳〵しつとん、しとょん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからからろの音がした、嫁が馳走に人の見るめと磯のみるめが肴ぢや

(五八) 四季花笠踊

二上リ 關のこまんは龜山がよひ、色をふくむや冬ごもり、まづ立つ春の祝ひには、縫ふて ふ鳥の花笠、夏は川瀬にあじろ笠、秋はをどりに菅笠を、そろへてそれ〳〵こまん踊りだせこまん、てん手ひやうしもそんそろた〳〵、そろた〳〵そろ〳〵そろ〳〵月の笑顔に照つたりや紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵、冬は雪見にかづく肱笠、花の都の御所塗笠は、なりがようてさて〳〵どつこいきよござる

(五九) 艪拍子踊

二上リ えい〳〵和歌の浦こそそれしての、さての第一名所うんさうだぞえ、さつとみつ潮

がいに—非常に

二上リ まづはゆたかに大手馬場先、つなぎ馬がいにつめたい今朝の雪、殿のお馬は鴇月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しと〳〵打てばかけあをり、お江戸そだちのひげ〳〵男、おん馬の口をしつかとさ、つりりん〳〵ひげ男、つりりん〳〵ひげ男、つりりん〳〵〳〵つりりん〳〵りん〳〵りん〳〵りんとはねたる髭男、つなぎとめたよ戀の關札

㊅杣山踊

二上リ おぢが杣山からもろたよ樫を、槍にすげたる十文字、立てゝ並べて、なあどつこい、なあどつこい、長押をよけて一だん〳〵〳〵やつとう〳〵二だん〳〵〳〵やとゝう〳〵一だん〳〵二だん〳〵二だん三だんだん〳〵そろへた石づきよ、する〳〵〳〵手並をそろへて、よするみぎはの駒がへし、はかたごぶぞり人にやかまはぬおりや好いた

㊆しとゝん踊

二上リ 尼が崎からこつちの聟殿〳〵くるとさしつしろかい早めて一丁の二丁の、三丁の四丁の、五丁の、六丁小早、花のゑじまへおせやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、

うつる—うゑるの誤か
そうとめ—早乙女
小早—輕舟

つほり〳〵ごつほりこ

（五四）岡山通踊

本調子やんれ白波の打つやつゞみの川柳、水にもまれてねこそ入りけれ、岸かげの花や櫻や藤や、うつえい太鼓のばちや川うつぎ、雨のはやしもさみだれも、たのむ汀の田歌の音頭、拍子をそろへてはやせども、えい勇みてうつる面白や、うゑい〳〵そうとめ笠買うてきしよにさ、笠買うてたもるならば、猶も田をばうよにさ、岡山がよひの六ちよ小早に艪を八丁立て、朝のおまへの三ぽが瀬戸をこぢよろ戀しきとな、歌うて名のりてお漕ぎやるはえい、この小じやくし小娘こせんぞかこさいかかゝいかこぐる松かこ女郎かつがわつかわ〳〵のんえいよほ帆ではやらいで歌でやる、君を思はで通はりよか〳〵、どこで見たぞつとしたとよえい〳〵、君は春咲く梅の花ぢやとよえい、かをりゆかしきとりなりは、ありやよこりやよえい〳〵、さつさえいさつさ、萬歳ぢや〳〵千秋樂〳〵ぢや

（五五）馬場先踊

二上ッ東からくる花嫁うれし、おれが目當の菅笠うれし、ほんに嬉し、お伴にとつつくだて助が、よぢらす〳〵、やれこりやよぢらす、どつこいよぢらす〳〵、腰をよぢらす紅葉笠、まん丸こうて著ようて、さまが菅笠百萬貫

(五二)權之助踊

二上ッ若衆さんさ、しのばゝさ、若衆忍ばゝ寺がよひ、なんでおぢやそろ〳〵ねん〳〵ちやがおぢや、そろ〳〵ねん、さても久しの權の助、あげのまりの、さげのまりの、あげのさげの、やりはりよりをおりや、ふみならうた、おれがふまいで、それを誰かふもぞいの、お手打ちかけて、ほろと泣いたをいつ忘りよ

(五三)金山まぶ踊

二上ッ佐渡の山まぶ山越えて、ぜんゑもんさんが、とゝぼんかとゝおん〳〵おぢや、ぎんずる〳〵ずら〳〵ずつと竹流し、竹に花咲くぜんゑもんさんが、とゝぼんがとゝおん〳〵おぢや、八百ちよの鞴で千ざを萬ざをごつほり〳〵ごつほりと、踏みやならうたに、ご

つりりん髭―つり髭

二上リさつまァ、のいちのやは、どつこい三ヶ國の伽羅よな、どつこいな、ななん〳〵名も扨よいやな〳〵、きやら〳〵伽羅男え、竪から見ても横から見ても、はつァよい男え、おさき一番手の奴、上髭ひんとした、しやんとした、つりりん〳〵つりりん〳〵、つりりん髭のなが刀、それ八もんじうから〳〵うかれて、あとからうか〳〵、うかうから〳〵うかれてあとから、うか〳〵うかからふる、手を振るだてを振る、爰は山の手のよい〳〵奴のでどころ

(五十)早咲梅踊

二上リひらき初めたる早咲梅のはんなりと、袖つま揃へてふつくりと、きいたか〳〵えいえい〳〵えい太郎冠者、御まへにねんのはや〴〵と、早咲梅の鶯か、きりきつてう〳〵きいてうきりきりきつてう、きつきよ祝うた太郎くわじや、梅の花笠はどうでもさ、かうでもさ、どうでもかうでも、えい〳〵太郎くわじや

(五一)菅笠踊



二上リおさきさき〳〵、さあさき〳〵は振手の衆、とろり〳〵と振らねばなんよさ、つぎつぎ〳〵は、あれ助よい〳〵、是助よい〳〵、浪助せき助臺笠はもち助、たて笠はてく助、戀のどつこいだて助、しやれた目元でひとひねり、こんどの〳〵〳〵今度の藪入にや裏からござれ、裏の藪から妻戸から、なりからふりから物ずきで、殿をめがけて振るは大鳥毛

㊽繁昌之市踊

二上リめでたいな、あゝめでたいな、われがすみかは都の辰巳稲荷山、こぼれかゝれる玉あられ、是の殿御に逢ひとて見とて、あの山こえて此山こえて、えいさんさ、さあさえいさんさ〳〵、君を思へば音羽の瀧の、瀧の白糸いとし、いと〳〵いとしよの、いとしよの、いとしよの〳〵、いとしけりやこそはんじよな市で、此酒に酔うたとさ、こん〳〵こん〳〵の盃は、千秋樂〳〵萬歳樂と祝ひ納めた

㊾山之手奴踊

いく／＼はいく／＼はいどうしく／＼、あつぱれ御馬は上手と上手が、乘つたか乘つたぞ、それぞれそろたえ

㊺白樫踊

二上リえいく／＼三熊野の那智のお山を今朝こそみたれ、順禮衆札をちやうど打ちや納めて、岩のはざまの白樫をく／＼國のみやげになろたよ棒の手、そつこで一振やつとうく／＼、やつとうく／＼とうく／＼く／＼く／＼やつとうく／＼まゐろ、とうく／＼とうく／＼まゐろ、岩のはざまの白樫をく／＼、國のみやげになろたよ棒の手

㊻舟指踊

二上リ高砂やく／＼此浦松に年をへて、木蔭の塵を一さらへ、つまげてからげてく／＼たかつまとりてまほじよはしり出て、てょらを待ちやれ、さあよいさ、是さよいく／＼、世の中のおめでたいよの「木蔭の塵へ返し

㊼七つ道具踊

のみに受けとつた、おゝ大分の「駒がいさむへ返し

（四三）なんほゝ踊

二上り君は二階のはん箱ばしご、やつこのぼしたてかんじり〳〵、かんじり通うてござれ、ずんど上りつめてはおりぬ氣だ、小娘を見たか、年はなんほゝゆかないが、なんほゝなんほゝ〳〵、やれ床とつてはなんほゝ、なづみかゝる、おゝ忍びの〳〵かくし殿を見たか、やつこのぼしたて、年はなんほゝゆかないが、なんほゝ〳〵、やれ床とつては、なんほゝなづみかゝる

（四四）竹馬踊

二上り五十三次にかくれない男、よゝをこめたる竹馬を、さて〳〵見事に飾りたて、手綱かいくりしつしどを〳〵、とどんどどつこいせと、どつこいせ、朝の出がけにや小室節、でがけにや朝の〳〵出がけにや小室節、一こゑ二ふし三藏や、いうたりつん〳〵つれだち、さあ〳〵いくべい〳〵、轡と鈴がりん〳〵がら〳〵りんがらが〳〵はいどう〳〵は

たのみ―結納

なか〳〵あたござ、逢はでやみなん、憂いぞつらいぞ

㊵新庄のや踊

二上リ紺屋もがりのや、だん〳〵〳〵だら助の細帯、さつてはたぐつて三重まはる、このよいかどのやしんじよやのさ、竹ごしによつくるよ〳〵よつくる〳〵よつくる〳〵くる〳〵〳〵と〳〵寄りたけれどもまづ通るそれはえ「さつてはたぐつてへ返し

㊶楊弓踊

二上リ御代はめでたや袋に弓を納め納めておいて、いざや矢をとれ一百手、君の羽風になどつこい一度はおちよ、的はたまやのな、どつこいねんね〳〵ねん〳〵〳〵音もさえわたる、紋は花桐おれとそなたはまつ、どつこい〳〵松竹ぢや

㊷先陣宇治川踊

本調子先陣宇治川ずら〳〵ずつとまくりこむ勢ひに駒が勇む、のほらほ〳〵のほらほよ〳〵、はんにやしとてとさ、さあしとてとさ、かつて冑のをじめの巾著金銀のは娘のた

ふけ—深田

こざいかく—小才覺

かゝのゝ市—加賀に野之市といふ所あり、それをいふか

田かふけかく〳〵足が引かれぬ、逢坂へさかの女郎衆と

㊼髮結小五郎踊

二上リこい〳〵小五郎、髮ゆひさしてやつと束ねてやくつわかいとり、大津八町でむつきくどん〳〵新酒こざけはこざいかくもな、どつこいなろかえ、關の女郎衆はやれこりや馬の口とる諸手綱、若衆見かけてな、どつこいなんなん〳〵なん〳〵やつこのやつとたばねてや

㊽傘踊

二上リむこ殿はなつくべいとて、夏は何をみやげに、ずんど凹んだ塗笠めそなら〳〵、いつそ尖笠ほそり笠、朝日のやつる〳〵〳〵やつつるつ〳〵そりやさせ男、やれ〳〵男かゝのゝ市大男

㊾いせき踊

本調子われは巖にさ、打ちよする波、はつと立つ名はいせきの竹の、かごのや目しげきや

ちよこ〳〵とをひの―解し難し

馬乘初弓はじめ、このやつつるつつる〳〵つるやつつるつ、男鶴女鶴つる〳〵つる〳〵やつつる〳〵、松はかはらぬ此殿の御はんじよ、さておめでたいよの

㊵八重垣踊

二上ッ小倉くわぜんちよこ〳〵と、をひのおもてからござれ、じつと引きしめ、やとん〳〵背戸は八重垣、大戸のくろゝの、くんぐり戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵なんぼくゞりくんぐりくゞりよいくんぐり戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵くゞりくんぐり、くゞつてだん〳〵めでたい御祝儀

㊶文まけ孫左踊

二上ッ坂の下には一夜もいやあよの、ぶんまけ孫左がお手枕、水はでてゆく山吹やそつこてしよけろいよんの、あいしてさ、寢覺にや鹿よ鹿のころよんの、あの峯通るはこつちん〳〵、さがつてのぼつて、のぼつてさがつて、ごいよころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころび落ちて逢瀨もあらば、あぶなかたやどつちかひかたは山田〳〵、沼

にほん—日本、二本

尤もさうよの、目近に持てさあまゐろ、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵きり〳〵まゐれ、さあまゐろまゐる〳〵、まゐる〳〵さあまゐろ、鳥は雁鴨雀ひよどり鶴のはし、さつてもいうたよういうた、まゐる〳〵まゐる〳〵さあまゐる、花は紅梅しらたま水仙花、さつてもいうたよういうた、げに尤もさうよの、そろへて〳〵そろへの扇は末はんじよえ

㉝さい鳥さし踊

二上リうづら〳〵鳴くなる深草野べの、根篠おしわけかきわけ〳〵、よく見れば人目せきれい打ちとけて、ありや山がらのおの〳〵おの〳〵おの〳〵おのがひきよくの羽もかろく〳〵つまさきしづめて〳〵つごもの〳〵つごもの〳〵えゝえ餌差竿え〳〵、けさ初聲はしをらしや

㉞卯の葉重踊

二上リにほん目出たい門に松竹かざり立て、若水男年男、卯のはがさねの著衣始、やれ御

ぼう―棒

ちんちやう―珍重

二上ッ花は四季さく、やれさて都はにしき、野山つゞきて一ぱいに、えいずつしりと、とことんとこと〳〵つんと〳〵つゝんとゝんと、とこ〳〵〳〵〳〵ずつしりと、うけ七代の年八卦、正月はじめ事始め、やれ十七八もうけはじめ、火性はつらりつとことんとこと〳〵つんと〳〵つゝんつとゝんと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、始めて開いだ扇子のかなめは、しつかと〳〵末はんじよえ

㊶順禮踊

二上ッよい〳〵〳〵肩にやおひずるひつかけて、あえいとこな、あなんとこな、つんつきそろへたぼうの手、きりりん〳〵きりり〳〵きりり〳〵、わつとまはつた順禮衆、是は播磨の書寫寺よさ、だん〳〵揃へてのぼつた、えい〳〵〳〵えい〳〵えい〳〵えい〳〵〳〵、諸願な成就ちんちやう〳〵、つゞいてのぼつた、よいやさ、めでたいな

㊷次郎冠者踊

二上ッ千石のよねぼね、萬石のよねぼね、お庭にずつしりつゞいてまゐれ次郎冠者、けに

かを—買はう

㉘丸福頭巾踊

二上リいつもより賑ふ門の二柱、でつくりといくよ重ねて毎年の〱惠方からとて、ゑびすと大黒とふつくな身でござつた、祝うて釣竿さあまゐろ、おさきへござれ、くるかあとからく〱、あとから見れば丸福頭巾でく〱、づきんでく〱にこく〱く〱、まるふく頭巾でにつこりと、けさの笑顔は尙でつくり、尙につこりいとしえ

㉙福助買初踊

二上リかどは一五三かざりわら、さげてものもどれく〱く〱、どつこい、どれく〱どつこいどれ、當年の惠方より福助が買初はめでたいな、倉びらきたなおろし、皮の財布を肩にひつかけて、古金かを唐金かを、文の上書起請の下がき買ひましよ、よいく〱伽羅の焚きがらかを、やれかを、をよかを、心中のよいよねたちを、千年も萬年もまんく〱年も正月買と祝うた

㉚有卦初踊

事ふれ—鹿島の事觸

よいこと〳〵、よい壽を祝うて事ふれがまゐりた、是やこなたへ御免なろ、まづ來年の惠方は申酉の間をば、年德神とさだめて庚辰の年はじめ、卯の十六日が豆まきだ、わつとつかんでよいやさ、鹿島踊をばちよちつと、ちと〳〵ちつと踊拍子にかゝつて、これやこなたへものとふ、まづ正月は大かの、はて大とも〳〵、二月小三大四五小々だ、それ六月は大よの、さて〳〵さて〳〵どつこい、七八月は小とさだめて、九月は大の菊月、十月小はがつてんか、霜月師走は大々、きはめて〳〵しつかときはめて、大小げんと定めた

㊆下六藤六踊

うでたい—めでたいの行なるべし

ちんた—葡萄酒

二上リえいどつこいえい〳〵、えいこのえいとんな、聟がくるやらげ六と藤六とお樽もつてまゐつた、おつとりそろへた御祝儀、霰まじりの霙酒、春はうでたいと其酒ひつかけて、花たちばなやれ宇治水、えいとんな、うんえいとんな、池田伊丹のげ六と藤六が晝は前垂玉襷、よるは綸子の三重まはり、ちんたの酒やしなの酒は聟殿のおすきぢや

おしやりやさうでござる―仰せあれば成程さやうなり

二上リおさきさ、ありやらんりやんりや、唐崎の、しててんやつこの、ほつ立てろ、まかせておけろの、よいやさ、これは豊後の、ありやこりや槍梅の、槍梅ぶんごの、おさきで石つきつかんで、すつ〳〵もぢりてふれとんやこひぢでふれ、とんやつとうやとうしやんぎり〳〵、しやんぎり太鼓の、ずんでんとんすすのどんすけか、ありや上の町下の町、中の町ははれぢやほどに、胸髭さすつてすつ〳〵ふらいの

㉕福之田踊

二上リさまが舟かやかんべざき沖に、ゑじまの姫むろはふくの田〳〵、あのょかんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごょのずけ、おしやりやさうでござる、ふくの田〳〵、あのょかんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごょのずけ、おしやりやさうでござるふくの田よ、いる〳〵ふくの田

㉖大小見踊

二上リ鹿島浦からのう浦から〳〵寶船がついたとさ、顔の若やぐ年男、よい事〳〵、よい

じげ—地下か
三彌—三谷
はさんばこ—挟箱

とほそもと〳〵〳〵ひきしめて、じげでひとりのだて男え、彦そはどこへ、山へさ、山へ上ればいばらやとめる、いばらやつとん〳〵放しやれ、やつしてさ、日がくれる、彦惣〳〵ひこその伯母御の歌うて臼ひきやるいのめゝかまへ、臼の目ぢやもの、かまりよかい、彦惣〳〵〳〵〳〵、彦惣はじげでひとりのだて男

㊂三彌土手路踊

二上りえい〳〵どつこい、長い刀をさいたはおさき、肩肱怒つてやつしつし、ついのはさんばこつぎどつこいやりふりぢやたてたえ、さんや土手みちな醉うたとさ、醉うたとさ、足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶないがてんぢや、あぶないがてんぢや、あぶない〳〵あぶなうてならぬえ、も一つかへして足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶないがてんぢや、あぶないがてんぢや、あぶない〳〵あぶなうてならぬえ、ぬれにや目のない金山、どつこい男え

㊃お先鈍助踊

二上リ高い山から谷底みれば、薩摩源五兵衞は目にたつ男、のほほんにほ、しやれた鬢つき茶筌がみ、ねて又おきても茶筌がみ、ずんどくぼんた塗笠、おまんはどこへ、播磨の明石へ、蛤ふみに〳〵、はまぐり〳〵〳〵ふみに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此舟にのせた源五兵衞、きりゝとまはつてのぞんだ播磨の明石へ、蛤ふみに〳〵はまぐり〳〵ふみに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此舟にのせた源五兵衞、一萬八千寶藏、えい〳〵やえいやえい代のさかえ

㊁長刀踊

二上リさてもそなたは寛濶、人か眞紅下緒のなが刀おつとり揃へたなぎなたすやり〳〵すやり〳〵、やり〳〵すやりちくとうさ、八方からめ手くも手鎌槍十文字、みよは〳〵一か二か三か四か、七つ道具でをさめておつとり揃へた長刀

㊂小野村彦惣踊

二上リ城州々々小野村の彦そを見たかえ、あたまちやつせん太もとで、細もとで、ふとも

すやり—素槍

太もと—太元結

㊇伽羅之板橋踊

本調手薩摩の鹿兒島の長吉どのは、伽羅の板橋をわたるとてこした、ほとんどえ、いで其比は花見月、櫻せたらおうたるなまず見つけた、長吉どの長松どの長吉長松、ちよろ〳〵めきがあげておとして、藤の花をしつかとからげて、さつさ姉のみやげに

㊈棟上踊

二上リ四本々々柱をいよへおつたて、大工のちこ助これのおたけに惚れましたさ、きりやしやつきり、きりしやつきりき〳〵、ちこ助のこぎりこぶくらやつこりや、こりや〳〵ひきまはし、一筆かいてはやりがんな、さてのう親見たや、あの子生んだる親みたや、ちこ助のこぎりこぶくら、やつこりやこりや〳〵ひきまはし、一筆かいてはやりがんな、さてのう親みたや、あの子うんだる親みたや、ちこすけさおやるぞえい、松に小鶴が舞ひあそぶ

㊉源五兵衛踊





そこ—其所、底
ひとね—一睡
きやうこつ—軽忽

がふところにあるかといふ事、いや／＼なんにもござんせん、出さにや殺すが、一度で出せと、さんどかはらけ程な目をむきだせば、是は旦那の爲替の小判、命たすけて助けてたべと手をあはすれば、かしましい、殺しはせぬぞ、あゝといへども、奥の納戸へ脇差とりに、行くをみてから身もふるはれて、むざんやよしべは長吉をとらへ、さあどうする最期ぢや、あゝ悲しやな、こゝに姉さまござらぬかいの、あら怨めしやと怨みなげけどつれなや、梅は聲を立てたら殺すといへば、泣くも泣かれず、かはいやな只をし鳥のはごにかゝりし野末の井戸の、そこにありとは夢にも知らで、親子親類かやせ／＼、長吉をかやせ、長吉かやせとな、夜ひとねもせでまよたえ

㊆一番鷄踊

二上リぼんさま／＼、ちとたしなまんせ、内にや女房子どもも無いものかなんぞのやうに性わるぼんさま、一ばん鳥の鳴く時は、こと／＼／＼とたゝきあけてはやでるとの／＼、内にや水がつくかあまりの事いの／＼、さつても／＼あまりきやうこつ

ぢや、ふやらの〳〵ふん〳〵ふ、ふやらの〳〵それはえ、ふやらのそれはえ

㊄晒賣踊

二上リさらししまざらし高宮ざらし、さらせば娘はくろむ、布はなるほど〳〵なるほど〳〵なるほど〳〵なるほど娘はくろむ、白くなるほど〳〵

二上りなるほど〳〵なるほど〳〵なるほど力にまかせたかつち杵、娘はくろむゐじまおれを見てなぜに顔ふりやるぞ、ゐじま高宮なんとしよぞ、ゐじまは生れつき

㊅難波長吉踊

二上りえい〳〵〳〵なにはの梅屋よしべ、心は入江の海の濁りよどみて、すめども終にあしのかたほのほに現はれて、引かれいづるや心の鬼よ、せめて百兩の金ばかりかや、いまだをさなき長吉を殺そとたくみあるとは夢にも知らで、主の使の悲しさは、是がな此世の名殘かや、えいこりや此世の名殘かや、長吉久しの姊にあはしよぞ、さあこちおぢやと、いふにだまされつれだち行きて、長吉さきの物は有るか、なんの事でござんす、金

かつち杵—かち杵

よしべ—由兵衛

久しの—久しぶりて

鳴いとさ―鳴いたとさの誤なるべし
鶯へかへし―「鶯ちう〳〵」の句より繰返し歌ふべしと也
ゆのふ峠―湯尾峠

とさ、あんさゝあんへこつがらてくせ、天照大神おんいでなされてめでたいな

(十二)ちゆつちゆら踊

二上リ鳥かあかゝつちりかあかかあ、鶯ちう〳〵ちゆつちゆらちう〳〵ちう、春になろとて法華經と鳴いとさ、ほけきやうでんぐりかへしてさつさ「鶯へかへし

(十三)づんがらもんがら踊

二上リゆのふ峠のまご杓子さ、さつとしめかけさ、えいこの〳〵柄が長うて、づんがらもんがらがらづんがらもんがらやつてくりよ、常陸の國のつのをかに、鹽賣長者といふ人が、黃金の築土をつくならば、蓮華はちすといふ娘、かれら二人の兄弟をてこの衆と定めて、思ひのまゝにつくならば、難なく築土は出來たるらんよふつふなんよゑ

(十四)君ちりをどり

本調子こゝな小吉めは與五へが君たんだ〳〵すのこきみちり〳〵かますのふぐた君、たんだかますのふぐた君、たんだあほとこふんではおぼちよこけべいてほこちよんとぼし火

うら葉—浦回の誤か
見とて—見たくて

二上リ 鳰の松山それからさきよ、志賀のうら葉のひとつ松ずんとよいきなひめこまつまつよは〳〵君を待つよは遠山松よ、山坂こえて〳〵〳〵見とてきた野の七本松よ、ほんに必ず青葉の松よ、のころきぬ〳〵衣掛松よ、嵐松山さら〳〵、どつこいさら〳〵どつこい さら〳〵〳〵さら〳〵〳〵さつと打つては濱松の音はざゞんざ

(十)さんがらが踊

二上リ あらい風にもようやよやよ、あてまいさまを、やろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、川ぢやざんざら柳のよいやさ、しろがねが〳〵よい手は〳〵こまの膝ぶしんからが〳〵信濃へやろか、やろか信濃の雪國へ、さあささんがらが

(十一)あべ川帋子踊

二上リ お江戸〳〵みやげにあべかは帋子〳〵、ありやこりやよい、著てはごそ〳〵〳〵とさ、あんささあん〳〵くわんこや〳〵、しやつき〳〵〳〵しやちんがら、こゝ爰までは走り出でみれば〳〵、ありやこりや戀のなか宿、さあおろせこれさ〳〵、著てはごそ〳〵〳〵

二上リのぼり下りに目につく姿、露の命を君にくれべい、追分の達磨ゐごころ、鬼に衣はそげたもをかし、座頭は尻居に犬が吠えつく、猫がしやみひく、酒のむ奴愛宕まゐりに袖をひかれた、だてな若衆が鷹手にするゐて、ふれやれ〳〵大鳥毛〳〵、浮世のんせいふんらんらんしんらんどんらん十三佛、かけ針くけ針たゝみ針、いゝいけのかは、菅笠よりほに算盤粒、關の淸水はうき名所

いけのかは―池の側針は名産

㈧月づくし踊

二上リ月は武藏野よいつきだしの女郎は三日月、だてな道中袖つき、たれを待宵あの顏つき、年は十五夜腰つき足つきさえた聲つき、なに夕づきよ、桂男よ、さつさいとしかござれ、さつさかはゆかござれ、いざよひ月にたはむれ遊べ、えい〳〵〳〵えい〳〵〳〵えい〳〵てる〳〵つき〳〵てる〳〵月を見たらば、なんとござるまいかの、てる〳〵月々てる〳〵月のおもかげ、月を見あかし飮みあかし

㈨松づくし踊

とふあした—飛ぶ足跡か

をするがの三保の浦、なりよきふりよき富士をになうた、たん〳〵たん田子の浦〳〵、晩にや必ず〳〵堅田の浦、どうでかつかひにくる夜の、君に大津の浦は七浦なん〳〵　どつこいなん〳〵なあ七浦、なん〳〵〳〵七浦、これからさきも七浦なん〳〵どつこいなん〳〵なあ七浦、なん〳〵〳〵七浦、かはらでこゝにすまは明石の浦は高砂

㊅ごばんづくし踊

二上ッ京は十らく樂み所、町は碁盤のなりよやみよや向ひ合すりや手に手をしみやる、よござる〳〵、よい手がみゆる、戀のな中手にとゝんととふあした、とゝんととふあした、わたり八日ずんずずんずと伸びるはまは何百六六三百六拾目、一期つれそふ、つれそふ中の白いちんちりめん黒羽二重でぬめらんす、繻子のおび〳〵、しめつゆるめつよいなん中て〳〵、うつや打つたり〳〵おてゝん手を打つ、うつたりな打つたり〳〵おてゝん手をうつ、うつたりな上手め〳〵、思ひのたけのよゝを重ねて、うちや納めた

㊆大津おひわけゑ踊

きた山—來た、北

㊂小倉山踊

二上リ小倉山からよむ言の葉の、歌の中山みやこの富士よ、つゞく山々戀の山、だてをかざるや衣笠山よ、なん〳〵なんでも錦おり、なん〳〵でも錦おり、裾はちらほらもみぢ葉ちらす、高尾楓の尾いやといはれぬ、どうも云はれぬ、袖をひかへた男山、これも愛宕の御利生かの、のぼればさつさ、えいさつさ〳〵、さつささぶろく十八町、あらし山風いとはできた山、春はかならず東山へござれの、花のさかりはまん〳〵丸山

㊃山ぶし歌踊

二上リ男もとならの、あさはれしちやほん、この山伏男をもちやれの、元結ひねらず袴きず、やれこりや袴きず、のんやほの、あさはれしちやほん、この山伏男をもちやれの、元結ひねらず袴きず、やれこりや袴きず

㊄浦づくし踊

二上リ和歌の浦なるいきかた男、戀に通はゞ千賀の浦ふみとりかはすそでのうちもみうら白裏浅黄裏、だて

大和橋―山にかく

㈠菊づくし踊

二上リ加賀のお菊は酒屋の娘、顔は白菊紅菊つけて、よいこの〳〵、よいこの小ぎくとりなりしや
んときくながし咲いて見事な扇車のくる〳〵〳〵くるま菊かさね菊、猩々舞を舞の袖〳〵、見
そめてそめて戀にこがれ、こがるゝ身は唐錦、通ふ道芝菊ませがきさ、あしあしでとん
とびこえつとんととびこえ、ぞん〳〵ぞんぞつとした〳〵、ひとへふたへ三重四重七重
八重菊よ、御所の御紋は菊の九重

㈡都はしづくし踊

二上リみやこ大橋わたりて行かば、思ひそめたよこいたの橋に、又も近江の瀬田のはし
かけよなさけのひとつばし人の心は假橋うきはし反橋なれば、あだに其夜は戻橋、つれなや君にふられて
さく〳〵、ふられて〳〵雪にふられて鵲の橋、ちよつと替せし詞のはしを、なんの忘り
よぞ〳〵それがうれしゆで清水の、とんとろ〳〵、とどろ〳〵とどろ〳〵、とどろとん
どろ、轟の橋、づもりて戀の大和橋、くちぬ四條の橋柱

九十一　いもの子　　九十二　小　川
九十三　ていこ屋　　九十四　ほいく
九十五　のんやほ　　九十六　二　木
九十七　まんまる　　九十八　こんどや
九十九　ふくとん　　百　番　さゝら

十九　むねあげ
二十　源五兵衛
廿一　なぎなた
廿二　小野村彦惣
廿三　三彌大手みち
廿四　おさき鈍助
廿五　ふくの田
廿六　大小けん
廿七　外六藤六
廿八　丸ふく頭巾
廿九　福助買ぞめ
三十　有卦はじめ
卅一　順　禮
卅二　次郎冠者(くわじや)
卅三　さい鳥さし
卅四　鵜の羽がさね
卅五　八重垣
卅六　ぶんまけ孫左
卅七　髪結小五郎
卅八　からかさ
卅九　いせき
四十　しんしよのや
四十一　楊　弓
四十二　先陣宇治川

松の落葉　卷第四　古來中興踊歌百番

目　錄

まんづ—先づ

にばつくにねがへり打つては寝られない

⑱さいの川原

古今新左衛門作

本調子爰にあはれをとゞめしは、さいの川原と聞えしは、二つや三つや四つ五つ、十さへ越さぬみどり子が、いさごをつかねて山となし、小石をひらうて塔につみ、一ぢうつんでは父のため、父の恩と聞えしは、須彌山よりも高うして、言葉に何ともいひがたし、南無あみだ佛〳〵なむあみだ、二ぢうつんでは母のため、母のめぐみの深き事、滄海よりも猶ふかし、三ぢうつんではきやうり兄弟わが身のためと回向する、南無あみだ佛〳〵南無あみだ佛、まんづ母の胎内に、十月がうちの苦痛をうけ、やう〳〵此土に生れいで、四とせ五とせ七とせ待つや、まつや待たずにみまかり出て、又いつの世に此恩をおくりかへさん、わらんべと、さん〴〵に苛責なし、いづちとも無く失せにけり、諸事のあはれと聞えける、南無あみだ佛〳〵〳〵〳〵〳〵

當流丹前古今ぶし　終

けもない事―少しもない事

二上リ浮世言葉によそへて問うて、とかく浮世ぢや戀の道、うらが氣儘なるならほんに、とは思へども人の口、有る事ない事おつしやります事聞けば、松は小藤と寢たといふ、小藤は松と寢ぬといふ、あの嘘はいの、ねたりやこそあれな、やれひつたりと、そのよな事はな、けもない事よ、聞けばうれしや思ひ草、只うつゝなや、人にいはれぬわが涙、それとは知らで思寢の、かわくまもなき我涙、羅綾の袂をも、引かばなどか切れざらん

㊆茶飲時　同人作

二上リおきていなんせな、あすの夜もあるに、今しばしぞや、又寢の床〳〵にはぬるゝも袖、東がしらむ、頓ておばゝの茶のみ時、しゆんだらまんだら福徳ゑびす　べずるべずるべざい天、南無藥師のお地藏がの、みめのよい女郎さまの、そばにそつと寢たるは雪か霜か霙か村雨か雨か霰か、吉野の初瀬の散りかゝるやうで、おいとしうてねられない、うらゝがやうなるみめの惡いしやつ面が、そばにぐわさりと寢たるは、いがぐりぎりつくり天神髭けさ打ちおろしのあらむしろ、がんぎ鑢鮫肌つくやうで刺すやうで、いつく

鵲の、天竺のあまの川に白い〳〵桶が流るゝ、奉公するとも豆腐屋にやいやよ、それなぜに、七つ起きして豆みがく〳〵、七つ起きして豆みがく

⑭山郭公　　古今新左衛門作

二上リ花の散る時やはつほとゝぎす山ほとゝぎす、月は三日月かたわれいびつ、まるい長月くる時雨月、雪をながむる火桶のあぶない窓の、あかしくれ竹いくよの枕、戀にねぬ夜は二夜三夜

⑮稲荷參　　同人作

二上リ引けや〳〵ひけや〳〵牛のもうもう綱をえ、柴に櫻を折りそへて、させいほうせいこりやどうだ、稲荷まるりの、參りの稲荷、振袖ゆかし、幽禪模樣でそんれいえ、おかた四十に娘は十五、ついの模樣でゆかしえ、さいかち山へ上るとて、荒い風がもつけな吹いてきた、脛の白さでえいとこなうんとこな、白さで脛の〳〵白さで日をくらす

⑯浮世言葉　　同人作

さいかち山―皂角子のある山

しい竹—椎茸か
中—夜中
ゆづの念佛—融通念佛

⑩郡内八丈　　同　人　作

二上リ山の上には白豆青豆枝豆、白い袋は祕藏のしい竹、芋の葉の露ぶりしやりと、これのおさつに機織らしよ、郡内八丈小倉島〱、郡内八丈こくらじま

⑪ありまの松　　同　人　作

二上リ松になりたやな有馬の松に、藤にまかれてねとござる、まかれて藤に、藤にまかれてねとねとこざる、なさけ有馬の花のえん

⑫伊呂波　　同　人　作

二上リ子ども〱よ、髪結うてとらしよ、いろはにちりぬるを、わがわがよたれそつねならむ、うゐのおくやまなけさこえて、あさきゆめみしゑひもせす京、宵にや和讃よ中にや法華經、曉起きてはゆづの念佛、紙子々々安倍川紙子え

⑬天の川　　同　人　作

二上リあまの川には水こそまされ、さてもやんれ逢ふよならぬえ、橋をやんれかきよやれ

うちのなへし云云―「内の鍋も釜もふすぼり鑵子も道理や」の誤か

によずもの―寝ようずもの

さへうれし、うらが港にやほだすもうれし、うれしえ、軒の玉水とく〳〵ござれ、繁くござれば、ござればしげく、人が人が知る

⑦鼠の晝寢　古今新左衞門作

鼠めがさんの野中に、晝寢してな、猫に子とらりよと夢を見たな、まもりよかけさへよけのまもりをな、晝寢の寢言いうたをかしさはいの、うちのなへしかまもふすぼり鑵子もとふりや、かゝみな黃金え

⑧老ぼれ枕　同人作

年は寄るまい、うらが部屋へは猫もこずもの、老ほれ〳〵こち寄れ、ちと〳〵抱いてによずもの〳〵、抱いてちと〳〵によずもの

⑨牛之綱　同人作

二上ッ引いたりな牛の綱をえ、そんれは引きやることぢや、殿御のな草かり年よ、鎌もよく刈れ、千草もなん靡け靡けやれ



肩身しよぼらでくちをしや、世をも人をも葛の葉の、うらむべきやうあらざれば、袂を顏におしあてゝ、只さめ〴〵とぞ泣きゐたり

㊃隅田川　同人作

本調子 吾は都の者なるが、人商人にいざなはれ、あづまに下る玉鉾の、さもあらけなきものゝふが、歩め〳〵と打つ杖に、あゝ父母の戀しやと、泣くより外の事ぞなき 自是江戶說經

二上リ「いたはしやをさなごは今をかぎりの下よりも、父は吉田の少將よ、名は梅若と申す也、都の人の戀しやと、西に向ひて手をあはせ、南無あみだ〳〵〳〵〳〵

㊄富士之嵐　同人作

二上リ ふじの嵐に艪櫂をとられ〳〵、ひとりこがるゝ田子の浦、山椒めが胡椒を女房にせうとおしやる、唐辛子が仲人、やれ蓼穗が悋氣する、どうでも山葵は鼻をはじくえ

㊅三嬉敷　同人作

二上リ うれし〳〵が三うれしござる、初手にごさつてもふられぬ嬉し、宿の首尾さへ首尾

本調子いかに鬼鹿毛よく聞けよ、牛は大日如來なり、馬は馬頭觀音なり、化現化生のものなれど、あまた有りける其中に、汝ことさら人まぐさをはむ故に、畜生の中の鬼ぞかし、駒もしやうあるものならば、耳ふり立てゝよく聞けよ、口に佛名唱ふれば、生きながら佛になるぞ鬼鹿毛よ、如是畜生發菩提心ときく時は、汝もたしかに聽聞せよ、そのとき鬼鹿毛は、畜生とはいひながら戀の哀を聞きわけて、諸膝折りてゐたりしは、人間ものは知らぬなり

㊂朝伊奈

古今新左衛門作

本調子あさいないかにとしかりける、無念なるかな世の中の、それ天人には五衰人間には八苦とて、八つの苦のある其中に、貧ほどつらきものはなし、貧苦とだにもなりぬれば、疎き人にはいやしまれ、旦暮に衣かさねゝば、夜さむさいとゞ堪へやらず、朝夕がとぼしければ、事問ひかはす人もなく、日鐺りじゆんぎにまじはらねば、慰む方も更になし、たまたま列座につらなりて、心は高上に人にすぐれて見ゆれども、重の衣がうすければ、

朝伊奈―朝比奈の訛

朝夕―食事

古今ぶし

瀧川六三郎
古今新左衞門

㈠なぞのうた

そこな船頭になぞ〳〵なに、こちや謎しらぬ、なんどのかきがねはづすが大事、かけるが大事、ういもつらいも淀長繩手、身過なりやこそ舟も引け、舟をひくとてなぜ袖ひいた、いかにおんらがいんなるもので、しんらぬ知らぬと思やろけれど、目元でも知る乘合舟の船頭休みやれ、あゝえつとしよ、しわい女郎しゆや、いやなら置きやれ、おかいでなんとしよ、事はかゝぬぞ、こちの舟蒔繪にかきし舟のうち、みつこや鹿島やこん比丘にん、御出家庄屋どの拔參、こほうらいがくどいた、戀慕のやみのくらがりに、皸足をさしだした、さまぢや御座らぬ、やつこの上髭さなでた、ごめん〳〵十めんつくりてひかられた、髭がはげたらごめんなれ

みつこ―みこ（巫）の促聲
鹿島―鹿島のことふれ

㈡小　栗

古今新左衞門作

に舵どつこいかぢ、どつこい枕よんの、ござれ沖津ののほほんに、ほんにさ、ほほんにほんにさ、ほほんにほんにさ、ほんに〳〵さ、ござれ沖津のどつこい、わかれの野でしげろ、たんだふれ〳〵戀のにくさよ

丹前出端 終

十八の君―十八公の緑をとりていへり

二上りめでたの若松さまはよんの榮ゆるはもよはらんは葉も茂るよんの、枝も榮ゆる葉もよはらんは葉も茂るよんの、ふくはらの里のよねくろは小松ばらかよひ十八の〳〵君とな、君とねの日のまつ夜はよねくろ、どこで見た見ゆるとさ、さつさ見ゆるとさ、十八の〳〵君とねの日のまつよはよねくろ、どこで見た、みゆるとさ、さつさ見ゆるとさ、わけの前髪太元結のしがくまき、はでな小姓衆はどれ〳〵、あれはそれはどゝんどえ、さまのおすきとて、ちんちりめんにのほんほゝ、肩には唐梅や、唐松に唐獅子を縫はせて、裾や袂はうらふくもみが、ひら〳〵ひ、さつさふれ〳〵ゆかしなつかし

(十九)濱川風流

山本歌門
近松勘之助

二上り今年渡りの伽羅ではないが、とめてねまきの染小袖、ねまきのとめて、とめてねまきの染小袖、濱川の女郎はお手が荒れそろなよえ、道理かな濱川繩の、でん〳〵でん出所なよえ、我戀は〳〵丸き苧小笥に角の蓋、あひますきまを合はせども、あはぬよの、しやてんはちまつかせ「さまがくるやら帆が見ゆる、そこ介こゝ介がつてんか、苫を敷寝

朧の清水―大原にあり
やせ―瘠、矢背

朧の清水に影はやせの里人、小原賤原鞍馬や貴船、あの奥山の柴といふもの、をり〳〵をり〳〵をり〳〵、折てたばねてきりゝと結んで、しやんと戴きつれた小原木を、こいこい小女郎なぜにこぢよろは出て待たぬぞ、小女郎こそくれ山ごしに、戴きつれた小原木を、さてもそなたは春の花、麻の中なる糸蓬、思ひそめたは恥かしや、思ひそめたりや浮世もいらぬ〳〵、やれさて〳〵〳〵浮世もいらぬ、縁でそろ物ちとをどろ、とゝのかゝの〳〵とゝのよい子をまうけてたもれのう、上下なれてよいとのを〳〵聟がくる、やれ聟がくる、聟殿の小袴何色にそめよぞ、えい〳〵花色〳〵、褐袴著してきり〳〵〳〵、尋常に奥のざしきにおんも〳〵と寝てかたろ、おうその奥の出居からよまの出居まで、さん〳〵さんさぐりまはれど、はんな嫁にはさん探りあたらで、髭面男にさん探りあたつた、はつちやこは物なんとしよぞ、りんとはねられ、たんと氣の毒しやらや〳〵しやら〳〵〳〵や、さつさしやらの戀路の心根や

(十八)若松風流　　岩井左源太

二上リ我は石川や濁らねども人が濁すよの、かけふにはなにとしんまゐらしよ、勝山が髮のゆひぶり手替りにこのえ君ちとせ山、それや昔のさゞれ石、いはほと成ていつまでも變らぬものは常磐木の、葉色に迷ふ人心、地をはしるけだもの空をかくる翼も、戀には誰も身をやつす、いや〳〵わらは心とひやうし、一眼早足やつとん〳〵、二眼早足やつとん〳〵、さきの力にやよれつもつれつ、やととん〳〵とん〳〵とん〳〵、うけて流して袖返し、棒はみや口戸田小坂、そちが思へばこちも思ふよ、ほんにさせいもんしやたらほん、誠についくのつい我等も思ひそろ、思ひと戀とはがつてんか、君が盃つく〳〵つつてん、つけざし三杯飲めや歌へやとかく世の中

㊆京之名所

多門庄左衞門

二上リ須磨といふも浦の名、明石といふも浦の名、すまや明石も外ならぬ、花よもみぢよ月雪のあけぼのは、筆で書くともつきせぬ都ぞおもしろや「北は黄に南は青く東白西紅にそめいろの、山は都の富士なれや、麓につゞく市原や、

つけざし―口をつけたる盃を人にさすこと

そめいろ―染色、蘇迷盧



に百夜めのな、忍ぶ夜はな、わけを百夜かよへとのんほえ、とにかくに戀路のな、心うわ〳〵浮氣で、たまつた事ではないたんだ たんだふれとは、なか〳〵ぬれた戀のやつこりや〳〵よい〳〵、とかく浮世はぬれの眞中

⑮狐會出端　　生島新五郎

二上リ石にせいあり水に音あり、鼓はたき浪袖は白妙雪をふるふりもよし、ふりかへる山更にかすかなり、又ある時は織姫の五百機たつる窓に入りて、人を助くる業をのみ、ましてや我名もいふ聲ひく袖のながめなり、そなたの空は白雲、あれこそ小原や小鹽山、今は舊巢へかへる山、此神の德を告げ知らしめんと現れ出て、恥かしやわれが姿のまことをあらはし、又は國土を垂跡の方便、頃は雪ふりなれや、木々の梢もうづもれて、梅も色そへ松とても、名こそ老木の若みどり、空すみわたる神かぐら、はんや神かぐら、齡をしらする此神の、ゆくすゑ久にと我が神託の、德をあらはす御代ぞめでたき

⑯曾我五郎　　山下才三

うつたり〳〵太鼓つゞみ、どん〳〵から〳〵とんからが、どつと生れた若ゑびす、顔みせ代々の笑ひ顔おもしろや

㈩市野屋

生島新五郎

二上リ京のみやげに何々もらうた、蒔繪の差櫛桐のたう、あゝもんつくつ、おれに一代そふ身ぢやとても、あだし此身はどうもせ、心とき櫛いのちぢや「戀風ふかばえい〳〵な、わけある方へさそはどさそへ、行く水に川島あいをこがれいで、舟はおぼろに影見えて、うきを身に積むしば〳〵も、かひも渚の濱千鳥、ちりやちり〳〵〳〵、ちりとんださ、嵐に亂れさつと散りぬるおもしろや「龍田川邊に舟とめて、をばなかちぢ通れば日が暮れさうよの、鳥が鳴きさうよの、鳥がなことまゝよの、余町の殿御とねたる時の嬉しさは、さて鳥も鐘もいとはぬ、こりやどつこいどつこい〳〵都風流世界のな、なん〳〵中に、色といふもの凝りかたまつてひとつの戀となりしばの柴の戸ほそもやれ玉簾も、戀にあつてはたまちぬ〳〵戀はさま〴〵あるが中にさ、小野の小町はさ、わけを百夜かよへとのんほえ、其中

二上リ萬代の神のみことの二柱、仰ぐもおろかなり、げに世のはじめ其水上のあかの水きよめ奉る、まづ人間の初月をば不動明王の受け取り給ひて、本來空の一物これとかや、祓ひ清めたてまつるの、つぎをばいかにと尋ぬるに、本心の靈心私なく、初めて明德と名づけ奉るの、二月めには獨鈷の形のあらはれて、これをたのしと名づけ奉るの、我朝にては神りよと仰ぎ名づくる、所は隔つれど文珠菩薩のうけとりにて、三鈷の形にそなへ給ひ、晝夜守らせ給ふとかや、次をいかにと尋ぬるに、五つ月めには六根手足をさいしきて、五體殘らず連續し、此時に至りて地藏菩薩の御守り、寵愛ことに淺からず、ちやうち〳〵あわょ、かぶり〳〵しほの目、錫杖に打乘つて、いんじんしよ〳〵いんじんしよと勇み給ひて、次をいかにと尋ぬるに、六月めになりしかば、好む所欲する所自然にてうじ、母の乳味を吸ひとる事、申さばいはば凡三石六斗なり、つぎつぎ〳〵は阿閦彌勒の御守り、當る十月は大日の御守り、四方にくわつと廣め給へば、梵天帝釋八百萬よの御神かぐらを奏し給へば、神樂の鈴がりん〳〵〳〵、りん〳〵〳〵〳〵りん〳〵〳〵、

たのしー出の字の誤なるべし

神りよー神慮か

さいしきてー彩色より轉じて分れそなはる意

いたり姿—高上な姿

つうどよんどえ、五丁町の寶ぢや、ふつた奴のゆかしなつかし

⑫成　相　　竹島幸十郎

二上り鎌倉の御所のお庭で十七小女郎が酌をとる、えいそりや十七小女郎が酌をとる、いたり姿でういう事いうた、よういうた／＼、思ひねぬ夜はそこ心實から待ちやあかした、浮世通りものだてしやの姿そなたどこへいきやる、夜更けてからにしばしお待ちやれ、つれになろ、お待ちやれしばし、しばしお待ちやれ、つれになろ、君とわれとは戀慕れんれつれ、見そめし月日は多けれど、しかも元日初春に、ちよつと見てとろ／＼とぼけて、うか／＼と裾やたん／＼袂に取りつきひつよきくどいた、れいの／＼れん／＼戀慕の深間ぢやと知れた、二世のかねごと、さつさ振袖、先手の行列ぼつ立てろ爰ではやるさ、さつさよいやさ、三十振袖四十島田さ、さつさ、さよいやさ、だてな振袖ゆかしなつかし

⑬祭　文　　竹島幸十郎

こりやさ、やつこりや〳〵〳〵これにくや、いふも枕が浮くばかり、面憎や浮氣だんべいおもはくだんべい、戀と思ひを笹舟に乘せておせさよさ、おさよさよさ、舵を枕に寢てこがるよ〳〵、ひとりねになく戀のにくさよ

⊕山崎がよひ

勝井長右衛門

二上リおもしろの山崎通ひや、行くも山道もどるも山道、心のとまるも山崎、かの里のぢよろと一夜ねたれば、ずはらめいたといはれたんがらがといのう、伊勢のお前でえいしてせい玉章をひろうたえ、えいしてせいおんなかおぢぞのおんくじおん取りおん見れば、一にや二がおり、二にや三がおりる、えいしてせい、さても玉章はおめでたいぞや、えいしてあれしてこれしてせい、そこで笠もてかん五兵衞、頭巾のもてこい、編笠もてこい、ない五丁町のたからぢや、千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさは、とろさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどよんどへ、も一つしてこい五丁町の寶ぢや、千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさはとろさになつて、おくれ〳〵をありやんりや〳〵しつし

えいしてせいー
はやし詞
おぢぞー御地藏

鹿かの筆—かの字不用か

こうばこひ—來るならば來いの意か

㈨關東小六

嵐三郎四郎

端唄ねやの戸〱扇車のえいえいくる〱〱と、めぐりあふせの波枕、さんやれ

二上リ「小六ついたる竹の杖、小六、もとは尺八中は笛、小六、末は女郎衆のやつこりや妻こふ鹿かの筆、いとし君さまと寢たる夜は、小六、寺々のほろりん〱大鳥小鳥の羽ぶしをたゝいて、ぼと〱〱〱ふら〱さがりの番太郎おやぢが、してゝん太鼓の、のほんほゝ、さまの俤忘らりよか、どこで見た、ぞつとしたとよえい〱、君は春さく梅の花ぢやかとよえい〱、君は春さく梅の花ぢやかとよえい、かをり床しきなりふりは、ありやゝこりやゝえい〱、さつさえいさつさ、さつさ振袖床しなつかし

㈩戀の風流

勝井長右衛門

二上リ昔の人の戀するは、命も絶えよと戀をする、さて中頃の戀の道、草木も靡けと戀をする、いま當代の戀の道、こうばこひ來ずばまゝよとやあよや戀をする、鳥羽のあなたに戀路がござる〱、はつちやさ許してさ、猫が三味ひく鼠が歌ふ、これも思ひはやつ

こさん用―小算用か

みの酒にいざや遊ぶべし、まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じてさむきにも、この木よりもさきたてば、梅を切りやそむべき、生れ在所は石切の、しやうでんなものも少とかくこさん用もするかえ、何所の袖かげんで女房もたぬえ、梅はさまざま有るが中にさ、はやざき梅ぽつとりと〳〵しな物〳〵信濃梅、思ひこが〳〵こがれて書く玉づさを、たよりもうめてやり梅や、そなたへとんと飛梅や、枝がさはらは御免なれ、ふりふつて〳〵〳〵、ふつて〳〵〳〵ふりふつた振袖の、たが袖の香のにほひ梅、初音ゆかしき鶯の、羽風につれてふはと亂れ〳〵〳〵〳〵てしだれ梅、しなと拍子をかぞへ〳〵て、それ〳〵それ〳〵それ〳〵そこらでしめろ、まかせておけろの、とんと〳〵とんとはずんだ手鞠梅、ひいふみいよ五つむなんなやことは〳〵しとゝんとん〳〵とんとんとろ〳〵とろ〳〵てうど百ついた、面白や、かず〳〵の盃はどこ〳〵へまはつた、長二長七長三郎ちよろ〳〵めきの長二郎、はなしがいのぐい太郎、ずくわんぼうがわ入道、はやし立てゝあそんだ





おんぢやらない—おぢやらぬ
蛇之介—大酒家をいふ
さらけ—淺甕
さみ—三味か、いさみの誤脫か

さ〳〵えいさ〳〵さら〳〵〳〵〳〵えいさつさござれ、どんどと打ては響くえ、昆陽野の宿の、遊女が袖をじつ〳〵〳〵ともひかへて、今やうは朗詠しぼり萩を歌ふとおさへて酒をしひられた、此酒にたべ醉ひべろり〳〵べろつく管まきやるか、小ふなぢやわいの、のめのよい上戸衆の側にそつとゐたれば、雪にひやかかん呑みかねぢかゝるかいな、そも恐しうはおんぢやらない、うらゝがやうな底もない蛇之介が、なんでも呑まんと思へば今里か瀨戶か南京さらけさ、打ちわられのすりこ鉢、ねるやうでねもせいで、しつくりがつくり寢がへりしては寢られない、はや明方の時太鼓、どう打つの、どんどん〳〵どう打つの、どんと打納め、えいやつとも聲をせい、さみ賑ふ門の松竹

㈧梅揃石切　大和屋　甚兵衛

二上リ おもしろや四方の山邊も白妙に、見渡すそらのうすぐもり、雲と見しは白雪の、白雪の〳〵はらへど降りつもる、花と見まがふこずゑ〳〵のしほらしや、いづれも白妙に眺め〳〵て、雪も氷も其まゝに、袖をかざし立ちよれば、これは木々の花きりくべて、樂

もの、あのや椀久はこれさ〳〵、鼓の皮かのうほんえ、しんぞ心はこれさ〳〵うちぬいた、ほんほえ、しんぞのうほんえ、とかく戀には身をやつす

㊆難波津壺論　大和屋　甚兵衛

二上リ浪華津に咲くやこの花冬ごもり、今をはるべと咲きそめて、榮ゆる葉もしげるよの、幾代かさねて葉もしげるよの、君がよはひは萬代の、久しかるべきためしかや、國も豊に民さかえ、玉の盃手にもちて、飲めや歌へやざゝんざの、聲すみ渡るめでたさよ、我もかはらぬ嬉しさよ、こゝな殿御はないくつ、十三七つあらまだ若や、さても〳〵わごりよは誰人の子なればしほらしや、をどれ〳〵爰な子をどり出せ、見事てん手拍子もそろ〳〵た〳〵そろ〳〵た〳〵そろ〳〵〳〵〳〵月の笑顔の照つたりや、紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵しんきしの竹根笹にあられ、はら〳〵〳〵〳〵落ちて亂れて夜ごとに通へさ、さまがふりだす形ふり見れば、さてもそなたはいとしゆてならぬ、扨もそなたはいつもどゝんど、どつこいどゝんど、どこついどゝんど、どんどとござれ、えいさつ

薄色に鹿子梅、まだいわけなき小梅ぶりよや、拍子も品もとり〴〵に、君が手なれし手鞠梅、おちてこぼれてはら〳〵と、空に知られぬ霰梅、われが思ひを筆にまかせてかきほ梅、文をば君にやり梅、淀の川瀬のなんなどつこい、やれさてさて〳〵水車、たれを待つやらくる〳〵と、めぐり逢瀬の待つ夜はほんに、なぜにぢよろは出て待たぬぞ、誰を待つやらくる〳〵と、めぐり逢瀬の待つ夜はほんに、なぜにぢよろは出て待たぬぞ、さても〳〵見事やいたいけしたるものあり、はりこのかほやぬりちがふ千種むすびに笹むすび、山しなむすびに風車、瓢簞にやどる山がら、胡桃にふける友鳥、虎まだらの犬の子、とるや蓬のやはた山

㊅椀久出端

大和屋　甚兵衛

二上リたどり行く、今は心もうかれそろ、誰かいく野をひきぬきしより、いつの比より相馴れそめて、通ふ心のいくせの思ひ、忍ぶつま戸をほと〳〵たゝくは椀久か、さりとはさりとは受けうかの、しのぼかの、そつこで受け出せ、おもはくをこれ〳〵うけた

磯に打つとなん、浦々とまり〳〵を打過ぎて大津の浦に著き給ふ

㊃右出端の跡遠目金　同人

二上リあづまも京も絶えせぬは、戀といへるくせもの、げに戀はくせもの、あの君の召したるこん〳〵小袖の袖の海、沈みはつべき我が思ひ、よしや吉野のはん花よりも〳〵、あのや君さまの思はせぶりに、忍び通はゞ亂れ逢瀬も有るやらん、げに恥かしき初戀に、夢うつゝにも言ふにいはれぬお姿を、たがせきとめて通路に、ふたり枕をかはしまの、橋をかけたやあのさとへ、飛び立つほどに思へども、隔つる中の悲しやな、とかく戀にはやるせなや

㊄八幡詣出端　中村七三郎

二上リげにいさぎよや心よや、だてな姿の〳〵男山、引く手あまたの梓弓、やたけ心に我戀の、岩青成ていつまでも、君が八千代はつきすまじ〳〵、とかく棄てぬはをみなへし、結ぶ契はちとせ山、花の情は猶つきじ、色はさま〴〵しなの梅八しほ紅梅あさぎ梅、地は

岩青成てーいはほとなつての誤なるべし
しなのー信濃、品

ならぬか戀の中の町、なかの〳〵中の町を通りたうはなけれど、なまだこつかんだ、あたまを見たか熊野小比丘にんが、ちとくわんくわん〳〵、くわんとも鳴るは夜明の鐘は、つんつんつらいか、づんでんとうから櫓太鼓の音によりくる

㊂東妻道之記出端

中村七三郎

本調子 きのふは袖に包みけり、けふ九重に旅の空、ふりあげ見れば鹿子斑にちら〳〵と、雪間に見ゆる富士の山、やう〳〵爰にきよみ潟、空にも關の有るならば、月をとゞめて三保が崎、名にのみきゝし菊川に、夢も結ばぬ假枕、小夜の中山なか〳〵に、濱松がえの若緑、さしでの岩を荒井の宿「さゞれ女波がよせてきて、岸の小草にあゝぬれかゝる、思ひうらある二川や、げに潔き道のべの雲の旗手に戀しき人の、戀しきえにしなつかし、只ひとりねの班女がねやの戸〳〵、西をきつと見たれば、月はな、月はでもせで磯に男波がなん、比叡のな、比叡のおろしが

荒井―洗ひにかけていふ

合ふいたる—合せ吹いたるか

しつたん—七反にかく

(二)藤内だんじり出端

嵐　三右衛門

二上リ藤内次郎殿はいの、笛ふきのややくで紫竹漢竹の、やつこのほこりをさ、さつ〳〵とも拂うての、とうらいの〳〵笛人の物はとらいの我物はやらいのと、合ふいたるはさつても吹いた笛吹と、どつとほめて通した、だんじり打てはやした、だんじり打つたみさいな、藤内三郎殿は小鼓の名人であらうの、胴にかゞ皮くれ紅の、調緒をんどりかけにかけさせ、ちょつちちふつほ〳〵、たつほょつたつた〳〵〳〵、合うつたるは、さつても打つた小鼓と、わつとほめて通した、だんじり打つた見さいな、たんじりうつた見さいな、藤内四郎殿はいの、太鼓の役でしつたんに、しつたん〳〵〳〵しつたんつくる御百姓、明年は八たんぢや、三明年は十六たん〳〵丹波の國の御百姓と、合打たるは百瀬上の町下の町とつとほめて通した、藤内五郎どのはいな、太鼓打の役で大まいの太鼓をあそこらもとに置かせて、金のばちを手にもち、つく〳〵〳〵つてん〳〵てれつくには、づんでんどん、てれつく〳〵つょてん〳〵とんからつ、とんとうつぽれた、なるか

㊀福神出端　　嵐　三右衛門

二上りそんもめでたい祝ひ申すよ、ゑびす三ぶ殿と大黒天がどつかとふんだ俵に、中にやよねたちを思ふやうにいれての、戀する人のやしなひ〳〵にょにどつこいさ、にょにどつこいさ、につこり〳〵にこ〳〵ともさ、お笑ひあつたにさ、福の神ぢやよ、悉皆在所の庄屋殿だんべい、ゑびすよい〳〵さぶどのは釣竿をかたげて、烏帽子狩衣しやんとき て、みきに醉うてよろ〳〵、足元はよろ〳〵、よろ〳〵〳〵と船こぎ出て、釣をたるればあら面白や、ひくは〳〵ひいてしやくる所を、つょとあげて見たれば、さてこそでつかいよいおめで鯛ぢやよの、大黒殿はいなよい〳〵寶くらべの白鼠、ちょ吸ひついつ抱きついつ、袋の内はごそ〳〵、打出の小槌に鈴のおと、しやんこ〳〵や〳〵六つ無病息災に、七つ何事ないやうに、八つ家敷を、新地にぐわらりとひろめた、九つ小倉をたつる〳〵、地形をえいや〳〵えい〳〵〳〵とも築きたつる、浪華入江のみつの浦風

古今(こきん)ぶし歌目録

山本歌門
近松勘之介

松の落葉 巻第三 中興當流丹前古今ぶし

目録

名のら計と―名のみばかりとの誤か

しんきとの毒や―との字不用か

月に二十日は云云―「堅田船頭をつまにはいやよ月に二十日は沖に住む」の唄による

く、うしや出しまに行く舟の、名のら計とこがれきて、聲おもしろく拍子どり、沖もしづかにからろの音が、いざや出て見よ、さまぢやござらぬ、磯うつ波よ、あたゞしんきやしんきとの毒や、月に二十日は沖にすむ、つまを持つたも名ばかりと、心一つにあきらめて、ゆけば怨みも茜さす、松の葉ごしに影こぼす、初鶯の鳴く音あどなやしほらしと、見るにつけ聞くにつけ、いづれ思ひのあくた川、深き願ひをかけまくも、神の恵みは男山、守らせ給へとふし拜み、月のおぼろの黄昏に、桂の里につき給ふ、色となさけの世なりけり、うき世なりける戀路やと、なづむこの道ばかりなり

浄留理　終

本の、生れいでにししるしには、いかなる五障三じゆも、一念彌陀の御誓願、何歎くらん只たのめ、なにはの事のよしあしも、つまぐる珠數の數とりて、とり〴〵さぞや噂せん、あれ御覽ぜよ行くさきに、はや横雲の立ち渡り、あけがた近き玉鉾の、早むる足もよわ〳〵と、堤づたひの忍草、あけばうき身のすてどころ、さらし繩手につきにけり

㊹子の日の松　　同　人　作

枕もとらず帶とかず、夢もむすばぬ春の夜の、名たてがましやふたり寢の、にくや烏の告げわたり、宵の島田をそのまゝに、置手拭旅姿、杖よわらづよ菅の笠、打ちつれ立て行くみちの、淸水ながるゝいけだ川、あだと實との水筋は、二つにわれて片瀨川、浪より浪にうつる瀨の、手水とる手に影みれば、寢ぬにほつるゝ黑髮の、しどけないやらわけもなや、化粧せぬ身は我ながら、見るもうるさく思へども、さすが女の雛形や、染めてゐがいて隈取りて、きせばや君がためにとて、さらす細布さら〳〵と、さゝれ女波がよせてきて、岸の小草にア、〳〵ぬれかゝり、夜晝わかぬ契ぞや、われはまろねに夢もな

かなはぬ時の神たゝき―諺
ぐわちな―野暮な氣のきかぬ
ざいしよう―在所
げしん―下心

きものを、いかなればわれ〳〵は、たま〳〵人と生れきて、ためしすくなき川竹の、流れに沈む身のさいご、つまはわれ故二親の、氣に背きにし故にこそ、たれにか負けも劣るべき、智慧も器量も身代も、皆泡雪と消えうせて、かはせし言のかはるをば、かはらぬやうにとさきの世と、さきて逢ふやら逢はぬやら、どうやらかうやら知らねども、いとし可愛の餘りには、かなはぬ時の神たゝき、そもまあわしが氏神は、どうしたぐわちな神さまぞ、京の吉田の神帳に、入つた神かや入らぬのか、わけも情もわきまへず、やぼ金神かうづじんか、正五九月の月々に、うぶすな殿の緣日と、御酒たてまつる年毎に、神事といへば大切に、ざいしようにいやんす母さまも、いはひ清めてねんごろに、わしも廓の內ながら、心ばかりの手向をば、どう受けさんした事ぢややら、げしんの悪い神さまや、かくなるやうな御まもり、さりとはつらやどうよくや、とても此世は此通り、せめて未來はちがひなく、夫婦一所に極樂へ、それも叶はぬものならば、たとへ奈落の底までも、ふたり手に手を取り組みて、離れぬやうにとかけまくも、かたじけなしや日の

無常の嵐―名優嵐三右衛門の死をいふ

人間のめ―人間の目にの誤か

とこあてん―押合ふといふより心太とつゞけて所にかけたり

是非なけれ―前章よりつゞきたる一句なりかれ見―かれを見の誤か

ば、花の都におなじみ男、戀のなさけのやまとやなりと、人もゆひしが其名もともに、つひに無常の嵐と消えて、夢かうつゝか身のうへの、ほまれはつかにからくり的、おやまが鬼にうらがへり、鬼が佛に南無阿彌陀、なむあみだ佛うたねぶつ(歌念佛)さるほどに世の中の人間のめかの姿を見せんとて、花開いてしめすまさにしんの知識たり、そのかみは鷲の御山に法の道、今はしげんの中にたゞよふアヽあさましや此身はさて沖こぐ舟のかぢを絶え、いつか到らん涅槃の岸、心の綱にまつはれて、色にひかれ香に迷ひ、なさけの竹の枝しげき、鐘のひゞきかりんちりゝん〳〵と音そふる楊弓齒醫者辻角力、おし合ひおしあひ行きかよふ、こゝ繁昌のところてん、夏すぎ秋はぎをんまち、花をがさりし踊子の、しくみ踊はすみだ川、これもあたらしふねへ

⑬萬屋助六道行　都太夫一中

是非なけれ、佛ももとは凡夫にて、かの耶輸陀羅女の妹背中、ぬる夜さまも悋氣の品も、今の衆生にかはらめや、かれ見これを聞くときは、戀も菩提もひきわけて、道は二筋な

めでたいこく―大黒と大國をかねて加賀につゞけたり
夏なき年―拾遺、惠慶「松蔭の岩井の水をむすびあげて夏なき年と思ひけるかな」
ぽんと―先斗町
水ちや―水ちややの衍か

たいこくの加賀掾サァ札めせとたきつくる、羽釜のたぎりりん〳〵、しやんと結びし胸高帶、乘物のでかご所せき、紫帽子御所かづき、思ひ〳〵のだて姿、女中がちなる物見なり、さて又涼の夕げしき、神のみたらし掬ぶ手に、夏なき年と思ひ川、水にかはづの聲たてゝ、的矢のかゞり打ちけぶり、かなたこなた燈火の、やゝ見えそめつゝ程もなく、東石垣西はまた、ぽんとにつゞく石垣町の、軒にあらそふ釣行燈、上は三條橋の下、しも松原のこなたまで、流れにつゞく水ちやは、曇らぬ空の星月夜、天の川原もかくやらん、治まる御代の太平記、あるひは平家物語つれ〴〵草辻談義、辻能をかしく拍子どり

謠 加茂の山波みたらしかげ〳〵うつりうつろふ緣の袖を水にひたしてすゞしむる〳〵、神はうけずや色ざいもん

祭文 祓ひきよめ奉るの、色のさかりはあづまなる八百屋のむすめお七こそ、戀路の闇のくらがりに、由なきことを仕出して、つみは死罪にきはまりて、すぐに引きだすあはれさよ、これも戀路の世のうはさ、歌につくりて讀賣の、手拍子そろふ笠のうち、よい〳〵〳〵あさ日さすまもそりや梅の雪、きえて殘りしその名をとへ





八雲たつてふ神—祇園は素盞鳴尊を祭るよりいふ

すしに—粋に

はやくも—早雲座、早くも

くめのじやうるり—龜屋久米之丞座を淨瑠璃につゞけたり

にくし、ねたましねたし口をしと、物ぐるほしくけしからぬ、心に曇る涙の雨、はんらはら〳〵〳〵〳〵、はら〳〵〳〵〳〵粟津が原、あはずといへどそもやわれ、怨みをあだになすべきか、南無や大悲觀世音、あはさせたべと伏し拜む、只ひとすぢの思ひには、射る矢もたゞん石山の、み寺にこそはつきにけれ

⑫四條河原涼八景　　同人作

春すぎて青葉の梢すゞしげに、繁る木の間の花うつぎ、夏のながめも異國に、似るべくもなき九重の、京の水際立ちつゞく、四條川原のにぎはひは、八雲たつてふ御歌の、神のみ氏子家富みて、大きに和ぐ秋津洲の、大和大路や大和橋、一むら竹のしのゝめも、やや明けわたす槇の戸の、音羽の山にこだまして、ひゞく芝居の朝太鼓、あかねさす日の赤前垂、すしにでたちし賤の女が、顏に會釋し、のう申し札めせよい場棧敷でも取てあげましよう、羽織もお笠も杖もあづかりて、御茶はあとから、あれ申し入りははやくもはじまりおあし千ぐわん萬太夫、年をかさねて繁昌の、龜屋は久米之じやうるりは、めで

の鳥かや恨めしと、厭ひし廓忍び出、笠ふかぐ〵と身をやつす、でたちまばゆき春の日の、長い刀にこしまきばをり、あだし男の五つ紋、付けし袂のうちとけて、そばで身じまひ相湯風呂、血文誓文起請文、あらゆる魂膽つくしたる、戀しき男はありあけの、烏の鳴かぬ日はあれど、一度あはざる事はなし、かくまで深き思ひ川、淵は瀬となる川社、禰宜のやうなる名をつきし、式部とやらいふ女房と、石山寺にゐつゞけの、石には腹を立てさせて、ふたりにこ〱笑ひ草、もゆるほむらのくら〱と、歸る燕や飛ぶ雲雀、ひらひら比良のがだけ見れば、花のさかりも白雪の、まだ谷々にきえ殘り、解けもやらざる我思ひ、いつの月日にあひ馴れそめて、ゆかしなつかし忘れもやらず、人目思はでそひねの枕、長き日かげに膳所のまちすぢ、すぎ菜つむ野邊の若草露わけて、褄ももすそもしつぽりと、ぬれしをれつゝ引く網の、えいさら〱〱〱〱、えいさらさ、さらさらさつと漕ぐ舟の、大津の浦は七浦、なん〱〱〱なあゝ七うら、なん〱なあ七浦、うらみの數もあだ人の、心の底の二重帶、今はさながら染色の、紫といふ名も

のか無きものか、思ひしらせん、さりとては今は打たではかなはじと、する〳〵と走りより、さん〴〵に打散らし、立ちのかせ給ひしが、中にて忽ち姿を變じ、思へば〳〵腹だちや、人のねたみの深きとて、うきねに泣かせ給ふとも、中々思ひはとまるまじ、我身は獄屋におしこめられ、葉末の露とや消えもやせん、御身は君といやましに、起きふし小夜のねざめにも、わらはが身の上そしりつゝ、とや有りかくやなりはつると、昔語に成るならば、猶も思ひはますかどみ、其面影のつらにくやと、又する〳〵とはしりより、何といふとも命を取らではかなはじと、二打ち三打ちてう〳〵と、打ちて瞋恚のほむらは身をこがす、思ひしらずや思ひ知れ、怨めしの浮世やな、あゝ怨めしの浮世やな、思ひ知らせん待ちたまへと、いふ聲ばかり有明の、月にまぎれて失せにけり、かの藤壺の怨靈おそろしきとも、中々申すばかりはなかりけり

大州―奥州の借字なり

(十一)石山寺契情大州道行　加賀掾

うきおもひ胸にたく火の柴屋町、よしみのおろせとやかくと、心を添へてくれ竹の、籠

うきなれば—うちなればの誤か

しんなばんに云云—身は萬に轉ずともか

まで現れきたりたり、弘徽殿きこしめし、あゝ淺ましや嫉妬のねたみは人にこそよれ、互におしもおされもせぬ御身にて、藤壺の女御にはさりとはにやひ申さぬなり、ことさら御身もみづからも、中宮后の宮にもあらばこそ、女御の數は多けれど、わきてたれとは夕まぐれ、おうそれながら我君をつまや夫と思ひ給ふはおろかなり、あらあさましの御心根や、はや／＼歸らせ給ふべし、藤壺いよ／＼腹を立て、いやいかに弘徽殿御身の命をたすけ置き、君に契をむすばせて、榮華の花をさかせつゝ、わらはは葎の宿に只ひとり、弱る蟲のねもろともに、泣きあかさせんと思ふかや、たのしみ盡きて悲みきたるは只今ぞや、いかに／＼とのたまへば、弘徽殿きこしめし、仰せまでもさむらはず、世は皆夢のうきなれば、あすをば誰もたのまぬものを、おろかの人のいひごとや、藤壺かさねて如夢幻泡とおもへども、夢のうちにも苦樂ある、おことは凡夫の身をもちて、口と心は替りつゝ、悔み給ふと叶ふまじ、弘徽殿おしかへし、しんなばんに轉ずるとも本來一物なき時は、何をか留めて悔むべし、藤壺いよ／＼腹を立て、それ人の一念はあるも

そのを—園生の訛
色いでぬべし—色にいでぬべしの誤か

かやうに申せば春の夜の、長物語よしなやな、心づくしにましまさん、お休みあれやまれ人と、かざす扇の手もたゆく、おもしろかりける次第也

⊕藤壺弘徽殿うはなり打

武江　虎屋榮閑

かゝる所に不思議やな、いとなまめいたる青女房の、其樣けしからぬ風情にて、妻戸の脇にたゝずみ給ふは、いかなる人にてましますぞや、そのとき答へてこはおろかなる問ひごとかな、人の怨みを受けながら、名のらずとても今ははや、そのをに植ゑし紅の、もれても色いでぬべし、弘徽殿胸うちさわぎ、はつとおぼしめされしが、心をしづめてなだやかに、げにげに名のらせ給はずとも、大方は推量申してさふらふなり、さりながら人の怨みをうけながらとは、拗みづからには何たる怨みのあるやらん、身にはおぼえはない物を、のうおぼえ無きとはおろかなり、ありしむかしの雲のうへ、共にながめし月影の、うつればかはる飛鳥川、花むらさきの藤壺を、追ひ出さるゝは誰ゆゑぞ、あゝあさましや蓬生に、ひとりこがるゝうき身の程、思ひしらせんそのために、藤壺の怨靈是

て遙なるじゆどうのせいゐん、ひやうぶつといゐるゐ異形の力わざ、ねてもさめてもたしなみしに、只いたづらに老の身の、少しよわりて候へど、いまだ心は春駒の、勇むにつけてをりふしは、よき便ともまかりなる、御覽候へ此あたり、浪華の浦の草の原、しやうちんけいぎよく篠竹の小笹しげれば、晝となく霧にこがくれ、雨ののち山賊夜盗のしれものら、高荷をおとし里がよひの下女やはしたに至るまで、うち剝ぎ取られ泣きさけぶ、其聲耳にひまもなし、さやうの時には老人も、例の長刀おつとつて、爰をば我にまかせよと呼ばはりかくれば、げにはまた一度はさもなき時も有り、いや〳〵支證なき我が身のうへ、にやはぬ老や老女のみ、さこそをかしとおぼされん、さりながら佛さへ彌陀の利劍や愛染な方便の弓に矢をはげ、多聞な矛をよこたへて、惡魔を降伏災難の拂ひ給ふと聞くものを、されば愛著慈悲心な達多が五逆にすぐれつゝ、方便の殺生は、菩薩の六度にまさるとなり、これを見かれを聞きつたへたを、是非しらぬ身のゆくへ、迷ふも悟るも心ぞや、されば心の師とはなれ、心を師とはせざれとの、古き詞ぞまことなれ

いるゐいぎやう―射るを異類にかく

高荷をおとし―馬につけたる荷をおとし奪ふ也

にやはぬ―似合はぬの訛

達多―提婆達多

六度―布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つを以て菩薩の衆生を濟度するをいふ

もゝ色—桃、百

まうき—老驥の誤か

しつせきのへいふ—七尺の屏風

て一夜はこい淺黄、染めいれ鹿子しめよせて、いく夜かさねし手まくらに、野邊のをすすきほに出て、打ちだし鹿子やしぼ鹿子、しくものもなき朧ぞめ、うつぶし色の御所ぞめは、皆おもはくの歌の文字、ちらし小紋地浮世ぞめ、しやむろから染いろ〳〵の、ちぢの思ひやもゝ色に、深き心をそめ入れて、君がはだへの山吹や、そめ紅梅は足利の、あづまのきぬに劣らじと、末つむ花や山藍の、ふり出そむる雲の袖、戀のそめ衣たつた姫、手ぞめの錦色ふかく、聲あやをなし染めたりしは、おもしろかりける次第なり

㊈現在熊坂

武江　薩摩外記

さすが昔はものゝふの、ふと浪々の身となりて、まうきの千里を心がけ、きかうのいつこをまちけれど、時にあはねば是非もなく、此あしぬまに朽ちはつる、老木の柳今ははや、氣力も弱ると云ひながら、さすが昔は唐土の項羽が早業わが物にて、しつせきのへいふをもいまだ高しと思はず、打物とつては子房が術一巻の書をつくしたり、するれんなまたふひかみち、驪龍領下の玉をも取り、弓は猶養由が昔をしのぶ弓勢の、弦を鳴らし

からかき―唐柿
けんぼ―吉岡憲房の染め出しゝよりいふ

明面目ほどこして、御前をこそ立ちにけり　漢家本朝にかゝる相人ありがたし、貴賤上下おしなめて、感ぜぬものはなかりけり

㈥染色盡　　　武江　土佐少掾

まづ初春のそめいろに咲くや花いろ、花に鳴く鶯染の聲あけて、人に春をやゆづり染、風にしなへてたよ〳〵と、めした姿の柳ぞめ、戀を煤竹ふぢ鼠、袂にのこる香染の、うつりやさつとちらし紋、染めしとの茶のきそはじめ、わがきがら茶はかはらねど、人の心のふたへ染、大和にあらぬからかきや、朱をうばふと名をたてゝ、もろこし人はそねめども、かの一本のはつゆかり、けんぼ黒茶に浪華江のよし吉岡に紅ひわだ、ほさぬ袖だにあるものを、戀に朽葉や身はされがきの、あはぬえにしは薄柿や、いつ紺瑠璃の卵色、そらにこがるゝもみぢばの、べにひわ鹿子ゆひ立つる、戀をする身の袖の露、しぼり千草のつまごめも、寝よげに見ゆる木賊色、わがたましひもあくがれて、ゆかしき空にとび色や、桔梗玉蟲まがひ染、うこんきうこん紅うこん、水色淺黄あさくとも、せめ





はつこ―八講

給へはて―給へとての術か

寺の觀世音、筑紫に彦山、出雲の國に大社、杵築の明神伯耆に大山、丹後に成相切戸の文珠、近江の國に聞えたる日吉山王二十一社、お多賀白髭比良のはつこ、湖水にあらはれ給ひしは、竹生島の辨天なり、美濃國には南宮高山劍の權現、越中にくりから不動明王なり、伊豆に三島箱根は二社の大權現、本地は文珠師利菩薩、富士は淺間大菩薩、遠江の國には秋葉駒形濱名の明神、三河に入つては寶來寺、峯の藥師は十二神、尾張の國には一の宮二の宮、第三にあたつては八劍熱田の大明神、惣じて日本六十餘州三千七百餘社なり、天にあつては日月星辰二十八宿、大地の底におはします堅牢地神にいたるまで、こと〴〵く勸請おろし奉る、たとひ定業かぎりの命なりとも、今一どよみがへらせてたび給へはて、せめかけ〳〵「いのりけり、佛神感應したまひけん、天下俄に震動して、御廟二つにさつとわれ、女御忽ちよみがへらせ、君はいづくにましますぞ、君は〳〵との給へば、御門夢ともわきまへず、のうこは誠かと思はず知らず抱きつき、是は〳〵とばかりにて、三大臣晴明にとりつき、おゝつかまつゝたり〳〵と、御よろこび限なし、晴

つかれ—わかれの誤なるべし

おうそれ—恐れ

なじみの君とわが、つかれの袖をぬれてほす、山路の菊の露のまも、忘られればこそ中々に、思ひ出さんやうもなし、あら怨めしの我身やと、倒れふしてぞ泣き給ふ

㊆晴明神おろし

虎屋喜元

其時晴明する〳〵と罷り出でおうそれおほきことにて候へども、それがしが神變にて弘徽殿を再びよみがへらせ奉らば、御修行おぼしめしとゞまらせ給はれと、憚りなうこそ申しける、謹上再拜〳〵うやまつて申し奉る、上は梵天帝釋四大天王閻魔法王五道の冥官、下界の地には伊勢は神明天照皇大神宮、雨の宮風の宮月よみ日よみ天の岩戸は大日如來、淺熊嶽にはふく一まん虚空藏、王城の鎭守には、稻荷祇園に加茂春日、貴舟は五社の大明神、鞍馬山には多聞天、高きお山は愛宕山、大權現男山正八幡大菩薩、松の尾平野梅の宮、伏見に一こん五香の宮、大和に葛城金峯山、塔の峯には大織冠、龍田は木花開耶姫、熊野は三つの御山なり、神功皇后、那智は千手觀音なり、津の國にいたつては天王寺に聖徳太子、住吉四社の大明神、四國の地には讚岐に金毘羅同じく志度

つま—褄、妻
わかい—わらひの誤か
せうしかくれば—障子あくればの誤か
かぞいろ—父母

ほひは、あはれにも又ぬれぎぬの、つましならずはかくせじと、一火すゑてはたはむれの、よそめの有らばいかにせん、今火をとりて前三や、うしろ七つはとかじ下ひもと、たがひにわかいこなさんとわしが思ひの塵つもる、山を見さんせこなたへと、せうしかくれば富士の雪

㈥樽屋おせん狂女跡　同人作

狂ふらんあと年のよはひは二八ばかりの若き人、世にはたぐひも夏山の、しげみが陰にこがくれし、君のゆくへはいづくぞや、しろしめされてさふらはゞ、教へてたべや人々と、聲をあげてぞ泣き給ふ、手ををりて悲しきことをかぞいろに、過ぎおくれつゝ數ならぬ、うき身のよるべなみだ川、袖のしがらみひまなきに、思ひかさなる年月の、千代に八千代の玉つばき、變らぬ色を頼みつゝ、かけし情も在原の、昔男か光る君、かをる中將夕ぎりより、猶まさとしの戀しやと、聲を上げてぞなげかるゝ、雨をしのぐやみのゝ國、笠のしづくも垂井の宿、泪ながらに立ち出て、はじめて旅をしな川に、しばし

昆布や、いふかいはぬかかもじこぶ、心にこめて結び昆布、しのぶむちつけみちのくの、つらき人をば松前昆布とは思へども、又わきかへる心の水、酢に入りしほにおぼるゝも、前世定まる宿緣なり、瞋恚の海を泳ぎこし、いづくまでもつきまとひ、くるりくる〳〵巻昆布や、くひさきひきさき刻昆布、思ひを晴らさで置くべきかと、いふ聲ばかりは火鉢の底にひゞき渡つて、ほむら思ひは猛火ともえ、五德てつきう金火箸、思へばこのかね怨めしやと、又あぶりこにぞ入りにけり

松前—待つまいにかく

㊄灸するゑそが　同人作

いつよりかさゝばかりにて朝夕の、かれひもうすき面やせに、身のいたづらやあだ人の、折しも頃は如月や、二日は灸によき日ぞと、暦ひらけばなる日とや、なるとならずと思ひ立つ、卯腹辰腿寅背中といひて笑み顏の、千代もかはらぬかはらけに、さもいつくしきさしも草、みよなら袖をかざしのうちかたと、ひねり〳〵て玉づさを、二つの星と點おろし、ゆくへ知らずに立つけぶり、あつうやおぼしめすらんと、わけていたはるよそ

さゝ—酒

なる日—成就日

卯腹云々—灸をすうる日と所とをいへる諺

油はこれと—油はあれどの誤か

ほんに—穂にかく

みづから—昆布にて製したる食物の名

下寺町になく烏、竹林寺の鐘のこゑ、油はこれととうしんなし、何の葉ぢややら秋風の、雨戸々々におとすなり、心細さようらめしさ、それほどゑひはあるまいに、申し〳〵とおこすれど、只くちなしと物いはず、にくい事ぢやと思へども、氣に入りたいが因果なり

㊂文ことば　　同人作

まことに文はねやの友、いよし御見と書いたるは、ほだしの種か花すゝき、ほんに誓文わいとしさに、いくよの夢を結び文、かたさまるる梅よりと、おもひまゐらせそろべくと、わけの盃いろめいて、わきていづみのおもはくは、只あひましてく〳〵、またのえにしをまつかしく

㊃昆布道成寺　　同人作

みづからと申すはそもたれぢや、そなたのためにも姉が小路のこぶぢや、何故にござんした、何故とはきよくもなや、うらみたら〳〵鱈汁の、つまの心のあだしさに、わらははだしに使はれて、きも移香のこせうの粉、はつとなつみと聞くからに、朝夕胸をやき

あさけ―朝開

㈠うつぼぶね　　半太夫ぶし

松帆の浦のうつぼ舟、身をなきものに思ひさへ、命もがなと慕ふまことに大ぬさの、ちぢの社のゆふだすき、かけてもつれしさゝめにも、どうで女房にや持ちやさんすまい、わしが勤めのまゝならぬ、よひ〲ごとの亂髮、空おそろしや氣にそまぬ、殿に添ひねの枕にも、鳥も鳴けかし鐘もなれ、嬉ししのゝめ、あさけに憂きを忘するゝその風情、こはい夢みし心なり、かうしたつらい勤めにも、指折りをりつゝかたさまに、逢ふがうれしゆてうかく〲と、どうした事の緣ぢややら、忘るゝひまも無いわいな、深き思ひは床の海、波はこすとも末の松、かはらぬ色をたのむ身、君とむすびし下紐を、ひとりは解かじ玉の緒の、たえぬ契はありともと、沈みはてにし敷妙に、ふたりが袖をやしほるらん

㈡竹林寺　　同人作

白無垢にひとへ帯した夜の雪、いつそのく氣か聞きたいの、とすればかくすそのうちに、

松の落葉　巻第二　中興當流淨瑠璃

目録

なみだ立ち騷ぐ―なみ立ち騷ぐの誤なるべし

らくる事のありはらや、昔を今になぞらへて、思ひの床にふし沈む

㊂うば玉

あふ事のたえてし無くはなか〳〵に、戀ふる心のなになれや、知らでだにこそ年をへて、逢ひ見しのちこそ戀はまさりけり、猶あやにくの秋の夜や、それとは知らでうば玉の、夜半のけしきも明けそめて、わかれし床のうき枕、わが身一つの思ひしに、涙さへこそとどまらで、淵は瀨となるに飛鳥川、ふかき情の袖ふれし、身をしる雨は降らねども、心のそらに行きかよふ、人しれず猶あふ事の、はるかなる身の物思ひ、うき身をたれか慰めん、思ひしらずもとはぬ身の、戀は盡きせぬ物おもひ、心つくしの關にこそあれ

㊃しのぶ戀

忍ぶ心は思ひにまけて、浮名忽ち立つともよしや大事かさ、流れ絶えせぬ涙の川の、なみだ立騷ぐ我心、いな物〳〵になる鐘の音、逢ふに別るゝ命にて、不首尾にかへるあやにくや

松の落葉首卷　終

松としきかばの誤なるべし

忘るなよ—伊勢物語の歌、下句「空行く月のめぐり逢ふまで」

むさびし—四字無用なるべし

しらかは今かへり　またばこんとの言の葉をいひがひなし、いや世を去りて松風も村雨も袖のみぬれて由なやな、身にも及ばぬ戀ゆゑに、かとりの衣や立烏帽子、空炷の香は殘れども、おもかげは見えもせず、夢ともなしやうつゝとも、松の木蔭にたゝずみて、袖は涙にひたしけれ

㈡ わかれのかね

忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月ともろともに、めぐり逢瀬の松島や、雄島の蜑のぬれ衣、いかにほすとも蜑小舟、こがれこがるゝ思ひねに、床はづかしきけさの夢、さめては元の涙爭ふ雲間より、それとしもなきほとゝぎす、只一聲を聞くよりも、憂きを問ふかと疑はれ、夏もはやなかば過ぎ行く、いよ初秋の蟲の聲々、おさびし、あはれ催す小田守の、庵さびしきねやの內、住むかひもなき世の中に、わかれの鐘を清水の、あくれば大悲觀世音、誓をたのみ今一度、たがひに見えつみえられつ、かはす詞もなかりせば、とても此身はむもれ木の、くちき櫻がさね、さりとてはいつくる春に、我花のひ

ゆきさまー行平樣
松としらかはー

(廿)櫻づくし　　同　半太夫ぶし

年のよはひは十三四五なるちご櫻、みめは楊貴妃桐ヶ谷、目元にこぼるゝ鹽竈や、召した小袖はなに〳〵ぞ、淺黃櫻に樺櫻、もみ紅梅の緋櫻を、めしかへ〳〵なさるゝ時は、しづが心はさみせんの、ほそりて三の糸櫻、まつ夜は君がおそざくら、忍ぶに吠ゆな犬櫻、後世は少しも願ひはせねど、墨染櫻普賢象、かの敦盛にうき世をすてし熊谷櫻、奈良の都の八重一重、京九重はひろしといへど、又と有るまいあの君を、花のしんに立ておいて、我下草とぞ成りにける

小うた

(一)松風

かたみこそ今はあだなれ是なくば、忘るゝ隙もありなんと、あらなつかしのゆきさまや、馴れし其夜のいひかはし、ふたりを召して立ちわかれ、今はあだしばし別るゝとも、松と

ていと―帝都か

よはの月―夜半を弱にかく

は、靡かぬ草木はなけれども、此道一つは稲舟の、とても靡かぬ我心、引き見させたまはんとや、あらはづかしの御ことや、はや〳〵歸らせ給ふべし、君はあきれて立ち給ふが、よし〳〵此身はていとよりおち人の身となれば、女にも見おとされ、かゝるつれなき有樣ぞや、我もり國が手となつて、かゝる不義をいひ出し、おもてを見られんはづかしさよ、さりとてはあやにくにおぼし切られぬ戀路のほど、歸らんとするに引かるゝはうしろがみの、行きてはかへり歸りては、又ゆきに冷えゆく玉體の、いたはしかりける次第也、みさをの前はさしのぞき、御いとほしくや思ひけん、覺えず障子をさつとあけ、のういかに我君樣春の夜風はお毒ぞや、御惱となれば物憂きに、こなたへ入らせ給へとて、御手を取つて内に入る、御手もさすがよはの月、雲にかくるゝ風情にて、しとねの内に入り給ひ、末は女御后にも立て給はんとの御誓、わりなく通はせ給ふにぞ、後宇多の女御と申せしは、みさをの前の御事なり、比翼連理の御契、心のうちも下ひもしつほと解けたる御なか〳〵、貴賤上下おしなべて、皆感ぜぬものこそなかりけれ

いもと—いもが の誤か

いなせ—否應

神のいがき云々—伊勢物語「ちはやふる神のいがきも越えぬべし大宮人の見まくほしさに」

に砕くるばかりにて、思ひにばうしてましますが、雪をまろめてひとつかね、投げつけ給へばみさをの前、あゝよしなやたれなるらんと、袂にかゝる雪うちはらひ〳〵、さはりさはらぬ返答に、天皇いよ〳〵あこがれさせ給ひつゝ、いやよそ〳〵しきみさをの前、はづかしながら朕すでにいもと姿をかいま見て、たち迷ひぬる雲の足、うかれてこれまできたりたり、せめてはそれかと白妙の、雪にはあらで消えはてん、我玉の緒もなよ竹の、ひとよばかりは名もたゝじ、とけて語らんわが思ひ、はらさせよかしとのたまへば、みさをの前はうけ給はり、しばらくいなせなかりしが、やゝあつて申すやう、あら勿體なの御事や、げにや戀路の習ひにて、高きいやしき限らねど、さしてそれともあやめ草、あやめも知らぬわれゆゑに、君の御名をたてんこと、さりとてはおそろしゝ、許させ給へと申しつゝ、さしうつぶいて音もせず、君はいよ〳〵堪へかねさせ給ひ、神のいがきをこえぬるも、戀路のならひ咎めなし、うら若き初草の、ねよげに見ゆる身をもちて、たが手枕のむつごとぞ、語り給へと有りければ、姫は此由聞き給ひ、まことに君の宣旨に

く音の雞頭花、つばなまじりの菫草、君がすさみの手鞠の花よ、ひいふうみいよこゝのへの、とんと落ちても名はたゞじ、深き心の底意をば、人にもらすな水あふひ、池に澤潟眞孤ぐさ、我は野にさくあだ花よ、折らばとく折れ散らぬまに、まれのみゆきにいざさらば、御酒をそなへてとり〴〵に、叡慮をすゞしめたてまつる

㊈みさをのまへ忍の段　　同　半太夫ぶし

給ひけり、わびしき中にも世の中の、戀路の色にてとゞめたり、うつゝなくも天皇は、みさをの前が姿をば、御覽ぜしよりあけくれに、心をつくさせ給ひつゝ、御母后の御前をば忍び出させたまひつゝ、姫のねやに忍び入り、こなたにたゞずみおはせしが、障子にうつる灯火の、かげのうちより見給へば、空炷のしめやかにけぶり消え行く折ふしに、みさをの前は障子をあけて見給ふに、雪にきらめく春の月、しくものもなきけしきやと、につこと笑ひしそのふぜい、巫山の神女が雲となり、契りのこせし面影や、李夫人がいにしへ反魂香にうつろひしも、物のかずにはあるまじと、叡慮ひとしほなやましく、千々

かほよ花｜杜若

むろそんれはぶし一ころ二ふし三蔵やいふたりつん〳〵つれだち、さあ〳〵行くべい〳〵、くつわの鈴がりん〳〵から〳〵、りんから〳〵りん〳〵から〳〵、りんから〳〵、はいどう〳〵はいはいはい〳〵、はいどうし、あつぱれ御馬か上手と〳〵がのつたか乗つたぞ、さて〳〵見事え、しやみに引かるゝ駒のいさみや

(十九)平あんじやう草花づくし　同　半太夫ぶし

あらいつくしの草のかず〳〵、色は山吹藤の花、黄菊紅菊櫻草、紫苑りんだう女郎花、思ひの色は岩つゝじ、かものお山にさく花は、だんのつゝじとしろつゝじ、たが手にふれてもちつゝじ、桔梗芍藥われもかう、忍び〳〵にくる〳〵風車、姿妙なるそのふぜい、早百合にゆりかけ〳〵さつとゆりかけ姫百合に、いつか添寢の床夏や、名もゆかしきは美人草、かほよ花こそひとしほに、色も匂ひも深見草、おく白露の玉椿、身をせばめつゝ影やどす、月見草こそやさしけれ、げにやまことに有明の、つれなく見えし別れより、ふたりぬる夜の悲しきは、おのが翼はかはせども、思ひしらずや心せで、まだき鳴

四辯—法無碍辯、義無碍辯、辭無碍辨、樂説無碍辯
八音—極好音、柔輭音、和適音、尊慧音、不女音、不誤音、深遠音、不竭音
さへだ—たけだの誤か
くわじよ—冠者か

原の鑑として、其身を照らさば、末代に武略のほまれを得たまはんと、四辯八音よどみなく語り給へば、老若一度にあつとぞ感じける

㊆櫻姫ごばん人形　　同　半太夫ぶし

まづ東は春に似て、大庾嶺の梅の花、むかしながらの山櫻、伏見さへだの花までも、木木の梢に咲きみだれ、鶸こがら鶯の、軒端の梅に羽をやすめ、音を出しかねたる所には、けい〳〵ほろゝの雉の聲、けいならばけいとはなくして、何ぞやのちのほろゝの聲、いつも春かと見えにけり、南は夏に似て洲濱に池をほらせ、池の其中には蓬萊方丈瀛洲とて、三つの島をぞつかれける、島より陸地へは反橋をかけさせ、橋の其下には浦島太郎が釣のふね、童男くわじよがうつぼ舟、五色の糸にてつながれたり、常樂我淨の風ふけば、獅子のあそびはおもしろや、かゝるめでたきをりなれば いさみゆゝしき御馬の初五十三次にかくれのない男よゝをこめたる竹馬を さて〳〵見事に飾りたて、手綱かいくりしつしつどう〳〵どどんとどつこい どつこいせ 朝の出がけに小室 それはぶし出がけにや朝の〳〵出がけにや小

彼觀音の力にて惡魔をしづめ東夷をうち、今は近江の大山に、正一位明神とあらはれ給ふは有難けれ、其次は田原藤太秀郷、將門をほろぼし、又龍王に頼まれて、三上の蜈蚣を射とめたる、古今無雙の勇士なり、第四番は余吾將軍、戸隱山の下もみぢ、色ある女性にひかれつゝ、無明の酒にゑひふして、鬼一口もしらざりしを、正八幡の擁護にて、夢さめ鬼神を從へたり、さて其次は御先祖源滿仲住吉の御示現にて、多田の大蛇を退治あり、萬民の苦を除き、いま權現とあがめられ、弓矢の神となり給ふ、次に頼光頼信頼義義家惡源太其中に取ても鎭西八郎爲朝は、弓勢は竝びなく、鬼が島までせめしたがへ、數百人とりのりたる大船をくつがへす、高麗唐土もおそれをなし、其姿を繪にうつし、門のまもりになすとかや、其次は九郎御曹子聞かず學ばでおのづから、劍術の妙をえて、七尺の屛風高からず、五丈の堀も廣からず、はかりごとは吳子孫子張子房にもこえつらん、同じくつゞいて武藏坊佐藤次信忠信や、坂田渡邊保昌や、定光季武仲光、かれらは何れも忠ふかく、力早業たぐひなき、めいたい無雙の者共なり、若君をはじめ奉り若殿

浦和―裏にかく

えんり江戸―厭離穢土にかく

第二代―第十二代の誤なるべし

げうの里、又ならびなき大宮と、おもて浦和の瑞籬を、はるかそなたに伏し拝み、むかふをみれば家ごとに、旅人をとむるつとめとて、思ひそまぬも洩らさじと、人手を握る蕨の宿、かくうらめしき世の中も、渡る物から板橋と、えんり江戸をもあとに見て、やう／＼行けば程もなく、五つのさはり淺草の、み寺にこそは著き給ふ、此人々の心のうちあはれなりとも、中々申すばかりはなかりけり

⑯曾我かけ物揃　江戸半太夫ぶし

まづ一番に見えたるは人王第二代景行の第二の御子やまとだけ尊也、端正美妙の御相好、御身の長一丈、御力は無量にまし〳〵て、十六歳の御時、八十梟をさし殺し、又東夷征伐に、駿河の國まで御下向、えびす逆意を企てゝ、枯草に火をはなつ、ほのほ御身にせまりし時、みこと御劍をぬき持て、拂ひ給へば、劍のいきほひ嵐となつて、猛火を忽ち跡へ吹きもどせば、賊徒殘らず亡びけり、今のやいづは爰とかや、尾張熱田の明神とをがまれさせ給ふなり、扨其次は平城の御宇につかへし田村丸、勇力智謀かねそなへ、念

ひろはせ—徒歩することと
こもろ—小室、孤
きえと—きえての誤か
坂坂本—坂の字一字冗か
くまがへ—熊谷
こうの巣—鴻巣に來るをかく

くれて、荒い風にもあてまい君を、ふゞきはげしき道すがら、ひろはせ申すうたてやと、見あげ見おろしかこちけり、とこよの前は御覧じて、こはおろか也、わびぬれば虎ふす野邊をわけきても身をば惜しまじ、只うきは糸ならなくに別路の、そなたこなたへつれぞ布引山、田中の宿のかり枕、敷くやこもろのおき別れ、只ぬぎすてし沓掛や、淺間の山の淺からぬ、思ひのけぶり追分の、風に亂れて消え〳〵きえとむくいの罪もかる井澤、日の夕暮の旅衣うすゐ峠のさがしきに、足をつまだて身をちゞめ、岩間づたひに肝を消し、歩みかねたる坂坂本に、いかでかわれを松井田と、しばしも更にやすらはず、安中すぐれば板ばなの、咲かぬ梢は高崎や、織姫ならぬ身なれども、からす川をばこえぬれど、逢瀬はたえて渚こぐ、蜑の小舟のいざり火も、たきすさめつゝ倉賀野の、夢路はかなき契ぞと、影さへ見ゆる山の井の、淺くは人の思ふとも、わが本性は深谷の水、ながれの箸のさかづきを、汲みくまがへに馴れそめて、忘れもやらずこうの巣や、あはれ由なきたはぶれは、只をけ川と打ちすてゝ、いそぐ心に引かれては、肥馬にも鞭をあ

ゐんり—圓裏か

水所—「水」は「の」の衍か

ゐにし—名にしの誤なるべし

わこく—和國

二ほんぎ—二本木を日本にかく

に、ゐんりの花とうたがはれ、二六時中の鐘のねは、煩惱戀慕の目をさまし、慈悲哀憐のともしびは、貪欲瞋恚の根をたちて、發心菩提の身にきする、かゝるそんゐん水所をも知らせ給はぬさうざうしや、はや〳〵御出候へと、詞にみのる玉かづら、花やかなりし辯舌の、よに面白くぞかたりける

㊄與作二代目　とこよおまん　半太夫ぶし

頼みをかけて住みなれし五智の如來を立ち出て、是や浮世の中やしき、五濁の水と名にたてど、月も宿かる直江の里、いつも行ききは大下の橋、駒もとゞろと踏みならす、音は高田の宿とかや、いざや火宅を今いづみ、ゐにしおはゞと願はしく、おもはん人はわれとわが、心の垢をあら井の里、わこくの本か二ほんぎの宿をも早く板まふく、風の便もとむるかと、思へばつらきせき山や、尙せき餘る泪川、たぎりておつる水上を、なに尋ねけん物思ふ、わが身としれば中々に、恨はあらじ返すとも、雲の衣はひとへにて、頓て跡なく晴れゆけど、心の霧のふかければ、妙光山も見えわかず、おまんなんだにかき

霞の關かの寺ある—誤脫あるにや

まつた—又

朧あけぼの—朧染、曙染

大悲—觀音

もりあげん—とりあげんの誤か

御製にも、霞の關かの寺ある、石の枕ぞ姥が池、秋の景色はかなしくも、無常が原の草のつゆ、消ゆるまもなく立ちさらん、橋場のけぶりあはれにも、なからんものは世の人の、定めなきこそいみじけれ、まつたかしこの一村は、うかれ女つどふ里なれば、浮世の人のたち迷ふ、心の花のいろいろに、おのが姿をしのぶ笠、笠のしづくもこぼれ梅、こりやどうぢや、けさの嵐や夕しぐれ、ぬれてほすまも渚こぐ、あまの小舟のつながれぬ、身は浮草の根をたえて、さそはれ渡るあすか川、ながれの身とてさま〴〵に、品をつくせる色小袖、朧あけぼの加賀染や、墨繪の源氏色紙おり、をり〳〵かはる風俗は、また面白きところなる、さてまた大悲の御寺は、大同元年彌生のころ、かの川夜な〳〵光りつゝ、波もいさごも金色に、只天竺の無熱池も、かくやとばかり疑はし、されば所の漁夫どもの、はじめの程は恐れしが、しだい〳〵に近づきて、見ればまさしく水中に、佛像あらはれましませば、いさもりあげんとゆふしほの、波間をわけて千尋の網、引くや誓の手にもれず、あがらせ給ふ尊像の、利生あらたにましませば、梢の雪もさながら

うし島ー牛島、憂し

てはいさめつゝ、水もらさじと誓ひてし、その移香も殘るや袖、手に手をとりて行くほどに、曾我の里にぞつき給ふ、此人々の心のうち、知るも知らぬもおしなべて、皆感ぜぬ者こそなかりけれ

（十四）としま八けい　　あづま半太夫ぶし

たち出て峯の雲、花やあらん春霞、霞の空もうらゝかに、匂ひも深き梅若の、柳のみどり一しほに、見ます鏡が池の面、木の葉うづもる冬がれの、氷もとけて漣や、みなぎる水の瀨はたえて、今はあさぢのせゝらぎと、名も岸陰の山吹は、覺束なくも咲きわたる、上野の峯の花ざかり、遙にながめ谷中寺、森の木末も茂りあふ、五月あやめに早苗とる、田中の村の夕すゞみ、蚊遣ふすぼる夜もすがら、水雞のたゝく柴の戶は、たがすみ田川すみ濁る、世をうし島といふしきや、烏鵲の橋も今こゝに、うつせる御世は永代の、島々うら／＼のこりなく、はるか東に見えにける、又名にあふ多田の森、牛の御前のみ社も、程ふる軒に月もれて、さびしき夜半の寐覺にも、驛路の鈴の駒形や、かの白川の

れの鐘のこゑ、寂滅爲樂とひゞけども、輪廻の花は散りもせず、ともに火宅の門をいざいづの三島の鹽木とる、浦のけぶりの一むすび、又ふた結びよれてもつれて解けて亂れて靡き大いそ、君をこいその道すがら、さりし夕べの比までも、こゝを通ひて來にけらし、此駒よ〳〵鞭をうたれし怨みをも、今はかたみと思はずやと、くどき給へばさすがげに聞き入れたりし風情にて、かうべをうなだれ耳を伏せ、主の別れを歎きしは、人間物をしらぬなり、たが玉章の箱根山、涙にそみて赤澤山、鎌倉山のやつ〳〵も、かけけおさるゝか足高山、刈藻かくなるふするの床に、石の枕や苔むしろ、ふたりかはさばつらからじ、待つ人もたぬかち路の旅、すゞの篠原まくずが原、小菅蓬生玉かづら、おしわけかき分けしどろもどろに行きなやむ、主なき駒の馬方いやよ、ほくに出てあふ夜もあり〳〵鞠子川、ながれて早きこしかたや、御身とても我とても、花ならば初櫻月ならば十三夜、さかりに足らぬ身をもちて、思ふ人には添ひもせず、かゝる憂きめを見る事よ、これもたれゆゑ紫の、一もとゆひのゆかりぞや、なげき給ふな歎かじと、諫められ

大いそ—逢ふにかく

ほくに—ほかにの衍か

あり〳〵—蹴鞠の掛聲にかく

歎かじ—原本「なげし」とあり今改む

戀は曲者云々―此文句近松の世繼曾我にもあり

しちだ―悉陀の訛

つかせまつかせ〳〵まかせておけろの、さて〳〵なまかせておけろの、さて〳〵有てぢよん〳〵ぢよんぢよろ衆有てぢよん〳〵〳〵ぢよん女郎衆、ぢよんぢよろさんまの槍の手、對の塗笠お先で振れさ〳〵、おさきで〳〵さき〳〵〳〵あと〳〵、あとさき揃へた道中、國は花のお江戸にとんとつついた、はや品川を越えてあづまをさして下りしを、皆感ぜぬ者こそなかりけれ

(十三)參會和曾我道行　江戸半太夫ぶし

戀は曲者皆人の、戀はくせもの皆人の、迷ひの淵や氣の毒の、山より落つるながれの身、うきねの琴のしらべかや、引手あまたに繋けれど、思ひいだすはかのひとり、かたみの駒の口を取り、つま故沈むありさまは、しちだ太子に仕へにし車匿童子が其昔、檀特山の岨づたひ、犍泥駒の諸手綱、もろき涙にくれけるも、それは生きての別れぞや、わが身のうさに比ぶれば、たちも及ばぬ富士の山、裾野の原は草がくれ、露の下にや兄弟の、いつなきがらと聞きなさん、鴫立澤にとぶ鳥も、やよやあはれを知るならば、傳へてく

うはき—上着、浮氣

假の宿心とめそ—新古今、遊女妙「世を厭ふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」

野の、吉野よりなほ上野山、のぼれば下る車坂、かなたこなたを見渡せば、群集の貴賤とり〴〵に、だてを下谷の里とかや、おも白無垢を引きちがへ、うはき〳〵は色々の、模樣もよしやよしなか染、くゆる思ひの數々を、いはで只にや山がすみの間よりほのかにも、見てし人には逢ひ足らぬ、淺黄縮緬茶縮緬、うこん紅樺薄鼠、色ある人に見せばやな、雄島の蜑のぬれ衣、藻鹽かく袖一つまへ、繻子や唐綾白緞子、縫摺箔の幅廣を、ゆかりの色や紫の、ちりめんてぼそ結びさげ、たれ白菅の加賀笠を、まへふか〴〵ときなしつつ、なまめききつる折からに、花のこかげも假の宿、心とめそと吹く嵐、蘭麝のかをりさそひ來て、さりし夕べの手枕を、いとゞ思ひぞ出さるゝ、我も洩らすな洩らさじと、移香ふかくかさねたる、つまの行くへも白糸の、みだれ心や狂ふらん

(十二)上るり御ぜんやりをどり

さみにいさんでひとをどり　ふりやれおふりやれ大鳥毛の振袖　ぎやうれつぼつたてあづまいり　ちと〳〵ちとかちを召されさ、しつかとせ、槍はぢよん〳〵ぢよろ、ぢよんぢよろさんまに持たせろ　まつかせ　持たせろ　ま

行けば、梅澤しぼみ、相摸の國府、小磯大磯平塚や、引地藤澤戸塚の宿、日數かさねて行く程が谷、願ひもやがてかな川の宿にぞつかせ給ひける、とにもかくにもかの親子の人の心のうち、あはれとも中々申すばかりはなかりけり

(十一)おせんものぐるひ　江戸半太夫ぶし

これは扨おきおせんは、いつしか狂女となる神の、とゞろ〳〵と中空に、立ちゐる雲の跡もなく、浮きて漂ふばかりにて、そこともいさや白露の、おきまどふ身はあちが原、まだき色づくわが袖に、たれゆゑ月は宿るぞと、よそになしても問はれなば、深きなげきも淺草の、葉末にむすぶ白玉の、光さやかにすみだ川、たえず流るゝ水の泡、うたかた人はつゝがなく、ありやなしやと聲たてゝ、問へどいはねのまつち山、夕越えくれば庵崎の、いほりかたぶく板びさし、荒れにし後は風あてゝ、ふわふわふわの關ならば、鳥の空音もはかるべし、許さぬものは逢坂の、人目の關を忍ぶが岡、よし不忍の池の面、けにいさぎよき淸水村、弓張月やいるさの山、谷中の木立しげりあひ、花のさかりはみ吉

しぼみ―鹽海

まつち山夕越えくれば―萬葉三「まつち山夕こえゆきて庵崎の隅田川原にひとりかもねん」

荒れにし後は―良經「軒は荒れて月もる不破の板びさし荒れにし後は只秋の風」

谷中―矢にかけていふ

見つけのがう―見附の國府か

みほが崎―三保、見よ

み島―見、三島

ふたご―蓋、二子

いつしき―一色、いつしか

やつどくらん、どうど打つてはさつと引く、潮の滿干の烈しくて、さしでの岩をあら井の里、濱松がえのわかみどり、いつも常磐の色ふかく、池田の宿をみかの原、わきて流るゝ泉川、いつかかたきを見つけのがう、風もをさまる袋井の、長き繩手をたど〳〵と、たどりかねたる世の中に、何かたのみを掛川や、夢も結ばぬ假枕、さよの中山なか〳〵に、かく越ゆべしと思ひきや、名にのみかねてきく川の、色香にめでて立ちとまる、ゆきゝの人は大井川、かく消えわびし露の身は、はやく草葉に岡部の宿、とは思へども、まてしばし怨みの一太刀うつの山、よもとのかげはあらねども、鞠子の宿にさしかかり、手越安部川打ちわたり、はる〴〵こゝにきよ見潟、そらにも關の有るならば、月をとどめてみほが崎、袖師が濱の沖つ波、薩埵山より見わたせば、由井蒲原に打ちつづき、雲にそびゆる富士の山、雪の内より立つけぶり、うへなき思ひにこがるゝは、げにうき島が原なれや、そよ〳〵そよと吹く風に、重ねの衣をきせ川の宿打過ぎて程もなく、あけてみ島や箱根山、そのふたご山是かとよ、畑小田原も跡に見て、いつしき佐川こえ

きたかた―北方、美濃にあり
ぐぜい川―株瀬川を弘誓にかけたり
あはで―阿波手、逢はで
なるみ―成る身、鳴海
ちりう―池鯉鮒、散り
しらすか―知らず、白須賀
かいがん―涯岸か

の用意ある、心の内こそあはれなれ、雞籠の山に響く鐘はや曉をもよほせば、涙たるゐの宿を出で、東にむかへばほの〴〵と、夜はあか坂の朝日影、青野が原にかゞやけば、露はさながら瑠璃の玉、光をますに異ならず、たれもみつやにきたかたや、老を養ふ瀧水の、あるとは聞けどはかなくも、さらぬ別れは怨めしや、名もたのもしきぐぜい川、我我よりもなき人を、渡してたばせ給へやと、深く祈誓をすのまた川、梢の花に鶯の、春雨厭ふか笠縫の、里につゞくやつゞじがさき、色にぞ出づる袖のつゆ、きゝし人には寐覺にも、夢にも更にあはでの森、一つはちすの蓮臺へ、えにし朽ちずば稻葉山、思ひのけぶり晴れてこそ、心淸須の川風は、さもひやゝかに身にしめど、その名ばかりは熱田の宮、あつさを凌ぐ笠寺や、何となるみの捨小舟、よるべいづくにあり松の、花もちりうのみたらしに、波の鼓やうたう坂、弓はなけれど矢矧とは、妹背ぞ只にをかざきや、御油赤坂のながれの君、よしや吉田の人心、おもてうらあるふた川と、皆しらすかの峠より、おきをはるかに眺むれば、渺々として際もなし、かいがんそこも不知火の、筑紫の海に

雨による田簔―古今、貫之「雨により田簔の島を今日ゆけば名にはかくれぬものにぞありける」

所、つまの行末安穏に、かたきを易く打ちおふせ、再び三田のみづがきと、又の歩みを祈誓して、ふりあふのけば入船の、目あてに立つるみあかしの、上のお寺のさいかいし、しやぎりくづでんどゝ、打つや太鼓のねのよさよ、かはす枕のさはりとて、ふたりぬる夜はいとひしに、つらさかへつて有難や、よしあし同じ草なれば、なにはも爰ぞ雨によるる田簔の島をうつされて、あづまながらも名はつく田、萱が軒端も住吉の、藤のたれ葉をつたふ水、流れの末は深川の、潮のよどみはくるくと、巴にめぐるみつ股や、のうのうあれく、あれこそは月の入るさをまつち山、神は大聖歡喜天、いだき合うたる尊體は、妹背むすびの御方便、げに頼もしやたのもしや、かほど濁れる浮世にも、すめばすまるゝすみだ川、早瀬にあかぬ都鳥、いざこと問はん言の葉を、結びなほせば心の糸、戀の港につき給ふ

㊉たるゐのおせん　　あづま半太夫ぶし

おせん親子の人々は、人にそれとは見えじがため、ともをもつれず只二人、ひそかに旅

㊈露の前舟路

同　半太夫ぶし

言の葉を糸で結びてした心、戀といふ字によみならひ、うらみ妬みもつれなさも、あだも情もいつはりも、このむすび目のとけてより、いとしにくしと見もわかぬ、夢もうつゝももと一つ、二つとはなき道すぢも、行くを忍路かへるをば、わかれぢと又よびかへて、あふさきるさに物思ふ、思ひのけぶり横折れて、蘇迷盧よりもなほ高き、わがたらちをの身にかゝより、行きてかへらぬ四方つ國、よすがもいざや五十皿子の、住みこし里をうかれ出で、涙の瀧も高輪の、おちて碎けてちり〳〵に、消えも失せなでうたかたの、あはれつたなやいやはかな、ないそなよいそ磯邊の千鳥、こよひはじめて立つ波の、波のたちるも何故ぞ、かりなる宿に心とめずは浮世もあらじ、人をもしたはじ、松風にきりの絶間の安房上總、船は千艘入らうと萬艘入らうとまゝよさ、あら〳〵あすの命もしらぬ身に、三日さき見つ富士の雪、鹿子斑のよそほひも、誰にか見せんあまさがり、鄙にみゆきもあらばこそ、とはいひながらみ車を、かけて頼むやうし町の、うさにはあらぬ宮

言の葉を云々―戀の字を分析していへり

蘇迷盧―須彌山

ないそなよいそ―鳴くな〳〵

きねがならはし神ごころ—「神はきねがならはし」といふ諺を用ふ、きねは禰宜に同じ

もろこしの云々—正徹「なか〳〵に見ぬ唐土の鳥もなし桐の葉おとせ秋の夜の月」

かすかべ—粕壁

さうか—草加、添ふか

を知らするおとづれの、誰が玉章をかけてくる初雁聲におどろきて、解きわけ衣洗ひほす、賤がつゞれの竿づくみ、夜半に砧をうつの宮、きねがならはし神ごころ、やはらぐ光あきらかに、まことを照らしたまへやと、祝詞をあぐるさつ〳〵の、音も雀の宮とかや、誓もかたき石橋と、かけてぞ頼むまつり事、すなほなりせばもろこしの、見ぬ世の鳥も羽をとめん、桐の花さくこがね井や、玉のつるべの水けぶり、室の八島もよそならず、くもとのぼるや西のそら、夕日小山のはに入れば、けふも限りの鐘のねに、あすは元より白玉の、やどらん末はまゝ田の里、荒れてやさしき八重むぐら、小菅蓬生かるかやも、亂れあひたる能毛の宮、此子が祈誓宮の根の、長くもがなと玉の緒を、かなたこなたへよりかくる、二つのわくをくり橋や、くりかへし返しても、昔は今にならばこそ、去つてかへらぬ我つまの、日數は早く杉戸の宿の、軒をならぶる家々に、たれかは宿をかすかべと、いや跡に見なして越谷や、只何事もふりすてゝ、君にさうかとたのもしく、中島根の井櫻田を、たどり〳〵行くほどに千住の川にぞつき給ふ

しとう―したふ（慕ふ）か

あらがねの―土の枕詞

つげの櫛―黄楊、告げ

きつれ川―喜連川に來連をかく

うぢへ―氏家、下野にあり

故に思はずも、局におりしと夕ぐれの、くるやら〳〵大じんどのは、馬もいなゝくくつわも鳴るに、門立しげきをざさ原、戀風しとうにかつらぎは、つや〳〵靡くけしきなし、とにもかくにもかつらぎは、情の深き女らうと、慕はぬ者こそなかりけれ

㈧放下僧道行　　武江半太夫ぶし

よしやつゝまじ袖の露、かゝる浮世にながらへて、なになか〳〵にみつ瀬川、おなじわたりにともなはど、今の恨もあらがねの、土の車の我ながら、思ひをいつかつげの櫛、とりも見なくに黒髪の、みだれ心もとけやらぬ、姿は人目はづかしの、もり田の里を夜にまぎれ、忍び出ればほのぐらき、月のくまだも影うつる、川井の宿は是かとよ、そのかみ川はいさぎよく、すめども下は濁る瀬に、何をたよりの根なし草、浮いつ沈んづしづんづ浮いつ、波のうね〳〵ゆられ〳〵てきつれ川、水のうたかたあはれげに、消えぬ命ぞうぢへの里、おもき歎きにかろき身は、娑婆にあく津の舟出して、願ひのまゝに彼の岸へ、いつか到らん白澤や、角ぐむ蘆のほどもなく、枯葉に風のそよ〳〵そよと、秋

きそん—年若く快活なるをいふ
おほたけ—御火焚
あるが—あるかの衍か

盆のをどりは伊勢踊、きそん十七とらの歳、まゐる薬師は寅薬師、さつさとふりやれ、さつさふれ〱振袖の、そめし模様の月見草、小褄にぬひの菊がさね、さて初冬やかみな月、つくや亥のこの餅花も、小春の名にやにほふらん、霜月はうぶ神のおほたけ、たけたけ師走には乙子の餅、ついたちや雪ころばかし雪まろめ、四季をり〱のたはぶれは、鬼のこぬまと歌ひしも、思へば〱此かみの、昔なりけり今の世に、千團子の大明神、つきずかはらずわらんべの、福徳祈るまもり神とて、おしなめ歩みをはこびけり

㊆かつらぎつぼねおり　　あづま半太夫ぶし

さてもかつらぎは元より勤めの淺ましき、うちよりもみはし近き局におり、あるがなきかの憂きすまひ、涙や袖をしぼるらん、とは思へども君ゆゑと、思ひさだめし心には、うきもつらきも忘れぐさ、つぼねの中もすみよしの、岸の姫松いく代まで、かく怨めしき川竹の、ふしては夢に其人を、見まくほしさようつゝにも、忘られぱこそとひたすらに、かわく間もなき袂かな、さるによつて浮世の人かつらぎこそは道しゆんが、はからひ

こなひ—こなたの誤か

にふし歎くも道理なり、げにわれとても二人なき、こなひの親のあはれみと冥加に付て、このごとくたゝずむ方もあらばこそ、罪をゆるさせ給ふべし、あれ〳〵あれ〳〵夜明のかねの聲、里を行きかふ人の音、あの鐘までもわれ〳〵が、今は別れと手をとりて、道のほとりの地藏堂、露のうき身の置きどころ

㊅京わらんべ　　あづま半太夫ぶし

まづ正月は門に立つとよ松竹の、かげに羽根つく手鞠とる、ぶり〳〵ぎつちよを手にふれて、玉を打出の破魔弓や、七草なづなよとんどやおほん骨牌寶引如月や、初午まゐりのみやげとて、鈴やつぼ〳〵風車、彌生になれば雛合とり〴〵で、ひゝなの殿のいもせごと、二八あまりは大人びて、色にいづるや櫻いろ、梅や椿の花よりも、卯月のけふのみ祭に、なごりをしきはせんだん團子え、たんご、たんご〳〵ヱゐ端午の節句會、よもぎあやめに冑を軒端にかざらせ、うちあひうちつれ竹馬の、隙ゆく駒の足はやみ、はや祇園會の夕すゞみ、螢こいとて水あそび、袂すゞしき夏衣、ひと夜あくれば初秋の、

になく烏、今のうき身のすて所、あすは巷にさらす名の、ほんにわたしもこなさんも、千代を八千代と契りしに、今は引きかへさきの世を、せめてふたりがあてどころ、定めなき世やいにしへは、人の心の中ながら、それと推して書く文に、あるひは髮切血をしぼり、涙に物をいはすれば、あまりかはらぬ人心、又こなさんもその通り、ことば咎めぬさきぐりに、逢へば是非なくわびことの、身はふし沈む涙川、大方粋なわれ〳〵が、今かくなるはさりとては、粋が身をもつためしかや、此年月の間には、あらゆる夢の數あれど、かくなる事は夢にさへ、せめて此世に身を二つ、おきどころなきわれ〳〵か、まして冥途を見ずしらず、どうしたわけな里ぢややら、どうやらかうやら知らねども、是非にたふとい所ぢやと、きけば此身もたのもしや、あゝさりとては今までは、ふたりが中に此娑婆を、わがまゝなりと思ふ事、誠一夜もありもせず、かうした切なきあひだから、命がけなる戀草を、根引になるとはや枯るゝ、跡にのこりし母樣の、いとゞ歎きは老の身の、不孝のうへの不孝とは、知りつゝ沈む戀のふち、浮めてたべや彌佛と、地

したしーしなし
の衍か

き月のうづだかく、歌の題とや是ならし、扨我戀を祈るてふ、思ひかけずばみ社の、月にわが身をかへり見て、憂きを問ふやと人里の、萱が軒端の竹垣よ、すましきりたる心から、曇れ浮世も月も見はてし墨の衣の袖わびし、やゝはしにもあまりぬる琴の一曲玉だれの、ほのかに見えし月かげや、十二や三の袖つめて、粹なしたしの目に立て、舞子なりふり束の間と、月を便りにかよふ島原、しのぶれど松のくらゐや梅の庵、もつた揚屋のそのけしき、下戸ならぬこそよねはよき、月に疎まれお迎ひと、かぶろかやしのあとなりに、おろせ〳〵の小提灯、お歸りといふ聲たかく、野邊にすだくる蟲のねと、わが身もともに泣きあかす、身揚くらきまぶぐるひ、あだめにかくる月かげや、しばしは憂さをぞ語りける

㊄助六後日　　江戸半太夫ぶし

とかく佛の敎には、いかなるやぼも嫌ひなく、一つはちすの約束も、せめて力にたまぼこの涙かずそふ道芝の、露と此身をあだくらべ、あだに思ひしあだし野の、煙かくま

せいがんじ—淸閑寺なり、濁點は原本のまゝ
名にふれし—名高く知れ渡りしの意
ねもり—ねむりに同じ

も打過ぎぬ、名も淸水にさし懸り、歌の中山せいがんじ、爰はいづくぞ小野の宿、きけば昔の名にふれし、かの深草の少將の、身をしる雨もよそならず、わが身のうへと怨めしく、けふの名殘のきぬ〴〵は、なか〳〵つらき別路に、月待ちがほのなつかしく、只あこがるゝ思ひねに、うたゝねもりの夢さめて、とあるみ寺につき給ふ

㊂ひとりね

あづま半太夫ぶし

咲きそめしより千本の花のおもかげを、見そめにしより我心、空行く雲のきえ〴〵と、消ゆるばかりの思ひねに、床の山かぜ夢たえて、枕にかよる月見れば、千々に物こそかなしきに、身はかげろふと衰へて、あるか無きかに世の中の、身をしる雨に朽ちはつる、かわくまもなき袖の露、いはぬばかりぞ浪速なる、あしの篠屋の下にたゞ、けぶり物かは胸の火の、つゝむとすれど色に出て、ひとりこちたき寢屋の内

㊃十六夜

同　半太夫ぶし

雲もなき秋の今宵のいざよひに、見しよの人の噂せん、まづもよしきの細殿に、さやけ

㈠秋の色　　　あづま半太夫ぶし

いつもきく麓の里とおもへども、昨日にかはる風のおと、身にしむことのあぢきなく野末の蟲のすだくなる、千草の花とあだくらべ、涙の露はしぐれつゝ、空行く月のかげうとく、いとゞ思ひに浮き沈む、かりねの夢もむすばれず、砧の音にさよふくる、時しとて秋を告げくるかりがねの、よすがなきこそかこたれて、あやなく殘る袖の香に、しばし忘るゝようさつらさ、萱が軒端もやゝさむく、籬の菊もみだれ亂れておく露霜の、猶ものさびし秋の色

㈡わかれの色　　　武江半太夫ぶし

げにわりなきは色の道、迷ふは人の習ひかや、君が仰せのつらからば、只一筋につらからで、情のまじるいつはりと、思へば猶もます色の、切るに切られぬ愛執の、戀慕の暗のくらがりに、火宅を出てやう〳〵に、誰まつばらの橋過ぎて、河原おもてを見わたせば、けふは嵐もはげしくて、いとゞ身にしむ戀風や、君がおもかげ身にしみて、そなたの空

松の落葉　首卷　中興當流あづま淨留利

目錄



増補繪入

松の落葉

京都寺町通二條上ル町
井筒屋庄兵衛
板行
万木治兵衛

元祿十六癸未年六月吉日

跋

往時藝にあそべる人おの〳〵このむ所あり、おくれたるすぢをかくし、學び得たるかたかどをのみさかしがり言ふめるなかに、これが音の歌に和し、あはれもやる方なきにぞ、何事もこと盡ぬべきを、幼よりならはさゞりし恨も今更なり、かのらんごやなどの遠きにこそ至らざらめ、なげぶしの本末かいなでて心ゆくばかりになんどいへるを、此書をあめる人打笑ひて、それこそ難きわざなれ、朝鍛暮錬のうへならで一曲は奏しがたし、なげぶしは手のかぎりすくなきやうなれど、今古の興廢なくことにたやすからずと、さらば我如學ぶべきにあらず、そも〳〵りうきうひんだの露のはじめより、なげぶしのみさをなるは松樹になずらへ、そのほか松葉の風聲ちり盡さざること見つべし、花落雲閑なるゆふべ、雨よきほどの窓のうち、あけぼのけざやかなる雪をあつめて、少年常に習はざらめや

なく、歌のとまりは節にていひすて、ゆう〳〵ときこえ侍る、歌はつれてうたふもよし三味線は一ちやうにかぎるべきか、近比歌の下の句三字めの節をさげてうたふ事だてにてよろし、此歌の曲節急ならず序破にとゞまりてしづかなるかたなり、よりてかみの句つぎの七もじのはじめ二字またはかへしのはじめ二字をよせてうたふべし、唱歌にはえありておもしろき事也、中比より二上りの調子をもちひて此ふしをうたへる事もあり、これには本調子とつれびきよし、ふしにははなはだ甲乙あり、このゆゑに口傳おほく言ひのべがたし、ある人なげぶしは女のもてあそびものなりといひたるも、優美なるさまをよくわきまへたればさる事ぞかし

歌音聲並三味線彈方心得

一歌の事音聲ゆたかにして始終たるまぬやうにうたふこと第一なり、當風といひて世上に彈きうたふをきけば、三味線を君として歌を臣とおほえしやうに聞えあしきとかや、歌をもつぱらとし鳴らし物はまことのあひしらひ、本手組のうたひかたと長歌端歌などの彈きうたひ各別なり、まづ三味線の調子をたいせつにあはせてのうへ歌ひはじむる事肝要にして、序破急のくらゐうきしづみ乙かんけやけからぬやうに心をつくべし、また連彈のとき歌ひとつのうち二上り三下りなどの調子かはる事あるは、一しほ相手の調子取やうあひかたにならひある事也　口傳

一なげぶしの事元來江戸ろうさいの節をなほして歌ひきたるとかや、音聲しめやかに調子はひくきかたよし、その分際に應ぜざる調子にては意味うたひがたし、いにしへ大阪屋河内風といひてうたひしほ、上下の句さらりと三味線あひしらひもみじかく、うたのとまりやんと歌ひしなり、今やうは節のたけゆるやかに、鳴らし物相の手撥かずもすく

逢ふも別もみないとによる涙つらぬけ形見にも

古今百首なげぶし　終

思ひ餘りて折り焚く柴の煙さびしき夕まぐれ

これもさすがにあはれを添ふる小田の蛙のくれの聲

春よ垣根の雪にはあらで消えぬ限りの下おもひ

泣いて寝がほの半はくもに見えてこぼるゝ袖の月

忍ぶ袂のいろ見えそめてこゝろにも似ぬ我なみだ

過ぐる月日は我のみ知りてかひもなき身を打歎く

限りある身にさりとは人の遠き行方をおもへとや

海人のすて船よる邊もしらで獨りなみだに伏ししづむ

さらば面影はなれもやらで人のつらさにます鏡

あふさきるさにみだれて今朝も尾花がくれに立ちとまる

宇治の橋守あはれと人はいはで年經る袖のいろ

扇ならでも身は舊るさるゝ秋のながめよつゆばかり

○ほうし　二十四首

雪の外山の曙つらや萱が軒端のとりの聲

今は身にしる愛別離苦の憂さを思へばなか〳〵に

せめて閨洩る月かげなりと暫しまくらにとまれかし

逢はで歸ればこゝろの闇よ月は冴ゆれど路みえず

花に置く露小ざさのあられこほれ易きは我なみだ

思ひつづけて涙の時雨定めなきこそ浮世なれ

月は人目の關路もなしや西にながるゝ夜半の空

雲の旗手のそなたを戀ひて住めば住む身ぞあぢきなき

難波入江の身は捨小舟岸にはなれて便りなや

來ぬ夜あまたの山ほとゝぎす降るは村雨わがなみだ

うき身浮草しづみもはてぬ底のこゝろを月や知る

身をば—「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命のをしくもあるかな」以下三首いづれも百人一首に據れり

我がおもひはあの浮雲よいづこ行方ぞ定めなき
人目忍ぶの草葉にむすぶ露の玉蟲ねにぞ鳴く
ものや思ふと問ふ人あらばせめて語りや慰まん
身をば何せん誓ひし人の命のみこそ惜しまるれ
絶えてしなくばなか／＼人も身をも恨みじ我こゝろ
忍ぶ心を色には出さじ物やおもふと問ふばかり
思ひあまりて見えしゆめよ覺めてなみだの外ぞなき
まだき我名の立ちたるとても思ひそめしを一筋に
聲にあらはれ鳴く蟲よりもいはで螢の身をこがす
幾夜しをれて貴船の川も袖のなみだに玉ぞ散る
人の滿干のこゝろも知らで底ひなげなる我涙
あだな契をむすびて今は我身ひとつの憂き思ひ

今はみだれて憂き山鳥の長きつらさの思はるゝ
扨も寝られぬあかつきうしや過ぎし今宵のしかも今
色にしづみて消え行く身なら引きは返さじすて小舟
幾重かさなる山川なりとこゝろへだつな旅衣

○をんな　十九首

逢はぬつらさを焦れしよりは逢うて別るゝうき涙
衛士のたく火は夜こそ燃ゆれ胸にたく火の絶えやらぬ
こゝろ細くも燈火ふけて待つはいのちの消えもせず
今はたよりの文さへ絶えつ何にいのちは掛けてまし
いとゞ淋しき寝覺の床になみだなそへそ杜鵑
幾夜ねざめの涙のふち瀬波のうね〳〵うき枕
殘る移り香まくらに添ひていとゞわすれぬ閨の中

問はゞ—問ふはの約か

なまぜ—なまじの訛

ありと—ありともの意

幾世ふるとも洩らさぬ水の下にかよふや岩根ぶみ
別れぬる夜のつらさを問はゞ後のあしたの文ばかり
夕べ〱のその移り香は君が袂の由縁とも
なまぜ生中馴れずばかほど物は思はじさりとては
歸る野みちの淺茅にやどる露にそへたる我なみだ
君に逢ふ夜は埴生のこやも玉の臺にまさるもの
思ひ重ねてくるしや今はあはで命もたえなまし
月のあけぼのこの村雨に今は忘れぬほとゝぎす
露の玉の緒かぎりはありと移るおもかげ變るなよ
野邊に蛙のなく聲きけばありし其夜がおもはるゝ
斯くと知らさで消え行くならばつらき報のありやせん
磯の松が根波うちかけて立つ名わりなき戀のふち

袖ひぢ—袖がぬれ

ゆくも云々—伊勢物語、「春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れ限りしられず」

一つ枕にしづみしなかも憂きはわかれの袖の露

○をとこ　二十六首

花のあけぼの夕の秋もくらべくるしきわが心

いかに隔てし覺束なさぞしめて寝る夜も飽かぬ身の

蛙なぐさへ恨のあるにまして寝覺のほとゝぎす

袖のみなとの寄る瀬を知らば嬉しかるべき涙川

あはで寝る夜は袖ひぢ勝る夢は枕のいとまなや

ゆくも歸るも忍ぶのみだれかぎり知られぬ我思ひ

かよひ馴れにし朱雀の野邊の露はものかはわが涙

うちや打たれし枕の淵も今は幾瀬の飛鳥川

稀に逢ふ夜は人目をしのび語りつくさん我おもひ

雨の降る夜はひとしほゆかしいつにおろかはなけれども

程は云々ー拾遺「忘るなよ程は雲井になりぬとも空行く月のめぐりあふまで」

憂しやこの身は親はらからの爲にしづみし戀の淵
なみだならでは哀を訪はじ深き思ひの袖のいろ
宵の口ぜつの白けたあとを鳴いて通るやほとゝぎす
君はつらくと恨みはせまじこゝろからなる身の憂さを
消えぬこゝろの半は雲にかよふ嵐をよすがにて
もはや命も絶えなば絶えよ住めば恨めしおなじ世に
人目忍べばその名もいはで思ふあたりのことぞ聞く
程は雲井にへだつるとてもこゝろ變るないつまでも
のこる形見のかゞみに移る月のさそひしおもかげは
恨みながらもまた打向ふ月は由緣か憂き人の
いつの夕に袖ふりわかれもはや淺茅も背にあまる
かよふ心は雲井のよその中にすぎゆく月日かな

わたりくらべ云云—古歌、「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし」

廓云々—「罪なくて配所の月を見る」の古語に據る

餘所になしても訪へかし人の月は誰ゆゑ袖にすむ

月を見ばやとちぎりし人も今宵そでをやしぼるらん

訪はゞ訪へかしこの夕暮を明日の命も知らぬ間に

更けてきぬたのおとより聞けば月に落ちくるわがなみだ

せめてやどれよ小簾洩る月も日ごろもとめし憂き涙

わたりくらべて世の中見れば阿波の鳴戸に波もなし

こゝろ〴〵の世の中なれや花の臺のつゆのいろ

紅葉こがるゝ色とは聞けど末の落葉をたれか知る

松のしぐれに夢うちさめて餘所のあはれが思はるゝ

涙くらべんやまほとゝぎす我もうき世のつらければ

○けいせい　十四首

廓はなれてつみなき月をいつか都のそらに見ん

松の葉　第五卷

古今百首なげぶし　附作者付

○さるおんかた　七首

松の葉ごしの磯邊の月は千歳經るともかはるまい

さしも知らじな斯くとは君につゝむ思ひの燃ゆれども

思ひ亂れて蘆屋のさとに海人の燒く火か飛ぶほたる

立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞつらき

我は菖蒲のねにこそ泣かめ引くな袂のつゆけきに

海人の燒くなる藻しほのけぶり人の立居のしほとなる

霰ふるらし外山のかつら色に見ゆるをいかにせん

○そう　十首

ね―根、音

しほ―鹽、機會

け、扇うちはの抜折羅繪にも、腕押首引草摺引、腕の骨くびの骨、どれこれこれ〳〵書いてお見しやれ、びりこくたいしばかたわう、鬼を茶の子の金平だんべい、ほゝをつかない勇力やと、今に殘りし力瘤

(廿二)道成寺

作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん、みづからと申すは、そも泊り定めぬ忍び妻、紀の路の奥に住馴れし、人の心を慰むる、白拍子の鼓草、なる瀧川の流の身、道成寺の御てらには、鐘の供養のあるよしを、皆人毎にゆふまぐれ、月は程なく入汐の、さして我身の罪科も、報はんことの嵐ふく、三室の山の紅葉ばの、色に染めにしあだ衣の、薄からざりしさんしうの、罪恐ろしくことに又、罪業深き川竹の、一夜ばかりの手枕に、人の罪をも身に受けて、永き闇路や黑髮の、亂心や結ぼれて、煙り滿ち來る小松原、急ぐ心はまだ暮れぬ、日高の寺にぞ著きたまふ

暮れぬ云々―暮れずして日高き中にと續けたり

ぼどり兒―「ぼとり」は「ぼつとりもの」などいふに同じく愛らしき意

の腕首節だつて、胸に生ふるいかり毛は、碁盤の面に銅の、針摺ならべたる如くなり、時致莞爾と打笑ひ、宇佐美久須美河津にて、大ぢからと呼ばれたる、河津親父が懐子、箱根別當のぼどり兒、上げたる手本が百六つ、小謠合して十六番、されども御房の御恩にきず、すつぺりかへじてなんにもなし、跡に殘る物とては、みづ一こくに千人力、小粒に碎いて財布に入れ、舊した帶の物蔭に、がんぢ搦みにからげつけ、そつとたしなみ候ぞや、三枚の草摺の早緒が切れて、水呑むか、茶の水まゐれ水まゐれ、有馬殿より貰つたる蠟燭箱を踏んぬいで、三里ぜつこつ摺剝くか、二つに一つは定のものと、びくともせず居たりけり、朝比奈其時身ぶりをかへ、ぎよとうがとうのふて狂ひ、力紙をがんぢと嚙めば、胴の筋が額にあがり、任脉筋が拳に下り、荒れたる骨は巖のごとし、きうてうの藤葛、松を搦んで木枯に揉まれて立てるが如くなり、朝比奈象の怒りをなせば、五郎は虎の氣をはつて、互ひにえいやと引く力に、三枚の草摺きれて、左右へばつとぞ退いたりける、いやえいぢよき〳〵、さるに依て今の世に、靈佛靈社のゐん馬にか

せうしー笑止
白癩でんー雷電にかく
どうでんすー兆殿司にかく
ゆつてー言つて

和田の一門九十三騎を引具して、長者の許に打寄りて、國土の魚をいぢり食ひ、後腹やまずの大遊山、醉三日の酒盛は、ことにせうしで面白や、かゝる處に障子の彼方に、金物の音がからりとした、白癩でんの雲外れ、無間奈落の底ぬけて、鍋の鑄かけはおりないかと、間の障子をさらりと明れば、びんぼあふれの荒五郎、大腹巻を著流し、五尺八寸の大太刀、片岡風に指しこなし、なんにも喰はねど高楊枝、そらつ吹いたる有樣は、さて持扱うたる客來なり、朝比奈が申すやう、兄祐成もましませば、些と座敷へお通りあれ、序に力を引見んと、つか〱と立寄り、草摺三枚引握んで、こりやどうでんすの掛物よ、時致にんがりともせず、いやだ白衣で候御免あれ、朝比奈聞て、ゆつても彼奴は若輩なり、下手にかゝつてそゝりをくれ、小歌節で遣つてくりよ、なんぼ隱しても曾我の五郎は知れる、心こん短うて脇差刀は長うて、色は眞赤らかいで聲高に、どつこいどこい何處の田舍あお若衆ぞ、平に一座をたのむによ、此うへは是非に座敷へ出さんと、えいやつと引いた、些つとも更に働かず、日本無雙の朝比奈が、二王に勝る力瘤、左右

仇し身を、誰にか見せん君ならで、色をも香をも知る人と、讀みし心はおもしろや

㊈花賣

面白の賤が仕業や、さんろならねど吹く笛も、ねよげに見ゆる若草の、花紫の藤袴、紫苑龍膽地楡、おもひの色は岩躑躅、いはで焦れて山吹や、忍び來るくる風車、姿妙なる姫百合に、いつか添寢の常夏や、名も床しきは美人草、顏よ花こそ一入に、色も匂ひも深み草、おく白露の玉椿、身をせばめつゝ影宿す、月見草こそ優しけれ、實にやまことに有明の、つれなく見えし別れより、二人寢る夜に悲しきは、己が翼は交せども、思ひ知らずや心せで、まだき鳴音の鷄頭花、茅花まじりの菫草、君がすさみの手鞠の花、一二三四とんとおちても名は立たじ、深き心の底意をば、人に洩すな水葵、池に澤瀉眞菰草、我こそ野に咲く仇花よ、折らば疾く折れ散らぬ間に、怪しの賤の身ながらも、稀の御幸にいざさらば、御酒を勸めてとりぐ\に、叡慮を淸しめたてまつる

㉀草摺引

ねよげに見ゆる—音と寢とにかく

常夏—床にかく　顏よ花—杜若　深み草—牡丹

まだき鳴音の—伊勢物語「夜もあけばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

茅花まじり—堀河院百首「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花まじりのすみれのみして」

めいえん―名園か

初昔―茶の名

後昔―同前

いのしろ、大鷹、鷹の爪―同前

ごくむじやう―極無上

㊅茶の湯

床の景色を見たまへば、小倉色紙を掛けられたり、棚の飾は何〱ぞ、今様體の香道具、心を附けて飾らるゝ、臺子の掛りしほらしく、釜は難波や蘆屋釜、たぎる其音はりん〱と、時ならぬ松蟲とのみ疑はれ、蘭麝の匂ひ薫じつゝ、心ことばも及ばれず、其時からさき立出る、さらば茶の湯の樂みは、聖賢悟道の翫び、斯る情の色の道、分きて心の引かるゝは、君が名に寄るしがのてに、幾夜ぬれ〱後朝の、ことの葉草の露しぼり、扨又茶入は瀬戸の振袖、めいえんさま〲多けれど、七種のえんとぞ傳へしは、もりいは并うもじかはしたおくのやま、麓のあたひ琵琶や彈く、引手からなる宇治の茶の、君が逢瀬の睦言を、いつの頃かや初昔、今日の日もはや暮れはてゝ、明日又誰に讓り葉の、移りかはるや後昔、古里慕ふ雁金の、いつか越路に歸るらん、いのしろ大鷹鷹の爪、年は經れども若森の、姿は猶もそよりの茶、外は別儀も嵐山、紅葉の錦色々に、えんがすぐるゝごくむじやう、君が手に寄る初鷹の、身寄の羽風にさそはれて、亂れそめにし

ち入れ、しやくりびきに引いてくりよ、えんや〳〵とな扇を颯と開きつゝ、はらり〳〵と扇ぎたまへば、さしもの大雪朝日に霜とぞ消えにける、山伏大きに怒りをなし、こゝがくさりのいつはい、いれ續きの奇特を見せ給へと、ざんげ〳〵ろこ罪障をしめにはつだいこごどうじ、うなぜこごどうじたゝきだされるな、猶も奇特を見せ給へと、赤手のこつほう摺剝き〳〵、責にへめてぞへめたりける、斯る處に不動の尊體、花火の仕掛で現はれ給ふ、それ見たかヲヽえいとな、一休拂子振上げて、汝ふどうけ汝ふどけか、あつかゝらかの喝と唱へ給へば、無首尾じまひで不動は目黒へお歸りさばへ、扨山賣かな山賣かな、けゝらけいわんてゝんがう、今時其手を喰べいか、さあしやつともゆつて見ろう、山伏ほつきと我を折つて、只平蜘と見えければ、一休すこし人柄で、こは現金なる御慇懃、斯やうに申すも拙僧本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子と思召し、見す見す某を佛菩薩の化身とて、諸〳〵の虚言の八百つき散らし、此後必ず沙汰なしと、各左右へぞ別れける

ろこ―六根か

ふどうけ―不道化を不動にかく

さばへ―さらばよ

けいわんてゝんがう―慶庵口のごまかしや手づまといふ意

かんふらん云々
―唐人唄の文句

ころり〳〵とこけの行、跛ひき〳〵金峯山、木の根にとり付〻、手繰つき、よぢらすどつこいよぢらす、腰を綟らす檜笠、一の覗裏壁谷、暗り峠探り坂、さぐりさぐつて頂上へ、登り詰めたる行者なり、方々のごとくなる新發意小僧の晝念佛、欠伸がちなる春の日の、眠り覺しの生灸、物の數にはあらねども、いで行くらべいたすべし、一休は聞召し、祈りて行の其驗見せ給へとありければ、いら高數珠を押揉んで、一祈こそいのつたれ、えい〳〵〳〵神の御前にやれ井戸掘れば、水は涌いで金がわく〳〵、ぞつくり〳〵ぞくぞくと、かんふらんはるたんにてんによながさきさくらんだばちりこていみんよ、これにて驗のなきならば、七の夕の星祭、鹿島三島諏訪熱田、高き御山は愛宕山大權現、鞍馬山には僧正坊、讃岐に金毘羅、飯綱の三郎、山々の大天狗、只今不思議を見せ給へと、責付け〳〵祈らるゝ、あら不思議や晴れたる空より大雪降つて、山々谷々押並べて、皆白妙となりにけり、山伏勢ひかゝつて、いかに〳〵と申しける、一休は御覽じて、これぱかりの小雪をしつてうともしつてうべい、そんびくともそびくべい、尻から挺さをさつ

花にも痛し―宗因「眺むとて花にも痛し首の骨」

とたらくさん―じだらくの意を普陀落山にかけていふ

だじやく―懦弱

道とうる―道通るか

の路なる、高野山にぞ入りたまふ、堂塔門院古事古跡、をがみ巡りて其後は、花にも痛し首の骨、あら面白や小空腹や、實に本來のくうの字は、食はぬ先より見證の、悟りの眼ちら〳〵と、目星の花も散りかゝる、とある朽木に腰をかけ、疲をはらさせたまひける、斯りける處にとたらくさんの大山伏、無性ほう髭無人相、國土の紅を塗散らして、じまばんかうのけ鬘、太布の衣の尻括げ、胴金巻の大鍋蔓、かんがうてつきの八角棒、だじやく無法に突散らし、一休和尚に立塞り、頭甲挫ぎの似せ口上、これ御房、修行は法師の業と聞く、修行成就致いての利德はいかにと尋ねける、一休聞召し、夫れ三界の大導師、釋迦如來の古への檀特山に籠り居て、阿羅々仙人を師と頼み、三十成道とげ給ふ、愚僧なども修行をとげ、さて成佛の道とうる、各の如くなる山伏達は、いつが峯入五月六月盆のころ、腰に法螺貝引つけて、金剛杖を突連れて、力に任せて押せさ、さ酒〳〵、六盃飲だら豆腐に蒟蒻、煮しめに初茸、こつこ許にえいさあえんや〳〵、役の行者の後をつぎ、大峯葛城釋迦が嶽、霞を潜り霧を分け、雲に起臥す兜巾も外れて、

抖擻―頭陀修行のこと

れやこの、雁の骨々粉にこづき、閼伽には牛の涎を盛り、燈明には井守の油、其外集めし蟲の數、一にげじ殿毛蟲どのに、鬚蜈蚣どの、藪の內の蛇殿蜥蜴どの、ほり〳〵ほり堀端の井守の數、繩でからげて引かたげ、火焰の中へ投げくべ〳〵、銅鑼鐃鉢を打ちたゝいて大音上げ、せめつけ〳〵祈らるゝ、まに〳〵まゝに儘にならぬは此の不動、此にも承引なきならば、阿修羅迦留羅緊那羅王摩睺羅王、我等が地主の堅牢地神に申付け、風來不動と爲すべしと、取つては投げまたは引寄せ、抱きあげ、くるり〳〵くる〳〵、くるり〳〵とひん廻し、平に賴むに御不動よ、いやでもをうでも、をうでもいやでも賴むによ、よや〳〵ほんに誠に曲もなや〳〵、これでも驗のあらざれば、淸玄今は倦れ果て、坊主冥利是までと、お不動抱いて其よりも、うろ〳〵淚で立つたりける、かの淸玄がありさま、哀ともなか〳〵申すばかりはなかりけり

㈦寬潤一休

元より此身は本來の、一物もなき假の世に、抖擻行脚とおもひ立ち、はじめてこゝに紀

せつしやう—殺生か

せつしやうかゝたる事

乳木—護摩の燒木なり乳ある木を用ふるを法とす

て、漸々行けば横雲も、はるゝ東雲の、今は散り行く花の山、御寺に著かせたまひける

⑯丹前清玄

斯て清玄は戀の敵のよしなかを、なき者となしてのち、櫻の前を奪ひとり、我俗體になりかはり、世を樂々と送らんこと、只とる山の猿の肝、さて〳〵果報は寢て待てと、今こそ思ひ知られたり、いざや祈りて其驗、現はし見せんと其よりも、やがて用意を呪詛の壇と申すは、せつしやうの法とて北に向つて行はる、鈴錫杖を振りならし、小鬢から大汗流らかいて、數珠も切れよや碎けよと、揉み立て〳〵祈らるゝ、されども驗のあらざれば、不動に向つて大聲あげ、さりとては〳〵聞きわけもおりないこんだによほい、夜となく晝となく無食素腹で祈れども、すつきりばつたり驗もなし、こりや又あんたる事だによ、ほい〳〵ほよほい〳〵ほ、一つの奇特を見せ給へと、數珠さら〳〵と押し揉んで、供物の樣こそおそろしけれ、乳木には珍らしき木瓜や枳殼白膠木の葉、苧殼交りの煙草の骨、扨は茱萸の折枝折りくべ〳〵、凄まじや大團扇にて扇ぎつけ、燒香にはこ

月やあらぬ―伊勢物語「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」
きちう―羇中か
飛ぶ螢―伊勢物語「行く螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこせ」

となる、きてうにはだまさるゝ、二枚五兩の小脇指、純子三本紅絹五匹、綿の代まで相添へて、霜月なかばに贈れども、つひにそれとて見せもせず、今は二人が中にある

⑮弘徽殿

夜半に紛れて出で給ふ、あら痛はしや主上は、十善帝位を振捨てゝ、召しもならはぬ草鞋に、御足を傷ましめ、義懐惟成御供にて、戀路に迷ふ泡沫の、歸らぬ水の泡とのみ、消えにし人の俤を、夢にだにも見えばこそ、馴れし昔の手枕に、語り盡せし睦言の、耳に止まり懷しや、忘れもやらぬ戀草の、露も思の亂れつゝ、我身は元の身なれども、戀しき人の無き故に、月やあらぬとかこちしも、實に理と思召し、御心細き折柄に、寡鴉の浮かれ聲、我を訪ふかと思はれて、終夜ともす螢火の、消えぬ思のあればさて、蟲さへ胸をや焦がすらん、實に在原の業平がきちうのながめに飛ぶ螢、雲の上まで往ぬべくは、秋風吹くと歎きしも、涙くらべて哀なり、いとどさへ〳〵身を知る雨の、晴る間もなき中空に、小田の蛙の鳴きそひて、道も定かに見えばこそ、涙ぞ道のしるべに

命なりけり小夜の中山―西行の歌、上句「年たけて又こゆべしと思ひきや」

唐木でござるべいよの、さんやれ杣山人も出て見やれ、見るになづまぬ身は吉田、よしだ通ればあれ〳〵禿が招く、なぜに禿は出てまたぬ、待たぬも道理、こゝに泊ると白須賀、汐見坂橋本の、濱名の橋に打寄する、波の荒井の遠干潟、梢の風はざざんざと、はゝま松より舞坂三里、砂の數々我や思へども、命なりけり小夜の中山是かとよ、捨てぬ憂身のならひとて、さすがねがひも大井川、變る淵瀨ぞ賴みある、やがて敵を宇津の谷と、聞くに心も淸見寺、三保の入海田子の浦、打出で見れば眞白なる、雪の富士の根美しく、山の小額黛の、際おく空や黑々と、片割月の指櫛の、粧ひ深きたしなみは、扨も見事のお葛籠馬よ、こゝは箱根の山坂なれば、初音が原の御座松に、暫しとどまれ時鳥、誰も小磯の宿つづき、鴫立澤は名のみして、家立ちつづく門々に、出入る人も大磯の、宿にぞつかせ給ひける

㈣きてう

見附箱崎船の中、寢られぬまゝにつく〴〵と、宿の首尾のみ案ずれば、我黑髮も白髮

はからはぬ—はからはんの訛

薄からず厚からず、烏帽子したよくはからはぬ、妾にまかせ給へやと、櫛笥のまゆだれ手合せし、いとも靜にすき下す

(十三)五人曾我

互ひ違ひの御手枕、透間の風も洩さじと、しめて寢さまも起き樣も、昔の人も後の世も、今の妾にかはらめや、此を見彼を聞く時は、戀と菩提を引分けて、道は二筋踏みもせぬ、殿に心は風車、千里萬里も物かはと、虎がいさめば少將も、夜の雨露なんのその、しととに濡れは劣らじと、東雲まだき烏羽玉の、闇に揭ぐる燈火や、御法の花を家土產に、折りこそ下れ峯の寺、裾野の淺茅分け迷ふ、早百合姫百合鹿子百合、小笹姫篠木瓜の花、ほけ〳〵〳〵としたこそよけれ、うたて嫁ごの繩襷、菅の小笠を傾けて、早苗とる手の所作らしく、うしろじさりに張りあげて、我田にかゝれの君が田の水、みづの流れは白眞弓、矢矧の橋の果てしなさ、御手を引合うてとろ〳〵、とろ〳〵たら〳〵折に休んで、河原面を見渡せば、流れ枯木が捨てある、定めて〳〵きん木理細かにござる程に、

したひがみ—ひたひがみ（額髮）の訛
めかれず—目放さず

心、すいた〳〵殿御の噂のみ、うつら〳〵と言暮し、せめてのことの慰みに、朝日夕日が言葉の末、頼みにするこそ優しけれ

（十二）元服曾我

見え初めしも早三歳、すぐる月日の數よりも、君に逢ふ瀬は幾度か、内外の者に堰れては、瀧津涙も流れ得ん、思ひの淵の底ひをば、よどむと人は白波の、消えぬ假言の勤とて、外の客衆に逢ふ時は、さすが餘所には陸奥の、千賀の鹽竈近ければ、あらゆる神も知ろし召せ、許さぬものは下紐の、關の扉かたきつれなさに、親しむ人は疎くなる、疎きはいと遠ざかり、まだきに秋の風荒れて、千草の蟲のかれがれに、誰に縋らん道芝の、露の此身の置所、方樣ならでよすがなし、生れ生るゝ世々かけて、變り給ふな變らじと、結ぶ誓のしたひがみ、天津かざしの花よりも、分けてめかれずながめしに、しづ心なく散らさんは、これぞ五衰の數ならぬ、とは言ひながら殿姿、今日ぞ定まる壽を、おもへば〳〵目出たやと、島田にさしゝ櫛をとり、髮搔分けて月代を、鎌倉風の今樣に、鬢

き、夢こそ頼めと打詫びて、なれし枕に咎ゆるす

㈨舟あそび

夏は涼しき淺草の、色をとゞめし舟遊び、身を捨人の思ひ川、ばつとしたのゝ譯姿、さりとは心現なり、なり行くまゝに熟々と、憂きことをのみ案ずれば、戀風慕ふ三味の音に、薫りよく〳〵、色と薫りのさりとては、氣の毒の山つもり來て、浮名いとはじ我思ひ、いづれ譯あるつてもがな

㈩まりこ

爰は何國と問うたれば、こゝは駿河の鞠子の宿よ、扨は嬉しやまりこまで來たか、宇津の山邊を歌でやる、手綱搖り掛け馬追ひ來れば、爰は下露くだり坂、宇津の山邊の夢現

(十一)千鳥の前

ふじは磯千鳥のまへと申せしは、法眼の獨り姫、情ざかりは十六の、年の始の初暦、婿取りよしと記せしは、誰が爲にぞと筆染むる、消してかこちて打恨み、嫁入ごろなる姫

屋のなだの鹽やき暇なみつげの小櫛もさゝで來にけり」

鳴神の云々—古今「天の原ふみとゞろかし鳴る神も思ふ中をばさくるものかは」

數に、濱の眞砂や空の星、よむとも盡きぬ戲れに、ことの葉草の露ふかく、いつの頃より陸奥の、關の下紐打つけに、解けて亂れて元結の、末長かれと結びてし、二人が中は久堅の、とゞろ〳〵と鳴神の、爭でか分けん分くるとも、垢に馴れたる九十九髮、もつれ初めにし其夜半は、若し移氣の餘所にやと、立居につけて疑の、思に胸を焦せしに、變らで影の積るにぞ、情の色も增鏡、松の二葉の千代かけて、たのむによ十郎どの、芦の丸屋に獨り臥すとも、君が外通ふ心はなきものを、見放ちたまふなわがつまと、しばしば髮をぞ梳きたまふ

㈧待宵

明日の夜を今宵になして月もがな、命も知らず曇りもやせん、目には定かに見えねでも、風の音信何地とも、知らぬ妻戸をたゝくなる、よしや迷と心から、若しや其れかと危みて、走り出て見れば蟲の鳴音も、小夜更るほど可愛らし、汝もや物を思ふかと、いとゞ床しさ增るらん、とすれば恨みかくすれば、またいと惜しさに絆さたて、縑の衣を打被

第一第二の絃云云—白氏「第一第二絃索々、秋風拂松素韻落、第三第四絃冷冷、夜鶴憶子籠中鳴」

黃楊の小櫛—新古今、業平「聲の

しよしかこつも野暮らしや、いつぞ夢こそましならめ、枕一つを樂みに戀し床しき閨の裡

㊅蟬丸

暗き御目の悲しさは、月日の影も水鳥の、賀茂の川岸波越えて、つひの夕を松坂や、消えこそかへれ粟田口、いつを便にたはつけの、我黑髮のさね葛、逢坂山にぞ著きたまふ

おなじく

第一第二の絃は索々として、秋の風松を拂つて素韻落つ、第三第四の宮はわれ蟬丸が調べは、四つのをりからなりける時雨かな、流るゝ水のあはれさよ、其理も目に見えず、月の入るさはいづくぞと、都の空も懷しさ、正木の葛靑葛、くる人ありとも知り給はず、槇や柏を押分けて、杖にすがりの岨傳ひ、たどり兼ねてぞ見え給ふ

㊆かみすき

なにの勤に暇をなみ、黃楊の小櫛もさゝでやと、取散したる玉櫛笥、漉きかへしぬる數

柳は水に揉まるゝ、枝垂柳は風に揉まるゝ、ふくら雀は竹に揉まるゝ、都の牛は車に揉まるゝ、茶臼は挽木に揉まるゝ、げに誠忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるゝ、小切子の二つの竹の、よゝを重ねて打治りたる御代かな

㈣白たま

さて白玉とまうせしは、いうに優しきだて姿、誰に見よとて咲く梅の、色の花笠深々と、著連れて連れてゆく時は、知る人ぞ知る白瀧の、音羽もこゝか名取寺、群れつゝ遊ぶ京童、あふさ來るさに茂りあふ、枝よりつたふ春風は、空に知られぬ雪なれや、友待ちがほの山櫻、今此娑婆に示現して、仰ぐもおろか淸水の、たえぬながめは面白や

今此娑婆に示現して仰ぐもおろか―謠曲田村の文句

㈤通ひぢ

忍び〳〵の通路に、待つはつれなや氣の毒や、便り求めてやる文に、必ず來んとの返り事、嬉しさどうも溜られず、宵より閨に引きこもり、待てどくらせど其人の、そよとばかりの音信も、早九つの鐘が鳴る、扨も思はぬ障りあり、今宵の逢瀬はかなはぬな、よ

月を山に見て云云ー月を見て指を忘るといふ禪家の語あり
魚を得て云々ー莊子に「得魚而忘筌とあり」

吹く嵐、蘭麝の薫さそひ來て、さりし夕べの頃までは、いとゞ思ひや出るなる、我も忘れじ洩さじと、移り香深く重ねきて、つまの行方を白絲の、亂れ心や狂ふらん

㊂放下僧

まづ青陽の朝には、谷の戸出る鶯の、氷れる涙解けそめて、雪消の水の沫に、あひ宿りする蛙の聲、聞けば心の有るものを、目に見ぬ秋を風に聞き、荻の葉戰ぐ舊里の、田面に落つる雁鳴きて、稻葉の雲の夕時雨、妻戀ひかねる小男鹿の、たゞすむ月を山に見て、指を忘るゝおもひやり、浦の湊の釣船は、魚を得て筌を捨つ、是を見彼を聞く時は、峯の嵐や谷の聲、夕べの烟朝霞、皆是三界唯心の、ことわりなりとおぼしめし、心を悟りましませや、月の爲には浮雲の、種と心やなりぬらん

おなじく

面白の花の都や、筆に書くとも及ばじ、東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻は散り〴〵に、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪のりせん、せきの川波川

荒れての後は―新古今、良經「人すまぬ不破の關屋の板庇荒れにし後は只秋の風」

故月はやどるぞと、餘所になしても訪へかしな、深き心は淺草の、葉末に結ぶ白玉か、光さやかに隅田川、絶えず流るゝ水の泡、沫人は恙なく、有りやなしやと聲たてゝ、問へど答へぬ待乳山、夕越えくればゆふ崎の、庵傾く板庇、荒れての後は風あてゝ、ふは〳〵不破の關ならば、鷄の空音やはかるらん、ゆるさぬものを逢坂の、人目の關の忍ぶが岡、よし不忍が池の面、實に潔き清水村、弓張月の入佐の森、谷中の木立茂りつゝ、花の盛りは三吉野の、吉野よりなほ上野山、のぼれば下る車坂、かなたこなたと（アヒノテ）見渡せば、群集の貴賤とり〴〵に、だてを下谷の町とかや、面白小袖引きちがへ、上著々々の（アヒノテ）色々に、模樣もよしやよしなか染、燻る思ひの數々に、いはで只にや山櫻、霞の間よりほのかにも、見てし人には逢ひたらで、淺黃縮緬茶ちりめん、鬱金紅樺薄鼠、色ある人に見せばやな、小島の海人のぬれ衣、藻鹽かくそで一つまへ、繻子や唐綾白純子、縫摺箔の幅廣を、由縁の色や紫の、縮緬手ぼそ結び下げ、誰白菅の加賀笠を、眉深々と著なしつゝ、なまめきあへる折柄に、花の木蔭は假りの宿、心止むなと

佐太、牧方、葛葉—河内にあり

世話ながら迷ひゆく、いかにまさきよ、あれ〳〵滿ち來る潮も戀すかや、女波男波のあるものを、佐太牧方を跡になし、葛葉の杜に色鳥の、塒もとむる優しさよ、男山には女郎花、荻の葉風のたよ〳〵と、振らで靡くは野暮らしや、淀や伏見の舟よばひ、いとし殿なら〳〵我も寢ん、あな不審しや松風の、吹かで調ぶる琴の音か アヒノテ 幽に三味線きこゆるは、此處はいづくぞ、時ならぬ郭公の アヒノテ 一聲聞かまほしやと仰せける、まさきよが申す樣、されば過ぎにし梅咲く比、都づかひの折柄に、下部の者に聞きけらし、伏見の宿の色里なり、名に撞木町とかや、ついてをかしきことながら、憂きが中にも物とはん アヒノテ 指きり アヒノテ 髪切いれぼくろ、よねの習ひかいやほんに、待つにかはらで心せば、誰か契りを餘所にせんとはと口ずさみ、今は早清水寺にぞ著きたまふ

㊁狂　女

いつしか狂女と鳴神の、とど ろ〳〵と中空に、立ち入る雲の跡もなく、浮きて漂ふばかりにて、其處ともいさやしら露の、置きまよふ身は淺茅が原、まだき色づく我袖に、誰

花の臺云々ー順禮歌「参るより頼みをかくる藤井寺花のうてなや紫の雲」

㊀淺黄帷子

ほの〴〵と夜明烏もいはゞ聞け、氣の毒の山越えかねしに、順禮が情にて、鬼一口を免れて、まさきよ一人御供にて、たどり〳〵と道芝の、裾は露やら涙やら、時しも秋の夕間暮、千々の草葉も紅葉して、錦かと見る谷陰に、樵夫は簣に家土産の、花はなに〳〵藤袴、桔梗刈萱地楡、門田の稲葉刈初めて、竹のまろやの賤の女が、月に向ひてうつ砧、聲をかしくも拍子とる、名にのみ聞きし鶯の、關こえ過ぎてながむれば、すねて茂りしアヒノテ松山の、かのわけ法師がそこはかと、かき集めにし徒然に、綸子鼻緒の足駄にて、作りし笛には鹿も寄る、肩なん過ぎにし黒髪の、絢れる綱には大象も、繋がるゝ習ひかや、玉よの姫を戀ひそめて、いつし帝位を振捨て、草刈童の名に立ちし、色の御門の陵とや、打越え行けば譽田の里、甲斐の黒駒たけくとも、しこなして乗る武士や、花の臺や紫の、雲と詠ぜし藤井寺、順禮が情をも、偏に大慈の誓ぞと、思へばいとゞ袖しほる、なほ行先は津の國や、難波の芦のふしの間も、まだ肌なれぬ妻ゆゑに、諸事

十九　花賣　おなじく　廿　草摺引　若山五郎兵衛ぶし

廿一　道成寺　しきぶ節

松の葉第四巻

吾妻淨瑠璃目錄

かいて—嗅いでか、此唄解しがたし

ろく、末ぢや一筆啓上せしめ候、先度は御狀を下されたれども、ついしか返事も仕らいで、さて〱無沙汰に思ひまゐらせ候べく候とも書いてやれ、筆のぢく竹ころく

㊅高尾

高尾内に居て蛤喰やるよの、もはやふぐどき、やんや今年のふぐはへ、それ〱〱それかいてお見しやれ、とぶろく〱〱や、しるすい〱のすい

ほてつ腹―馬方の馬を詈る語

とつ著いた、早品川を打過ぎて、東をさしてぞくだりける

㊅むまかた

千両とるとも馬方いやよ〳〵、寒の師走も日の六月も、わつはしめ腰にや馬柄杓、やつとまかせのよい〳〵、とぶが如くにはねるが如くに中をも驅け、山をも谷をも越ゆる白月毛、ちん烏足、わけえいさらありやとんな、起きあがつて馳せ上つて、ぴんと刎られて、て丶丶丶丶いんひ丶丶丶、こよな馬奴は飴が過ぎたか、ほてつ腹奴、歩めやあゆめ、歩まにやならぬ、あつちらな、こつちらな、あちりこちり、すべりまはつて、はいはい〳〵、春はござせのお葛籠馬よ〳〵、明け七歳の連錢芦毛に、さゞ波轡をとつつけて、押掛ざんまい、はりりんしよ、日本一のやぢ馬、かたらば猶よかろ、かへしてかへして轡とつてやぢ馬、かたらば猶よかろ、駒を早めて

㊆ころく

小六ほつくり〳〵、ついたる竹の杖ころく、もとは尺八、中はひうやりちやうやり笛こ

陸奥―傍訓原本のまゝ
風―無常の風をいふ
せつく―督促すること

願もいとゞ掛まくも、露惜しからぬ陸奥の、深き情を汲上げて、南無や大慈の觀世音、枯れたる木にも花咲かせ、今の若いに浮氣もしやれ、風が誘はゞなるまいに、まだ夜は深いにさりとては、後朝せつく舟迎、箸をり焚し酒の燗、猫の荒らせし座禪豆、月は待乳の木がくれに、告げて漂ふむら鴉、一二三夜を籠めて歸るつらさに又の御げんと、神かけてまだ見ゆる今戸橋、しょ向島崎なごり有り、押切灘もつゝがなく、急ぐ心はなけれども、永代橋にぞ著きたまふ

㊄やりをどり

振りやれおふりやれ、大鳥毛の振袖行列、ぽつたて東入り、ちと〳〵ちと歩行をめされの、しつかとせ、槍はぢよん〳〵ぢよろぢよん女ろさまに持たせろ、まつかせ持たせろ、まつかせまかせまかせ〳〵ておけろの、さて〳〵な任せて置けろの、さて〳〵〳〵ぢよん〳〵ぢよん〳〵女ろしゆ〳〵ぢよんぢよろ樣の槍の手、對の振袖御先で振れさ〳〵、おさきで〳〵さき〳〵〳〵あと〳〵〳〵跡先揃へた道中、國は花のお江戸に、とん〳〵

笑止々々が三笑止ござる、一に出ぬ首尾、二に舟の雨、土手の夕ぐれ、橋場の烟、明の烏のこゑ〳〵も氣のどく

おなじく

笑止々々が三笑止ござる、一にかす首尾、二に遲い首尾、軒の夕暮限りの太皷、ならぬ貰ひの約束も氣のどく

㊂唐人歌

かんふらんはるたいてんよ、長崎さくらんじやばちりこていみんよでんれきえきいきいはんはうろうふすをれえんらんす

おなじく

三浦の四郎左衞門、長崎平左衞門、菱屋の三郎左衞門、東屋の新七で、江戸町山形七郎右衞門

㊃永代橋

三浦の云々―吉原遊女屋の名寄なり

とさん—盃臺

さかひや—堺屋を榮えにかく

やとアヒノテどつと譽めたもことわりよ、二つ二葉の松はたのみにわかれは浮舟な、あゝん〳〵、三つ三笠に、四つ吉田の兼好が流れとて、其敷島の道をたつる女郎は惡性らしやの、びやくらい可愛らしの、五つアヒノテ五つ井筒は意氣地張合、強いか弱いか、六つ武藏は辨慶せいの兵ぢや、七つ長橋は欄干につゝ立つて、口舌の男を今や遲しと待つたりけり、雪踏の音はざら〳〵、ざざらりひしやり、すはしれもんのんよと、盃手に持ち待ちかけるアヒノテ歸るさはとろさになつて門までおくれさ、さらばやはつと言うては、八つ八重桐は髮きり姿に樣をかへ、とさん組重盃を、禿に持たせてさすいさ野暮さ、てん〳〵てん〳〵てんとや、追つめぼいかけ、もんのび物日をいちに禮拜、南無歸命頂禮くぜつもなかれ、九つ小太夫はおしつけこぐらを建てそめて、家もさかひやの女郎屋揚屋の大黑舞と、夜店の太鼓で囃した、十でとうから明日はとうからござんせ、三番太鼓でずんでんどうから、文は遣手のかぶろやりくる

⑫せうし

ばんしゆ―番衆

あゝきの月―氣の盡きを秋の月にかく

其木の下でさすぞ盃、やつこりや〳〵飲めさやださ、ぞめき騒ぎし有様を、見たか平沙のらく遊び、禿遣手に太鼓持、瞽女や座頭に按摩とり、扨も悪所の晴らいやと、ばつというてばんしゆ〳〵ばん〳〵しゆ、雨も降らぬに高足駄、蓑著て笠きて棒突いて、行燈提げてどんがらり、どんどと鳴るは夜店仕廻の太鼓持、どんがらり何者ぢや、あれは遠寺の番太郎、さつては別れの涙こそ、さつさ濡れてしつぽと、濡れたが瀟湘の夜の雨にもまさるべし、明る日は二日ゑひの作り病で、おや兄弟の見る時は、眞らし氣に洞庭の、あゝきの月とも謂つんべし、いかい呆痴のなれの果、うかりひよんとぞ見えにける

㈩一 津島まつり

津島祭にうかれ出てえ、晝は〳〵しん樂にちやんぎり、しつきり船遊び、まづ三番叟の鈴の音は、おふさへ〳〵や、おんは〳〵しやんしやんとゝん〳〵踏渡る、囃せやはやせや役者衆、其次は供の衆數へ數へ見たれば、一つ人の忍ぶ新町の式部は、花奢なものぢ

うや松原—祭文の極文句なるうやまつてにかく

やだ—いやだ

ぼつとり者—美人の意とぼたぼた降る暮雪とにかく

とよどんだ猫の鈴でもそつともとまれかし、實にうは氣檀那、うつざはよねやま藥師、なんなむ歸命長左衛門、あぶらうんけん宗右衛門、御祈念とぞうや松原通りへ

㊈失念

今度長崎でかはつた小歌をならうた、あとさきは覺えないが、中の唱歌を忘れた、さこそ有るべいとて書いてもらつたが、それさへ出口でおとした、これ面目ない、首尾もしよわけも此通り、これ面目ない

㊉惡所八景

なんぼ堰きやるとも逢はなけりやならぬ、やだといやらば出直してやりかけよ、及ばぬ戀を瀬多に唐橋、ばつと立名が浮名のうきにさ、網ひく〳〵よね達は、やんれ可愛らしやの、えい〳〵えいざんのお山は、くされだてしやぢやないか、やれ雲の帶、鹿の子斑に雪のふり袖、實に〳〵江天のぼつとり者、志賀の唐崎〳〵、代參り引つつれだつて、ついつれだつてまゐる女は、男ほしさに宿願かかか掛けたえ、利生を待つぞ一つ松、

煙管の雁首鳩の目―正當の通貨にあらざる私製の錢

ばとへかしいよ伊豫に松山、讃岐に金毘羅、同じく志度寺の觀世音、津の國に至つては、天王寺は聖德太子の御願所、鹽屋松本二芝居 アヒノテ えい〱〱今年や殿御の草刈年よ、鎌もよく刈れ千草も靡け、心よいその鹿毛の駒、どこ〱〱〱どつこい〱、姉さまや姉さまや杏で〱よござんす、山を通れば山桃ほしや、身をも投げかけ搖らば落ちよ、餘りつれなの山桃や、山につれなの山伏や、なほ山深く分け入れば、加賀にしら山信濃なる、淺間更科いよ甲斐の國 アヒノテ 都留が郡や小笠原、相摸の國に鶴が岡、鎌倉山を餘所にみて、沖の小島に友もなく、うきを駿河の田子の浦、砧の音のいと高く、宇津の山邊を三保が崎、磯に寄來る浪の音、名乘つたる千鳥の轡の響がちん〱〱鴨の脚 アヒノテ かはるまじ〱、此世は扨置き後の世も、これ〱さつて〱浮いて來た、身は浮島の遠江、名高き故事を三河なる、かの八橋やいつの間に、尾張の國には鳴海潟、いつまでここに伊勢の國、鈴鹿宮川月讀や、阿漕にひくはなみたへに、山田が原や宇治橋や、はしのいよこの下には、橋の下にはそつこでお檀那、ほんのぜに煙管の雁首鳩の目、おつ

びやくらい—白癩にて誓詞

よらんせの、わくるは〱わくる〱〱〱すきわくる、網を五しきにすきわくる、まんまん又兵衛が網すき、まん〱又兵衛はあみすき、又兵衛がすいたかねの緒、兎角又兵衛どのはしやぐわん後世ねがひ

㈦ぬり笠

御方塗笠七年早い、菅笠にかへて御召しやれさ、近江の笠はいよこの、さいたさなりはようて、びやくらい著ようてさ

㈧さいもん

もとより眞の行者にもあらざれば、ぶしたる祭文知らばこそと、出放題にぞ、抑〱祓ひ清めたてまつる アヒノテ 御裳濯川の影きよく、外宮は四十末社、内宮が八十末社、合せてやしやくのなぎたおふ膝車に搔込うで、其處さん此處さん アヒノテ 上方の社には稲荷祇園賀茂春日、松の尾の大明神、北野は天滿天神なり、あの仰やんすことはいの、あのおしやんすことはいの、鹿島浦には寶船が著くとの、千本舟岡朱雀いろ里やあそれの アヒノテ ナゲブシ 訪は

曲もじもござんせんはいの、こればかりの盛切飯を一ぱいばかり、踏んぞろばいても蹴轉ばいても、ちつともぞつとも大事もないが、火燄となつて燃え上る〳〵 アヒノテ 火燄かたをばおごろじやつてア、悲しアヽ、なく〳〵ばかりひもじ

㈥あみすき

網すき又兵衛どのは後世者でござる、跣裸の代まゐり、祈る驗の利生も有らば、町々〳〵門々店の端にも引掛けて置いてから、子供衆々々々最些とそちらへ寄らんせの、およもちつとそちらへよらんせの、わくるは〳〵わくる〳〵〳〵〳〵すきわくる〳〵、網を五色にすいてかきよとの宿願かけて、因幡藥師〳〵はんなたこすだこ殘らずかけた山葵 アヒノテ 信濃の國には戸帳に掛けた、其が虛言なら善光寺の佛所に問うてまた見さんせの、愛宕樣へは月まゐり、祇園やれ〳〵淸水丹波の子安の鐘の緒、かけた願なりやすかねばならぬ アヒノテ この町は子供で喧し、上の町ですきましよ、上の町下の町、店の端にも引つかけて置いてから、子供衆々々々最些とそちらへ寄らんせの、およもちつとそちらへ

すだこ—酢鮹

閻浮―此世のことをいふ

このえ

㊃はつ音

初音つらにく障りがちにござる、せつくはいてゐよ、よざどの譯は氣の毒、濡らす〱濡らす〱洩れて亂れてはつとさ、だん〱物憂い正月アヒノテ御慶々々〱と明けゆく春の、二丁目あたりに鶯鳴いて氣のどくの山、すたりし昔かねのかず〱、今更惜しと譯を友禪、左の腕もゝにすけさまいのちとほりて、りうしのてんとむつ言も皆僞りよ、あまのろくざも徒らごとよ、月に廿日はあふたいていも惡所すてぼのさんせきゆゑに、今は便りの文ばかり

㊄がきまひ

あら閻浮戀しや、安きひまなき身の苦みを、のんさて誠に倒れ伏してぞ泣くばかり、辨慶聞いておゝ道理々々〱骸骨たち、さりながら忽ちそこを立ち去らずば、片つ端しよりかつひしやがんとぞ申しける、骸骨此よし聞くよりも、武藏さま〱辨州さま、其ば餘り

二枚肩―駕籠をいふ

燒印編笠―燒印おしたる貸編笠

此方のかたでそも辨慶、二枚肩にも得乘らいで、燒印編笠打かざし、丹波口にてけつまづいて、裾つぎまで踏裂いた、何とした、氣根がない、襤褸を下げ〳〵松原通りの蒲燒を召すまいか、家來ぜにとくない〳〵のない、兎角食はねば身が細る

㊂舟うた

あさの御前のまんほが瀨戸を、小女郎戀しとな唄うて名乘りてお濟ぎやる、こじやくしこん娘こさいかこせんかこかいかこぐるまつのこよねか〳〵つがはが〳〵〳〵のんえいよほ、艪ではやらいで唄でやる、君を思はで通はりよか〳〵、何處で見た、ぞつと致したとよ、えい〳〵君は春咲く梅の花、あゝぢやとよえい、薰る床しきとりなりは、ありやりやこりやりやえい〳〵、さつさえいさつさ、萬歲ぢや〳〵、千秋樂々々々ぢや、ちよぎや〳〵ちよぎりやちり〳〵やちり〳〵〳〵とも、渚に友呼ぶはんまちん〳〵千鳥が寄來る〳〵、こん〳〵〳〵小波に搖られて揉れて、たんどりちんどり、しどろもんどりはねられた、ほゝたん〳〵つるやらこの、したんたん〳〵たゞちがよんきゝよ、こんこゝこのこん

ひんは—貧乏か

こくに—至極の意か
さんちや—散茶

ぜによない—錢がない

んでん國になるとも、物日々々は無にせまい〳〵、さらばへおつとせ頼むによ、ならぬにさうそつきめ傾城奴、ひんほめへへへへへ、歸る姿は野暮人の、笠も足駄も踏散らかいて、雪の其夜はばか〳〵し、やう〳〵たどり行くほどに、道哲の鉦の聲、千手陀羅尼をよむ時は、早明方になりなんと、千々に心を砕けども、行きて歸りてぬめる身か

㈡さんやがへり

世にこくにあはれらしきはさんちやがへりのふと吉三、宵の酒宴に思はれて、あなたの方へさらばへ、此方のかたへのきばはんや、馬にも舟にも得乗らいで、手編笠をさしかざし、土手の窪みでけつまづいて、膝頭をすりむいた、何とした、あたたのた（アヒノテ）跛ひきひき金龍山の、米饅頭はおりないか、ぜによないない〳〵のない、兎角戀には身がふとる

おなじく

世にこくにわびた茶の湯は、朱雀通ひの浮れ人、宵の騒に聲かれて、あなたの方で投節、

ちうさいー歌曲の名

不道化ーおどけにもならぬ事

梵天國ーつかひはたすことをいふ

さわぎ

(一)一夜かゞみ

更けゆく空の犬の聲、揚屋々々も打すみて、恨みらうさい別れ酒、齘みだれの閨もあり、しどけ態振の單帶、もすそ小高く脛白く、おくり届くる仲の町、己がさまぐ＼待乳山の、松の嵐はその夜の夢を覺させ寢ぬばかぐ＼り、あゝばかりへ、明けぬ先にと葛城の、あ降たる雪かな、雪を丸めて一つかみ、投付けたまへば操の前、誰ぢやいの、こんな惡いことはせぬものよ、金を集めて一つかみ、なげつけ給へばみそかの前、誰ぢやいの、こんな結構な事するものよ、納豆集めて一つかみ、投げつけたまへばつぼねの前、誰ぢやいの、おかさんせ、こんな不道化な事はせぬものよ、實にさまぐ＼の戯れにつれて、連れてくるわの、のんやほゝぐ＼はんやしたふてんとさ、さあしたふてんとさ、勝つて兜の緒じめの巾著、きんぐ＼のはアヒノテたとひ此身は梵天國になるとも、假令ひ此身はぼ

どん〳〵アヒノテつく〳〵てんつくつくどんがらが、太鼓の音もよしやつとしよアヒノテにあひのつま〳〵いとゞ太鼓の音どん〳〵もよしどん〳〵〳〵アヒノテどん〳〵どん〳〵アヒノテつく〳〵てんつく〳〵どんがらが、太鼓の音もよしやつとしよ、物に狂ひし我すがた

㊂門ばしら

晝はたんこ〳〵な、桶の輪をさしみやるさのほんへ、夜さりやせんまじよの腰しみやる、しやうがへ

おなじく

たんだ振れ〳〵六尺袖をさのほんゑ、てうせんじ門柱をふりかくす、しやうがへ

㊃いけだ

池田伊丹の六尺達は、晝は繩おび繩襷、夜は綸子の八重まはり

しみやる—しめなさる

六尺達—こゝにては酒造男をいふなるべし

ん、我思ふ〳〵心の内は白菊、岩隱〳〵篠の細道かき分け行けば、蟲のこゑ〴〵面白や アヒノテ 降りそむるやれ降りそむる、ふりそむる今朝だにも〳〵 アヒノテ 處は跡もなかりけり アヒノテ 西は田の畔あぶないさ アヒノテ 谷峯しどろにこえゆく、あの山越えて此山越えて、こがれこがるゝ憂身かな

㈡ かづま

恨みは人をも世をも、人をも世をもおもひ思はじ、只身一つの報の罪や數々の、浮名に立ち懺悔のありさま、岩洩る水の思となり、名をあだし野の露涙、つゝめど餘る世の習ひ アヒノテ 昨日の花は今日の夢、アヒノテ おどろかぬこそ果敢なけれ アヒノテ 身の憂きに アヒノテ 人のつらさの猶添ひて アヒノテ 忘れもやらぬ我思 アヒノテ せめて暫しは アヒノテ とまれかし、梓の弓に立つそらの、是まで現れ來たるぞや、あゝ懐しや今とても、忍車の我姿 アヒノテ 我すがた アヒノテ 物に狂ひし有樣を、あはれとも又果敢なけれ アヒノテ 世の中は廣いやうで狹いよの アヒノテ にあひのつま〳〵いとど太皷の音どん〳〵もよしどん〳〵〳〵 アヒノテ

しもえ

(十六)いしきり

思ひ初めてはいとま無きつらさ、涙萎れて妻戀ふ千鳥、どこの浦かけて鳴き明かす

おなじく

君と二人は雙の岡の、染めて小松のよい中なれど、恨みかねては降る時雨

三下り

㊀こんくわい

痛はしやな母うへは花の姿を引きかへて、萎るゝ露の床の内、智恵の鏡もかき曇る アヒノテ ほうしに見えたまひつゝ、母を招けば後見返りて、さらばといはぬ アヒノテ ばかりにて、泣くより外のことはなし アヒノテ 野越え山こえ里峯こえて、來るは誰ゆゑそさまゆゑ アヒノテ 君は歸るか恨めしや アヒノテ いのうやれ アヒノテ 我が住む森に歸らん、勇みにいさみて歸ら

㊈野中

あのや野中におし伏せられて、後荆で刺れはすれど、前ば結構な〳〵お正月ぢや〳〵、まへは結構なお結構なお正月ぢや

㊉小まち

思ひ深草色には誰も、迷ふ道芝露ふみ分けて、百夜通へと僞る文を誠と思ひ、彼の少將は月の夜もゆく、闇の夜も通ふ、思ひ餘りて涙に濡るゝ雨の夜も、風の夜も拂へど〳〵袖に散り來るは、雪か霙か木の葉か露か、軒の玉水と〳〵と、ゆきては返り返りては、又せん方なみの夜の路、こゝを通ひて來にけらし、車の榻に通はんと、こゝにたゝずみ彼處に立てば、扨もかなはぬ浮世かな

㊄轉寢

心の問へば隱れない戀路、知る人なみの寄るさへ夢さへ現さへ、由なの猫の身をそほ濡れて、なれよにようとは又うそばかり、それはじやうなら浮世にかよる、露のあだもの暫

にようー寢ようを猫の鳴聲にかく

おなは―未詳

死んでまた來て、その〳〵 アヒノテ 其先の世も思ひ知らせん、思ひしれ アヒノテ 袖の湊の戀の淵、渡りくらべん涙川 アヒノテ 色に沈みて死のとも、引きはかへさじ早小舟、名は渡さじ

⑫東をどり

朝の六つからずんど出掛けた、ずんずと踏出す八文字、鬢附とろりと人柄で、伊勢町舟町のだて姿、酒屋の娘店のひまよりちらと見た、見初めた晩に逢うぞや語ろぞや、差足そろ〳〵どりをちつくらくら、くらちつくらばつたり、くら〳〵がりちつくらばつたり、くら暗がりくら〳〵がりの暗くとも、開けてお待ちやれ遲くと、遲くと月の出るまで

おなじく

よひ〳〵夜な〳〵通ふ妻もつおなは、髪の結時鐵漿つけ比は、月は三日月いづる比、のうやれ〳〵さてもの、誰を待つやら黄昏どきに、門に〳〵立つとのう錦木かいの、よる立ちやる

いと、わきていはれぬ世の中

㈩村雨

村雨々々はれ間をしのぐ、人目づつみの草葉の螢、胸にたく火のたぐへてもゆる、我は消えなん〳〵我は、我は消えなん何時かえ

おなじく

獨寢々々夜さむのころも、まこと裏なき心の月も、曇れ〳〵と降來るなみだ、我は朽ちなん、くちなん袖は、袂くちなん浮名も

(十一)みだれ髪

君と我とは七つ八つ、十で殿ごを見初めて染めて、人こそ知らね アヒノテ 振分髪を其方ならでは誰にか見せん、この黒髪を アヒノテ 今は仇なる亂れ髪、亂心やあゝ〳〵 アヒノテ 逢ひた見たさに來たぞかし アヒノテ つらや〳〵と アヒノテ 思ひはすれどまた捨てられぬ、憎さ餘りていとしさまさる、扨も命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、

㊆鹿兒しま

こゝにはやらぬ鹿兒しまにはやるになさ、三十振袖四十島田なほいさ〱

おなじく

志賀のさゞ波立つともまゝよ、霞がくれの船床し

おなじく

文はあまたに書くともまゝよ、思ひそめしはたゞひとり

㊇みどり

ながめいみじき吉野の山や、花の八重雲棚引つれて、峯の白雪ふもとの吹雪、野邊の綠と色こき交ぜて、ともに散りしくうす花筵、馴れし其夜の袂に匂ふ、春の移り香よそにのみ洩すな、えいこのさんさ袖の移り香、よそにのみもらすな

㊈しら雪

うそのかたまり眞の情、此眞中にかきくれて、降る白雪の人心〱、積る思ひとつめた

佐渡とな、佐渡と越後はさいこのさいよ筋向ひ、それはえ橋をな、はしをかきよやれ、

さいこのさく、いよ船橋をそれはえ

おなじく

春は吉野に咲いたとさ、咲いたとさ、初花櫻それはえ

おなじく

夏は雲井に鳴いたとさ、鳴いたとさ、山郭公それはえ

おなじく

秋は高雄に染めたとさ、染むるとな、置く露時雨それはえ

おなじく

冬は霜夜の冴えたとさ、さゆるとさ、鳴く友千鳥それはえ

㈥さんさぶし

宵は月にも紛れてすむが、更くる鐘にはさんさ袖しぼる、よしなの思ひ

二丁立―舟に艪を二丁立つるをいふ

おなじく

最早曙わかれのつらさ、閨にことゝふ蟲の音、絶えなばたえよ玉の緒我涙え、それは憂人の閨にことゝふ蟲の音、絶えなばたえよ玉の緒我涙え

おなじく

舟に召せ〳〵色有る里へ、波のよる〳〵誰まつち山、追手嵐の來ました、みつけ箱崎わけの里、舟めさぬか、それは仇し仇波落ちて沈んで死のとも、引きはかへさじ二丁立、名は流さじ

おなじく

待つに程なく今宵となりて、年に一夜の逢瀬も絶えて、たのむかさゝぎ〳〵、戀の湊の渡しもり、幾秋もそれはまたのおりひめ、飽かぬ別の名殘にいとゞ、袂は星合の空きのどく

㊄さいこのぶし

えいさらえい

おなじく

數々の宵の睦言、うらみに更くる東雲、しのゝめの涙ながらにもはや歸るさ、さらばえいやとな、えいさらえい〳〵〳〵えい〳〵えい〳〵、しかも月の夜か闇の夜に、えいさらえい

㊃ちん〳〵ぶし

幾夜かさねて降り積む雪の、佐野の渡りに駒引きとめて、拂ひかねたる吹雪の、霙交りに降り來るを、かちびともえ、それは戀の夕暮、色にこゞえて死のとも、せめて思を語りなば、はてそれまで

おなじく

ならぬ戀ならやめたもましよ、沖のちん〳〵千鳥が、羽打ちちがへの戀衣、さてよい中、それがぢやうよ、沖のちん〳〵千鳥がはねうち違への戀衣、さてよい中

かちびと―徒歩人
ぢやう―定

ほとゝぎすーほんとうにかく
みのー美濃、簑
おふやー未詳

の名を流す、しやうがへ

㈡薩摩ぶし

親は他國に子は島原に、櫻花かやちり〴〵に

おなじく

空に鳴く音は皆うそどりよ、閨の内こそほとゝぎす

おなじく

お江戸出てから戸塚は泊り、駒を早めて藤澤へ

おなじく

美濃に妻もち尾張に住めば、雨は降らねどみのこひし

㈢ひよどり

ひよ〳〵と鳴くは鵯、小池に住むは鴛鴦、をしどりのしかも寡におふやのるすもり、さらばえいやとな、えいさらえい〳〵えい〳〵〳〵、しかも月の夜か闇の夜に、

二　上り

㈠和歌の浦

和歌の浦には名所がござる、一に權現、二に玉津島、三に鹽釜、四に妹背山、かたをみこそ名所なれ、しやうがへ、いよわけようういうたな、のほん〱のほんえ、かうした譯よ、片男波こそ名所なれ

おなじく

人は常とや移ろひやすき、露の託言をまことと思ひ、尋ね入らばや心の奧の、見えぬ色こそ床しけれ、氣の毒いよ譯よういうたな、見えぬ色こそ床しけれ

おなじく

吉野川には櫻を流す、龍田川には紅葉を流す、橋の上より文取落し、水に二人の名を流す、しやうがへ、いよ譯よういうたな、のほん〱よほいほ、かうしたことの水に二人

て契りの薄氷、なか〳〵戀は渡らじ

おなじく

交はす手枕絶えぬ逢夜の中川、さはり浮橋かよるつらさは誰ゆゑ、よしや流に朽ちはは
つとも、一筋をあだにはせまじ我心

おなじく

閨にとゞまり過ぎし其夜の睦言、おもひ亂れて獨り寢る身の憂さつらさ、つらき今宵は
夢もなく〳〵泣き明す、添寢の枕なつかし

おなじく

なんぼ惜みし昨日の花も、徒らに今日はいつしかかはる習ひの戀衣、最早垣根も雪かと
見ゆる卯の花、猶懷しきほとゝぎす

ていざこととはん都鳥

おなじく

見しや玉簾、内ぞ床しき思妻、ひくな唐猫、綱に任せて追風薫る、こゝろを誰にかこちて夕暮、あだには聞かぬ浮名を

おなじく

人のつらさに懲りぬ心の、いつまで憂きは玉の緒、絶えぬばかりに呉竹、いくよ伏見の夢も流れてなみだ川、柵かけて堰かうよ

おなじく

戀の初風身にしむ程ぞ懐し、月は文月誰が通はしの、文月なゝの夕べを、星も幾瀬の思川、鵲橋を掛けうよ

おなじく

袖に降りくる時雨立田の思川、ぬれて紅葉の色も流れの果てしなや、何をうらみに絶え

㊹さかづき

玉の盃底なきとても、とても契らば二世と結ばん、二世と結ばん常陸帶、さてよい中

おなじく

たとへ御げんは任かせぬとても、有りて馴染の、有りて馴染の末はたがひの逢瀬川、さてよい中

おなじく

後の朝に通はす文の、よべの手枕今朝はなか〳〵、今朝はなか〳〵亂髪、結ふがひも

㊺くどき

二丁はげしき夏の夕べに著く船も、人目堤の神ぞ螢も我思ひ、こひと憂身を沖の鷗にかこちて氣の毒、うそも捨てられず

おなじく

夕べ淋しき秋も半の通路、戀に朽ちなん袖の湊の捨小舟、月はもとより隅田川に、流し

に靡きしを

ちらし

扨も優しき螢の蟲や、忍ぶ繩手の闇路を照らす、人の心も情あれ

㊼(卅二)てまり

つる〳〵と出る月を、松の枝でかくした、いざさらば切りても捨ちよやれ、松の枝の下えだ

ちらし

とんと突きあげきりょと廻り、廻り見てし人こそ床しけれ

(卅三)いつの夕べ

何時の夕べからやら、つい彼の人になづんで、只管に深き緣しも、かはる枕の起臥、此里のならひかや、徒ら草の秋風、さそふ色とて移ろふ人の心やというたら、憂さを忘りようか、えいはいな〳〵というても性はなほらうか、跡をいふ程氣のどく

逢ふは別れと豫ては知れど、今朝の後朝いつよりつらや、袖は千入の涙となりて、恨みこがるゝ身は戀衣、せめて一夜はきても見よ

(卌)なみだ川

涙ならでは憂をばとはぬ、乾く間もなき我袖の色

おなじく

花は折りたし梢は高し、心づくしの身はいかにせん

おなじく

立田川には紅葉を流す、我は君ゆゑ浮名を流す君故ながす

おなじく

浮名立田の山路ゆけば、顔にもみぢがいよ散りかゝる、もみぢが散りかゝる

(卌一)しがまつち

恨みつわびつ、おもひを志賀の床の淋しさよ、つれなき人に見せたや庭の、柳の糸の風

難波津のみじかい芦の節の間を、濡らさるゝ身の朽果てず、扨も現に移ひくれて、夢も見ようや見まいやら、半ば咲いたか白ぎくの、比になれ〳〵尾花も亂れ、今日はふり行く時雨の雲よ、神ぞ八幡わすられぬ、袖は別れの露涙

㊆よさく

獨こがるゝ心の色々がよひ、いはで信夫の山山吹がよひ、露の玉垣卯の花重、はれぬ思ひを五月雨に、颯と薫れあや菖蒲、さりとは假寢の床の夢、短夜の夏の夜に、東雲ことふ山郭公、浮名に立ちし、せめて知らせん此つらさ、猶しも乾かぬ我袖に、颯と降れむら村雨

㊇捨小舟

まがきながらの御げんはつらや、人目忍べばおもはくばかり、袖は涙の淵瀬となりて、憂は流の身は捨小舟、せめてしばしはとまれかし

おなじく

花に戯れまた時鳥、月に愛でぬる時しもあるに、年の名殘と降る白雪と、いづれあはれ、さりとはえ、移るも浮世え、長きためしの松さへも朽つとの、扨は千歳も一夜のゆめかえ、果敢なの此身え

おなじく

憂ぞつらいぞ此里なれて、染むもそまぬも逢はねばならぬ、いつか思ひの八重霧はれて、せめて夢になりともえ、譯あるかたへ、まゝにならぬは誰が身にもありとの、それを便りに憂身をおくるえ、此年月をえ

㉖有馬

露になりたや袂の露に、消えぬ憂身のかこち草、何を種とか我思ひ

おなじく

星になりたや七夜の星に、橋は紅葉の色ふかく、掛けて願の絲の縁

㉗しら菊

くめ―汲め、久米

霜にさまよひ時雨に通ふ、袖の落葉も涙に濡るゝ、野路の棚橋こひ渡る身は、何につけても物憂きわざよ、宵は首尾なし、更けては障り、四つをかぎりの夜の關

おなじく

幾夜かはせし情の末も、いかに逢瀬のなか中川に、ほんに洩らさぬ心の底を、くめの岩橋絶えても人に、戀ひやわたらん思ひをかけて、何時をかぎりに身を投げん

おなじく

よしや頼まじあだ人心、一重ばかりか八重山吹の、たんと馴染のちかひもあるに、移りやすさの花色衣、問へど答へぬ梔子はらや、我は木幡のかちはだし

おなじく

草の中にも物思草、誰に恨みは眞葛が原や、とんと此身を捨草にして、朽ちも果てなばそれかれそれよ、緣は朝顔淺くとまゝよ、せめて逢瀬の深見草

(廿五) もろこし

秋の籬に咲いたは小萩、露の淺茅生露白露ぬれた〱、牡鹿妻戀ふ鳴く音はさ、あゝなくねはさ、あゝなくねはさいとゞ身にしむ、獨寢々々々々〱〱、悲しさまさる、袖は乾かぬ此身のつらさへ

㊁龍田

秋のたつ田に流るゝもみぢが、染めてある〱、有明の月もろともに照るや、散るや濃き紅の川波、さだめて〱〱、色より色に移るならば、戀ひ渡るたよりとものゝ、さりとは

おなじく

後の朝に名殘の袂は、濡れてある〱、いかなれば身をうき里に行くや來るや、いつまで草の何時まで、定めて〱〱、きん氣のどくなる障りもあらば、果敢なき我が通路、さりとは

㊃くしだ

おなじく

龍田山みちたどりて見れば、のうさ鹿のなん〱鳴く音は可愛や、妻ゆゑに身をやつす

⑳梅がえ

庭の梅が枝命の君に、何が惜かろぞ花一重、咲たの、さいた〱〱何がをしかろぞ花
一重さいたの

おなじく

五月五月雨涙の雨の、降るにつけてもなほ床し、獨り寢交す枕手枕、降るにつけてもな
ほ床し獨寢

㉑戀風

戀草の類ならば、葛は恨みの思ひ草、秋の夜なればなほ短夜と、逢ふ夜の空を歎いた、
何故に、身を戀風と尾花そよ〱袖の香

㉒まがき

絶えぬ思と人には告げよ、今は難波のくゝみをづくし、身を盡す、よひくゝぬるゝ我袂

おなじく

朽ちてかひなし名にのみ立ちて、浮身長柄のはし柱くゝ、よひくゝぬるゝ我袂

㊇ふじから

あれて優しき伏見の里の、雪にゆき降る呉竹の、折れさうな雪に、雪に雪降る呉竹の、をれさうな

おなじく

刈らば疾くかれ淀野の眞菰、刈れば月影が下にすむ、底にすむ、刈ればくゝ月影が下にすむ、底にすむ

㊈しほや

今日と暮してあすかの川に、のうさ幾夜なんくゝなじみも、かはればかはる世の定めなや

角おもはるゝ

おなじく

八千代ふるともかはらぬ色よ、松に藤枝の其俤を、見るに一入にしをさんしうしほらしや、兎に角思はるゝ

㊆しがらみ

絶えて逢はずと文をば通へ、文は妹背の〳〵中となる、橋となる、よひ〳〵濡るゝ我袂

おなじく

あひはちかうて逢はせはせいで、千賀の鹽竈〳〵身をこがす〳〵、よひ〳〵濡るゝ我袂

おなじく

假のねまきに薫物すれば、よしやわざくれ〳〵色となる、戀となる、きぬ〳〵濡るゝ我袂

おなじく

―西尾、三州、

を、かはして色を、枕恥し僞りがちなる我床の山、よしそれとても世の中

おなじく

うき寢つらさの待乳の山の風、夕越え暮れてさゝ小舟あゝ定めなや、床の浦波ともなき千鳥〱、絕えぬ思ひに月日を送るもあだ人心、よし逢ふまでの移り香

おなじく

あだしあだなる身は憂き枕、習はぬ程の床の露、あゝ幾度か袖に餘れる淚の色を、あゝ袂の色を、峯の紅葉ば獨りこがれて枕の淚、あはれと人の訪へかし

おなじく

憂を語らん友さへなくて、慰めかねつ我心、あゝ現なや、過ぎしつたへの其水莖の、黑みし跡を見るにつらさの、いや增す淚は誰故ぬるゝ、あはれと袖もとへかし

(十六)浮れ女

花は吉野よ紅葉は高雄、松は唐崎霞は外山、いつも常磐の振はさんさしほらしや、兎に

秋の色よき錦を、秋の錦を誰が織りて、染めも色よくそめたよ、染めもそめたよ小夜時雨

おなじく

時雨々々にぬれ〳〵て、濡れて妻戀ふ鹿の聲、色の道とて優しや、しかも浮名の龍田山

おなじく

よしや浮世の中にも人の上にも掛けてだに、何かいよしも心のまゝの、眞間の繼橋まゝならぬ

おなじく

人のいよこの上にも掛けてみよ、人の上にもかけて見よ、眞間のいよこのつぎはし、ままの繼橋まゝならぬ

㊄朝妻舟

仇しあだ波よせてはかへる浪、朝妻舟の淺ましや、あゝまたの日は誰に契りを交して色

る、みだれみだるゝ黒髪の、結ひがひなしや、またの逢瀬を何時の夜

おなじく

秋の雲間の月影床し、神ぞゆかし籬の蟲の音、枕に爭ふ曉東雲、果は明けゆく閨のひま、飽かでも別るゝ、さすが形見の面はゆ

㊹舟橋

佐野のいよこの舟ばし、さのの舟橋かけてなほ、思ひいよこの渡るを知らせたや

おなじく

春の色香の名殘も、藤のたそがれ物わびし、夏は卯の花五月雨、せめて訪へかしほとゝぎす

おなじく

志賀の唐崎つれなく餘所にのみきく小夜時雨、思ひかけては常磐の松も許さぬ蔦紅葉

おなじく

いの、絶えなば絶えよとても逢ふ夜の、有るものが何ぞのやうに玉の緒〱

ちらし

單へ重ねの契りは薄し、千代も長かれ糸櫻、そりやさうさ、結ぶえにしの糸櫻、そりやさうざ、江戸やつさ、ういて來た

⊕花笠

梅の薫の花笠嬉し、ほんに床し、月影殘りて、さりとは曙、遠山けしきの雪も少しは白妙に霞の間より、此處はうぐひす一聲を

おなじく

吾妻からより花都嬉し、神ぞうれし連三味合唄、さりとは庄五郎も一つたのむぞ、半太土佐節淨瑠璃を、萬〱段も聞かまほし、扨も揃うた連唄

おなじく

今朝の別れの鷄の音つらや、ほんにつらや、亂るゝ〱さりとは亂るゝ、ねん〱亂る

山郭公またの東雲もない物か何ぞのやうに待宵〳〵

おなじく

おぼろの月をたのみに夜もすがらながめた、はや春風薫り持來る軒端の梅はいの〳〵、あだ名や立たん交す手枕も、ないものか何ぞのやうに轉寢〳〵

おなじく

海人の刈藻に住む蟲の、われからと歎いたはや初時雨、尾花穗に出で餘りの色はいの〳〵、散殘せかし露の名殘も、ない物か何ぞのやうに秋風〳〵

おなじく

寢覺習ひし槇の屋にとぼそをおくにさ、はや木枯落葉降りしく枯野の色はいの〳〵、訪へかし人の雪の朝も、ないものか何ぞのやうに冬枯〳〵

おなじく

忍びかねたる人目の關守を歎いた、はや憂涙袖や朽ちなん獨寢の夢はいの、丸寢の夢は

ほのんやほ、雲井の鳥の一聲、閨のきやらの香睦言よ、のんやほ

おなじく

いつの有明、のんやほ、袖ふり分れしつらさに〱、最早淺茅も背に過ぎた、のんやほ
のんやほ〱、袖振りわかれしつらさに〱、最早淺茅も背に過ぎた、のんやほ

おなじく

戀は生憎五月雨、降來る涙なみだ〱、せめて訪へかし郭公、憂身を五月雨さみだれ、
降來る涙なみだ、せめて訪へかしほとゝぎす、憂身を

おなじく

夕べ〱はつねさへ物わびしきに、わびし〱千々のあはれは妻戀ふ鹿の音、黄昏たそ
がれ物わびしきに、わびし〱千々のあはれは妻こふ鹿の音

⑪水雞

水雞の鳥のよすがら敲きあけて置てさ、はや五月雨雨に色增す菖蒲のことはいの〱

り、そりやあふ

(十一)のんやほぶし

晩にござらば肥後鉈さいてござれ〳〵、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ〳〵〳〵、肥後鉈さいてござれ、晩にや梅の木の枝おろそ、のんやほ

おなじく

戀は憂きもの、のんやほ、待宵きぬ〴〵つらや、つらい逢ふ夜ながらも我涙、のんやほのんやほ〳〵、待宵きぬ〴〵つらい〳〵、逢ふ夜ながらも我涙、のんやほ

おなじく

春はござらば、のんやほ、三吉野よしのへござれ〳〵、いつもながらの山櫻、のんやほのんやほのんやほ、みよし野吉野へござれ〳〵、何時もながらの山ざくら、のんやほ

おなじく

思ひ掛けては、のんやほ、雲井の鳥の一聲々々、閨の伽羅の香睦言に、のんやほのんや

鹿の妻あはれや、妻戀ひてよる〳〵、さりとは終夜獨りいよしもなき明かす

おなじく

月になれ〳〵果敢なし、幾度か袂の露々〳〵乾かでものや思ふと、暫しさへ須磨のうき寢をとへ、こととへ友千鳥、うら〳〵〳〵〳〵定めぬ鳴音あはれや、夜もすがら

㊉長崎節

しんきなしめそ木綿車、かけて廻り逢ふよる〳〵は、そりや逢ふよる〳〵は、掛てめぐり逢ふよるばかり、そりやあふ

おなじく

こがれ〳〵て唐土船の、袖に湊のよる〳〵は、そりや逢ふよる〳〵は、袖に湊のよるばかり、そりやあふ

おなじく

桐の一葉のなほそれよりも、脆き涙の露々〳〵よ、そりや逢ふ露々〳〵よ、脆き涙のつゆばか

かたひ—片日の意か

おなじく

恨み寢る夜は夢もつきなく又恨み、どうやらかうやら明けて見し俤の、いづれ夢やら現やら、どうやらかうやら明けて

㊈伊香保節

花になりたや、ほんほとんどどつこいしよ、よし〳〵〳〵吉野の花にいよしも、ほとんどえ、咲いて亂れてほんほとんどどつこいしよ、露々〳〵櫻の下露、落ちていよしも、ほとんどえ

おなじく

夏は垣根の、ほんほの〳〵あやなしや、卯の花白々〳〵明けても、いかに訪ひ來ぬほとゝぎす、かたひ夕だつあとすゞしき小村雨、梢に蜩蟬のね、いづれ夕べはたゞならぬ

おなじく

忍ぶ涙の洩れてはあやにくや、いつ〳〵〳〵〳〵何時しか浮名立田の夕時雨、濡れて小

㊇わきて節

花と雪とはどれが吉野のながめやら、どうやらかうやらわきて色分ちなく、どれが吉野のながめやら、花やら雪やら分きて

おなじく

荻と萩とはどれが露やら嵐やら、どうやらかうやらわきて待つ夜の袖は、どれが露やら涙やら、どうやらかうやらわきて

おなじく

須磨と明石はどれが月やら名所やら、どうやら斯うやら分きて色わかちなく、どれが月やら名所やら、どうやらかうやら分きて

おなじく

あだし情はいづれ果敢なき思ひ川、どうやら斯うやらわきて逢瀬もあらで、何れ果敢なき思ひ川、どうやら斯うやら分きて

おなじく

よしやわざくれ身は朝顔の、日影待つ間の花の色、恨みられしも恨みし人も、共に消えゆく野邊の露

おなじく

あだし此身を煙となさば、とても淺茅の里近く、小夜のころもに香はとゞまりて、せめて見ぬ世の形見とも

おなじく

分きてつれなき人ゆゑ我は、暮す日影の朝顔か、露は袂におき餘れども、かひも涙の身ぞつらき

おなじく

獨りとゞめて恨みしかひも、元の水なき隅田川、さても流に身はくれくれて、今は藻屑の捨小舟

いなさ細江―千載、清輔「逢ふことはいなさ細江のみをつくし深きしるしもなき世なりけり」

㊅玉の緒

なんぼ仰しやつても、逢はぬつらさを見て給れ、ほんに添ふ身ならば斯うした勤はせまいに、最早玉の緒たゆるばかりの憂枕、いや待久し一夜さへ、餘所にゐられぬわが思ひ

おなじく

なんぼおしやつても譯のわるいが氣のどく、ほんに添ふ身ならば斯うしたことをしてくれそ、最早勤もまゝな上から、己しだい、いや待て暫し我心、思ひ待ち〳〵まち明かす

㊆加賀ぶし

勤めもの憂きひと筋ならば、疾くも消えなん露の身の、日蔭しのぶのよる〳〵人に、逢ふをつとめの命かな

おなじく

いつしいづれの日に立ち初めて、いなさ細江のみをづくし、朽ちも果てなば浮名もともに、同じ濱名の橋柱

ぞ人の問ひし時露と答へて消なましものを」

夜日と―夜も日も

㈣芦分舟

難波の浦によしや思はじ芦分ぶねの、こがれ〳〵て逢夜もつらや、せめて別れの鐘ばかりかや、未だ名残も盡きせぬ夜半に、鷄もつらいは告げ渡る、ういこの〳〵憂きわかれ、後の朝の文枕、暫しな傳へん荻の葉の、そよとばかりの便もないか、恨みなけれど、つれなや餘所に移る色香と微塵も知らで、只變らじと祈る心は、いつまで草の何時も苦しき身を憂き床に、夜日とねもせで迷うたえ

㈤深山路

馴るゝみやまぢ名も吉野川、ふかく絶えせぬ思の憂さを、いはで重ぬる八重山吹の、夏は卯の花咲き初めしより、軒の橘薫るも床し、初音高間の山ほとゝぎす、浮名高橋戀ひわたる、身は其東路の常陸帶、結ぶ契の緣にしはながと、秋は來てしも宮城野の風、落つるに脆き花桐の、戀の道芝猶わけがたき、露の夕霧立迷ひつゝ、冬野に強き柏木も、獨りこがるゝ色をへ

㈡高瀨ぶね

由緣もとめて若紫の、草の籬を今來て見れば、花か紅葉か其俤の、見えつ隱れつ木の間の月の、浮氣ならねど身は高瀨舟、こがれこがれて、燒くや藻鹽の夕煙、此身をこがすえ

おなじく

君が心を引かるゝ程は、引き見んとは思へども、定めなの世や飛鳥川の淵瀨、深き思を色の一葉に載せて、浮きぬ沈みぬおもはく、馬はあれども君を思へばかちぢ、さはいひながら戀の重荷を何に載せてやらうぞ、こゝを木幡の里になしてほしやの、心身にも餘つた

㈢ありあけ

世の中の〳〵嬉しきうちに、勝りてつらき逢夜の床よ、我も妹背は有明つぐる、鷄の鳴音に後朝の、袖の白玉何ぞと問はど、露とこたへて消えぬ命をさ、おもひは沈む

馬はあれど―拾遺、「山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば」

袖の白玉―伊勢物語、「白玉か何

狐にはめなで―伊勢物語、「夜もあけば狐にはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

㈠飛鳥川

戀といふ字はむくつけだにも大宮人は、いとまなき戀路、櫻かざして木下蔭の、露に濡れにぞぬれし我小夜衣、夕べ〳〵は飛鳥川の淵瀬、底に淺いぞ濃いむらさきよ。よしやこがるゝ澤邊の花に、煙くらべん來いよ〳〵螢、薫をしたふ芝蘭のもとに、狐にはめなで、其鷄のみだるゝ比は、早きぬ〴〵の別になれば、花も雪も紅葉のあはれ、冬野の契りまでかはらぬ色をえ

おなじく

風も懐かし夕べの空に、袖の薫りもまださめやらぬ、深き緣しのかたさまなれど、あだし此身もまゝにはならぬ、月日程へて昔の譯を、問ふは嬉しや、さりとは命、いつそ露とも消えなば消えよ、心までくる涙の川に、流果敢なきうき世の勸め、染むもそまぬも枕の夢よ、覺めて朝のつらさを知らば、たとひ丹波のしないた鬼も、さうしたことの寄るせはなくと、せめて便を松の葉の變らぬ色をえ

十七　ころく

十八　高尾（たかを）

松の葉 第三巻

端歌目錄

朝い—朝寢

ひとみ—蔀（シトミ）の訛

こまもすさめず—古今、「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」

東雲々々いつ夜が明けた、朝い久しき仇枕、下し籠めたるひとみ戸の、中の御座に端居して、文の腰張影暗く、外面にしげき市人と、共に賣來る芥子の花、江戸町はやき身拵、地白に網のつれ模様、目に掛れとの風俗や、符牒ことばの揚屋入、藤や三浦の二むれに、乘物忍ぶ内床し、問へど答へぬくちなしの、こは誰やらん花衣、しんてう遲き其中に、こまもすさめず刈る人も、絶えて年經るゆかまさへ、生先床し新太夫、その外みやび由ある女郎の、時雨あだしの名寄草、人の結びし捨言葉、書きもらさなん藻鹽草、いつの比より右手はうすく、ひだり勝なる色人の、樂みきはめ東屋に、兵庫津の國花松屋、夕べ轟きまへ渡り、氣をとり上す（アヒノテ 二リ）すが搔や住なす床の一構、しかの投入違ひ棚、梨子地の硯玉櫛笥、ふたり寢よとのやよや文枕、皆くれなゐの三つ蒲團、雲を疊んで堆く、いち爐にたぎる松の風（アヒノテ 本テウシ）殊に色ある三味線や、人立返る床の内、折り敷くござのかた〳〵に、語り殘せし短夜の、とても寢られぬうき枕、蚊帳のひとへの薄月洩るゝ洩るゝ、もれて淋しや終夜ともになかるゝ郭公

刈萱—借るにかく

ありと、紅葉重ねのその薄様に、書いてやおくらん文見草、人目忍ぶの我涙には、乾く間もなき尾花が袖も、引かば靡きやれ、さりとては葛のうらみの數つもり來て、いつかは君をまた宮城野の、萩の下葉の露にしつぽと濡れて、何ともなう荻吹く風の便りをも、聞くやと待ちし戀心、亂れみだるゝ難波の、芦の契はつらい浪のよる〳〵、さんさみをづくし思ふはくださうな

(四九)こひ草

思ひそめたよ濃き紫の、色に出でじとつゝむに餘る、袖に涙はのん、さてまことにこぼれぞ掛る、戀慕れんれつれ アヒノテ 知らぬ昔は餘所なるものを、今は身に知る愛別離苦の、憂さを思へばのんさて、まことに情もつらや、戀慕れんれつれ アヒノテ 召せ〳〵草花、何々ぞ、妻待つ夕顔白菊の、花さき初めて美人草に戀草、ずんど秋風の立たぬ間に、靡かさんせ女郎花、お差合はござんせぬかいの、ちよつと刈萱

(五十)東雲

命は勿論さ、六つ昔の袖薫る、花橘の夕暮に、山郭公鳴連れふるはな、ふるは過ぎにしさいこのは人懐しや床しや アヒノテ 七つ生中馴れて悔しや、馴れまいものを、逢へば別れの鶏が鳴く、夜は東雲か、八つ山伏姿に様をかへ、兜巾篠懸錫杖を腰に指いて、京洛中の花盛り アヒノテ 一重二重や三重八重、九つ戀に來ましよか、小原しづはら八瀬の里、柴めさぬか露踏分けて、十でとうからちらめく星の數々曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろり〳〵とする時は、扇おつとり刀指いて、太刀の柄に手を打掛けて、往のよなせ戻らうよというては袂に取りついた、いとしけりやこそしとゞ打て、憎か打たりよか、手がそれて

なせ—はなせの誤脱か

(四八)あき艸

秋は常さへもの淋しきに、思につれて亂るゝ心、露も涙も爭ひかねて、戀の路の邊踏分けがたき、草の色にも染む身はつらい アヒノテ ちらと見初めしゑいさん〳〵女郎花ゆゑ拙き心かのん、扨まことにはや思ひ草、身は朝顔の淺ましながら、せめて靡かんこともや

大宮人は云やー新古今、赤人「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ」

槙の島には晒す麻布、賤が仕業は宇治川の、波か雪かと白妙に、いざ立出て布さらそ アヒノテ 鵲の渡せる橋の霜よりも、晒せる布に白みあり候 アヒノテ のう／＼山が見え候、朝日山に霞たなびく景色は、たとへ駿河の富士はものかは、富士はものかは アヒノテ 小島が崎に寄る波に／＼、月の光をうつさばや／＼ アヒノテ 見え渡る／＼伏見竹田に淀鳥羽も、いづれ劣らぬ名所かな／＼ アヒノテ 立つ波が／＼瀬々の網代木さへられて、流るゝ水をせきとむる／＼ アヒノテ 所がらとて／＼布を手ごとに、槙の里人うち連れて、戻らうやれ賤がやれ

㊼かぞへ歌

ひとつ人の迷ふ戀といふ字は、むくつけだにも大宮人はいとまなき戀路、櫻翳して木の下蔭の露に、濡れにぞぬれし我小夜衣、二つ二葉の待乳山、松の嵐に其夜の夢を覺させ、別路の憂きやつらさを、三つみ吉野々々へ／＼ござれ、いつもながらの山櫻のんやほ アヒノテ 四つ世の中の人の心は、品々にわかてど、五つ／＼は色といふ字に引かれては、消ゆる

の、われから梅の色懐かしく、思ひつゞけて書く玉章の、便求めてやり梅や、間を隔つるかきほ梅 アヒノテ 本テウシ ながめ得ならぬ庭梅の、花の俤霞の間より、ほのかに見ゆる朝日め、色をも香をも知る人ならば、よしやとがめん枝は折るとも

㊺小笹

しなへやしなへ小笹も風に、そなた忍べば人が知る、あゝ餘所には咎もないものを、見しよりもあこがるゝ、及ばぬ戀にいとゞ思は彌増して アヒノテ こぼる涙の明暮に、乾く間もなき〳〵我袂 アヒノテ 文玉章の數をつくせど、つれなき君に見せたきものは、風に靡けるしほ屋の煙、荻萩芒まだもござるよ、えいをみなへし、引くに靡かね草木もないに、見せたや庭の柳の絲の、柳のいとのえい風に靡くをの、叶はね浮世雲に梯、及ばぬ戀に思ひみだれて、えい何しよぞの、とかく浮世は氣まゝがよいぞいの、勿論さうな、そりやさうさ

㊻晒

戯女の―萬葉一「たをやめの袖吹返す飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」

君ならで―信明「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」

や散々に、おさらばへ、これちかのうち本テウシいとしけりやこそしとゝ打て、憎か打たりよか、何んでもこれはあいたく、潮來出島のこん小手招き、まねく袂に文や玉章アヒノテ實に楓橋の夜の市、泊々宿々の窓にうたふ群女は、客を留めて夫とす、別れあれば待つ暮あり、品こそれかれ戯女の、袖吹返す飛鳥風、昨日と過ぎて今日と暮れ、武藏の國なる新吉原がとまりぢや

㊃梅づくし

君ならで誰にか見せん此花の、色はさまぐ櫻梅、八入紅梅あさぎ梅、地は薄色に鹿の子梅、きなす姿はまだいはけなき、小梅振よき信濃梅、品と拍子をとりぐに、數へかぞふる手まり梅、落ちてこほれてはらくと、空に知られぬ霰梅、振仰見ればをちこちの、野梅山梅咲きそめしより、初音床しき鶯の、羽風に靡く枝垂梅、雪かあらぬか白梅の、初花衣八重梅や、誰が袖ふれし匂ひ梅、春や昔の思はく深き谷川梅よ、さりとては心筑紫の豐後梅三下リアヒノテこがれくてゆく舟の、泊定めぬ島梅や、海人の刈藻に住む蟲

ひしやく—遊女の一種

小歌淨瑠璃だてらしく、實に數々の戲も、聲ちり〴〵に別れゆく、我通ひきと吹く嵐、餘所には告げそ朝がらす

(四三)色　香

定めなき色香に浮かれ國あまた、かたい枕も垢づく衣も、なりやつれたる身のゆくへ、懺悔に語り申さん、抑江口神崎は名のみ殘りて風俗なし、野上の里は草枕、朝妻舟は楫枕、誰こがれけんあと知らず アヒノテ つかひ揚げたる島原を、都の西に入日影、移る心に焚付の、柴屋町には火も立てず、化粧かはりしづし君を、はる〴〵こゝに三越路や、鹽津海津にどれ〳〵それ、あれ〳〵針が浦、釣するあまのうけなれや、心一つを定めかね、敦賀小萬の吸付煙草、きつくなづめば目もあはぬ〳〵、目がまはる、女郎と契らぬ旅人には、夜著も借さいで寺泊、お草臥なら寢まるべいとて、わさゝの酒をしひざかい、四の五のづしを出雲崎、おなじ流の酒田のひしやく アヒノテ 底眞實から 三下リ 解けてちんちんちぎりの、幾夜も結ばん常陸帶、掛卷くもへ水戸の藤柄枝川躑躅、明日のわかれに

望月の云々—西行、「願はくは花の下にて春死なん其如月の望月の頃」

糸による云々—貫之、「糸によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな」

その小櫻の望月の、いつそ消えたや花の下露

㊂玉くしげ

玉櫛笥ふたつの色の誠うそ、わけ賣る里のよすがとて、あだし言葉の藻鹽草、煙幽かに飛び亂る、螢の宮にあくがれし、その玉葛假に今、いかなる筋の糸による、ものならなくに別れ逢ふ、戀慕のしらべほのかにも（アヒノテ）三下リ 作り聲して呼子鳥、覺束なしや隱し君、其數なりしもろ人も、名のみ殘りて今はまた、昔を忍ぶ夕まぐれ、顏に扇のいやらしく、目に入る色の風俗と、時の媒さそひ來る、流の誠汲みて知る、茶やのしなづまじつとも知らで、花の光も潔く、みるめに濡れし鹽衣、海人の仕業もないものか、何ぞのやうにさりとては（アヒノテ）本テウシ 宿も定めずはしたなく、宵の睦言餘所になり、氣は短夜の長枕、しかけ言葉の口舌ども、餘所に下紐解けぬ心のあれかし、此身を捨てゝ逢はうにたいこ無首尾の假寢して、月を越しても憎からぬ、咎をば酒に逢瀬の末、空おほれせし後朝に、八聲の鐘と鳥騷ぐ、五丁の天の曉に、歸るさ繁きたはれ男の 二上リ 己が囀りさまぐ\に、

ぬるともいよ花の雨―拾遺、「櫻狩雨は降りきぬ同じくはぬるとも花の陰にかくれん」

に鬱金に淺黃に鹿子、地紅や地紫、けんたい郡內鳶八丈アヒノチこれの小よねにとんとつとんと絆された、やすい事、其方でおうちやれ、ちよん〳〵おけさおきのとなかに、とんととよんとどつこいいよすて〳〵小舟の、すて〳〵られては立ち申さぬアヒノテ扨てそれそれの幕の內、茶の湯松風染模樣、難波に刈るや葭蘆の、土佐を語らぬ幕もなし、都のつての一ふしは、柳櫻をこき交ぜて、淺黃帷子黑小袖、おなじ岡邊の松にはあらで、其里人の風俗も、名は懷しきやりしゆやり娘、姿形は橫太り、みどりたよりが髮結ひかへて、野暮に身をなす抱帶、禿夫々髢が落ちた〳〵、おとにも浮名の霰根ざさ根引の末たのむ、ういこの〳〵身の行方、江戶やつさ三下リ見付箱崎そつちの客衆と、こつちの客衆がくると、やしよ艪かいを早めて、一丁の二丁の三丁の早き御舟、色の湊へやんれ押せやれと、衣紋江戶やつさ、嵐待つ間の花よりも、しつとん〳〵しつとん〳〵しとんしとよんしとよんとん〳〵〳〵〳〵、時めく里の家櫻本テウシ今日も暮れぬと告げわたる告げわたる、恨み重なるあどふの鐘、人は散り行く群烏、われはぬるともいよ花の雨、

花の香に云々―新古今、貫之の歌

うかりひよんなる寢覺かな

四 はな見

花の香に衣は深くなりにけり、木の下蔭の風のまに〳〵、八重の霞に彌たかき、惠みになにか上野山、花と戀とに憎まれて、ほんに〳〵ほに〳〵名に負ふよすが、鐘撞ぼん樣見よや、濁世の野暮すらに示さん爲に御佛の、濡有がたき御姿、半ばは花に隱れ在す、風に漂ふ幕の内、てりこそてりぬかてりましこ、鳴音かはゆき山雀の、己が祕曲の羽も輕く、よい〳〵〳〵やさ、ひよくりひよ、親父が腰に瓢簞ひつ付て、ひよ〳〵ひよつと浮かれた、花ゆゑにひよくりひよ アヒノテ 峯の嵐とな連立ち通ふ、ひこそ女房はだてこき〳〵で、小褄搔取りしやら〳〵行きて、これこちの人、おう見ゆるかの、ようぬけまうす、小笹篠原根笹やかくい松の尖杌でな足突立てゝ、うづきづき〳〵うづきにうづき、卯月八日の花よりだ、お名をばえ申すまいよの、しやん〳〵、しやんと指いたる長刀、花か蝶かと打群れて、櫻ちり積む菅笠やさし、ほんに床しお側に引きそふ伽比丘尼、紺

ひやうごのふろめ—兵庫の風呂屋女

花踏んで云々—朗詠、「踏花同惜少年春」

朝ごみ—朝廓の門の開くを待ちて入込み遊ぶこと

袋町、おつとさしこめおふねひやうごのふろめ立別れ、室の泊にうき身を寄せて、鞆の浦よねそこ〳〵に、我から濡らす袖の海、安藝の宮島みやひして、難波くづしの三つの糸、しんき〳〵篠竹な、かけて思ひをさしよよりも、内裡小島のさゞれ魚、うきをまじりの櫻魚、さごしいとよりこち〳〵と、呼べば汐の目をなぞ賣る アヒノテ 波の枕や下の關、なほ行くさきは不知火の、心筑紫にこひわたる、唐土船のよるとなく、晝ともわかぬ戲れ女の アヒノテ 玉の襷の花をどり、柳の眉の眞圓ござれ、まんまるござれ、十五夜の月の輪のごとく アヒノテ あゝ現なやあだまくら、遠くも來ぬるものかなと、過ぎこし方を都には、司位も夫々に、身狹大袖ゆき短か、引扱紙や二つ折、また二つ櫛しどもなく、雪の素足の花踏んで、おなじく惜む後朝や 三下リ 又朝ごみと入亂れ アヒノテ 其方の客衆と此方の客衆が來ると、やしち一丁の二丁の三丁の早駕あふむ取持、やんれさいづれあふむ憂さつらさ、誓紙誓文實を見しよに、しつとん〳〵しつとん〳〵とん〳〵〳〵、とうから内證吹込だ 本テウシ 戀の嵐にはつと吹上大盡ぢや、さつてはそれからそれ次第、

吉三に物申がござる、何處からごさつたいの、散茶町から參りたが、おうけぎりをとりましよ、其は何時のことかといの、師走の事ぢやいの、つがもないことゆつてくるゝな、書立てゝ來たれど、詮議ばかりで、のほほん〱のんほのう、いよ〱埒がない、夜が明けた、無首尾じまひの歸るさ、つらや太鼓がどんで、あとさへ歌の音を打出いてまたまゐろ

㊵あだ枕

生憎の寡鴉に朝覺めて、誰を待乳のやよや麓川、三つ艪二つ艪舟もよひ、波はしたなく過ぎがてに、また睦言の薄訛、枕の床の寢ざめ歌、耳に止まり物悲し、仇にはせまじ移り香の、あゝ形見なる、あだ馴衣旅衣、日數かさねて駿河なる、賤機山のをりに觸れ、次でをかしき安倍川や、來ぬ夜契らん彌勒町、又神風や神風の、伊勢の古市八十瀬川 アヒノテ 此處も戀草柴屋町、とまるや百舌の撞木町、鉦を叩いて佛にならば、なじよ〱木辻鳴川、ならずとなると阿波座新町越後町、一夜二夜の堺の津守、明くるわびしき

をり―折、織

尻よ—尻をの促聲
ざり—砂利
ひんこひ轉び—ひきころび

尻よはせ折り通ひし路の邊、ざりとる池の水鏡、片枝枯れたる皂莢も、やれ〳〵戀に痩せたか、そちや異な姿、稻荷の岡に馬はあれども、君を思へばのう手編笠、土手の松原誰ゆゑ、のほんほ通ふ、ひんこひ轉び、跛ひき〳〵ゆく程に、此面彼面の中の町、逢瀬逢瀬にかはらじな、知るも知らぬも秋の夜の、月待つ程の今宵しも、かゝすいしやうして檻の、よるべ〳〵の契かな、揚屋の燈數照りて、母屋にかさねし折鬚籠、芒に出す銀月も、ものずきふりてまたをかし、晝の御座にいぎたなく、醉臥すをとこ月しらず、行水がへり待ち受けて、白波男龍田山、忍ぶ心の生憎や、曇れと月をかこつらん、のどやに運ぶ物しげく、間遠にあめる提灯も、今宵はなくて過ぎよかし、くつわの暮のまり過ぎて、遣手の宿の念佛講、二丁目あたりに菅搔絶えて アヒノテ 初音三井寺唄ふらん アヒノテ 月の照るやら曇るやら、身揚り暗き女郎の、仇目にかゝる夜這星、約束なしの浮れ人、友の浮れにうかれ來て、どれでも〳〵振に聘ばれし新造の、髮そこ〳〵に結ひなして、八聲に近き揚屋入、枕とる間に明けぬべし、欠伸勝なる閨もあり アヒノテ 隣座敷のふと〳〵

千歳、西尾、薄雲、きよはし、柏崎、かをる、こにし、やまと——遊女の名

テ衣紋坂こえて鐘の聲、いで其比は神無月、くるわ〳〵ずまひは涙で暮す、野分つれなや、吹きや散したるあつたら小萩をすゝき、花に醉ひまた紅葉には、醒めてたどりし土手颪、春にかはりて袖寒むや、提灯暗く行き通ひ、見知り越なるかすり唄、諸人のなづむは色ちとせ山、雲は薄々西をの空に、いり日なほ照る虹のきよはしうい女郎、霜も霰もひつちこないて、嵐につよき柏崎、かをるくらべん東と京と、いづくはあれど陸奥の、千賀のぜんせいそれにはかはり、こにしやまとが藻鹽たれ、下り立つ田子のうらめしや、けかようおぢやろぞアヒノテ足音荒くこゑ上がれ、大門いまださゝずして、茶屋の半蔀たれの格子アヒノテ誰か羽織被いてよね口說く女郎くどく、受切胴切一つがひ、笑止なるかならぬか戀の中の町

㊈月見

或はしらゝ吹上和歌の浦、住吉難波高砂の、尾上の月の曙を、ながめて歸る人もあり、我はそれにはひきかへて、昔語りと名に立ちし、色のむらたのちゝうじやうの、步でやれ

の繁ければ、籬ながらの御げんと言へど、咎められてはなりませぬ、ういことういこと、

そりやさうさ、江戸やつさ浮いて來た

㊼香盡

六十一種の名香は、法隆寺、東大寺、逍遙、三吉野、紅塵、枯木、中川、法華經、花橘、八橋、園城寺、似たり不二の煙は、菖蒲、槃若、鷓鴣斑、青梅、楊貴妃、飛梅アヒノテ種ヶ島、標滲、月、龍田、紅葉の賀、斜月、白梅、千鳥や、法華、老梅、八重垣、花の宴、花の雪、名月、賀蘭子、卓、橘、花散里、丹霞、花筐、上は薫り、須磨、明石、十五夜、隣家、夕時雨、手まくら、有明、雲井、くれなゐ、初瀬、寒梅、二葉、早梅、霜夜、七夕、寢覺、篠目、薄紅、薄雲、上り馬、とかく伽羅の煙と命の君は、とめても幾夜、いくよ留めてもとめあかぬ

㊽時雨

なら松の葉の落ちそめて、夕影白き待乳山、時雨々々に鳴く鴨の、聲も氷るや干潟路アヒノ

君來ずは―古今集の歌にて末句「霜はおくとも」也、此唄も例の遊女の名寄なり

深やぼ―深養父の地口

(卅八)小むらさき

君來ずは閨へも入らじ小むらさき、我元結に霜置くと、又のたのみを夕霧や、因幡の山の峯よりも、移しや植ゑし唐崎の、松の緣もこながとや アヒノテ 身は浮舟の波の紋、巴の君やこがるらん、西を遙かに眺むれば、日影傾ぶく森見えて、金龍山とはあれとかや、譽れ名高き異國まで、楊貴妃虞氏君李夫人も、これにはいかで勝らんと、おもひ寄るべの波枕、君に逢瀨の波まくら、片しく袖の乾く間もなき沖の石 二上リ 難波入江の身は捨小舟、しづむ思ひは我ひとり、それはへ飽かぬ別に袖引きとめよ、宵のなさけに醉ひうかれ、河内通に生駒山、其名高雄ののう若楓、見んとばかりに契りつゝ、焚殘したる薄雲や、伽羅の煙の薰るは神ぞ思はく、薰るは神ぞおもはく アヒノテ 姿を見れば淸原や、深やほなりしおてき達、浮世を忍ぶ目狹笠、雨は降らいで戀がふる、身は八橋のさわやかに 三下リ 著爲す裳をかいとりて、我ふる妻はいよなほいとし、やれなほいとし アヒノテ本テウシ こがれこがるゝ身は對島笛、戀の音取りのおのづから、君と我との中遠し、とかく人目

逢瀬—負せにかく

逢瀬の、とかく人こそつらけれと、うらみの葛の玉の緒の、絶えなばたえよアヒノテ扨も命はあるものかアヒノテ黄昏時の軒のつまに、餘りてかゝる夕顔、花をしるべに尋ねんと、もの言ひよれば、手になれぬ蓮の浮葉よな、情に染まぬ露のなさけに

(卅五)うきね

うき寝の床にこと訪ふは、枕にかゝる涙なり、せめては夢になりともまどろめば、短夜に山郭公消息れて、はや夜が明けた神ぞつらいよの、こがるゝ憂身の消えもせでアヒノテさても命は存へて、晝は終日なき暮し、夜はアヒノテよどこにふし沈む、槇の扉を打つ村雨や、梢に戰ぐ松風か、契り置かねど果敢なやな、君が訪ふかとおどろかされて、いとゞ涙に目がくれて、壁に背ける燈火の、影幽かなる曉の鐘の聲アヒノテつく〴〵と聞く時は、とかく叶はぬ世の中に、ふつつと思ふまいとはおもへ〳〵ども、又捨てがたき過ぎし別れに、逢瀬といひし言の葉をわすれまい、此世はさて置き後の世も、のうさてな、逢見ての後の心にくらぶれば、かほど物をば思はじものを、昔戀しやな、今の身や

いが思うた振して袖引くな、語りつゞけて行く程に、餘所の見る目も恥しや

㊷東山八景

見渡せば東山の春の景色や、祇園ばやしに吹く嵐は、山市の晴嵐と疑はれ、河原おもての眞砂の色は、江天の暮雪も斯くやらん、面白の花の都や、地主の櫻にしくはなし、鴨川の流の末に行く船は、遠浦の歸帆か、冴えわたる淸水寺の鐘の聲アヒノテ遠寺の晩鐘のひゞき、それ白河の洲崎に翅の散亂すは、平沙の落雁とも謂つべし、さて靈山の月影は洞庭の秋の野、これにはよも勝らじ、扨また漁村の夕照は釣垂れて總角にあそぶものを

㊸夏草

夏は夕べの身の思なる色に心は深見草、露は袂のいとまもなしに、羨しくもうき戀の、よは知られつしらぬ顏よ花アヒノテ立ちも放れぬ君がおもかげ、あふさきるさの淚の河に、黑白も分かで泣きしづむ、底の玉藻のいはで茂るも、餘所目々々忍ぶの小車に、通ひかよはゞ關守も、一夜は許せ手枕の、塵を拂はぬ常夏の、韓紅の袖の香も、花橘に咎は

常夏—床にかく

千夜を一夜に―伊勢物語、「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥や鳴きなん」

きわずみ―氣はずみの誤か

卌七　七夕

夏果つる扇と秋の白露は、いづれか先におきぬらん アヒノテ 年毎に逢ふ夜待ち得したなばたの、逢はで寢る夜は袖のみ濡れて、降るは涙か身を知る雨か、かけし情は鵲の、渡せる橋におく霜の、實に面白や今宵しも、月は冴えゆく秋の夜の 二上リ 千夜を一夜になせりとも、名殘はつきじ今更に、ことば殘りて鐘がなる、鷄も鳴き候、あたゞしんきや氣の毒や、とかく浮世はまゝならぬ

卌八　ひき車

さらば引かんと夕露の、濡れたとり態さらりとやりて、引かばお靡きやれ、えいさらにさよいよえい、花とならば散りかゝれ、おん身は紅葉の色よのう、日かげに添ひて色増る、えいとな アヒノテ さて世の中はな、世の中は定めなき身の萍の、引かば靡きやれ散らぬ間に、やんれひく〳〵、引くは只、濱で網ひく、山で引くは大石、胡弓三味線鳴子の繩も、引く殿さまがきわずみ、やれ袖を引く、都の牛は車を引きやる、引きやるはよ

よる―寄る　夜
こひ―來い、戀

深見草―牡丹の異名

衣、八重一重さき亂れ、げに九重のたぐひなき、色も殊なる櫻花、粧ひゆゝしく見えにけり、扨その次の島臺に、松と竹とを植交ぜて、千代をさへづる雛鶴が、汀の方に巣をくひて、谷の流に龜遊ぶな アヒノテ 賤の緒手卷くりかへし、よるこひ〳〵よる戀さまよ、人の情はよるにこそあれ

(卅)波まくら

皐月まつ花橘のかほよばな、見るに心の深見草、深き思の憂さつらさ、色に出さじと忍ぶ草、しのぶかひなきいよ陸奥の、壺の碑かくぞとも、岩根の山の岩躑躅、いはねど人の戀しき物と 二上リ 恨みながらも月日をおくる、さても此身はあるものか アヒノテ 神ぞつれなき〳〵命かな、さあ〳〵なにかへ、とは思へども情に隔つる袖あらば、賤か伏屋に月は宿らじと、夕べにそよと籬の、露吹風のおとづれに アヒノテ 傳へしかひや有磯海、ちん〳〵ちり〳〵磯打波に、とても濡りよなら諸共と、深き逢瀬の浪枕、交すばかりの荻の上風、萩の下露

千よ—花の千よを千夜にかく

節々—世々、夜々にかく

賤のおめ—賤の女をのべて言ふにや

もしたり、あら恐ろしの誓の詞、この行末を何とせん、可愛がらんせ流れの身

(廿八)花の宴

よしや吉野の花より我は、其夕暮の折からに、垣間見えにし俤を、忘れもやらでうかうかと、移る心や紫の、色に出たよ恥しながら、花によそへてやる文を、見よかし〳〵散らぬ間に アヒノテ いとゞ心のいよつくし船、やる方分かぬもの思ひ、文の返しもいつとなく、待ちしかひある今日の日も、はや入相の花の宴、逢うてぞ今宵新枕、心とけたよはやいつの間に、一夜ばかりか桐が谷、八重も千よも神ぞかはるな、かはらじ、我も花には嵐、よしや吹くとも〳〵契たえすな

(廿九)いく春

幾はるの眺はいつしかはらねど、わきてのどかに照る日影、契は竹の節々こめて、君と二葉の松もろ共に、枝も榮ゆる若緑、仰ぐにあかぬ時を得て アヒノテ されば怪しの賤のおめさま〴〵の造花、色を盡してさゝげけり、まづ咲初むる梅の花、いとよわく香も深き花

明くる侘しき—拾遺、「岩橋の夜の契もたえぬべし明くるわびしき葛城の神」

さゝ—酒

むいき—同情や察しのなきことをいふ

らぬ山々は、名のみして明くる侘しき葛城山よ、夜の御げんに言葉殘りて別れ、さらば〳〵にのう歸る山、君が心の知らせはせねど、亂れて今朝は黑髮山に、つたふ涙の袖振れ山よ、袖をふる〳〵振りやるはよいが、わけのある身の袖ふるな、ふる妻いとし

㉖夕され

嬉したま〳〵袂にかゝる、さゝは小藤の花の露、つゆに心のいつしかみだれ、秋にはあらぬ春ながら、いとゞ思はいや增り、亂るゝものは青柳の、絲はものかは中々に、花におき伏し萎るゝ此身、此夕されの一盛り、折らば今折れ散らぬ間に

㉗川たけ

其樣ゆゑにぞみだれ髮、解きし下紐かず重りて、無理に實からいとしゆてならぬへ、ややともすれば閨のうちより、手を扣いては水くれよ、夜は何時ぞ、歸らにやならぬ、急かせ言葉のむいきの時は、神ぞつらいは勤のこの身、心を配りて氣をとりて、限りもあらぬ玉づさを、夜明けぬうちに認めて、こゝや彼處とやり繰るつらさ、恨みられては恨み

江戸―穢土にかく

きてこそ見たれ―來、著の兩意

しゝま陰―島陰

釣するよしの―釣するよしのの誤か

いかにせん、兎すれば恨み、斯くすれば在がひ知らぬ世の中に、江戸をば厭ひ、いづれともこれをまことに大磯や、旅で憂いものは入相の鐘よさ、山路を行けば鹿の聲、富士のお山を後に興津、前には蒼海漫々とはても無く、嵐につるゝ夕浪の、打のけ寄せつ立つ波に、末をいづくと遠江、濱名の橋を打渡り、左手や右手のながめして、七瀬や八瀬や八十瀬川、ふかき思ひはみの尾張、きてこそ見たれかさ寺や、げにいにしへも我ごとき、もの憂き旅のくちずさみ、一首はかうぞ詠じける、實に今日ばかり曇れ近江の鏡山、旅のやつれの顔の見ゆるに、涙の雨の守山、露にしつほりしつほり濡れてこそ行け草津の宿よ、連もなぎさの捨小舟、しゝま陰より艪の音が、からりころり、志賀のかん唐崎の松づるきづる、からころりと漕出して、釣するよしの、やつさ釣つたところがおもしろや、なにがなにがへそなたは瀬田の長橋、眞弓槻弓日を重ね、矢走の浦にぞ著きたまふ

(廿五)山づくし

戀の山路に入りそめしより、人目忍ぶの山とはつらや、稀に逢ふよは鷄さへも、時知

しきを引きて、君達にやつこの見せて聞かせたや、よい〳〵ずんと濡なませうに

㉓戀づくし

思寢の心からなる夢ぞろか、または現かうつゝなや、ちらとばかりの俤を、御簾の追風さら〳〵に、忘れもやらぬ身ぞつらき　アヒノテ　戀はさま〴〵多けれど、逢戀待戀忍戀、恨みの戀に別れの戀こそ物憂けれ、我は本國草深き東あたりの者なるが、今度はじめて都へ上り、雪のふり袖ちらとまた見初め、しづ心なくこひにして、文玉章をかき口說やれば、お情の返しに必ず今宵逢瀨とありしをいと嬉しくて、八重葎しげれる軒に宿りきな、連理の契あさからず、深く語れど、かねて別れの思はれて、さりとては馴れぬ昔がましぢやもの　アヒノテ　交す枕は數重なれど、我も忘れじ君もまた、思出せよ今宵のちぎり、離れ〳〵の村雲見れば、明日の別れもあのごとく、あただしんきや、もんきや、さりとては戀には果なや、いかがせん

㉔笠寺

涙なそへそ—新古今、俊成、「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥」

よねしろう—妓女

りんぜつ菅搔—糸竹初心集中卷を見よ

(廿二)らつひ

我は都のらつひ洛外寅薬師、しかも我等は中子でな、浮れ者でござる、思ふ方には過ぎしころより別れて、獨りいとゞ淋しき寝覺の床に、涙なそへそ時鳥、涙とともに無常を觀じ、とかく浮世はかしかましと、思ひし比より山路に入りて、小柴しば垣引結び世に在りがほに月を眺めて、更けて砧の音かと我は聞けば、月ぞ知らする我涙、思ひつづけて足曳の、小鹿の啼聲に夢さめて、われをば誰か訪ひ來んと、いとゞ寝られぬ秋の夜に アヒノテ ものを思ひの眠りをさます、其いにしへはよねしうとあれば舞うつ唄うつあだくらべ、浮世の中を思ひ出れば心も亂れ、みだれたりよさ スガガヤ 餘りゆかしさに琴のてうしを調ぶれば、折しも松風があなたの峯のかたよりも、こなたの琴に通ひ來て、彈きてあはせたは何よりもつて面白い、扇雲井に須磨に桐壺、うす衣に雲の上、四季のみだれかあつちりな、すぢりもぢりて、えれくりだしたるりんぜつ菅搔おもしろや、花橘の袖の香に、鳴くは何鳥郭公にうぐひす、水雞の鳥のたゝき落し、音信るゝ柴の扉のけ

空に知られぬ—拾遺、貫之「櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける」

えんじよ—遠所か

こうろぎ—來うにかく

轡虫—妓家の主人をくつわといへば也

梢々は花かと見えて〳〵雪の朝はのほんアヒノテのんほ、のういよ風厭ふ〳〵アヒノテ霜夜に濡るゝ我袂、春の夕ぐれに山々を見てあれば、折しも春風に櫻の花が散りかゝる、ちりちりはつと花のちりたるは、空に知られぬ雪かと見えておもしろや、夏はほとゝぎす卯の花に菖蒲草 三下リ 牡丹芍藥あつちりなこつちりなアヒノテすぢりもぢりて、えりくりえんじよの奥山の陰、小鹿の鳴く音蟲のこゑ〴〵、秋はな名にある月に移ろふもみぢの色、とりや集めてあはれさ勝るアヒノテ冬は時雨に雪か霜かと消えてたまられぬ

(廿) 狹ごろも

獨り思ひを枕に語り、せめてたのみの夢覺ます、麻の狹衣打ちさめて、いとゞ寝られぬ秋の夜に、さりとは月更けて、いつさてこうろぎ、ねもせで松蟲、更くれば鈴蟲、ずんど深ければ堰きやるは憂いよ轡蟲、厭はぬ心にてんと結うた髪を、望みなら根からふつつときりぎりす、鳴かぬ間はござんせんよ、すこしあはれみアヒノテレンボ颯と妻戸の時雨は憂やの、袖の涙は露の亂れがみ、結ふにいはれぬわが思ひ

ゆる若草を人の結ばん事をしぞ思ふ」

花のあたり—古今、好風「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふとみん」

袖には洩れて睦ましく、思ひそめたよわか紫の、筆にまかせて杜若アヒノテ夏は涼しき池水に、住む川竹のすて小舟、こがれ〳〵て昔を忍ぶ、草のまがきに涙をそへて、泣くや皐月のアヒノテ誰彼時に、誰を待乳の〳〵やよや山ほとゝぎすアヒノテ君はさみだれ思はせぶりよ、我は螢火おもひに燃ゆる、この夕暮のものあはれさに、鳴音淋しき蟲のねアヒノテ秋は來にけり、我訪ふものは荻が上葉に亂れみだれてかぜ戰ぐ、餘所にも置くや袖の露、月の移ろふ影見えて、殘る松さへ嵐と共に、人目も草も枯々に、いつもながらの冬は憂や、落葉も霜に埋もれて、木の下露にぬるゝ夜は、いと淋しき床の內、枕ならでは白雪の、積るおもひに伏し沈む

（廿）はる風

咲いた櫻に吹く春風は、のほんへ花のあたりを除てふけ〳〵、こぼれてかゝる花の露アヒノテ深山隱れの身は郭公、のほんへ人は知らねど啼きあかす〳〵、よひ〳〵ぬるゝ我袂アヒノテ歎く涙は妻戀ふ鹿よ〳〵、荻や芒に〳〵おく露の〳〵、くるれば色の袖しぼる、

東路や―千載集顯輔、「東路の野島が崎の濱風にわが紐ゆひし妹の顏のみ面影にみゆ」

ねよげに見ゆる　伊勢物語「うら若みねよげに見

松に降る時雨、なさけに隔はなきものを、忘れまじ盡きせまじ、おもひはつんつん釣の絲アヒノテ引てしやくるところは本テウシ釣つたところは面白や、漁村の夕照はうつすらん、實にも長閑けき海の面、一首はかうぞ詠じける、東路やアヒノテ野島が磯の濱風に、我紐結ひし妹がかほのみと、詠じ捨てゝぞ行く程に、山市の晴嵐おもしろやアヒノテ千兩とるともまだ〳〵馬方いやよいやよ、腰に馬柄杓アヒノテ手にや叉煙管、月の都をふらねばないよさ、どうした心底しほがないアヒノテ日もはや西に入相の、極樂寺の晩鐘と、聞きしに優る八景や、由井が汀に寄する波、峯のアヒノテ嵐にもみ合せ、寄する雄波がどう〳〵と、どうと打つては颯と引き、日本無雙の名どころや、これぞわらはが住家とて、雪の下にぞ著きたまふ

㊈わか草

世の中の人の心はいろ〳〵に、うつろふものは花の色、梅が香をとむ鶯の、谷よりいでてまだ里馴れぬ、野邊の若草ねよげに見ゆる俤の、人目つゝめばいろには出さぬ、

願は神奈川—叶ふにかく

(十八)鎌倉八景

まだ夜を籠めて有明の、月も宿かる武藏野の、空も一つに契り來し、妹背の中をふり捨て、斯く立出づる我つまの、心のアヒノテ中こそ恨めしや、恨みながらも立出て、ふり上見ればほの〴〵と、霧にへだたる安房上總、出で入る船のかず〳〵は、遠浦の歸帆これならん、汀の鳥もつがひ〳〵、羽を休め寄せ集りて、ふはと立つや雁鷗、平沙の落雁おもしろや、あれに見えしは有難や、幾千代ぢよのかみ神樂、鈴の森アヒノテ嵐こがらしさつと吹けアヒノテ笠にや笠に木の葉がはらはらと、はりいよ〳〵はら〳〵と江天の暮雪まのあたり、遙かに高きおん山は、いつも鹿の子の富士の山、どれ〳〵それ見て〳〵からから見てから戀が增します、かず〳〵のお言葉にはつとだまされた、それで寢もせで迷ひゆく、おもふ願は神奈川の、沖に漂ふ海人小舟、苫もる雫もろともに、涙に明かす船の中、これやまことに瀟湘の、夜の雨ともいひつべし、雨も晴るれば網を曳く、ひくに靡かぬアヒノテつれなさよ 三下リ 君を思へばアヒノテかく忍べども、かひぞなき、つれなき

ゆふさき―庵崎

㈦手枕

照りもせず曇りもやらぬ、月は朧の春の夜の、ゆめばかりなる手枕に、君が浮名やかひなく立たん、とかく人目のしげ〳〵なれば、忍ぶ山みち忍びて通ふ、井手の玉川岸根の蛙、今や鳴くらん浮世の中に、我とひとしく物おもふ身の、あらばかたらん憂さつらさ、戀の山路をたどり行く（三下リ　アヒノテ）こひ〳〵て戀しき人を待乳山、ほのかに見えし木の間より、名も懐しき郭公、いま一こゑの音信に（アヒノテ）昔の人のしのばれて、袖に涙は夜の雨、草のゆふさき分けてこし、隅田川原の荒れたる宿に、水雞ならでは扉をたゝく、人はあらじな待宵に、枕な投げそ、なげそ枕に咎もなや、武藏野になべての草は懐しや、わか紫のいろ〳〵（本テウシ　アヒノテ）ありし御げんに交せしことの、無下にかはらぬ心ぞならば、しんぞ嬉しさ何にかまさる、ものを數々思ふ身を、誰かあはれとおもひは遣らで、床しき身こそ松の緣よ、いつも心をな添へたや、千とせをも又かけてへ、千歳を掛けて、やつさかはらぬ中とよ、のうさてな

住の江―墨の繪にかく

三笠、もろこし、幾よ、千里、更科、せん夜―妓名

こちのてう―此方の町

笙の岩屋―日藏上人この窟にこもりたりき

野のはなの俤うつす住の江筆染川の、深き中をば誰が夕霧や、濡れた譯あるつれ歌を、彼のおもはくの三味せんに、梅がえ薫るに鶯の、初音はいとゞしほらしや、どうもならぬにいよの、兎角君ゆゑ身は八橋の、花濃むらさき杜若、騒ぎ立てられてアヒノテぞくぞく逢ひとてなりませぬはと、籬ながらも西をきつと三笠の、月の桂の男だてかや、にほんもろこしきりゝと廻して、花まつが枝の藤えかなほも藤波のえいり江に寄せつ、物思へども浮橋の、中よかるもの泉川、幾よ千さとの月は更科、おひかけ仲の町で見ごとにさ、誰ゆゑころんだ、轉びやせぬもの手を突いたアヒノテお手とろ、君のなきみぢやないもの面憎や、にくか打たりよか、せん夜もちよの、勢至千手は悉皆彌陀か菩薩か、たゞし吉田の神ならば、つなぐ利生もあれ柏木のいこくわかやま、こちのてうのよねたちは、意氣も張りも強いはいの、金平だんべい、さかた櫻木さつても名譽の太夫しゆ、この君たちの手に載せられては、いかな笙の岩屋のお聖さまも、三味にのせての一節は、末もこながと春ごまは、千秋樂なる御代ぞ目出たき

ねに—根に、寝に

らさきの色に心はあらねども、深くぞ人をおもひ染め、かひも渚に我袖しぼる、人目
人目忍ぶの其通路の、舟にうち乘りお敵達はこぬかの、うちのせよせつ、幾度思ふ宿の
首尾、とは思へども只ひと筋に、この譯知らぬ人ならば、たとひ萬にいみじきとても、
玉の盃手に觸れよアヒノテしやんとさせ、底はいよ〱知られぬか、君に逢ふ夜はまつ
乳山二上リアヒノテ手にふれてアヒノテいつしかも見ぬ紫の、ねに通ひゆく轉寢のアヒノテ君の〱
濡こそアヒノテじつとは見えね、しんぞ此身は神ぞ此身は涙脆うて、憂いぞつらいぞ、枕
もうくばかりへアヒノテわけの〱宵にはアヒノテいよ絆さるゝへ、しんぞ此身は〱涙脆
うて、ういぞつらいぞ枕も浮くばかりへ

⑯はる駒

世も麗やかに園生の花の、春駒は夢に見てさへ心もよきに、況して舞うたら千秋樂よの、
いつもかはらぬ若水の、流の末の我等さへ、浮れ雀のひよつとうかれいでて、あの色里
に來てもおうしう、名は高橋のかへるさを見たれば、まづ花咲に梅がかしはの、振もよし

あらまし—あるまじの意に用ふ

春日野云々—伊勢物語の歌

のながめは駿河の富士よ アヒノテ 雪になりたや此身は消えて、今の思ひをえいさん知らせたや、よしなやと思ひ續けて斯くばかり、戀せずば人は情のあらましものを、憐みたまへ賤がうき身を

(十四)八重梅

二上リ 梅が咲けがしいよやへ梅が、枝を枝を手折るふりして、必ずござせとさまを招く アヒノテ かならずござせと樣をまねく、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも アヒノテ 浮世ぢやな、まれに逢ふ夜は現かゆめか、稀にあふ夜は語る間もなき、さんさ短夜や、よしなの思ひ アヒノテ 浮世ぢやな

(十五)春日野

三下リ 春日野のわか紫の摺衣、忍のみだれかぎり知られぬ我思 アヒノテ おく露のしづ心なき秋風に、うつろふ人の濃むらさき、花紫の萩がえに、亂れみだるゝ心のつらさ 本テウシ アヒノテ その繰言のまたの夜に、君ならでよんよん餘所にはさあへ、色にはうつさじさあへ、む

まつの思はん―古歌「いかにしてありと知られし高砂の松の思はん事もはづかし」

吉野、さくら木、初音、狹衣、みよし、そめ川、高雄、野分―例の遊女の名を取り入れたり

なんものを、誰か殘りし菊の香の、八重紫にうつろひて、袖の昔もいつしかに、逢ひ見しことを數ふれば アヒノテ むら〱見ゆる冬草の、上に降敷くしら雪の、路踏みわけて誰訪はん、まつの思はん羽束師の、森の木枯たえ〲に、涙々たばしる玉霰、あさ日まつ間のうき身の命、ながれの末の我らさへ、もしもや誘ふ水しもあらば、戀の柵堰きとめよ

(十三) 四季

誰か始めし戀のみち、いかなる人も踏み迷ふ、ながの繩手のゆき通ひ、四季をり〱の絕えせぬは、春はよし野の花さくら木や、その一節も待ちがほなる、初音床しき鶯の、梅が香をとめ青柳の、うき寢の寢みだれ髮は、いつに忘りよぞ アヒノテ 夏は涼しき狹衣を、著てもみよしのおんかほよ花、あひそめ川の流こそ、淸きながれを思ふにぞ、いとど思はます鏡、曇らぬ空に秋は來にけり アヒノテ いつの間に殊に色あるもみぢ葉の、その名は四方に高雄山、野分も今はもみぢして、とても濡りよなら、生中しぐれはいやよの、冬

馴れし東の―平家物語十、侍從、「いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」

熊がへ、虎の尾、桐が谷―櫻の名

玉ゆら―暫しの間

初し色の初ざくらアヒノテ絶えぬながめは九重の、都がへりの花はあれども、馴れし東の江戸ざくら、名におうしうの花には誰も、うき身をこがす鹽竈櫻、花のふり袖八重ひとへアヒノテ下には無垢の緋櫻や、樺にあさ黄をこき交ぜて、わけよき縫の糸櫻、引手あまたの身なりとも、せめて一夜の戲れに、醉を勸むるアヒノテ熊がへのアヒノテ猛きこゝろは虎の尾の、千里もかよふ戀の路アヒノテ忍ぶにつらき有明櫻、君の情のうす櫻アヒノテよしや思ひを桐が谷アヒノテ浮世を捨てし墨染ざくら、昔を忍ぶいへ櫻、花の扉の寂しきに、月の影さへ遲櫻アヒノテ三下リ闇はあやなし紅梅櫻、色こそ見えね折る袖も、匂ひざくらや菊櫻アヒノテ花のしら露春ごとに、打拂ふにも千代は經ぬべし

(十一) 冬草

厭はじな玉ゆら宿る人の盛りアヒノテ身を知る雨の初時雨、さだめなきかな浮雲の、月の匂ひも影さむき、鴛鴦の浮寢の枕さへ、氷柱のたもと解けやらで三下リアヒノテとこの浦曲のしき波の、濱風冴えて鳴く千鳥、思へば夢の世を知らで、やがて枯野の朝露と本テウシ消え

常磐の山の―古今、十一、「思ひいづる常磐の山の岩つゝじいはねばこそあれ戀しきものを」

霞の間より―古今、貫之、「山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」

らじ、この夕暮をとはゞ訪へかし

⑩藻鹽草

千代は經るともかはらぬ色よ、常磐の山の岩躑躅、いはねば人の戀しきものと、思ひしよりも硯に向ひ、よしなし言を心に任せ、書きてぞおくる藻しほぐさ、胸にたく火の煙は空に、なびく習ひにいよの アヒノテ 末は逢瀬の波枕、獨りこがるゝ身は浮舟の、よるせ定めぬこの憂さつらさ、知らせたや〳〵、ゆめに見んとて片敷く袖に、鳴音淋しき アヒノテ きり〴〵す、つれなき人を松蟲の アヒノテ 草の籬の夕べになれば、物こそしんぞ思への、さりとは浮世、やつさいつさて御げんはとに角に

⑪さくら盡

あかでのみ花に心を盡す身の、思ひ餘りに手を折りて、數ふる花のしな〴〵に、わきて楊貴妃伊勢小町、たが小櫻や兒櫻、もゝの媚ある姥櫻、我や戀ふらし俤の、花の姿をさき立て、ゆくへ分越しみ吉野の アヒノテ 二アガリ 雲井に咲ける山櫻、霞の間よりほのかにも、見

八橋、雲井、西を、はつ山、外山、つしま、九重、さかた、小太夫、かしはぎ、異國、からさきやしほ、狭衣、玉の井、小歌、ふぢえ、よしだ—遊女の名

をかけて八橋の、雲井の西をながむれば、はつ山外山の峯の紅葉ば色深きより〳〵四方に浮名は〳〵高雄山々々〳〵、思にぬるゝ我袂、あれみつしまの花のころ、九重にこそ匂ふらめ、ならさかた小太夫かしはぎ二人とは、兎にも角にも頼まじものを、わけよきを知らぬは異國者かなと、から〳〵さきの笑ひ顔、目元にやしほがへ、目元のしほに馴衣、かの狭衣の袖ぬれて、涙の玉の井うらむる小歌の、そのふぢえよしだのおもはくや、どうもならぬにの

㊈小夜ごろも

きぬ〴〵に交す形見のさよ衣、妻こひかねし鹿の聲に、亂れ亂るゝ糸萩の、結ほれやすき玉の緒の、寄手引手に物おもふ身を、せめてあはれと暫しなりともアヒノテ忍ぶ山しのび兼ねたる人目の關を、道しるべせよ忍ぶ草の、いつそ露とも消えなば消えよ、だいじかさ、あるに甲斐なき捨小舟アヒノテ底こそ知れぬ袖の海、がわく間もなき枕の渚、立つ仇浪はしげしとまゝよ、其をたよりに逢ねばならぬ、明日までよもや 三下リ 露の身はあ

はちざまーざはさの誤か

浮橋、ながと、東雲、玉葛、逢坂、せきしう、薫、初音、白たま、泉川、こよし、かるも、泊瀬、山の井、利生、せいし、せんじゆ、きてう、松枝、常磐、千とせ、八千代、

るな、おひかけ中の綱から見事によ揃うた、やれ先の綱にへえいや〳〵、屋敷出たときや浮れて出たが、今は カヘシ 籬あたりを小歌ぶし、おうはちさま〳〵はちざまを見たか、今は思ひの種となる アヒノテ

㈧戀ごろも

あだなりと名にこそ立てれ櫻木の、初花染の戀衣、若紫や濃紫、由縁もがなと夕霧の、立迷ひにしうす雲や、上の空なる君たちを、何とて思ひそめ河や、身は浮橋のうきねにも、せめて夢には打解けよ アヒノテ 閨ゆ月さへ枕にかよふ、獨りこがるゝ夜はながとの、其東雲のとりの聲、みだるゝ露の玉葛、いつ逢坂と心はせきしう、とめて幾夜も薫るは初音、瀧の白たま涙の淵に、沈む思ひは泉川、いつ見きとてか 二上リ こよしかるもの歌ひしは ロウサイ よしや歎かじ叶はぬとても アヒノテ 定めなきこそ浮世のならひ、氣の毒にいよの、とは思へども捨てがたき、人を〳〵泊瀬の山の井の、むすぶ契の利生のあらば、せいしせんじゆの其一座 三サガリ 今やきてうと松がえ常磐 本テウシ 千とせ八千代の物思ひ、情

うきち―浮き地か
さんしろう、坂田、まんよ、小太夫、まさき、櫻木、はつ花―遊女の名
とんてきどへろきん者、とびあがり者
本づンな―本綱

きちの太夫さゝま、情はさんしう坂田にまんよに小太夫、まさきに櫻木はつ花のやどやゆきには、ひねつてしなつて、笑つてあゆんで、癖は何もなにはぢや、ないこそは道理なれ、京のぶらと大阪のぶらとお江戸のぶらと、三千人のぶらどもが、寄合談合でつくりつけたるおこたち、いかなとんてきどもも、有頂天の野暮すけなりとも、ふんふん深くは逢はうか、あひますまいか、いや只深くはなり候まいと言つたら、口舌になりましよ、あいのやのぢは合點かよ、本づンなよへ、やんれ打てや打て、皷太皷羯皷手拍子に碁雙六におん百姓いよむしろばたに田畑よざがよねを搗杵、砧かるたに常ぜんが極印、しよろりがむちは鹿の角、ちよこ〳〵打つはけいひき鍛冶屋挺子の衆、からりころりちん〳〵からりの槌の音、打つたる狸の腹つづみ、正月は節分豆ぶり〳〵にかきだま、七草なづなよ、なじよ〳〵搔きよせて、ほと〳〵とたゝいた、いとしけりやこそしとゝ打て、にくか打たりよか、やつこりや〳〵〳〵、手がそれた、おひかけしめかけ聲をかけ、本づンなよへ、されば僧正遍昭の、名にめでて折れるばかりぞ女郎花、我おちにきと人に語

ひつひけ―盃を引きうけ飲むこと

よそろうた―よく揃うた

志賀、白玉、花の、桂、唐崎、うす雲、八橋―遊女の名

さ、やがて死ぬ〳〵、ひつひけうん飲め騷げ、明日をも知らぬ身に

⑥雲井ろうさい

山の端アヒノテいかな夜もよも人アヒノテこそ知らねアヒノテ閨は涙の淵となるアヒノテよしや歎かじ叶はぬとてもアヒノテ定めなきこそ浮世なれアヒノテスガガキチラシ我ふりすてゝ一聲ばかりいづくへゆくぞ山郭公

⑦木やり

やれ浮立つは春の日の、霞のうちの梅の花、一重ばかりか櫻花、にほひ含みてさける梢を折りたや、中の枝から見ごとに能う咲いた、やれかをる袖をへ、えいや〳〵散らばかひあらじ、やれ物憂きは秋の夜の、君に松蟲轡蟲、一よばかりか蟋蟀、二夜も三夜も君をかうろぎ、おひかけ中の綱からみごとよそろうた、やれさきのつんなをえいや〳〵引かば靡きやンれの、皆樣もごぞんじぢやが、志賀の白玉花のに桂唐崎うす雲棚引く、あれからこれまでえいや八橋さんま、さら〳〵さつと幇間をたのんで、口說き濟いたりや、う

べんべ―衣服
いつに―往くに

に語らんげんごじうアヒノテいとしげんしうに逢ふ夜さは、さんさ雞も鳴くいそ夜も明けそ、さんさ寺々ぼろりん〳〵〳〵〳〵、小寺のしててんてんちんからころりよの、おゝほつとりぽとりのほとほんほと〳〵〳〵、しとゝら太皷もつん釣鐘も、のうこのいよそれのう、扨撞くな鳴らすな、げんごじう

㊄さんや踊

今度はじめてお江戸に住めば、天が輝く光をくれて、きれよさかれよ振袖伊達を、だてを駿河の富士白山ぞ、だてな若い者さんやへ通へ、忍ぶ畦路で虻めがわれに當ておつた、かつ憎けれど君が爲なりや、つらさもういこんだ、浮世忍ぶの深編笠の、姿かたちで若きは見ゆる、篠の芒で末とげぬ、よしなの思ひぢやなアヒノテ誰も好いたるお江戸の風や、生田昆陽野の敦盛さまが、熊谷笠にはちく杖、二つ紋のちん縮緬のべんべを著せて、せん堰かしよ、憂身の寢みだれ髪を、いつに忘すりよぞ、扨も指いたる長刀、お氣の通つたお若衆さまの、いつくに〳〵血目玉が放され申さないアヒノテだても浮氣も命のうちよ

道哲―日本堤に住みし道心者
さん茶―遊女の下等なるもの
とうりん坊―遊女に欺かれて金を取らるゝ者をとられん坊といひ之に反して遊女より金をまきあげる者をとりん坊といふ

よいそのやいそべに打波の、寄せくる遊山船がさわぎ集りて、しやぎりのおとの（アヒノテ）おひやりこひやりひやりこ〱ひやりひやりらんらららりつるんろるるりやちやらろ鉦が、又彼處を見てあれば、富士詣の行人たちが、懺悔〱六根罪障、ざんぶりどんぶりずぶどぶひよひよんにひよ、瓢簟を腰に付けて水あそびもござんす、右は無縁寺いつもより、今朝打つかねの音のよさ、鉦を扣いて佛にならばさ、土手の道哲は氣の通つた佛ぢや、好いた佛ぢや、あれを見よ、さん茶通ひの野暮すけが、駒を早めて乘たりや、とうりん坊あうたりやおそまきさつて土手の際になれんばはらりと飛下りて、よい羽織被いて顏打ちかくし、籬々をそろりと見れば、あれどれ振袖が袖がのう、袖がのほんのほんえ

(四)源五しう

花は櫻よ、薫は梅よ、はつ音床しき山ほとゝぎす、月は高雄のもみぢを照らす、雪の肌になれ〱馴るゝは、班女が閨の戸〱（アヒノテ）行きて三浦の籬の内に、花のいろ〱その濃紫、きくに初音のうぐひす袖を、引手いくたび忘れもやらで、ちよの思を〱、誰

とるや小袖のつまゆゑに、歩行習はぬ道芝の、露に起伏しをれつゝ、軍みだれのことなれば、嵐ぞつらき花のまへ、ちりぐ〵になる身の行方、まさみちの御ン手をとり、たどろ〵とのんさて、まことに君ゆゑなれば、遙かに後を見かへなば、ありし所に立つ煙、いたはしやな我つまの、何とかならせたまふぞと、其方の空よとながむれば、涙の雨の玉島や、はや入相の金が崎、いたはしや老の身の、さぞやもの憂くおぼすらん、我が思ひに亂髮、ゆひかひもなき身なれども、南無や宰府の御ン神、いにしへの憂を守らせたまへやと、深く祈誓をかけ帶の、結ぶちぎりの朽ちせずば、つまにはやがて逢ひに相あふ、松こそうれしかりけれと、語り慰み行く程に、蘆屋の關にぞつきたまふ

㊂富士詣

宿の首尾よく繕ひおきて、浮かれこがるゝ二挺立に打乘りて、思ふ君をばはや三俣の、上の茶屋よりわけよしが招く氣の毒に、いよのほんはわがえだもさんよへこの、いよこのへ〵はんもひちやさと、兩國橋までのりつけて、花火々々をめせさせ買はんせの、よい

初音、松がえ、鶯、きてふ、吉野、藤枝、八橋、小紫、泉川、染川、薄雲、夕霧、たのも、八しほ—いづれも遊女の名

㈠若みどり

春は初音の松がえ引きて、君が千とせを八千代とおもふ、その常磐木の若緑アヒノテ梅の花がき薫るより、鶯きてふと囀りかはし、吉野の花も櫻木藤枝、色なつかしき黄昏に、山郭公音づれて、明け易き夜のならひには、夢の浮橋なか絶えて、文もかよはぬ戀の路、蜘蛛手にものを思ふこそ、かの八橋の杜若、若紫や濃むらさき、由緣ある身に賴みをかけて、緣にしを結ぶ泉川、いつ逢ひ馴れてあひ染川の、あだ浪かゝるぬれ衣の、袂涼しく秋たちて、荻ふく風に亂るゝ露の、その玉葛かけしより、わする間もなき我が思ひ、空に浮るゝあの薄雲に、夕霧かゝるその月のころ、人まつ宵のものさびしさを、誰に語らんみ吉野の、たのもたよりも盡き果てゝ、恨み涙に袖しぼる、色は八しほに染めなしおいて、もみぢ散りしく高雄の山の、嵐につるゝ村時雨、幾度ぬるゝ我袖アヒノテ拾はば消えん玉篠の、霰はつ雪ふらば降れ、我ふる妻は〱實からいとし

㈡まさみち

四十二　玉くしげ　同人作
四十三　色香　同人作
四十四　梅づくし　爲澤檢校作
四十五　小笹　生田檢校作
四十六　晒　北澤勾當作
四十七　かぞへ歌　野川檢校作
四十八　秋草　松岡檢校作　藤島勾當作
四十九　戀草　松岡檢校作
五十　しのゝめ　武州花都作

松の葉　第二巻

長歌目録

右相傳法式之次第者柳川檢校より淺利檢校相承し、淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬ、こころざしあらん人は早崎より口受あるべき也

祕曲相傳之次第

初傳　搖上　　二傳　亂後夜

此二曲を新曲の祕曲といふ也、誓盟をもつて相傳の時師へ一禮の法式あり、亂後夜以前に後夜敦賀ごやといふ二曲あり、此曲に手を加へて三曲一にして亂後夜となし傳授する、後に晴嵐といふ一曲淺利檢校手をくはへて彈く也　口傳

三傳　七つ子　此曲は浮世組をさきへ彈きその跡にて彈く也　四傳　松むし

五傳　淺黃　六傳　茶碗

此三曲を新組といふ、七つ子相すむうへ次に傳授するなり

七傳　堺　　八傳　中島

此二曲を本曲の祕曲といふ、極最上の傳授誓詞神文ありて、一卷の書を附屬するなり、師へ一禮の法式あり　口傳

しんきはりよ—
辛氣を晴らさう

○破れた尺八手なかけそ、とてもなるまいもの故に、われた尺八手がござる、じいじとしむればなるものを、取りて吹きて見たれば、ふしがちやうとした、れつろれつろりよれつのれがつれつろ

㊆なよし

○なよし〳〵は梨のあだ花、なよしなりはしもせで、なると名の立つなよし

○黐小竹にあらねども、さらにさら〳〵さらに知らぬもの、ともすれば何ぞよ其方ののぐねり、何となりとお好みや、鐘を打とかのう

○しんきはりよやれ、濱へ出て沖のしま〴〵を見てなりと、あれに見ゆるは志賀の浦、こがら崎一松、田舍くだりの道すがら〳〵

○田舍くだりの旅の殿、名所の月がながめしやんとのう、しやんとながめたりよさ、ぞろいとしうて遣瀨なや

本手端手裏組終

○ひとの嫁ごと竹にさく花、よやとおもへばやへ曲もない、さまぢや詮ないしやもしやももちぐなにしよ、そうてなにしよ、それしよしやなにしよ、若衆をどりをのう、若衆踊を一をどり

㊅みす組

○御簾の俤もの越に見そめ聞きそめ、うか〳〵と戀をして、痩するは人の知らずして、夏痩をすると、やれ推めさるゝ

○露に亂るゝ絲薄、そよ〳〵と吹來る風にも靡きそろ、現なや正だいなしや、とは思へども、そもじと我とはよろづ世までも千代までも

○風にまかする浮雲も、吹く方へゆく、目でしめばひくと思はれ、つれなの君の心根や

○かづいた水が搖りこぼるゝも浮世の習、さてもつれなや、しやうだいなしや、憂きや憂や、ならぬは破れた尺八かのう

○竹がな十七八本ほしやな、浮名や洩さじの中戸に組も

しよぐわん―賞玩

○さきの月の廿五日に定めたるには似ぬ、照るも曇るも冬の日も

○山は雪ぢや、麓は霰、里は雨、うらへまはるも其樣ゆゑ

○沖を漕いで通るは、明石の浦のけんざが本船か、さて艪ではやらいで唄でやる

○一の枝ひけば二のえだ靡く、なびけや小松、一のえだつりりんり〱

㊄八はた

○月は八幡のまだ空にも、往の〱とは思へども、後に心がとゞまりて、後髪が引るゝ、なんぼ戀には身が細ろ、二重の帶が三重まはる

○たつるお茶には泡たゝで、我が浮名はむら〱に立つ、むら〱に立たば立て、まことの心解けずばしよぐわんぢや

○あの山陰をすぐに來るだに遲いになよ、眞實恨言さしおいて、まづ抱ておよれのう、なよしんじつ

○思ふ門には竹をうゑて、雪の降りたる曙を、つれなき人に見せばや、靡く笹の葉

宮—安藝の宮島
はつかゞいち—二十日市
げんざ—源三といふ人名なるべし

こひ—鯉、戀

めがきみ—目がさめて君も寢ず我も寢ずとの意か

○山ぢや谷間の深谷おろしの木の葉埋れのう、柴の庵もまたのんえいそれなつ、都なれどものう旅は憂や

○沖の引く汐に竹に油を塗るやうに、とろり〱と唄うて名乗りて、漕ぐや船方はえい上様の御座船か、またのんえいそれ、艪ではやらいで唄でやる

○おちよぼちよぼ様の態は椋鳥ぢや、聲は鶯ぢや、しゆくしやかむくしやか、さんはかしんはか、しんからきうたかずんばいぼ、眉目が能ござれば聲も詞ものうしなやかな

○宮へは三里へのうえい、三里も近さんり、はつかゞいちのげんざが塗物は、漆では塗らいで、梔子ばかりでさつと一刷、えいそれはつたらずんでんどう、そのやうな塗物は、たゞはくるゝとも、おらはいや〱いやで候、やがて剝ぐるに

○猿澤の池の水ではない、こひがすみ候、身の池に

○篠竹の小篠竹の窓の嵐に、めがきみもお寢らず、われも寢ず

○櫻木に鷽がとまりて、琴の響に花がちる

ねいろ—根入、寝入
とぎ—磨、伽
おかた—奥方
うたい—打たう

○十七八は砂山の躑躅、ねいろとすれば揺り起さるゝ
○曇り鏡か我が身は、思ひまはせばとぎほしや〳〵
○明日は殿ごの砧打、おかた姫ごも出てうたい、きぬた踊はおもしろや、砧をどりはひと踊

㈣はや舟

○祝ひめでたのう、嬉しめでたのうよう若枝も栄ゆる、のう葉もしげる
○ながの長崎の長のるすんの留守すれば、思ひ出すことは宵と夜中とのう暁と、なごやまぢよのう、肥後ぢや八代熊本ぢや、鳥も得かよはぬ山なれど、住めば都よ我里と
○四角柱ののう、四角柱のまたのんえいそれ角、角の無いこそ添ひよけれ
○花は咲いてものう、梅は開いても花さいて、無益のあだ花よ
○これがいとまな、ふみ手には取らいでなま中に

れ戀の道、きりはたりちやう〳〵

○とてもお捨ちやるものゆゑに、去りがたいとて抱かりようか、浮世の中のさんだんにさ、言ひつる事よの、言はりよりもなまなか一夜はまゐるまいよ、いや〳〵いやなら始に否とはおしやらで、今さら何とならうぞのう、思はざなきそ増花ぐるひせうずもの、わざくれ

㊂青柳

○さても其方の立姿、春の青柳絲ざくら、心がたよ〳〵と

○文もやりたし便宜もしたや、俤に立つそのおもかげを、忘られもせで身に添ひ、そぞろに浮れきてうきやうこつや、正體なしや憂きや戀のとまらぬ、只兎に角に恨めしや

うきやうこつや—うきやうつゝやの衍か

○枕に掛るみだれ髪、いとゞ心の亂れ〳〵てやるせなや、よしや其身が何とならうぞの

○緣なき思に身はほれて、朝顔の花の露よりもろき身をもちて、さのみ心な盡くさせそ

きりはたり云々—虫の聲なり

村さんめ—村雨

しん知らぬ

○たんだ人には馴れまいものよ、馴れての後は、るゝんるゝ身が大事なるもの、離るるが憂いほどに

○かづいた水がゆり〳〵たぶつき滾るゝげなものを、現なや殿はみやこに

㊁にしき木

○神のおまへの御注連繩、そよ吹く風にも靡けばなびく、つらき心を打捨てゝ、ものぐねになめされそそ、ふふりわるや、打解けよ、くすみても詮なや

○山がらが籠のうちでの恨み言、籠が小籠でもんどり打たれぬ

○七里小濱のな、砂の數ほど思へども、緣がうすいやら添ひもせぬ

○をつとは錦木とり持ちて、鎖いたる門をたゝけども、内にこたふる蟲の音の、思ひきろやれ戀の道、きりはたりちやう〳〵

○忍べども思ふ君には逢はずして、村さんめははら〳〵ほろと降るほどに、思ひきろや

あかれず—閼伽にかく

るる

[illegible]㊆はで片撥

○笛による鹿は妻故に死する、我等もさまに、やれ命すてうずよの

○ありがたの利生や、お有りがたの利生や、佛まゐりの利生で妻に行逢うたのう

○朝間とく起きて手水瓶をみれば、我がおかぬ花のあるも不思議やな

○不破の關の板間に月の洩るこそやさしけれ

裏組

㊀賤

○賤の身なれば色には出さぬ、あ只心のうちに焦るよ

○立寄りてむすぶ山の井の、あかれず飽かぬ中はな、松の二葉よ、千とせ經るまで

○筆でかくとも繪にうつすとも、さらに盡きせじ松島の、波にうつらふ月の影、島の數

たんだ―只

ものを

(六)京鹿子

○是は京鹿子色もよや、目結手際もよや清や、あら都戀しやのう、都のしてたち戀しやのう

○これは京小袖色もよや、紋がら手際もよやきよや、あら都戀しやのう、都の染殿戀しやのう

○しんの闇にも迷はぬ我を、あゝ扨そさまの迷はする

○吹けよ松風、あがれよ簾、今の小歌のぬし見たや

○花とならばなよ、たんだおん身は紅葉の色よ、のうさて日數にそひて色まさる

○梅の香を櫻ばなに宿らせて、青葉のまゝに眺めばや

○尺八の一節ぎりこそ音もよけれ、君と一夜は寢も足らぬ、あら心なの君さまや

○そちと此方とは松に藤のさがり枝のごとく、誰彼時にかよる、かよるな情が身に纏は

きんぎ―金銀か

たけりやろ―猛りあらう

○甲斐の國なる信玄さまのな、一度もござらぬ、二度もござらぬ、おちよぼ忍ぶに六つの苦が候、まづ一番に雨に霰に夜露に柴垣、のうさて犬のあだ吠え、それ月はなほ月は、のうさて月はえせ者

○忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい、待つ夜に其身がくるみでもなし、なよさてまことにくる身でもなし

○去年の竹とよ今年の竹とよ、しどろでもどろで、のうさて節がそろはぬ、なよさてまことに節が揃はぬ

○誰でござり申す、壁越のまた鼠鳴、今宵は殿御の後に寢て聞く、寢ても聞けどよ、おきても聞けとよ、今宵の夜がさて明日の夜になるとも、逢はずば戻るまいよの、なよさてまことに戻るまいよの

○扨もつれなのきんぎんさまや、きんぎござらざ、ぬめりてくらそ、それを誰ぞと尋ねて聞けば、六條下の町の和歌山さまの內の山の神が聞いたらば、たけ〱たけりやろ

咲くと―咲くともの意

さんたまりや―Santa Maria

○紅は薄くなるとも、そもじと我とは一期契るべいぞよもさ、白髪に小枝の咲くと契るべいぞよもさ

○昔より今に渡りくる黒船、縁がつくれば鱶の餌となる、さんたまりや

○思はぬ君にお情は無益、うき身やついて歎く我等に落ちさせられぬ

○名所さま〲多けれど、吹上の濱は和歌の浦、さあ天神玉津島、布引の松山いく千代千代と、和歌山の松、お詣りあれの紀三井寺

㊄しもさほそり

○この程は戀ひつ戀ひられつ、今宵は忍の初でござり申すよの、さあいよへいよへ、打解けてゆら〲とお寢れのうさ、まだ夜は夜中よ、しげれとんと君さま、さあいよへ〲

○まことやら鹿島の湊に、彌勒の御船がついてござり申すよの、さあいよへ〲、帆柱は黄金の帆ばしら、帆には法華經のごのやまん巻物、さあいよへ〲

比良、小松、鹽津、海津、坂本—皆近江にあり

釜の座—京都の地名

○比良や小松の朝がよひ、褄が濡れ候磯打つ浪に

○鹽津海津にあるときは、上りたいよの坂本へ

○門に立ちたは八もじさまか、夜風身の毒内ござれ

○いつの何時そなたを見初め、我が身はたゞ磯邊の千鳥、鳴かぬ間もなや君ゆゑに

○こゝは三條か、やれ釜の座か、一夜泊りてしげりまゐらしよ、われが殿ごは名古屋にござる、扨もお留守は物憂いものぢや、えい〳〵さら〳〵のう石をひく、えい〳〵やつというて曳くには、夢だんべいの、えいというて曳けばお靡きやるかのう、いよやつというてえいとへ、えいさらえい

㊃長崎

○みやいちがよれた〳〵、しよぢよがなさけ

○長崎の鷄は時知らぬとりで、眞夜中にうたうて〳〵君を戻す

○くれなゐの三尺手拭、形見に見よとて置いて行く

○忍んだりやな、忍ばれたりやな、裏の細道小藪から

○おもふ儘なるのや今宵かな、月は朧につまはきて、もみぢ葉を見よこいは散る

(二)葛の葉

○さてもやさしの、いよ葛の葉や、何を便りにはひ掛る、いよえいはひかゝる

○君を松島をしまの海人の、袂干がたき我涙、いよえいわが涙

○深山清水はそこから澄むが、君の心も底からか

○山で小柴をしむるが如く、今宵其様としめあかす

○淺き契にあひ馴れ染めて、ふかき思はあゝさて涙川、君に逢瀬を待つばかり、あゝさて待つばかり

○こんどござらばもて來てたもれ、ぎふのお山の檜の木の枝の、浮世がかりのおもひ葉を

(三)比良や小松

なる―成、鳴

とり―雞鳴

○いとし若衆と小鼓は、しめつ緩めつしらべつゝ、寝入らぬさきになるかならぬか〱

○みやまやるまい、深山瀧の水はうちやうていつく、ちやうど打てば、うちやうていつく、つく〱しんたんたらつく、丁ど打つ、若衆をどりを、のう若衆踊を一をどり

葉手

㈠まつにござれ

○待つにござりたいとしの君やのう、今夜ござらざ焦れ死のう

○とても縁なき中ならば、などや始のつらからん、いとゞ烈しき吹上濱に、とりを限にかのさま待てば、寒き嵐も身にしまぬ

○われが殿御はとう五郎どの、朱雀栗田口より石また曳きやる、えいややころさにやつというて曳きやる、お聲きくさへ四肢が萎ゆる、まして添うたら死のずよの

○君と我とはのや籰の絲の、切れて離れてまた結ぶ

さんだん―讃嘆、いひはやすの意

かは―皮、川
寢―音にかく

もしろや〳〵

○我戀は綟子の袋にいろ小袖、何と包めど色にいでさふろ、やれいで候、逢見てのちは何とせうぞの、戻ろやれ、しやなら〳〵と

㊆浮世組

○誰も浮世はかりの宿、さのみ人目を包むまじ、よやきみしやらり

○文もやるまい便宜もせまい、返事さへせぬ憂さつらさ、君をば人に思はせて、かほどにつらきものぞとおんもひ思ひ知らせでとは思へども、身の上になれば更に思ひ切られぬ

○とても立つ名に寢てござれ、ねずとも明日は寢たとさんだんしよ、花の踊をのう、花の踊を一をどり

○我は小鼓殿は調べよ、かはを隔てゝのう、かはをへだてゝ寢にござる、花の踊をのう、花のをどりを一踊

ぢよずもの―てようもの

坂本で所望めされた

○あすはぢよずもの、舟がぢよずもの、おもたげもなとおよる殿ごや、あゝお寢る殿ごや、飛驒のをどりを、ひと踊り〳〵

○船のなかには何とお寢るぞ、苫を敷寢に楫を枕に、ひんだのをどりを一踊々々

㊅しのび組

○いよ忍び〳〵て心嬉しや、梅に囀る鶯の、夜は梢に宿るとも

○思ふまいよの、やれそれほどに、顏に紅葉の立田山

○いとま乞には來たれども、碁盤面で目がしげければ、まづお待あれ、柴の編戸も押せばなる、あはれ霰がはらほろと降れがな、其間にあゝ笑止や立つ名や、笑止と立つ名や、忍踊はおもしろや〳〵

○戀をせば〳〵、二十三夜の月を待て、月の僞なきものを、てゝてからこしやんぎしやかんこはらりついやひよついや〳〵つやにちやうらゝにやうつほゝ、忍踊はお

わざくれ—まゝよ
めぐすし—目醫者
こしめせ—きこしめせ
れいしようじや—靈照女か
こだけ—小竹

○橋にわが身を投掛けて、渡らせうよの、とろ〳〵〳〵と、やれ渡らせう
○月の夜に打つ砧の音の、えいはら〳〵ほろ〳〵はらほろと、又してもおどろく夜も〳〵あるに、獨り寢よとは何事ぞ、思はざなきそ、增す花狂しようずもの、わざくれ
○わざと來んとはおしやれども、眞實おもへば恥も人目もおもはくも、思ひ出されぬものぢやもの、しかしながら君は只增花のあるゆゑ
○十七八はうんえいころり長押のほこり、皆殿達の、目に入りたや〳〵、目に入りたらば藥師へこもれ、藥師の前で、めぐすししよ〳〵

㊄飛驒組

○弓矢八幡寢はせねど、寢たとおしやらば、などせうぞの
○一つこしめせたぶ〳〵と、殊にお酌は忍妻々々、れんぽれれれつの、れいしよじやうにそはどれつのれ
○これの千代女がかみわけは紫竹こだけに四の節、加賀や越前美濃尾張越後京根來粉河

舟づる—舟が出
る
なと—何と
ひと花ごころ—
一時の浮氣心

○腰に下げたる巾著は、これも憂き人の縫ぢやほどに
○道で見たりともわすれまい、枝垂やなぎの振ぢやほどに
○雨はふるとも雪ふるなさ、忍ぶ細道の笹の撓むに
○成ると成らずと文をばつくせ、心强やつれなや、とにかくに我は數ならぬ身ぢやほど
に、君來うか〳〵往こか、こずは戻ろに
○一夜ふた夜と馴れ染て、明日は舟づる、なとせうぞの、恨めしや
○いやと言うたものかき口說てのう、何ぞやそなたのひと花ごころ、思へや君さま、叶
へやわが戀、あらうつゝなの浮れ心や、揉まいの〳〵さゞら揉まいの、我等も若い時
は殿にもん揉まれた

㊃不祥組

○若いが不祥で負ひまるらせうかの、背門柴垣の破れたを
○思ふまいとの鉦を、ちんからころりと打てば、罰やら猶おもはるゝ

たいが—大河か

世にふる—世間にひろがる

ではのしほや—出羽の鹽屋か

○鳥もかよはぬ山なれど、住めば都よ我里よ

○我戀は千本小松の枯るるほど、たいが水ひて埃たつほど

○みるめばかりの戀をして、千賀の鹽釜身を焦す

○いへば世にふる、言はねば心がもだ〳〵と

○お目と目と目を見合せて、はなれ難なのその俤を夢にも見もせず、うつゝになりとも逢せてたもれ、逢ねば心がもだ〳〵と、おもひの種や、あこがるゝ身をなにとせう

その

○京では一條柳屋が娘、四割帶をたすきに掛けて、いかにも腰が、しなやかな〳〵

○いざ詣ろ六地藏へ、ほとけに隔はなけれども、さりとてはではのしほやが建てた六地藏、えいそれしほやが建てた六地藏

○忍びの殿様にふらょんとさげさしよ、縁のあるゆゑ餘念がないよの

㊂腰組

てうりやう云々
―はやし詞なり

本手

㈠琉球組

○比翼連理よの、天にてる月は十五夜がさかり、あの君さまはいつも盛りよの

○おもひを志賀の松の風ゆゑに、しなでこがるゝ

○深山おろしの小笹の霰の、さらりさら〳〵としたる心こそよけれ、險しき山の九折のかなたへまはり、此方へまはり、くるりくるくるとしたる心は面白や

○とろり〳〵としむるめの、笠のうちよりしむりや、腰が細くなり候よ

○とても立つ名がやまばこそ、此方へお寄りやれのう、柴垣ごしに物言はう

○小原木買はい〳〵黑木召さいの、てうりやうふりやうひゆやりやにひやるろ、あらよひふりやうるりひようふりやう

㈡鳥組

一　𧡨（しづ）　二　錦木（にしきぎ）　三　青柳（あをやぎ）　四　早舟（はやふね）　五　八幡（やはた）　六　翠簾（みす）　七　なよし

此七曲柳川檢校作也、此内早舟相傳（このうちはやふねさうでん）の時師（ときし）へ一禮（いちれい）の法式（はふしき）あり

松の葉　第一巻

○三味線本手目録

一 琉球組　二 鳥組　三 腰組　四 不祥組　五 飛驒組　六 忍組　七 浮世組

此七曲を本曲といふなり、石村虎澤琉球國より相傳のうへ、手をなほし加へて一作となし、今の世に至りて三味線第一本手組の濫觴となれり

○端手目録

一 待つにござれ　二 葛の葉　三 比良や小松　四 長崎　五 下總ほそり
六 京鹿子　七 端手かたばち

此七曲を新曲といふ、柳川檢校作也

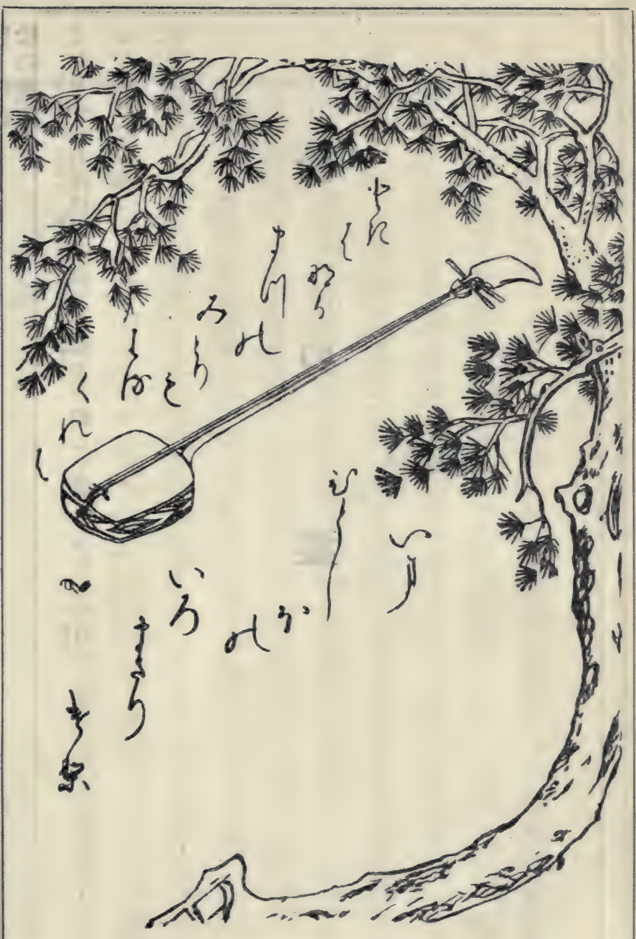
○裏組目録

ははり錦江に桃花飜り、塵動き雲逗るの功、妙手として十の指さす達人なり、やつがれとしごろ閑暇の茶菓に是をもてあそびて、知音のこゝろざしありければ、よりよりかの本手端手長歌端歌吾妻淨瑠璃新曲の唱歌を草書し、かつ古今百首の投節をくはへ、花晨月夕の心やりにかいつくるを、ある人ねもごろの求めに應じて、櫻木に命ながうせんとするにまかするもの也、此花のもとにあそぶ好士あらば德孤ならず吾いづくンぞかくさんや〱。

于時元祿十あまり癸の未龍集の涼み月秀松軒の木のもとにかきあつめぬれば、松の葉と名づけぬるもむべなるべし。

松の葉序

それ吾朝の音律は天の鈿女の命より起りて霰ふるらし外山のかつら色に見ゆるをいかにせんと庭燎の唱歌にはじまりける、かつ人王百七代正親町院の御宇永祿の比琉球より蛇皮二絃の樂器渡り、和泉の國堺にすめる琵琶法師中小路が手につたへ、長谷の觀音の靈夢によりて一絃のまし三絃とせしを世に三味線と呼びて、しらぶる音にあらゆる呂律そなはらずといふ事なし、是一より二を生じ二より三を生じ、三より萬物の音聲を生ずる理いたれり、かの中小路より石村虎澤澤住相うけ、次て寛永に攝州に加賀都城秀堪能ならびなく、九重に遊び東武に、跪き官職に昇進して、加賀都は柳川、城秀は八橋、みな僧官に進じて檢校に經のぼりければ、此三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける、傳ふる所本手端手新曲綿蠻として、淺利檢校佐山檢校出田檢校市川檢校朝妻檢校藤島勾當、今や都には小野川檢校三橋檢校猶等覺一轉のひかりをあらそふ藤永勾當熊川勾當松澤勾當木崎勾當早崎勾當豐田勾當淸田勾當倉橋座頭等、武藏には岩崎檢校豐橋檢校連川勾當安數川座頭等、雪上に霜く



松の葉

八幡町通ふや町角 山本七郞兵衞板

當世こうた揃終

ば

一菊のませがきゆひそめて、なか〱今はなか〱いまは昔こひしや身のうさを

いせぶし

■秋の夜の鹿はないても明かす、人目忍べばうやつらや ヱイ 泣くも泣かれず、忍べばつらや人目 ヱイ しのべばうやつらや ヱイ なくもなかれず

くわんとうほそり

大ざかくだりに、十七こぢよろにゆきあうた、とのとねたやらのさて、髪がそゝけたしばし、おまちやれ、誓文たてゝ聞かしよに鹿島香取や諏訪熱田までうきすの明神伊勢や熊野さ愛宕白山とのと寝はせぬ、けさの嵐にのさて、髪がそゝけた

阿波のなると―洞房語園には、「とは思へども世の中の人の心は飛鳥川」の句を後に添へたり

○いとゞその、夜も〳〵歎きて、あかす、床も〳〵枕も浮く、ばかり

○思ひきろ、とは〳〵、たよりの、なさけ、じつは〳〵、浮世の、すて、ことば

○忘草、がな〳〵、一もと、ほしや、折りて〳〵、そだてゝ、見て、わすりよ

○阿波のなる、とに〳〵、身は、沈むとも、君の、仰せは〳〵そむく、まい

○頼むまい、その〳〵、つらきの、君を、あふせ〳〵に、かはる身を

一とりのねも、鐘もきこえぬ里もがな、ふたりぬる夜の、かくれがにせん

一篠竹（しのたけ）の、窓の嵐に目がさめて、君もおよらず、われもねいらず

一ながらへば、また此頃やしのばれん、憂しと見しこそ、八幡（はちまん）こひしき

一手に手をしめて、ほと〳〵とたゝく、われは、そなたの、てつゞみか

一山のはこそ、月はあれ戀路のみちに月はあらじな

一思ひきれとは、身のまゝか、たれかは切らん、戀の道

一阿漕が浦にひく網も、たびかさなれば人も知れ、さりとてもいなの小笹（をざさ）のせめて一夜（ひとよ）

戀にこがれて―此句淋敷座之慰には、「こがれこがれて」とあり

立つる錦木―松の葉には「身ぞうらみ葛の葉を身ぞつらき」とあり

邊の、鳥ともろとも歌はば歌へ、さゝんせ盃のも酒を

▲ろうさい

▲戀にこがれて露とも、消えば、あとはとにかく、君たのむ

▲立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞうらみ、葛の葉

▲いつの月日に相馴れそめて、今ははなりようかうらめしや、なにの因果にあひ馴れそめて、人目つゝめばうやつらや泣くも泣かれず

▲山のはに西へ東へわたりしさとも月の光はひとりものかは

▲山のはになさけないその身はおしどりの、いはで年とる、身ぞつらき

△松の林のこのしたかげも君がござらにやうらめしや

△夢の世に見たや聞きたや、山ほとゝぎす、姿ならずは聲なりと

▲江戸ろうさい

○つらき人、より／＼、つれなき命さても、はかなのわが身やな

かゝるさんや―洞房語園には露を草とし「われ」を「われぢやに」とせり

とせの、月日をおくる、今宵かぎりと、いよでたをのこ、强きお酌にいかなる下戸もつがばおのまさんせのも酒を

「唄の、一ふし、たれぞときけば、籬ながらも、かくれはあらじ、君の、お庭の、草葉となりと、强き、ゆふべの、風ともなりし、吹かば靡かさんせ名もたゞじ

「うらむまいぞよ、つれなき君を、人のつらさも皆われからよ、あまの刈る藻にすみぬる蟲が、思ひかひなき涙の色、お笑ひあるな名のたつに

「かゝるさんやの露ふかけれど、君がすみかと思へばよしや、玉のうてなも、おろかでござる、人はともいへやれかくもいへ、よその見るめも、いとはぬわれを、お笑ひあるな名のたつに

「つらき、人より、つれなき命、あすは露とも消えなば消えよ、こよひ、ばかりと、定めたをのこ、つよき心に、いかなる君も、引かば靡きやれ名の立つに

「つひにのがれぬ、無常の世界、死なんさきより燒かるゝ此身、胸のけぶりは山谷の野

光る源氏—洞房語園には上半のみにて「契かな」をくり返せり

おぼしめすやら—若みどりには「ねやの空灶」以下を出せり

いとゞさびしき—松の葉には前半のみ出せり

さゝのうで—酒飲んで

●ゆかり思へば、春日の里の、昔男がなつかしや、若紫のこひごろも、昔男がなつかしや

●光る源氏の、おもひの螢、つゝむともなき契かな、その玉かづらたまさかに、包むともなき契かな

●おぼしめすやら、その戀風が、きては枕にそよ〳〵と、ねやの空灶うきねの床に、きては枕にそよ〳〵と

●いとゞさびしき、寢覺の床に、涙なそへそほとゝぎす、昔を忍ぶわが袖に、涙なそへそほとゝぎす

▲さんやどてぶし

「戀の關守、たがするおきた、おもふ敵には、あはでぞ歸る、つらき人目や、かの業平の、歌の心に、いかなる君も、あはゞおゆるしやれ名も立たじ

「ゆめの、うき世に、さゝのうで、遊べ、あすはこひしき、昨日の、むかし、たれかち

まれにあふ夜—此唄洞房語園には「忍ぶ」を「包む」、「それもまた」を「夢も又」とあり
あかぬ別れ—洞房語園には「あかぬ」を「つらき」「告げわたる」を「鳥も又」とあり
雨のふる夜—松の葉には上半を投節とせり

●君とわが中、柴垣ごしよ、人はさがなやゆひたつる、此身はやけよ逢はねばならぬ
たとへ淵瀬にしづむとも

●まれにあふ夜は、人目を忍ぶ、せめて夢にはうちとけよ、とは思へどもそれもまた、
忍ぶ御見にみしゆゑか

●あかぬ別れを、思ふもしらで、いつもながらの鳥の聲、とは思へども告げわたる、鳥
もつとめの身ぢやものを

●雨のふる夜は、ひとしほゆかし、いつに、おろかはなけれども、残る言の葉、おもへ
ばゆかし、いつにおろかはなけれども

●人につれなく、あたりもせぬが思ふ人には逢ひかぬる、とは思へどもそれもまた、逢
はぬさきだにあるものを

●ういぞ流れの、女とむまれ、貞女、ふたりの道そむく、しかしまことの心の水は、君
が外には汲ませまい

ばのナ一筋にャン

▲三輪の神かやよる〳〵ナ通ふひるは人目のナしげければャン人目のナひるは晝は人目のナしげければャン

▲人目おもへば戀しとナだにもいはで戀しきナわが思ひャンこひしきナいはでいはで戀しきナわがおもひャン

▲あふにかへなば命もナすてよよもに浮名のナ立たばたてャン浮名のナよもによもに浮名のナたたばたてャン

▲またの御見(ごけん)はひとむらナしぐれ定めなき世にナ袖ぬらすャンなき世にナさだめ定めなき世にナ袖ぬらすャン

▲むぐら茂りて荒れたるナ宿は秋はきにけりナ人しれずャンきにけりナ秋はあきはきにけりナ人しれずャン

▲當世かがぶし

見る夜はナうらめしやャン

▲初音ゆかしや身はほとナとぎす八聲もろともナなき明かすャンもろともナ八こゑ八聲もろともナなきあかすャン

▲物や思ふと問ふ人ナあらばいかが答へんナ袖の露ャンこたへんナいかがいかが答へんナ袖の露ャン

▲よしやいとはばつらしとナわれは戀のためしにナ身をなさぬャンためしにナ戀のこひのためしにナ身をなさぬャン

▲逢はぬ昔とあひ見てナのちといづれ思ひはナいかならんャン思ひはナいづれいづれおもひはナいかならんャン

▲思ひわするな千代ふるナとても契りかはせしナかねごとをャンかはせしナちぎり契りかはせしナかねごとをャン

▲あだになすなよその夜のナちぎりかはす言葉のナひとすぢにャン言葉のナかはすこと

物や思ふ―松の葉には「物や思ふと問ふ人あらばせめて語りて慰まん」とあり

行くも歸るもし
此唄松の葉の投
節の部にあり

うらみながらも
—是も松の葉に
あり、但「うちな
がむ」を「うちむ
かふ」とせり

當世こうた揃　新なげぶし

▲行くも歸るもしのぶのナ　みだれ限り知られぬナ　わが思ひヤン　知られぬナ　かぎり知られぬナ　わが思ひヤン

▲わかれゐる身は夢こそナ　たのめ打つな妻戸のナ　よるの雨ヤン　つまどのナ　打つなうつな妻戸のナ　よるの雨ヤン

▲亂れみだるよあのくろナ　髪はわけていはれぬナ　わが思ひヤン　いはれぬナ　わけてわけていはれぬナ　わが思ひヤン

▲うらみながらも又うちナ　ながむ月はゆかりかナ　うき人のヤン　ゆかりかナ　月は月はゆかりかナ　うき人のヤン

▲秋の夜すがら限なきナ　月をひとり見る夜はナ　うらめしやヤン　見る夜はナ　ひとりひとり

當世こうた揃

任せて吹きちらし、野人の耳をうごかさんが爲には非ず、いたらぬまでも、天地鬼神の心にかなひ、妙音不思議の聲を調べ、生長化收の道をしらんため也、もし此道に緣あらば、はからずして妙音の樂師に逢ひて、一息の指南に預らん事をねがふの外他念なきもの也

中村宗三

寛文四年甲辰卯月吉日

寺町通

秋田屋五郎兵衛板

耳は聞かんがため鼻はかがんがため―此二句再版本になし

鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黄鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絕、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり

又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の腑に通ず、黄鐘、斷金は、心の臟、小腸の腑に通ず、鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の腑、盤涉、勝絕は、腎の臟、膀胱の腑、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃の腑より通ずるこれなり

一其外生きとしいけるものは、云ふに及ばず、非情無心の草木風聲水音まで、自然の調子にあらずと云ふ事なし、然る間人の目は見んがため、耳は聞かんがため、鼻はかがんがため、舌は味へんがため也、されども調子に至つては、聞く人まれにもあらず、學ぶべきものともせす、誠にいたましきかな、古人は牛の叫び馬嘶を聞き、杜鵑一聲に、世の亂るゝをしる、これみな音律をえたるもの也、おろかなる人とせんや、今時の人は、耳ありても、淫聲を聞き口ありても虛をいひて、終に其身のあたとす、今此尺八も口に



越と云ふ、これ十干の調子也、日月の調子とて上無下無をくはへて十二調子也、此十二調子の次第は、まづ一越は子に當つて位は一つ、數は九つ、斷金は丑に當つて位は二つ、數は八つ、平調は寅に當つて位は三つ、數は七つ、勝絶は卯に當つて、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當つて、位五つ、數五つ、下無は巳に當つて位は六つ、數は四つ、月の調子是なり、鳧鐘は午に當つて、又位一つ、數九つ、黄鐘は未に當つて、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當つて、位三つ、數七つ、盤渉は酉に當つて、位四つ、數六つ、神仙は戌に當つて、位五つ、數五つ、上無亥に當つて、位六つ、數四つ、日の調子これなり

一又順のうつり逆のうつりと云ふ事あり、順八逆六と覺ゆるなり、順のうつりとは、一黄平　盤双上鳧斷鸞勝　神下是を八のうつりとも云ふ、運氣論納音の五行に、八つをへだてて。子を生ずると書きしも、此調子の理也、逆のうつりとは、

一下神勝　鸞斷鳧上双盤平　黄、これを六つのうつりとも云ふ也

一又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、

世に柳川流といふ、くみのかずは、おもて七、うら七と、その外大事ども多き中に、さかい與中島與といふは、大なる祕事とす、はてのかず、三十餘あり、中にもらんこやといふ事は、引きえがたき事也、學ばんとおもふ人はよく〳〵習ひうくべし

一調子を聞き習ふ事、初めは圖竹一竹にて聞くべし、功者に成ては、四穴十二律にて聞くべし、十二律は昔黄帝の臣下、伶倫と云ひし人嶰谷と云ふ所の竹を切て、作り出すと也、去に依て調子を業とする人を伶人と也、此調子と云ふ事は、人間のなすにあらず、天地の間に陰陽造化の氣みち〳〵て、自然の聲音物をかつて、顯るゝ道理也、これ天地の妙一氣の流行不息の印也

一十干の調子と云ふは、天一の水より生ずるを、盤渉と云ふ、地二の火より生るを斷金と云ふ、天三の木より生ずるを神仙と云ふ、地四の金より生ずるを平調と云ふ、天五の土より生ずるを鳧鐘と云ふ、地六の水となるを勝絶と云ふ、天七火と成るを、黄鐘と云ふ、地八の木と成るを双調と云ふ、天九の金と成るを鸞鏡と云ふ、地十の土と成るを一

じばあがあき、しばあがあき、しばがきこをしいてなあああゝん、ゆきいのおなふりいそをでゐ、ちらとみいたとなあああゝんふりいそをでゐゝゆううさいのをなんなもさあんよさいよゆきのなゝふりいそをでゐ、ちらとみいたとなあああんあ

▲鹿をどりのうた

うらううららのせきのをしみいづうはあゝ、よごとをにおつれゐどをなもをたあたあぬううゐいそりや

返しおなじ事也

▲をかざき

をかざきじよろしゆをかざきじよろしゆをかざきじよろしゆはゐいじよろしゆうをかざきじよろしゆはゐいじよろしゆう

近代山井の弟子柳川検校、此道に心をよせ、寤寐にわすれず、天性その骨をえて當代の名人也、色あひばちのしなやかなる事、中々凡人のわざとはおぼえず、さるに依つて、

ぜゑんじせきやまさんりをうゝちわあたりい、ひとをまあつうもをゝとをにいつうくう
との

　これよりさきは三味線おなじごとくに引く也

見わたせばせたの唐橋、のぢしの原やかすむらん、雨はふらねどもり山をうちすぎて、をののしゆくとよ、すりはりとうげのほそみち、こよひはこゝに草まくら、かりねの夢は、やがてさめが井、ばんばとふけば袖さむき、いぶきおろしに不破のせきもり、とざさぬ御代ぞめでたき

▲小六ぶし

ころく、むまれはにしのをくにころく、そをだちやほゝほんほゝほん、ほゝほゝほん、のをよををくはん、んとののんかゝいやかゝかゝんかゝ、そんそれまことにのほんほゝをさあて、むさあしのにすうむなころく

▲柴がき

シトシサ
つらんや

▲あひの手

テステスツ▲ステレステ▲ツルトシサ▲

▲すげ笠ぶし

ステ、チタ、タチテ、チタテ、スチチテ、ツステ、ツトトシトサ シトトトテツステ
やぶれすげがさあやあ、あんやあよしめをがきいれていのをゐい、さらにいきもせず、
トレツルテツトトツツステ、ツテツト ツ、ト、レササシト
ゐよいさあんよさああああよやあさんよさ、すうてゐもせゐずう

▲よし野の山

シトサシサシト、ツトツトサシト、ツステ、ステチタテスツヤクテツト、ツトシト
よしのよをやまを、ゆきがとみいればゆきてはあよ、あらでんよやあこれのを、はなあの
ツステツトシサシャツトサ
ふゞきよのんよやあこれの

▲海道くだり

ツステツト、シトツト、シトサ チタタテチテスツス、テ、ステツルステツルトロシト
おもしいろのかいどくだりやあ、なにとかたあるとつうきいせじかもがはしらかはうよ
ツトトシトサシトツト、シトサシトツト、シトサ チタヲテテテステレツルテツ ステ
ちわあたりいおもふひとにはああわたぐちとよを、しのをみやあがはあらあやあ、じう

シトツト
とをしい

これをよく引き覚ゆれば、いづれの歌にてもふしだに一つなれば、かくのごとく引きてあふなり

▲おなじくあふみをどり

スクテレツルスクテレチタテレテクテレツルスクテレテンツトトサカシキトテトロツルスクテレチリテレツルトテトロサツ、ルテ
ふうらい ふらい ふるつまいいとしなわれふるつまはなをいとを しや

ツトロツトサカシキトテトロツルトテト
れ な を い と を し

たどしこれは引きやうむつかしけれども、世上にてよく覚えたるはかくのごとし

▲伊勢をどり

ステテチテ、テツ　ステレツテツトツトサ　シトツトロサシトテツステレツルトステ、
あのきみさまはあ、いせのはまあそだおち、めゐもとにしほがやれこぼれかあかるゐよ

▲小倉をどり

シトトツテツトトシトトシツトサ　シテツテツト、シトトシツトサ　スト、ツテツトト
をぐうらのをのをんのをんのへの、ひともとをすうんすうんすゝき、いつうさてゐほほ

シト、シツトシサ　ステレツテツトトシトトシツトシササ、シトツトシトサシトツ、
んほゝんほにでて、みだれやあんやあんやあんあをいのおたまこかれゐんてなきこかれ

此畫は再版本に據る



○ふうらいふらい古妻いとしなわれ古妻は猶いとしやれ猶いとし

▲三の糸のしやうが

り（トハ）すくふを云ふ
て（トハ）はなして上より引くを云ふ
れ（トハ）すくふを云ふ
た（トハ）五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ
ら（トハ）すくふを云ふ

右あはせてしやうがの数十六字あり、これをよくそらにて覚ゆるほど何事にてもはやく引きならふ也

十六字とは　しきさかつるとろ（シャサカツルトロ）
　　　　　　すてちりてれたら（ステチリテレタラ）

糸をおさゆるゆびは、人さしゆびなり、べにさし中ゆびにてもおさゆる事あれども、それは功者に成りての事也、はじめは人さし指ばかりにても苦しからず

▲あふみをどりのうた三味線引きやう

ふうらいふらい、（ステツステチテ）ふるつまいとしな、（ステツステテツト）われふるつまは、（サシト、ツステ）なをいとをしい、（テテツトロツ、）やれなをよい（テツトツトサ）

さみせんしやうがの事

▲一の糸のしやうが

し トハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

き トハ すくふを云ふ

さ トハ はなして上より引くを云ふ

か トハ すくふを云ふ

▲二の糸のしやうが

つ トハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

る トハ すくふを云ふ

と トハ はなして上より引くを云ふ

ろ トハ すくふを云ふ

す トハ 五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ

て トハ すくふを云ふ

ち トハ ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

初めはよく引く人にあはせてもらふべし、但調子高きは糸たび〳〵切れてわろし、少しひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上ごまより一寸ほど下に、糸三すぢながらに墨を付けおくべし、あがりさがりのなきやうに同じ處に付けおきてあはせ習ふべし、糸ゆるまれば墨下り、しまり過ぐればあがるものなり、髮筋ほどあがりさがり有ても、一調子ちがふもの也、これを證據にして糸をあはせ習ふべし、又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮になりとも糸になりとも、墨にてしるしを付け、同じ所にこま立つるやうにすべし、或人のいはく

引き習ひ糸をあはせんとおもふなよ

すみだにあへばいとはあふなり

髮筋ほどあがりさがり有ても一調子ちがふもの也―此一句再版本になし

引きかへたる所あり、されども此曲猶よきにしもあらず、其後もたび〳〵不吉のためしありける也、又七つばかりかきくだし、三のたゝき、篠むすびなどいふ調の曲の名也、いづれもたやすくは引きえがたき事なり

三味線ならひやうの事

人の引くに心を付けばちの持ちやう、糸のおさへやうを見るべし、或は歌をひかば、まづ其歌のふしはかせよく覺ゆるが肝要也、たとへばゑをかゝんと思ふに、たび〳〵みたる物を書くはにせてかゝるべし、終に見ざるものを何としてか書き出すべきや、三味線もこれにひとしく、我さへ歌を覺えずして、三味線にうたはする事、なか〳〵成りがたき事也、先づはじめには糸をあはせ習ふが專要

糸をあはせ習ふやうの事

いふ心にて、りうきうぐみといふ事を作りおけり、弟子虎澤檢校に殘さず傳へしかば、虎澤またくみはてと云ふ事を作り出す、虎澤より山野井檢校傳受して、世にひろまる糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也、たやすきものに似て、はなはだ引きえがたきもの也

一琵琶の調子まづ黃鐘の調子に合せんとおもふ時は、一は黃鐘に合せ、二は一越三は平調、四は一のうは調子也、又盤涉に合せんとおもふ時は、一は盤涉二は平調、三は双調四は一のうは調子也、のこる調子も准之、琵琶の樂にあまた有りといへども、大唐より傳へ來るは

一上原石上

一流泉啄木

一玉樹三女

此玉樹といふ曲は、不吉の曲といひ傳へたり、然るを或人うつりをかんがへ、此中一手

三味線の次第の事―一本には此見出の代に「三味線糸竹、柳川ひでんのひきやう」とあり

糸竹初心集　下卷

三味線の次第の事

抑日本に三味線をひき初めし事は、文祿のころほひ、石村檢校と云ふ琵琶法師あり、心たくみにして器用無雙の者なり、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸を三筋にてならす物あり、小き弓に馬の尾を絃にかけて引くなれば、小弓とは云ふとぞ、石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとのしらべやうも、一二はびはのごとく、三の糸はびはの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所のものいひけるは、此島には眞蛇の多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さればらへいかのなく聲、小弓の音に少しもちがはざる故、眞蛇を退けんが爲に專ら引く也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引き給へといふ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶此をやつし、三味線をつくり出せり、琉球の島よりえて來ると

桐壺　　すま

雲のうへ　　うす衣

うす雪　　からかみ

雪のあした　　新曲

此分いづれも、一くみにうたのしやうが六づつ有り、たゞしゐてんらくは七つ有り、其外の大事のくみどもおほく有る也、中に雲井のしらべと申すは、大きにひじする事也

○一つとや人も知らぬ戀をして涙は秋に絶えやらぬ

○面白の海道下りや何と語るとつきせじ鴨川白河打渡り思ふ人には粟田口とよ四宮河原や十禪寺

八八九八 七 六五七六五 四 五
かざき上らうしゆはゐい上らうしゆ

▲かぞへうた

七八八九十十と いきんい と十九十九八九十五十九八九九十九八七八七六七三八七六五
ひとつとやあひいとをもゐしらあぬこひをしいてなみだはたもとをにたえやあらぬ

▲かいだうくだり

六六七三八七六五四五九十と十十十九十九九テン十五十九八九八七八六七七八八七八六六七三
おもをしいろをのかいどくだありやあゝなにとをかたあるうとつうきいせじかも川

八七六六五五九十と十十九十九八九十と十十九十九八九十と十十九十十八九九十八九八七三八七
しら川うゝちわあたりいゝおもふひとにはあゝあはたぐちとよをゝしのみやあがはあ

六六ロ七八八八七八
らやじうぜゐんじ

これより末もかくのごとくくり返して引くなり

此外はやりうたどもあまた候へども、ふしさだまらざるはしるしがたし

八橋流(やつはしりう)くみの名

ゐてんらく　これは古樂の名　天下泰平

梅がえ　宮古鳥(みやこどり)

○柴垣越してな雪の振袖ちらと見たとな振袖雪の雪の振袖ちらと見た

○裏のせきの清水は夜毎に落つれど名も立たぬゑいそれ夜毎に落つれど名も立ゝぬ

○お町でのやき手は誰々ぞそりや中に明月伊勢定家そりや尾上野風にかしのいに花垣關寺吉川よそりやよ太郎よ〳〵とよひやいたしてまふきせた

○岡崎女郎衆はえい女郎衆〳〵

しばあがあき、しばあがあきしばがきこをしいてなあゝあんゆきいのむなふりそを
でゑょちらと見いたあとなあゝあんふりいそをでゑゑゆうきのなんなんさあんほさい
よゆきのいのむななょふりいそでゑちら と見いたあとなあああょん

▲鹿をどりのうた

うらうょょらの、せきのをょしみいづはあょ、よごとをにおつれゑど、なもをたょあぬ
うょゑいそれよごとをに、おつれゑどなもをたょあねうぅょ

▲あひの手

おちよでのやきてはたれ〳〵ぞ、そりやなあかにめいげついせていかそりやををのへの
かぜにかあしのいいにはなかき せきでらよしかはよそりやよ太郎よよ太郎よよ太郎
よ 太郎よ太郎よとよ ひやいたしてまふきせた

▲をか崎

をかざきじよろしゆをかざきじよろしゆを かさき じよろうしゆはゑい上らうしゆうを

○芳野の山を雪かと見れば雪ではあらでやこれの花の吹雪よのやこれの

○破れ菅笠〆緒が切れてさらば著もせずさんさ捨てもせず

○小六ついたる竹の杖本は尺八中は笛末は女郎衆のそれ誠に筆の軸竹

▲芳野の山

よしのゝをやまを、ゆきかとみいればゆきではあああらでむゝ、やこをれのはなあの
ふゞきいよのむゝ、やあこれの

▲すげ笠ぶし

やぶれすげがさあやあんむやあ、しめをがきいれていのをゐい、さらばきもせず ゐ
い さんさあ、あゝや あゝさむゝさすてゐもをせず

▲ころくぶし

ころくついたるたけのおをつゐころく、もとはしやくはちなかはあゞふえころく、すう
ゐゝはほゝほんほゝほんほほんほゝ、のんよをゝしよんしよ、しよんしよんしよろしゆ
ののんかゝいやかか、かゝんかか、そんそれまことに、のほんほほをさあて、ふでのぢ
くうたあゝあけ、ゐころく

▲しばがきぶし

○これから見れば近江が見ゆる笠買てたもれ近江笠やれ近江笠

○小倉の野邊の一本薄いつかさて穂に出て亂れ合のおたまこがれてこがれつらんや

○あの君樣は伊勢の濱育ち目元に鹽がこぼれかかるぞへ

これゑゑからあみれゑば、あふあふみがあみゆうるな、かさあこて、たもをれ あ ふみがさやれ あ ふみがあさあ

此うちむかふ爪にて引く事有るべし、よく〳〵心をとむべし

▲小倉をどりの引きやう

をぐうよらあのをよ、のおんのおんのへゑの、ひとをもとをすうむすうむすすうき、いつうよさあてゑよ、ほをんほほんほにでて、み だ れあああんあよあんあをいの、おたまこがれゑんて、秋こがれつらんや

▲あひの手

「八」「きん」「いといいきんきんいきん」「とゝ五十九八

▲伊勢をどり引きやう

あのきいみさまあはあよ、いせのはまあよそだあち、めゑもとにいいしほがやれ、こほれゑかかるぞへ

テントテンイ〇テンキンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンキンテン、イテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テンイテントテン十〇八テン九テン十〇テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン七テン六テン五

右すがかきの如くでんといふは、みな打爪也、その外は、いづれも前爪にて引くべし、

又むかふ爪といふ引きやう有りまづ

一五と引く時は一は向爪、五は前爪にて引くべし

二七と引く時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引くべし

三八と引く時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引くべし

四五と引く時は四はむかふ爪、九は前爪にて引くべし

いづれも糸四つはざみ也、歌のうちには幾所も有るべし、よく〳〵心を付けておぼゆべき也

▲あふみをどりのうた琴引きやう

ば

三を引ての跡のうち爪は、一二をうつべし

四を引てのあとのうち爪には、一二をうつべし

六を引ての跡のうち爪には、二三四のあたりをうつべし

七を引ての跡のうち爪には、三四五のあたりをうつべし

八を引ての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし

右いづれも、次第々々におなじ心なるべし、但糸三筋うつにはさだまらず、前爪より二筋ほど先をあたるに任せうちたるもの也

▲りんぜつ引きやうの事

テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五テン六テン七〇テン八八テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇テン十十九八テン七テン六テン五〇三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十

ぢ―柱

時、糸十三ながらいづれもぢのきはに墨を付けおくべし、糸しめゆるめにて、調子あはするにあらず、ぢの立てどころにて、合せたるものなれば、ぢをはづしたりとも墨をしるしにて、本の所にぢを立つるやうにすべし、大かたはあふもの也、又ぢを立てづめにしておけば、糸たび〳〵きれてあしゝ、其上糸のびるもの也、墨を證據にして、糸をよく調べ習ふべき事肝要なり

▲すがき引きやうの事

三テン四テン六テン五〇三テン四テン六テン五〇三テン四テン五テン六テン七テン八テン九テン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テン十テントテンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テン九テン八テン七テン六テン五

此うちてんと有るは、いづれもみな打爪也、其外はみな前爪にて引くべし、打爪といふは向爪脇爪ふたつの爪にて、三筋ばかりを、てんとうちかきたる物也、うち所はたとへ



子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子也、残る調子もこれに准ぜよ、又雲井の調べといふ事を此比八橋検校ひき出したり、此八橋もと三味線の上手なりしが、中年より琴を學び、不思議に、琴の妙をえて、今日本の名人となる、音聲色ざしほど拍子、中々心におよびがたき上手なり

一琴を引きならひやう、曾て知らざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうを見習ふべし、まづ大指にさしたる爪は前爪と云ふ、中指にさしたる爪を、向爪と云ふ、人さし指にさしたるを、脇爪といふ、糸の名は手前なるをきんといふ、次はいといふ、又次はとと云ふ、それより次第々々に、十九八七六五四三二一也、此中におさゆる糸は、四七九八也、但引きならひにはおさへずしても苦しからず、爪かず計りよく覺えたるよし、初めには糸あはせがたきもの也、糸あはざれば何事引きてもうつらぬものなり、されば糸をよくあはすべし、但右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞かずしてはあはせがたし、初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合ひたる

糸竹初心集 中卷

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に玄淨法水とて、二人の僧あり、或時長崎に至て、琴の引きやうを唐人より傳はり、其後都へのぼり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給りて、法水は關東にくだり、琴をひろむる、玄淨は筑紫にかへりて、これも琴を專らに執行す、さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也、かよりとていやしき賤のわらや、不淨なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず、神をすゞしめ菩薩の現じ給ふ妙音なれば、四町のうちを初め奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、そのおそれ有るべき事也、凡糸の調べやうは、まづ一越に調べんと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黃鐘、四は盤涉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、九は四の上調

七　執行―修行に同

ヤヤチリヤヱヱ、ヤヱルホ、フヱチリチ

▲盤涉呂の音取

ヱヤヱ、ヒタヱヤウ、ホフヱウホヽ

▲同律音取

リリヒイリヤヤ、リヤヱウ、ホフヱウホ

右いづれも、調子吹く時、まづ此音取吹かざれば、調子かはりてうつらぬ物也、此外音取あまた候へども、數さだまらず

宗君流の書物に傳る手の數は

黄鐘廿三　盤涉十六　一越十五　平調十三　双調十一

此外さらばの音取、またゝきかへしみだれ、戀の音取かんのゆりなどは、宗君一子相傳の所なり

如此に吹て其後、一越の手にても双歌にても吹くべし、何も如此に音取ある也

▲平調呂の音取

ヱホホウホホ、ヱイヱイヱホヱ

▲同律の音取

イヱフヱヱウ、タイタヱフヱ

▲双調呂の音取

ヤウホウルフ、フウホフヤ

▲同律の音取

イヤフヤヤ、タヒタヤフヤ

▲黄鐘呂の音取

ウヱウ、チタウルホ

▲同律音取

イイホ

是を何べんも吹く也、則ほど拍子は笛の如く也、此内おなじ字の重りたる所の吹きやう、何にてもふさぎたるゆびを、少しうごかしたる物也、たとへばフの字の重りたる時は、四のゆびを動すべし、ホのゆびの重る時は三のゆびを動すべし、ウのゆび重る時は二のゆびを動すべし、エの重る時は一のゆびを動すべし、やの重る時は、うらのゆびを動すべし、リの重る時は、一のゆびを動すべし、ヒの重る時は、三のゆびを動すべし、神の字の重る時は、二のゆびを動すべし、いの字の重る時は、三のゆびにて打つべし、上の重りたる時は、二のゆびを動すべし、たの重る時は、三のゆびを動すべし、ちの字の重る時は、二のゆびを動すべし、又音取はたとへば一越の調子を吹かんとおもへば

ウフフホフヽウ、リウリウフウ

これを呂の音取と云ふ、同律の音取

ウリヤリヤエ、ウリウリウフウ

云ふ事あり、黄鐘の大事これなり、此外黄鐘の手ども、いくつも有之候へ共、しるすに及ばず、但ほど拍子タヱフヱはひろふ、ウトチトはのぶる也

▲盤渉の調子つしま

フヽホヽホヽフホヽ、ホウヽホヱウヽヽホ、ホヱヱウヽホヱウヽホ、　高音リヽヒヽ、ヒヽリヤヤ、ヒリヽヤヽ、ヤヽタヤタヱヽ、ヤタヤタヱウ、ヱヤヱウホ　おろしホウウホヱウヽヽホ、ホヱヽウヽホ、ヱウヽヱヤヱ、ヤタヤタヱウヱ、タヱウホ

▲二段の序

タヽタヽ、ヽヽタヒヽ、ヒ神ヽヒ、上神ヽヒ、ヒ上上神ヽヒ、上神ヽヒ

高ねおろしは、初段同前、三段めは二段めのごとくに吹て、まを同じ如くにして、手を吹入れたるもの也、其手定らず

[illegible]▲さがりは

ヒイヽヽヽヒイヽ、ヽヽヽヒヽ、ヒイヒイ、ヒヽイヤヱ、ヽヽウヱヽ、ヱヱヤタヽ、ヒ

此手は文祿の比、後陽成院の皇后に、糸竹の音に長じ給へるあり、此手を吹きいださせ給ふ、さるによりて后手といふ也

▲ころび

イエフエタチタエフエウタエフエ、ヽヽヽヽヽフエヽウ、タエイエヽ、フウルホ

▲返　シ

ウヽエルタエフエ、タウルホ

此手頓阿彌吹出す、返しの一の息にころぶゆび有り、他流には頓ころびとも云ふ也

▲小兒

イエイフエヽタイ、エウエルホ、フエヽヽヽヽフエタウタエ、チタチヽエフエウタチ

イエウエ、ホウルホ

▲返初手におなじ

此手は門阿彌吹出す也、ある山寺の小兒に戀慕して吹きし手也、さらば明白まるらんと

ウエフフエタエフフエ、ヽヽヽヽヽフフエウエ、チタエフフエヽフウルホ

▲返初手におなじ

此手江州大津の住、とぎやの佐右衞門二郎吹出す也、刀をとぎける時、此手をおもひ出し、手を拭はで、吹てみるに吹きけるうちに手かわきたり、さるによりて手巾といふ、此手の中にチタエフフエヽフウルホと吹くところあり、吹きやうおほし、チタエイヽフウルホとも吹く也、これをぬき手巾と云、日光院吹出さるゝ也、又チタエフフエウエホウルホ

▲返

ヴヽフエフフエタウルホと吹く也、これは筒手巾と云ふ、宗佐老人の手也

▲后手

ウエフエタエフエ、ヽヽヽヽヽフエタイタチタエフエ、チタチヽタエフエ、ヽヽヽヽ

フエウエ、ヒエフエウエ、ホウルホ

▲返シ初手におなじ

あのきみさまはあ、いせのはまそだあち、めもとにしほがやれこぼれかゝるゐ
（エヤヤリヤヤエウ　エヤエウ、ヒイリヤ　リ神ヒリヤリヒリヤゐヤエウ、エヤ）

此外五調子の手どもあまた候へども、数おほくこまかなる事に候へば、のせがたし、但黄鐘のうち、世間によく吹き覚えたる手、少ししるすものなり

▲初　手

ウエフエタエフエ、ヽヽヽヽフエウエ、ヒエフエウエホウルホ
（ユ　リ）

▲返　シ

ウヽタエフエ、タウルホ

此手黄鐘巻頭の手なるによりて初手といふ呂也、やはらかにかろく吹くべし

▲安（やす）田（だ）

タチタチヽ、ウチタエフエ、ヽヽヽヽフエタウタエ、チタチヽ、イエウエ、ホウルホ
（ユ　リ）

これより末初手の返しを吹く、此手江州の住　安田と云ふ仁、吹出す手也

▲手（しゆ）巾（きん）

右にしるすごとく双調と盤渉とには後のやたるを吹くべし

▲双調いせをどり

あのきみさまはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれこぼれかゝるゐ

▲黄鐘よしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではああらでんゝ、やこれの、はなあ
のふゞきよのんゝ、やあこれの

▲盤渉よしのゝ山

よしのゝをやまをを、ゆきかとみいれば、ゆきにはああらでんゝ、やこれの、はなあ
のふゞきよのんゝ、やあこれの

▲黄鐘いせをどり

あのきみさまはあ、いせのはまそだち、めもとにしほがやれこぼれかゝるゐ

▲盤渉いせをどり

づうもををとにい、つうくうとの

これより末尺八吹きやう同前也

▲平調の調子よしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではああらでんゝ、やこれのはあなの
ふゞきよのんゝ、やあこれの

▲平調伊勢をどり

あのきみさまあはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれ、こほれかゝるゑ

此外近江をどり、すげかさ、海道くだり、いづれのうたにても、右之格を以て吹きならふべし

▲双調のよしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではああらでんゝ、やこれのはなあの
ふゞきよのんゝ、やあこれの

はあらでやこれの花の吹雪よのやこれの

○あの君さまは伊勢の濱育ち目元に鹽がやれこぼれかゝる

○ふうらいふうらい古妻いとしなわれ古妻は猶いとしやれ猶いとし

○破れ菅笠〆緒が切れて更に著もせず棄てもせず

○面白の海道下りや何と語るとつきせし鴨川白河打渡り思ふ人には粟田口とよ四宮河原や十禪寺人松本につくとの、此唄閑吟集にあり

ふぶきよのんょ、やあこれの

▲いせをどりのうた

あのきみさまあはあ、いせのはまあそだあち、めもとにしほがやれ、こぼれかょる

▲あふみをどりのうた

ふうらいふらい、ふるつまいとしなわれふるつまはなをょいとしやれ、なをいとをしい

▲すげ笠ぶし

やぶれすげかさややんやあ、しめをがきいれていのをょゐい、さらにきもせずゐいいさんょ、さあややあさんょさ、すてもをせず

▲海道くだり

おもおしいいろの、かいどくたりやああ、なにとかたあるとつうきいせじ、かもがあはあしらかは、うょちわあたり、いょ、おもふひとにはあょあはたぐちとよをょ、しのみやあがはあらやあ、じうぜゐんじせきやあまあさんりを、うょちすうぎてゐょ、ひとま

○吉野の山を雪かと見れば雪で

上神(じやうかん)　イタルチ　　以上十三

これをよくそらにておぼえざれば吹き習ふ事成りがたし、但此内ヤタルこれ三つは二やうに有り

一㋳一三四明うらと二ふさぎたるをやと云ふ

一㋟一と三ふさぎ二と四とうらあけたるをもたと云ふ

一㋸一二四裏をふさぎ三ばかり明けたるをもると云ふ

これは双調の調子、盤渉(はんしき)の調子に、このゆびを用る也、黄鐘平調(わうしきひやうてう)一越(こつ)には右のヤタルを吹くべし、よく〱心をとめゆびづかひちがへず、空にておぼゆべし、惣じて尺八は、五調子用ひ候へども、まづ歌は一越の調子を専(もつはら)とする也

一一節切證歌

▲やまとをどりのうたふきやう

ホウフホフホウウウ　エウエウフホウ、エヤリ、ヤと上リヤエ　ヤリエウ　エウホウ

よしのゝをやまをゝ、ゆきかと見いれば、ゆきではあらでんゝ、やこれの、はなあの

ちトハ一をあけ二三四とうらをふさぎたるを云ふ

ほトハ四をあけ一二三とうらをふさぎたるを云ふ

うトハ三四をあけ一二とうらをふさぎたるを云ふ

ゐトハ二三四をあけ一とうらをふさぎたるを云ふ

りトハ二三四とうらをあけ一ばかりふさぎたるを云ふ

ひトハ一とうらをあけ二三四ふさぎたるを云ふ

しやうトハ三四とうらをあけ一二ふさぎたるを云ふ

神トハ四とうらをあけ一二三ふさぎたるを云ふ

たトハ一二四をあけ三とうらをふさぎたるを云ふ

るトハ二四をあけ一三うらをふさぎたるを云ふ

以上十三字也

フホウヱヤリヒ

百十二あり、これも調子は十二調子より外に非ず、五調子を專らとす、筒音は平調（ひやうでう）也、簫は、竹數十七本あり、一つに一調子づつ切たるもの也、但十二調子より外に非ず、のこりは同音也、竹十七は五行十二支を合せたるもの也、吹きやうの息づかひ内外あり

一一節切吹樣之事、まづ左の手をうへになし右の手を下になすべし、左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさし指にて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ、一の穴と云ふはおもてのふしのそばなるを云ふ、次を二、次は三、下を四といふ、まへにあけたるをうらといふ、第一おぼえずして叶はざる事は、指づかひの名也

一節切惣の穴の音知る事

ふ トハ 惣の穴をふさぎてふくを云ふ

い トハ 惣の穴をあけてふくを云ふ

や トハ 一二三四をあけうらばかりふさぎたるを云ふ

ほろぼろ—暮露の字をあつ、この修行者の事つれ〴〵草に見ゆ

一虚無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切るゆゑ、尺八といふとぞ、濫觴はたしかに不知、そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしといへども、了簡せず、昔よりほろほろの家に用る物と聞えたり、梵士漢士色おししら梵士などいひしもの、此尺八の執行者と聞えたり、近き比不人といふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外れんぼながし、京れんぼ、さむ也井川、よし田などいふさま〴〵の手有之、いづれも律呂の調子にあはせたる物とは聞えず、されども我道にあらざれば、其深き事をしらず

一一節切の尺八切りやうの事、節を一つこめ長さ一尺八分に切る故、此名を付くといふ、節より下は七寸、上は三寸八分に切る也、但竹のふとほそによりて、調子違物なれば、極めて寸は定らず、筒音を黄鐘の調子にあはせたる物也、音色は笙のごとく、ゆびづかひは篳篥に似たり、歌口のしめ様は、笛同前也、ゆび遣ひ卅二あり、笛は惣の穴七にしてゆびのあげさげ百廿八あり、調子は十二より外にあらず、上乙あるによりて、しらざる人は調子多様に聞ゆる也、筒音は盤渉也、ひちりきは穴の數九つ、ゆびのあげさげ五

糸竹初心集 上巻

先一節切尺八は、其濫觴まち〳〵にて、さだかならず、そのかみ異人有て、宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり、然しより宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念ゐことゝし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のするゐをくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだにもみず、わづかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音をしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也

糸竹初心集目録

抑此書たる事は、一節切の尺八并に、琴三味線ならはずして吹きおほえ、引きおほゆる道の書なり、然りとはいへども少しも心得たる人の、用ゆるわざにはあらず、曾てしらざる人のために、若やと記すものなり、しかし又さらになるまじき道にもあらず、書趣をよくかんがへ、聲歌をそらにおぼえなば、少しはなどかならざるべき、若是に調練せば、此心をたよりとし、いかなる事をも吹き出し、引きいだすべきものなり、よく〱こゝろをとむべし

糸竹初心集

世はかぎりなし、事は盡きせずとは、たれかいひけんこれ誠也、まことの道は天の道也、これをまことにするは人の道なりとは、むかし聖の詞也、此誠物と我とになきにはあらず、されども知られず知らず、年をつみ、日をかさねて、頭の雪びんの霜のみ、色をあらそふ事、人みなおなじ、こゝに中村宗三といふものあり、幼きより目しひて色をみず、瓶をわるよはひより、理にさとく、耳を以て目とする事、人にすぐれたり、つく杖の土木水石に當る音を手にえて心に得る、しかしより音を聞きて理をしるべき事のあらんを思ひて、琵琶、琴、さみせんに心をつくせり、或時は大森宗君が一節切の調子音律にくはしき事を聞きて、強ひて是をまなび、寝食を忘れてやうやく師に近し、されば友遠方より來りて、又學ぶものあり、かれに對して書き付くるものをみれば、予が眼をうらむる心有て、徒らに書のはしに記すものなり

糸竹初心集

壹岐

凡七首

▲峯の小松に雛鶴つがひ、谷のながれに龜あそぶ

▲ござる〳〵と浮名をたてゝ、さまは松風おとばかり

▲しまうた〳〵團七どんのさら小麥六把ばかりしまうた、裏のおかめ女とざれあうて

しまうた—小麥藁をだいなしにしたりとの意

對馬

凡三首

▲いらぬ煙管のらうが長うて、さまとねる夜のみじかさよ

▲野にも山にも子なきはおきやれ、萬の倉より子は寶

▲いざやわかい衆ござるまいかよ、晝狐なんのばかさりよ、とんとろばけよ

凡三首

下卷　大尾

思ひだすとは―閑吟集に、「思ひ出すとは忘るゝか思ひ出さずや忘れねば」

もとぞ―持たうぞ

▲思ひだすとは忘るゝからよ、おもひ出さずに忘れずに

▲幾夜あかしの浦こぐ船も、うかれこがれて磯へよる

薩摩

凡二首

▲闇夜なれども忍ばゝ忍べ、伽羅のかをりをしるべにて

▲ちよの前髪おろさばおろせ、わしもとめましよ振袖を

▲洲山(すやま)おかめ女は洲山の狐、尾ふり尻ふり人をふる

▲ちり行く花は根にかへる、再び花が咲くぢやない

▲志賀唐崎の名はよけれ、一つ松とは聞くさへつらい

▲島が島なら世が世であらば、なんの地かたに身はもとぞヨイコノイカニ なんの地かたに身はもとぞ

▲夫の留守に人よせせぬは、拐も見あげた花よめご

▲平戸小せどから舟が三艘見ゆる、丸にやの字の帆が見ゆる

丸にやの字―元禄の頃江戸大傳馬町三丁目に丸屋某といふ廻船持の富豪ありきとぞ

凡五首

肥後

▲つまよな池のどんがめならば、くんくるべいヅボンボへ

▲とものむかひのせんする山、は地からはえたか浮島かエ丶エ

▲よひに見そめた白齒の娘、ようもなりそな瓜の蔓エ丶エ

とも―備後の鞆　せんする―仙醉島なるべし

凡三首

日向

▲月はいみじき闇こそよけれ、忍ぶすがたの顔見えず

▲水にかはづの鳴く聲きけば、過ぎし昔がおもはるゝ

▲おもひこがれて飛ぶほたる、ゆふべ〳〵に身をこがす

凡三首

大隅

おのれ―一本「おれ」とあり
くんくるべい―來るべしと
つくばくわんおん―筑波觀音か
ごんぼ―牛蒡
きち〱ばうず―はたおり虫の

な
▲さまの痴話文鼠にひかれ、おのれが思ひは穴になる
▲くんくるべいと待つ夜はなくて、待たぬ夜はきて、ちよんきりちよんかいな
▲つくばくわんおんに口髭がはえたサはえたら大事か、なんとせう、ちよんきりちよんかいな

凡五首

肥　前

▲げんが弟はヤアレ砂地のごんぼ、ねそこほられてあらはれるよゲンコベ
▲藪のなかのきち〱ばうずは、なじよと鳴くぞ、親がないか子がないか、親も子もござるけれど、をばごのかたへかたびら一枚かりにいた
▲おまんまたぐらに釣鐘堂が出來て、けふもくれぬかと六つのかねサヨイナア
▲させばおさへるおさへば飲めず、飲めば其身のあだとなるサヨイノウ

しなばかつくる—しな（嬌態）ばかりする

でこのぼう—木

うかめて—極樂淨土に浮かませて

そよぐけんな—そよぐ故に

▲臼はまはさでしなばかつくる、しなでまはろか此臼が

▲待つがつらいか別れがういか、待つは樂みわかれはつらい

▲みめがよいとて心が人か、大坂でこのぼうでつらばかり

凡五首　　　豐前

▲わしとおまへは諸白手樽（もろはくてだる）、中のよいのは人しらぬ

▲つれて行かんせいづくへなりと、たとへ鹽屋の火をたくとても、おまへ故なら苦しゆない

▲さても見事なみたらひつゝじ、晩につぼみて夜中（よなか）にひらく、夜明方にはちり／＼と

凡三首　　　豐後

▲後世を願ふはわが身ぢやないぞ、さまをうかめてともしたい

▲金の山吹風そよぐけんな色はんな色はんふく茶にすんふく茶、ちよんきりちよんかい

こまの名物云々―博多獨樂と博多帶とをいふ

花すぎか―一本「花すぎる」とあり

▲ほしやをしやと思ふはなんぞ、とかく君ゆゑナアレカシ

筑前　凡七首

▲こまの名物博多と聞え、帯にしてさへまはりよい

▲生れ來りしいにしへ問へば、君にちぎれと夢に見た

▲後家をたてゝの身だしなみ、日かげにさける花ずきか

▲茶ものがたりに人事（ひとごと）いうて、おのが恥をばのみかくす

▲こまの手づなをしりながら、さまに引かれて身をよごす

筑後　凡五首

▲高みにのこる月影を、宿せし袖はかはるまい

▲いかで忘れん逢ひなれて、後世のちぎりもあきの山

ねいろ―根入、寢入

茅―穂の誤か

はをかくす―齒と雪とにかく

ゆつら云つら―いひつらんいひつらんの意

▲十九はたちで妻(つま)ないならば、ひとりまるねがさびしかろ

▲わしは濱松ねいろとすれば、磯の小波がゆりおこす

▲おやも兄弟もなき身のはては、ともに情のかけどころ

▲闇のまる木橋さまとなら渡ろ、落ちて流れてさきの世ともに

凡五首

土佐

▲田野の山道茅(ち)は帆はひかぬ、おさや手織のやつもめん

▲親にかくしておはぐろつけて、よそにふる雪はをかくす

▲ゆつら云つら女房にせうと、つれて他國をしよとゆつら

▲さまとわしとは燒野のかづら、蔓は切れても根はきれぬ

▲こいといふのに遠いといやる、なんの四十餘里、四百里も心ちかくぞナアレカシ

▲戀しゆかしもさまゆゑばかり、逢はぬむかしにナアレカシ

▲鉦をたゝいて佛にならば、江戸のはやがね皆佛

凡五首　　讃岐

▲さまよ〳〵とこがれて來たに、さまはおしかよ物いはぬ

▲志度はよいまち西北(にしきた)をうけ、八島おろしはそよ〳〵と

▲花のゐじまはからみがあらは、たぐりよしよものみのはらへ

▲人の娘と新造の船は、人が見たがる乗りたがる

▲八島山には大谷小谷、なぜにこなたに子がないぞ

▲みすじふろ谷(かや)朝さむござる、火燵(こたつ)やりましよ炭そへて

凡六首　　伊豫

▲月はかさなる腹の子はふとる、生木筏できが浮かぬ

き―氣、木

淡路　凡七首

▲舟がつく〳〵百二十七艘、さまが御座るかあの中(なか)に

▲丹波雪國つもらぬさきに、つれておでやれ薄雪に

▲しんく島田にけさゆうた髪を、さまがみだしやる是非もない

▲花は折りたし梢は高し、ながめ暮らすや木のもとに

阿波　凡四首

▲あたけ戀しとさまつた山がよひ、つたのたていし星月夜

▲せまい廣いとわしが寢た部屋を、今はよそめで見てとほる

▲雨がふろとて沖から曇る、娘さろとて聟がこぬ

▲鳥もはら〳〵夜もほの〴〵と、鐘も鳴ります寺々に

しんく島田―辛苦して結うた島田髷

娘さろ―さろは離別の意

▲西ふく風の夕ぐれに、思ひいでたよ里ごころ

▲こいというたとて行かれる道か、道は四十餘里夜はいちや

▲戀ぢやせきやるな浮世は車、命ながけりやめぐりあふ

凡三首　　　　紀伊

▲いく千代久し松がえの、君もさかえるわかみどり

▲月になりたやさまが住む、ねやの臥戸を照したや

▲たづねてござれ戀しくば、三輪のふたもとともすぎん

▲おもふ殿御が野邊ござるなら、涼し風ふけ雨ふるな

▲山が燒けるがたゝぬか雉よ、これがたよりよか子をおきて

▲人にはいはりよと云ひさがさりよと、わしが身にさへくもりなか

▲人の口には戸がたてられぬ、流れ川瀧せきならぬ

三輪の云々—二本杉に共過をかく

くもりなか—くもりなくば

▲宮と廣島に海がなかよかろ、いとし殿御をかよはせはすまい、わしがちよこ〳〵通ひましよ

▲渦がまひます廣島の沖に、渦ぢやごしせんゑくほでごしす、おまへとわしが中ぢやもの

凡二首

周防

▲東風（こち）ふきすさむあしたには、さまの涙か雨のあし

▲ひとよ馴れ〳〵この子が出來て、新茶々壺でこちや知らぬショソガヘ

▲吉田通れば二階からまねく、しかも鹿の子の振袖がショソガヘ

▲酒はのまねど酒屋の門（かど）で、足がしどろであゆまれぬショソガヘ

凡四首

長門

ごしせん―ござんせぬ

こちや―此方、粉茶

世間ひろがり内すぼり—諺に外ひろがりの内すぼりといふ
ひづる—はこべの事か
くさぎ—臭桐
底にくい—一本「底にがい」とあり従ふべし

▲こちの旦那殿はからかさ育ち、世間ひろがり内すぼり
▲こなたお背戸にひづるとたでと、なんのひづるめがたで〱と
▲こちの旦那殿くさぎの育ち、うはべうつくし底にくい

凡五首

備後

▲さかえ久しき松がえの、岩の岸根に波よする
▲江戸へ〱と木草もなびく、江戸には花咲く實もなりて
▲にくい〱はうらの裏、實(じつ)のにくいは思ひのあまり
▲たとへ火の中水の底、およばぬ中に住むもきみ
▲心短氣な男を持てば、胸に早鐘つくごとく

凡五首

安藝

備前　凡五首

▲千代に八千代に御代をさまりて、浪も靜に四つの海

▲しあく大工はちよく〵まかちよ、おれが木ずゑにとまりて女郎まねく

▲ごゐや赤坂吉田がなけりや、なんのよしみに江戸がよひ

▲君にあふとて朝水くめば、濁る心かまだあはぬ

▲備前岡山新太郎さまの、江戸へござれば雨がふる、雨ぢやござらぬ、十七八の戀の涙が雨となる

備中　凡五首

▲つきせぬしるし岩に花、峯の小松のしげりあふ

▲こなた思へば照る日もくもる、さえた月夜が闇となる

ごゐ―御油の訛、御油、赤坂、吉田いづれも遊廓に名高し
新太郎―池田光政

おかた―妻君

だいと―大唐米か大道か

▲いつか鴻池の米ふみしまひ、播磨灘をば歌でやろ

▲今の若衆は麥わらだすき、一夜かけてはかけずてよ

▲髪を島田にゆはうよりおかた、心島田にもちなされ

▲ござる〳〵と浮名を立てゝ、さまは松風おとばかり

▲思ふ殿御と臼ひきすれば、臼は手ぐるま中でまはる

凡六首

美作

▲十七八はだいとの藁で、打たねど腰がしなやかに

▲まへ田の稲の葉もちのよさは、黄金の露をまきあげる

▲又とゆくまい湯原の湯へは、三坂三里がうい程どに

▲近江の笠は形がようて著よて、〆緒が長うてきよござるソリヤイノウ

▲どんどと鳴るは大竹さゝら、ならぬは七九ごまさゝらソリヤイノウ

石見

▲京の大佛に帆柱もたせ、鯨つりたい五島浦で

▲閼の地藏に振袖きせて、奈良の大佛聟にとろ

▲これの親方御繁昌をなさる、一奥は琴の音中の間鼓(つゞみ)、かどはものもが絶えませぬ

凡三首

隱岐

▲背(せな)をたゝかれしんこ程はれた、これも悋氣のかたまりか

▲いなしよ〳〵と思うたうちに、太郎が生れていなされぬ

▲われは奥山のさゝ小笹、藤にまかれてねとござる

凡三首

播磨

▲池田伊丹の上諸白も、錢がなければ見てとほる

ものも—物申、案内

しんこ—新粉餅

打たしやる―原本「うたせう」とあり一本により改む
おしるのみ―御汁の實
そふとめ―早乙女の訛
ふかねど―ひかねどの訛
ひるまもち―未詳
かたぶら―かたびらの訛
千家北島―共に大社に仕ふる名家

▲ばくち打たしやる大酒のみやる、わしが布機(ぬのはた)むだにして

▲晝間はでかいたが何のをけのみでなよな、いそばたのわかめよしそれがおしるのみでなよな

▲そふとめのまたぐらを鳩がにらんだとな、にらんだも道理かや、またに豆をはさんだとなよな

凡五首

出雲

▲これの石臼はふかねどもまはる、風の車なら猶よかろ

▲ひるまもちのござるやう、あかいかたぶらで、ぶらりしやらりと、あかいかたぶらで

▲さんまれこれの嫁御さま、どこなそだちのさんまれさまぞ、稻のうらほののぎそだち

▲千家北島にやア燒餅がはやる、なかに味噌入れてポッポほや〳〵と

凡四首

因幡

▲つきせぬしるし岩に花、峯の小松のしげりあふ

▲あさまよりの小鳥が露にしよぼろぬれたやうな、ゆら〳〵と苗をとる露にぬれたよな

▲けさきたおなれとがかたびらはなよな、裾も縫はずにきるかたびらはなよな

▲ひるま米つくは十二からうすでなよな、嫁も姑も寄つてつきやれよ、十二からうすでなよな

▲お主にやいとま取りあの山こえて、都まさりの親里へ

▲後世と契りて今又あきやる、釘をうちたや後のつま

凡六首

伯者

▲心かよはす杓子のさきで、言はず語らず目でしらす

▲金の威光の太平顔も、きのふかぎりのさんづ川

おなれと—未詳
なよな—はやし詞
太平顔—おほへいがほ

ぬりや—ぬれは

▲きのふや今日までみづしの女、今は二ヶ所の倉のぬし

▲丹後田處よい米どころ、娘やりたや聟ほしや

凡六首

但馬

▲親は子というて尋ねもするが、親をたづねる子は稀な

▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすゞみ

▲思案しどころふんべつ處、親の意見もきゝどころ

▲與作丹波の馬追なれど、今はお江戸のかたなさし

▲與作おもへば照る日も曇る、關の小萬がなみだあめか

▲雨はふるとも身はぬりやせまい、さまの情を笠にきて

▲みやこ〳〵とわしつれて來て、こゝが都か山中(やまなか)を

凡七首

丹　波

▲稲の葉むすび思ふこと叶ふ、末は鶴龜五葉の松

▲わしが事かや志賀唐崎の、一つ松とはたよりなや

▲谷の小藪に雀はとまる、とめてとまらぬ色の道

▲雨はふれ〳〵雪ふるな、忍ぶ細道竹たわむ

▲梅やさくらは七重も八重も、なぜに野菊は一重咲

凡五首

丹　後

▲わしとおまへは小藪の小梅、なるも落つるも人しらぬ

▲岩のしみづは底から湧くが、さまの心も底からか

▲月は東にすばるは西に、いとし殿御はまんなかに

▲人はけなりや兩手に花を、わしも片手に花はしや

すばる—昴星

しんがい—心外れて殘念にもの意
こめいこと—こいといふこと
まなご—まさごの事（旁注）
しんば—新葉
つよばみ—ゑばみの事（旁注、

▲わしが思ふとて戸板に豆ぢや、なまじ言はぬがましぢやもの
▲千里はしるやうな虎の子がほしや、やるぞ此文江戸までも
▲いとし殿御のしんがい田がわれた、夕立俄にこめいこと
▲月夜烏は迷うても鳴くが、わしがしんじつ思ふでもなし

凡五首

佐渡

▲佐渡と越後はすぢむかひ、橋をかけたや船橋を
▲さまは釣竿わしや池の鮒、つられながらもおもしろい
▲いとし殿御にあひたいことは、川のまなごで限りない
▲雉のめん鳥奥山さして松のしんばのつよばみに
▲池の子鮒に心をくれて立ちやかねたる白鷺よ

凡五首

見しよもの—見せようもの

ねばる—油の濃厚なるをいふ

けがふさん—毛がふえんの意か

▲きゞす野にすむ雲雀は山に、鶉粟穗につまおもひ

▲飲みやれうたやれさきの世は闇よ、今は半の花ざかり

▲沖の戸中の三本竹は、うまず竹やら子かさかぬ

凡四首

越中

▲よろづ世をへる音なしの、瀧の流れはよもつきじ

▲あゆは瀬につく鳥は木にとまる、人は情のしたにすむ

▲死んで又くる釋迦の身がほしや、見しよものつらあてに

▲買うてくりやれよねばるのを一兩、ごまの油でけがふさん

凡四首

越後

▲老いせぬ千代の松さかや、谷間の岩に龜あそぶ

かひしやう―甲斐性
ひつ―米櫃の意
むしやれ―蒸され
ようもよも―よくも〳〵

▲相性(あひしやう)みよゝりかひしやう見やれ、小鬢なでうよりひつなでうよ
▲しんき〳〵が三つ四つござる、語るしんきに語らぬしんき、一つ枕に寝ないしんき

加賀　凡五首

▲をさまる世のうれしさは、稲穂さかえる秋の水
▲里のあたゝまりでむしやれてくらしや、われらはみ山の蝉のこゑ
▲けふかあすかと朝日を待つに、つひに曇りて日をくらす
▲さまは流れの瓢簞男、ぬらりくらりはようもよも
▲みやま六月布子(ぬのこ)を著るは、金がないから冷ゆるやら

能登　凡五首

▲親子草(おやこぐさ)とは年ごとに古葉(ふるは)ゆづりのわかばかや

山家鳥虫歌　巻之下

若狭

▲松より巣だつ鶴の子の、千とせは君と親のかげ

▲はしる舟をも招けば磯へ、よるは心のまことなり

▲よそに思ひし昨日のあやめ、けふは我家(わがや)のつまとなる

▲むかし竹馬老いては末の杖となりたるおやぢさま

凡四首

越前

▲山かげやいがらし川の流れには、みやまの奥のきよのみづ

▲月の夜にさへおくりをもらうて、見すてられたら闇の夜に

▲思うて來たのに水かけられて、わしが思ひを水にしやる

見すてられたら—一本に「見すてられたよ」とあるよろし

年を經ても損ぜざる納めかた有る事は古書にくはし

上　卷終

よられ―ゆられる事（旁註）

▲橋のらんかんに腰をかけ、沖をはるかにながむれば、沖の鷗が三つつれて又三つつれてむつまじくよられながらも君戀し、さんしよのせい

▲明くればいでて暮るゝまで、辛苦するのはたがためなるや、末をとげんと思ひつめ、身は粉になるとかまはぬに、つれないことばいかゞせん、さんしよのせい

凡二首

陸奥出羽の風俗民家に子をぶつかへすというて、三歳の比父母これをくびり殺す、人これを怪まず、夷狄の如くありしに、仁風及び今其事なしといふ、陸奥の國或村に古塚のありしを、其里の者畑地にせんとてあばきしに、大きなる郭を掘り出しあけて見れば、錦の直垂に鎧甲に太刀をはき、そのさま七十歳ばかりなる老人と相見え生けるが如し、所の役所へ訴へ見分をうけ、吟味の處姓名かつてなし、定めて秀衡にてもありなんとて、今その所に社を建て祭りありしとなり、納めやうにより數百





ぎんぼしーぎぼうしの事（旁註）
くてー食うて
さんしよのせいーはやし詞

はこい海人はあま尼はあま此平上去入の事を心得る時は皆分つ事なれば、みづから知るべき事なり、五畿内の人音の事を學ぶにあらず、都に近きゆゑ、よき音を自然と小兒より聞きおぼゆる故なり

陸　奥

▲橋のぎんぼしを五兵衛かとおもうて、既に詞をかきようとしたが、さんしよくて見て胡椒くて見れば、いとこどしやら、にてからい、さんしよのせい

▲秋風が吹けばいの、秋風がふけばサ豆の葉もかれるいの、豆の葉もかれるサ枯れたが大事か、なんとしよ、さんしよのせい

▲あのむら千鳥つらにくやサわれをつれてはなぜ行かぬ、つれて行たら殿御にあうてサわしが心の底うちたゝき、見すてられたら島國へ、さんしよのせい

凡三首

出　羽

いへらん—いらへんの誤か

くも、こい—原本は是等の旁點に各差別をなしたるもさして要なければ略す

上野の國は物に臆する事なき風也、軒端の雀といひしにより、かくとだにえやは伊吹のさしも草とよみし實方朝臣は行成と同じ時の殿上人にて、口論をし行成の冠を笏にておとされしを、さらぬ體にて冠を著、色をそこなはずして、是はいかなる故に亂冠にあひ候ふやらんと申されければ、實方いへらんかたなくしらけて立たれけり、主上此事をひそかに御覽ぜられて、實方を陸奥の守になして遣され、終に召し還されずして國に卒す、歸洛せん事を願ひて、今一たび臺盤のいひをくはゞやと言はれけり、其後實方雀とて、殿上の臺盤のあたりに必ず雀ありけりと言ひ傳へたりと百人首の抄にあり、其後歌の會席にてこけたる殿人ありしを若き人笑ひしに、年老いてこけるを笑ふ人々の命長かれ思ひしらせんと讀みし人もあるに、歌道をたしなみ學問する人のつよしみ第一なるべし、下野陸奥は詞訛多しといふ、なまるといふ事五音四聲のわかちを知る時はなきはずなるを、四聲の考なくして、妄に詞を使ふ故なり、此國に限らず諸國とも四聲の分ちをいへば、雲はくも蜘蛛はくも戀はこい鯉

をなしたるにや

上　　野

▲わしは此町の軒端の雀、聲で聞きしれ名を呼ぶな

▲殿御忍ぶはしんきでならぬ、くゞり九つ古川七つ十二小口の榎戸をあけて、忍びこんだら夜が明けた

榎戸—板戸の誤なるべし

▲戀と情はきりあるものよ、したでおくるはみへのおび

戀と情—此歌解し難し

凡三首

下　　野

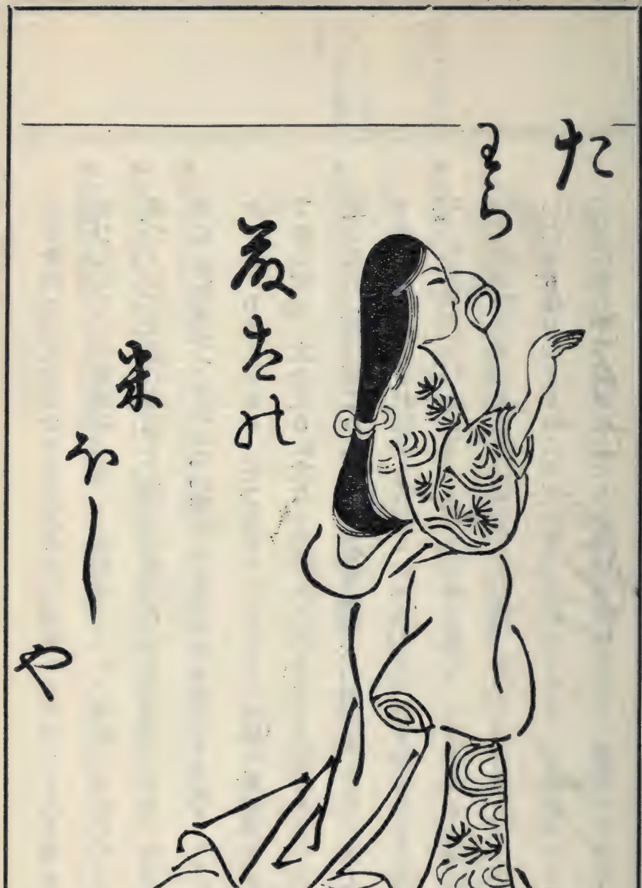
▲十七かむろのこぐちにひとり寢て、花がかゝると夢に見た、

▲人はともあれかくもあれ、わしはめじかとかたならびよ

▲白鷺や舟のへさきに巢をかけて、波にゆられてしやんと立つ

凡三首

りて身のたけ九尺ばかりの男黒き衣に冠著たるがつつと入り來りて、聲をあぐる事おびたゞし、子貢進みより、こは何者ぞといふ所を、中にひつさげ腰にはさむ、子貢つゞいて大庭に引出して鬪ふに勝たんこと叶ふべからず、夫子さしのぞき見給ふ所に、彼の男がつらがまちの間時々ひらきあふ所ありと見えしかば、そのつらがまちかいさぐり取て引寄せ、とびあがつて上になれと敎へ給ひければ、子路心得てくんでおし伏せ、之を見るに大なる鯰の九尺あまりなるにぞありける、夫子見給ひて物老いぬれば群の精これによる、龜蛇魚鼈草木の類に至るまで、久しきものは神皆よりて妖怪をなす、されば是を五酉といふ（酉といふは老ゆるなり）殺す時はやむと語り給ひけり（捜神記術波傳等に見ゆる）かの魚をしたゝめて人々にすゝめし程に、うゑを救ふ、天より賜ふにやと後世の人はいひけり、凡五行の氣をうけし類、老いては皆怪をなすべきもの也、人の老いたるも怪をなすものにや、大原の王仁祐が祖母二百餘歳ばかりにて、形小くなり三尺に足らず、妖をなしたるの類鬼神論に出たり、鼠老いたるにより猫をはむの妖




我も
ひうでを
射く
とうて

▲おまんの部屋で鳥せみが鳴くいノゥ何と鳴くャァつまこい〳〵と三聲鳴く

凡三首　　信濃

▲嬉しめでたの若殿さまよ、知行ましします程なしに

▲逢ひた見たさい飛びたつ如く、籠の鳥かやうらめしや

見たさい―見たさはの誤か

▲籠の鳥ではわしやござらねど、親が出さねば籠の鳥

凡三首

飛騨の國の人の心せばし、他にもるゝ氣なき故なり、信濃の國心すこやかなる風なり、此國或寺に猫あり、世にいふねこまたなり、商人來りて所望しかへり、我家に惡鼠ありて猫をくひ殺す事度々の事なり、彼の猫を合せければ、鼠をくらふ、鼠又猫をくらひて二つのけもの死しけるとなり、昔夫子陳蔡の間に苦ませ給ひし時、夜に入

燒石の如くもの―如きものの誤なるべし

凡五首

近江の國風詞やはらかにして善をえらぶ心あり、美濃の國心やはらかにしてよき風なり、此國月吉村といふ所に長さ一二寸ばかりある薄白き寶貝の如き月糞といふ石あり、同所村田の邊に星糞といふものあり、上天の星は末代かはらず、流星は地中より出づる陽氣にて空へあがり、冷際といふ大寒の所あるにあたり、すれて光を發し落つるものを流星と名づけいふなり、土中の陽なるゆゑ土氣をふくみのぼる、大なる流星は地まで火光とゞく、ともし火のしんあるが如く、陽は發し土氣はかたまりて黑き燒石の如くもの地へ落つる、これを星糞といふなれば、岩村に限りてあるとはいぶかし

飛驒

▲佐渡と越後は筋向ひ、橋をかきよやれ船橋を

▲橋の下には鵜の鳥が鳴くぞや、何と鳴くエゝぶりしやりと

浅香山云々―「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心はわがもはなくに」の意

▲何も職ぢやが鞍馬の職は馬に七束我身に二束、馬の手綱を手にひきまとひ花の都へ柴賣りに

▲わしが殿御は明日から江戸へ、足も輕かれ天氣もよかれ、とまり〳〵に女郎なかれ

▲大田原見たか江戸見たか、大田原町はまだ知らぬ、お江戸に弓が千挺立つ、弦引くとのはわがつまか

美濃

凡六首

▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる

▲淺香山かや山の井の、人の心の底みゆる

▲底の見ゆるはたれが知る、深い中とはみとせまで

▲海がないとや此國に、舟も帆もある高瀬舟

▲高瀬舟には柴をつむ、われは浮名の種をつむ

凡四首

安房の國は心するどなり、上總の國安房と同じ、下總の國は上總と同じ、山沼流水多き所なり、常陸の國風氣よろしからず、病をもつて死せざるをほまれとする風なり、此國息栖明神のいそ海に女瓶男瓶といふ二つの石あり、中は素水にてしほの味ひなし、忍鹽井の水といふよし、素水なる事はかろくして湖はおもし、海中きりのぼるが如く、彼の石の中の水は砂ごしをするが如し、然れども山上に水あり、海なき國の山に湖の出る所あり、石中に潮わく所あり、これらは山澤氣を通ずる故に、一氣そのまゝ通ずなり

湖―二ケ所とも潮の誤なるべし

近　江

▲年たち返る御代の春、松の緣の千代を待つ

▲伊勢の山田のいまきりたけは、お杉お玉のさゝら竹

いまきりたけ―今切り竹か

▲堅田船頭を夫にはいやよ、月に二十日は沖に住む

め―根の事（旁註）
いたこ、岩井町―遊女町（旁註）
よれまこも―よれもつれたる眞菰

▲むかし見し夢ふりすてゝ、今はむかしの夢こひし

凡五首

下總

▲曇らばくもれ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし
▲土橋板ならよかろもの、どんと踏んでは目をさます
▲さよの中山これではないか、さまについてやろ撞鐘を

凡三首

常陸

▲水戸で名所はせんばの川よ、はすのめごめに鴨がすむサツサオセ〱
▲いたこ出島のよれまこも、殿に刈らせてわれさゝぐサツサオセ〱
▲いたこ出てから牛堀までは、雨もふらぬに袖しぼるサツサオセ〱
▲岩井町とはたが名付けしぞ、かねがなければつらいまちサツサオセ〱

めんに、などか祟をなさゞらんと、張南軒といふものいひけん、ことわりにこそ覺ゆれと、鬼神論に出たり

安　房

▲碎けても身はかまはぬぞ、のくならばなぜに我をばおとしたぞ
▲山な白雪朝日にとける、とけて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧水
▲そなた命をすてんというて、今はふたみち山ごしに

凡三首

上　總

▲臼よまはれよまはれよ臼よ、晩の夜びきにまはりあふ
▲岩にせかれて腹たつ波も、心すぐなら波こさん
▲つまは北國(きたぐに)まだかへらぬか、文をやりたし歸るかり
▲おもふ心のまゝならば、ねたむ心はなぜやまぬ

山な―山なる





凡五首

甲斐の國南に富士をおほうて氣こもりするどなり、伊豆の國は氣強くして淸き心あり、相摸の國は淫風多き所といふ、武藏の國心廣くおごりの氣ありといふ、此國足立郡大宮の森のうちに黑塚といふありて惡鬼すむ、東光坊といふ山伏鬼を退散せしむるといふ、いにしへは人の來らざる所に塚穴あれば盜賊こもりて、人來れば殺し衣類を剝ぎとる類を鬼といふ、然らざれば山川木石水土の怪に過ぐべからず、山深く水暗く草木おひしげる所は日月の光及ばざれば、陰陽の氣自ら欝して百怪を生ずる事は、いはゆる蒸してくさびらを生ずるが如し、これらの類に苦めらるゝ事はさくる事を知らず、みづから恐れる所なり、晉の溫嶠といふ人牛渚といふ淵に舟をとどめて此所に水深く集る所と聞きて火をもやして照らすに、さまぐ〵の怪しきもの水に浮み出てにげ去りぬ、深山大澤はかれがいるべき所なるを、人ゆきて之をしづ

相摸　凡三首

▲大工どのより木びきはにくや、同じ中をばひきわける

▲くるか〳〵と川下みれば、いぶきよもぎのかげばかり

▲つまは萱刈り鎌倉山へ、われは子どもに根芹(ねぜり)つむ

武藏　凡三首

▲都まさりの淺草上野、花の春風おとさえる

▲こゝはどこぞと船頭衆(せんどうしゆ)に問へば、こゝは梅若隅田川

▲色のよいのは出口の柳、殿にしなへてゆら〳〵と

▲いとし殿御を遠くにおけば、鳥なくさへ氣にかゝる

▲わかいをなごに殿御のないは、笠にしめ緒のない如く

不過六六丈とあり 六六は三百六十丈なり 生物草木のかず三百六十を限とす、土地は圓體なるにより、東の山へ登り西の山を見れば西ひきし、西の山へ又登り東の山を見れば、東の山ひきし、是土地まどかなる故なり

甲斐

▲殿は雨夜の月かげなるか、心もしらぬ行末を

▲高い山から谷底見れば、おまんかはいや布さらす

▲おれがさらすは布ではないぞ、あだな男の心をさらす

凡三首

伊豆

▲こんどござらばもて來てたもれ、伊豆のお山のなぎの葉を

▲ゆうべそが〳〵ふつたる雨は、虎が涙か風つよし

▲じつに添ふなら生爪はなそ、おれは五つの指をきろ

そが〳〵ー曾我にかけていへり

といふにつき、そのいはれをいふにより、心晴れて病いえたりと也、心の惑ひより起る事しかり

駿河

▲ことし世がよて思ふやうに叶ふ、親もよろこぶ身も立ちて

▲知つてをれども人にまた問うて、母のさしづで迎ひとれ

▲さまのやうな〳〵瓢簞男川へ流して鯰とかたりや

凡三首

遠州と同じきうち取締りなき風といふ、此國富士へ登る事九里、信州浅間の嶽は凡八里あるといふ事いぶかし、いづれか其山の麓なるや、又は谷峯をこえ行くまがりも知れず、諸國土地の高きありひきゝあり、信州は本朝第一の土地高き所なり、富士海へ近き故山のもとといふ事大概知らるべし、山の本は海より量れば知らるべし、一四海くぼかなる土地に水たまるを海として、異國本朝高下ひとし、天文書に雖大山

凡三首

三河遠江とも虛談少く、女もけなげに恥を知る風といふ、大井川による堤の陰に忍びて見れば、鳶の如きもの來り魚をとる、人音すれば去る、俗に木の葉天狗といふ、考ふるに夜鷹なるべし、夜川面に出て蝙蝠虫魚などをとる、すべての事我心既に惑ひぬれば神も亦くらし、神くらきが故に物に惑ふ事あり、たとへば目を患へる者の空中の花を見るが如し、これを玄花黑花といふ、孔子曰、人の信ずる所のものは目なり、眼もまた信ずるに足らざる事あるかと宣ひしは、かゝる事にて見あやまつ事多くありと鬼神論に出たり、又晉の禾廣といふもの常に親しく來る人ありしが、久しく怠りて來らざりしを不審に思ひ問ひければ、以前座敷にて酒を飮みたるに、盃の中に蛇の形あらはれる、高位の賜はる物なれば飮みつくす、是より病に犯さるゝ故來る事疎くなるといふ、壁の上に蛇をゑがきたる弓をかけ置きたり、是故の事にてありなんと思ひ、又座敷にて酒を勸め盃に物ありやと問へば、以前の如く蛇あり

かへる—歸、蛙

こがらす—小烏、焦れさす
からす—枯らす、烏

之を考ふるに昔大蛇ありて人を呑む、いけにへを納むれば外に祟をなさずといふ事ありて、淫祀を祭るあやまちより起りて、後世そのまねをすると思へり、近年は國君の命ありて此祭をとゞめ給ふのよし、大智の君といふべし

三　河

▲さまの心はなぜうすくなる、こゝは八橋かきつばた

▲あかぬ故里(ふるさと)ふりすてゝ、たれがためかや君ゆゑに

▲柳の糸にとめられて、かへるもならず子がつなぐ

凡三首

遠　江

▲あくればいでて暮るゝまで、身は粉になるかはだかむぎ

▲遠州濱松ひろいやうでせまい、よこに車が二(に)挺(ちやう)たゝぬ

▲君はこがらすわれはまた尾羽をからすのはねばたき

尾張

▲萱も刈りたし麥かりとりて、羽織したてゝ親も子も

▲をなごすきなら八丈へ行きやれ、八丈むかしは女護の島

ひさごくづやー瓢を這はせたる草屋

▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすゞみ

▲さんしよ胡椒より辛い物せたい、ならぬ世帯は尚辛い

▲心きよきぞ水鏡みやれ、濁る心はなきものよ

▲江戸にさく花駿河でつぼむ、ことにお江戸は花ざかり

凡六首

國風實義ありさわやかにしてよき風なり、此國中島郡國府の宮に毎年直會祭といふあり、往來の人を一人捕へる故に、其日は外へ出ずといへども、自然ととられる者あり、人形を作りて其人のかはりとして、まな板の上にするゑてかたはらに人を置き、翌朝神前より追ひ放し倒れたる處にもちを納めて塚をつき、其人は我家にかへす、

凡五首

志摩の國いにしへは伊勢と同國なり、伊賀の國風伊勢と同じ、婦人のかたち山城と伊勢を第一とするなり、伊勢のくぼたとむく本の間に錢かけ松といふあり、參宮する人此野の長きにあきて、行程何程あると問ふ、里人戲れて豐國野へは十日に餘るといふに呆れて、壹貫文の錢を松が枝にかけて太神宮を拜し、國へ歸る、他の人彼の錢を見るに、蛇のわだかまるやうに思ひ、神靈ありと恐れて取る人なしといふ、此類漢の世に蘆浦といふ所を過ぎし人の何となくわらぐつを樹の枝にかけて過ぐる、あとより來る人又始め過ぎし人の如く掛く、後には幾百といふ事を知らず、何者の戲れにや草鞋大王と名を題して、後には終に御社を立てしと也、これらの類淫祀というて蛇狐狸のたぐひを祭ること和漢とも多くあるなり、父母の氣は卽ち天地の氣にして、人體をうけ得て何ぞ故なき淫祀を敬ふ事やある、國々往來の樹にわらぐつをかけ、才の神というて旅行無難を祈る、此類か

才の神―道祖神

わごれ—和御寮

あひに—其間に

▲勤めすりやとてわごれのやうな、やほの酌すりや足もする

▲鳥羽でさく花ャアレ女郎は大坂の新町にャアレャレ〳〵 酒は酒やに茶は茶やに ャアレャレ〳〵

▲心中しましよか髮きりましよかャアレ髮ははえもの身は大事ャアレャレ〳〵

▲駒のやせたに高荷をつけて是(これ)でおりよかよ鈴鹿の山を、しかも月夜か闇の夜に

凡五首　　志摩

▲今朝のうの字は嬉しのうの字、きゆるまもなきうのかゞみ

▲思ひ切らしやれもう泣かしやんな、さまの戀路はうすござる

▲曇らば曇れ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし

▲つとめしようとも子もりはいやよ、お主(しゆ)にやしかられ子にやせがまれて、あひに無き名を立てらるゝ

▲顏をけがすはおしろいか、生れながらの山櫻

見ずと—見ずとも
藤—有馬に藤といふ湯女ありて有名なりき

▲千代も長かれこの君の、老木の松は榮えゆく
▲他國へだてゝ海山こえて、見ずと心はかはるまい
▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる
▲咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒がいさめば花がちる
▲をさななじみに離れたをりは、沖の艪櫂が折れたよな
▲ねたらよござる青田の中で、ねたら花さく實ものりて
▲つばめも軒の住家にかへる、君は何故かへらぬぞ
▲見れども見えぬ沖の船、こち吹く空をねやにまつ
▲小石小川に子がすてゝある、ひろうてそだてゝ花がさく

凡九首　　　　　　伊勢

▲かけてよいのは衣桁に小袖、かけてたもるなうすなさけヤアレヤレ〳〵

わがいやか―我を厭ふか

こく―穀

▲浮名たゝしてなぜ君はそはぬ、人がさますかわがいやか

凡二十二首

千世を祝ひ孝弟の道ありて言ひ出すこと義に叶うて情ありといへども、國富み華美を好む故にや、心さま人を怨み身をかこつ事も勢強くをとなしからざる姿あれども、よきにすゞめなしたらば義ある國といふべし、此國東成郡林寺村といふ所に、鳥虫の類石の上にとまれば、いたゞき二つにわれて口を開きおとし入れて又もとの如し、蛙の物を呑むに似たり、よつて蛙石といふなり、又河條國金遼山の廟に龜石あり、人食につきぬれば、此石に向ひ禮をなせば飲食悉く出すと、三才圖繪に出たり、蛙石は物をのむ、龜石はこくを吐く、一氣なるによりさもありなん、いぶかしとて或人林寺村へ行き尋ねしに、人家の藪中に蛙石あり、いにしへは口をあけしよし、今は其事なしといへり

伊賀

▲腹の立つとき裏に川ほしや、水に心をすゝぎたや

▲鳥も通はぬみやまの奥に、すめば都ぢやのよ殿よ

▲野でも山でもお主さまよかれ、お主のおかげで世に出づる

▲物をいやるないやくづになる、いはで包めばくづもない

▲人をつかはゞ川の瀬を見やれ、淺い瀬にこそ藻がとまる

▲おれをいふとて隣をおしやる、濱の松風うらをきけ

▲夢になりともあはせてたもれ、夢に浮名は立ちやせまい

▲さまがわるいかわがあしかろか、ねたむ心はすがの根か

▲思うてござるか思はでくるか、おれが心をひいて見るか

▲お臺所のれんじの窓に、月と書いたはまことかや

▲胸でくるしき火はたくけれど、けぶり立たねば人しらぬ

▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ

いやくづになる—言へば屑になる

うち—浦、裏

れんじ—櫺子

ては集る、前生は人あるひは犬猿のれいとかたよりありて、生をかへんや、かくあれば天地生々してやまざる事はいかならん

攝津

▲ことし世がよて穂に穂がさいて、殿も百姓もうれしかろ

よて―よくて

▲おやはこの世の油のひかり、親がござらにやひかりない

▲人はけなりや親さまふたり、わしは入日の親ひとり

▲親といふ字を繪にかいてなりと、肌のまもりと拜みたや

▲歌のかへしは二度こそかへせ、三度かへすはいなものよ

▲山を通ればいばらがとめる、いばら放しやれ日が暮れる

▲いとしかはい子に旅させ親よ、うい もつらいも旅でしる

▲心短氣でわしや國をでて、今は習はぬ職をする

▲はんきをなごに心をおきやれ、どこのいづくでかたろやら

はんきをなご―半季雇の女

ゑとーえつと又はやつとなどの意にて甚しくの意

▲松が殿御で子をうめばこそ、山に小松がたえませぬ
▲嫁を〳〵とゑと誚りやんな、誚る我子も人のよめ
▲むかし思へば恨めしござる、なぜにむかしは今ないぞ

凡二十一首

長き世の松を慕ひ豐年を喜び、友白髮の有樣池のをし鳥の睦じきを眺め、うれしき世にあふ事は、淀の流れの車たえせぬ古事思ひ出られてをかし、民の風うはべうつくしくおとなしと雖も、實義うすき所といふ、此國堺の寺に白犬あり、勤行の時堂の椽に來り平伏する事年あり、餅を咽につめて死す、和尙憐みて弔ひぬ、或夜僧の夢に彼の犬來りて念佛の功力により、門番人の妻にやどると見しが男子を生めり、出家させ異名を白犬とよぶ、やすからず思ひて和尙に問ふ、餅を嫌ふ故にといへば、然らば食すべしといひて、用ある體にて座を去り行方しらずとなり、佛說に過去現在の事をいふ、天地の間一元氣にして五行あつまりて物を生ず、死しては散じ散じ

人はわるない—此唄隆達小唄にもあり

のばた—野端か

たがへす—耕す

お前ついしよ—人前ばかりの追従

お茶をあらしに—茶を貪り飲まん爲に

▲人はわるないわが身がわるい、やぶれ車でわがわるい

▲朝はあさぼし夜はまた夜ぼし、晝はのばたの水をくむ

▲風がものいやことづてしよもの、風は諸國を吹きまはる

▲をつとたがへす娘はかせぐ、妻はせどへ出て米かしぐ

▲嫁をかはいがれ嫁こそかゝれ、むすめ他國の人の嫁

▲紅葉ふむ鹿にくいといへど、戀の文かく筆となる

▲尋ねてござれ戀しくば、わしは信田（しのだ）の森にすむ

▲月夜うたてや闇ならよかろ、待たぬ夜にきてかどにたつ

▲さまに貰うた根付のかどみ、見れば戀ますおもひ增す

▲後世（ごせ）をねがやれぢさまやばさま、年寄こいとの鳥がなく

▲落ちよ〳〵とおとそとしやる、猿の木のぼり落ちやせまい

▲お前ついしよか人事（ひとごと）いふか、お茶をあらしに又來たか

樂みは—此歌「樂みは夕顔棚の下涼み男はてゝら云々」といふが普通なり

はるの松が枝—濱の松が枝の誤か

をし鳥—啞にかけていふ

古歌に樂みははまのひさごの夕涼みをつとはてゝら妻はふたのして、御製のよし、男女ともに心やはらかにて詞うつくしくあれども、國の癖としてことをはかる心多しといふ、大和河内の境に二上山といふあり、麓に雲母多くあり、雲母は水氣にて此山に霧たちのぼりて雲合へば雨ふる故に、二上山に雲集れば雨ふると所の者いふは陰陽相和し同氣求むる故なり、雲母と書くは此故なり、相感ずる事は前にいづる

和泉

▲千とせにあまるしるしとて、君が世をへるはるの松がえ

▲こなた百までわしや九十九まで、髮に白髮のはゆるまで

▲ひよ／＼と鳴くは鶫、鳴かぬは池の友にをし鳥つれてゆく

▲七つさがりて田の草とれば、のばの露かや涙かや

▲聲はすれども姿は見えぬ、君はみやまのきり／＼す

▲さまはけなりや細糸つむぐ、わしは山家のふしつむぐ

▲人の事かと立ちより聞けば、きけばよしないわしがこと

▲阿波の鳴戸に身はしづむとも 君の事ならそむくまい

▲こひの山吹なさけのあやめ、秋の枯草しをれぐさ

▲さまとわしとはうちごみやなぎ、浮けど沈めどもろともに

▲思うてこひして叶はぬ時は、稲の葉むすびして見やれ

▲こなた思うたら是程やせた、ふたへまはりがみへまはる

▲一夜(いちや)おつるはよもやすけれど、身より大事の名がをしい

▲いとまぢやというて挿櫛(さしぐし)くれた、心とけとのときぐしを

▲あきもあかれもせぬ中なれど、いとまやりますす親ゆゑに

▲鐘が鳴るかや撞木(しゆもく)が鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る

凡二十六首

君を敬ひ豊年を祝し、神に祈りて安穏を願ひ、貧しきうちに樂みあはれに聞ゆる、

うちごみやなぎ―打込簗よの誤か

一夜おつるは―「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ」の意

けなりや—羨しや

でごと—出ることの衍か

ふりで—降出

散りば—散りぎは

▲親がかたおや御座らぬゆゑに、人もあなづりや身もやせる

▲人はけなりや咲く花なれど、われは木蔭（こかげ）のしをれぐさ

▲さまとわしとは山吹そだち、花はさけども實はのらぬ

▲富士の裾野のひともとすゝき、いつか穂にでて亂れあふ

▲人がいひますこなたの事を、梅やさくらのとり〴〵に

▲人のいひなし北山時雨、曇なき身は晴れてのく

▲わしは谷水でごとは出たが、岩にせかれておちあはぬ

▲何をなげくぞ川ばた柳、水の出ばなを歎くかや

▲さつき雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田のおとし水

▲梅はにほひよ櫻は花よ、人は心よふりいらぬ

▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ

▲おもしろいぞや今さく花は、のちの散りばは知らねども

あらぬかぎり云云—あらんかぎりは朽ちもせぬの訛
世の中—豊作

の事いにしへありし事也、漢の武帝の御時未央殿の鐘故なくしてみづから鳴ること三日夜までやむ事なし、帝驚かせ給ひしに、東方朔奏しけるは、銅は山の子にして山は銅の母と承る、陰陽の氣類をいへば、子と母とは相感ずべし、山くづるゝ所ありなんと申しけるに、三日のうちに南郡の山くづるゝ事三十餘里とぞ奏しける、今も人家の釜鳴ることあるは此理にてぞ侍る、是等の理をよく通じなば其一氣の感ずる所は百世と雖も遠からざる事をしるべしと鬼神論に出たり、山伏の鐘を山上へ持ちゆくこと、東方朔に尋ねたらばいかゞ答へん

河内

▲君は八千代にいはふね神の、あらぬかぎりは朽ちもせん

▲ことし世の中稲刈りそめて、神と君とにかさね餅

▲山家なれどもわがふるさとは、柴のいほりもなつかしや

▲山家々々とあしげにいやる、色のよい花山に咲く

心のまゝ―心のまことの衍か

▲思ひなほしは無いかよさまよ、鳥は古巢へかへらぬか
▲人目おもはず人さへいはにや、織りてきしよぞやたつ縞を
▲そうて添ひ飽くとのごもあるに、添はで思ひのますもあり
▲お月さまさへこひぞよめさる、こゝで待てとの雲かげに
▲蝶よこてふよ菜の葉にとまれ、とまりや名がたつ浮名たつ
▲はやるかんざし髮かたちより、すぐな心がうつくしい

凡二十五首

山々里々にていひならはすことわざ世の人情父を慕ひ君を敬ひ、宮仕への賤の女なれば主を思ひ子をしたひつまを親む心のまゝやさしくも感ずべき事也、此國に大峯といふ深山あり、昔遠江國長福寺へ山伏來り、大峯へ入る路用の合力を得んといふ、かねといふは鐘樓より外はなし、路用にたゝば參らせんといふ、客僧喜び、鐘をさげて走りゆき釋迦が嶽の松にかけ置て今に存すといふいぶかし、しかれどもかやう

こゆみ—暦の訛

なさけないぞや—隆達小唄に同意のものあり

▲わしはやまがら餌におとされて、明障子のうちにすむ

▲人に物いや油のしづく、落ちてひろがるどこまでも

▲わかいをんなの願かけるのは、神や佛もをかしかろ

▲さまにうらみは三島のこゆみ、いうてなにしよに添はぬから

▲花のさかりをこなたでしまうた、どこをさかりとくらそやら

▲ゆうべ呼んだる花嫁御、けさは無間の鐘をつく

▲花は一枝折手はふたり、わしはどちらへ靡こやら

▲ひとり山道ものすごござる、早く聲だせほとゝぎす

▲なさけないぞやけさ立つ霧は、かへる姿を見せもせで

▲雉のめんどりすゝきのもとで、つまを尋ねてほろゝうつ

▲月夜かげにもほしたい袖を、ぬらしたよ又しぼるほど

▲さまよあれ見よあの雲ゆきを、さまと別れもあのごとく

おはら木やめせ〱黑木さゝをめせ
こくも薄くもきこしめせ〱

栗本駿河家に形有之

大和

▲千代の松がえ三笠の森に、朝日かすがのみかげまつ

▲さまのいとまのすひつけ烟草、戀がますやら火がつかぬ

▲梅と櫻と吉野へいたら、梅はすいとて戻された

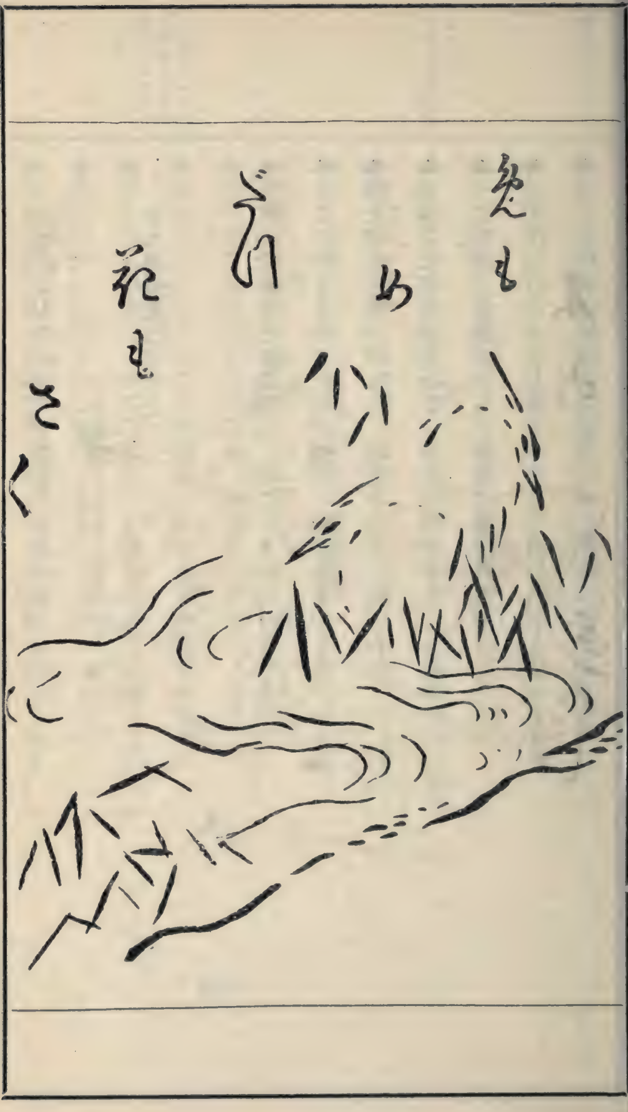
▲東山のは雪ではないか、あれが雪かやさくらばな

▲一に當麻(たへま)の糸掛ざくら、奈良の都は八重櫻

▲ござれそめたらさま來そめたら、道の小草も枯るゝほど

▲よしの川には住むかよ鮎が、わしが胸には戀がすむ

戀—鯉にかく


花もさく



秋の山ー鳥羽の名所

圖に出すー原本黑木と櫻の枝とを畫きたる盃の圖あり、略之

▲こなた思へば野もせも山も藪も林も知らで來た

▲いとしとのごの目元のしほを、入れてもちたや鼻紙に

▲こひといふ字がありやこそきたれ、鳥羽の戀塚秋の山

▲さてもよい子や黑木賣のむすめ、戀の重荷かかつぎつれ

▲山にさく花あらしが毒よ、わしは君さま見るが毒

凡二十五首

君を松にたとへ千代萬代まで榮え給へと祈りし賤の女の心ばへ、又は豐年の貢を祝ひ、妻子おくにのるの心、孝弟の道まなばずして人情感ずべき事なり、他の國にすぐれ水清く男女ともに色白く詞おのづからわかれて滯りなし、孝弟の道は國々同じといへども記すにいとまなし、五畿内の外は大概をのぶる、此國に大原盃といふあり圖に出す、東山殿時代此盃出來、蒔繪小原木のもやう故大原と申す由、それより後色々形を變ずる

黒日—暦に黒點を付するより俗に黒日といふ受死日と稱して大惡日なりとす

幾世長かれ—此歌誤脫あるべし

さつき野—五月頃の野邊
かきはなげかけ—鈎を投げかけの誤なるべし

▲こなた思へば千里も一里、あはずもどれば一里が千里

▲いとま下され後日は待たぬ、あすは黒日(くろび)で日がわるい

▲戀にこがれて鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が身を焦す

▲飲みやれ大黒歌やれ蛭子(えびす)、殊にお酌は福の神

▲幾世長かれ此殿のめぐみ育ちて若菜つむ

▲さまはさんやで宵々ござる、せめて一夜(いちや)はありあけに

▲高い山には霞がかゝる、わしはこなたに目がかゝる

▲繻子の袴の襞(ひだ)とるよりも、さまの機嫌のとりにくさ

▲舟は出て行く帆かけて走る、茶屋のをなごは出て招く

▲招けど磯へよらばこそ、思ひ切れとの風が吹く

▲さまの寝姿けさこそ見たれ、さつき野に咲く百合の花

▲かきはなげかけゆすらば落ちよ、心つれなや山桃よ

山家鳥虫歌　巻之上

山城國風

御じやうらく—御上洛、寛永三年秀忠上洛の時の歌なり

はんじよー繁昌

▲めでた〱の若松さまよ、枝も榮える葉もしげる

▲ことし御じやうらく、うへさまはんじよ、花の都は猶はんじよ

▲稲は刈り取る穂に穂がさいて、どこに寝さしよぞ親ふたり

▲親子つまとも田を植ゑしまひ、神に千歳(ちとせ)のたねをまつ

▲こいとたがいうた笹原こえて、露に小松は皆ぬれた

▲ござる其夜はいとひはせねど、くるがつもれば浮名たつ

▲わしは小池の鯉鮒なれど、なまづ男はいやでそろ

▲忍ぶ道には栗黍うゑな、あはず戻ればきびわるい

明和八辛卯冬

天中原長常南山序

山家鳥虫歌　目錄

山家鳥虫歌序

夫仁は心の徳五倫は常の道にて、此世の中にある人ごとに是を亂すは人といふべけんや、かくありて事の繁き中見る事聞く事につけ言ひ出せる山々里々に稻刈り麥搗くことわざ聲おもしろく諷ひなす賤の女の一節、いかなる故の心にやあらんと耳をかたぶけても、其心分ちがたく、故に尋ねて筆にしるし、其風俗を見れば幾千世と君を祝ひ身にすぎ樂みの餘り、荒れたる家にむぐら這ひかゝり、よもぎなど高く生ひたる庭にたくはへ置きし籾を取りいで、あやしきさましたる女ども化粧して、をのこと共に臼挽歌うたひ、心地よげに疲れをはらさんとて、かたへの牛飼ひ所に休み、煙草のむ間に茶うけと名づけ、こき茶に熬米を入れてをさな子ども持ち運ぶ有様、瓢簞屢空し顏淵の樂みと思ひ出られて、あはれに思はるゝ其言の葉、たが言ひなしたらんも知らず、世の風俗として花になく鶯水にすむ蛙の聲、いづれか歌をよまざらんと古事にあるよしして、山家鳥虫歌と名づけて、その所々の國風もしらるべきやと集むるもの也。

山家鳥虫歌

のれが本意(ほい)はふるきを後に傳へん事を思ふのみなん

塚玉齋主人しるす

我友丈河ぬし年來ひめ置かれたりける吉原小歌總まくりといふ册子を見れば、まづ客人の廓通のところを初めて、うかれめの座敷のかた、はた其比の小歌をさへ書きまぜて、それがはしに萬治三年とあり、其古雅なる事いふべくもあらず、抑ゝ吉原町の傀儡屋はいぬる文祿慶長のころほひ此大江戸の大城ちかくところ〲に在りけるを、庄司何がしといひし人おほやけにねぎ奉りて、元和三年といふ年堺町の下つかたへ彼のくゞつ屋を一つにつどへ移して葭原町とぞいひける、此時葭の字を吉の字に書き改めたりといへり、其後明暦丁酉軻遇突智神のあらびありし年また千束の龍泉寺村へ移されて、はじめて新吉原町となんいひける、かくて此册子に萬治三年とあれば、今の新吉原町いできはじめて僅に四年といふとしの刊行なりけり、されば此年文政二年まで凡百六十年に及べり、其風俗の質素小歌の古雅なる事誠に今の世のさまとは異にして珍しともめづらかなりかし、かゝる惜しき册子をいたづらに紙魚の棲となさん事いとくちをしきわざなれば、丈河ぬしと謀りて、いささか落字をも補はず訛字をも正さずありつるまゝに謄寫して、再び櫻木にはゑりぬ、只お

すいられぬ一誤字あるべし

右此歌は直之以正本令板行者也

見ぬまでも—見ぬまでは の誤か
たれ始めし—此唄隆達小唄を二首連結せし也
しば—娑婆の誤なるべし
すゝぐまいもの—此歌重出
てんと—天道にて誓詞也
ゆひ立て—言ひたて、結立

一衣紋つくひ通へども、相見る事は程を經て、逢ふは優曇華嬉しやな
一見ぬまでも夢うつゝとも思ひしに、今見こがるゝそもじ故かな
一たれ始めし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ、秋の夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の長の夏の夜や
一名にも似ず白波たてるすみだ川、見ても見飽かぬ吉野櫻
一未生以前(みしやういぜん)が遙にましぢや、何の因果にしばへ來て
一すゝぐまいもの形見の小袖、馴れし昔がうすくなる
一てんと八幡此上からは、立つや浮名は無にせまい
一うつゝか夢か幻の身をもちながら、遊べや歌へ酒飲みて
一浮世に住めば思ひの増すに、月と入ろやれ山の端に
一ちらり〳〵と花めづらしき、雪の振袖ちらと見そめしより、今は思ひの種となる
一菊のませ垣ゆひ立てられて、今はなか〳〵すいられぬ

多生の縁―多生曠劫以前よりの因縁
不慮でそろ―豫期し難く候
來ぬにて―來ぬとての誤なるべし

一思ひ別るゝ其曉は、鳥もはら〳〵われも泣く
一涙で曇る今宵の月は、思ひし山の晴れやらず
一袖の振合せさへ多生の縁と聞くに、況や枕を並べて打解けておいて、思ひし事を今語らいで、又も逢瀬は不慮でそろ
一月日かけて變らじと契りし中を、くやしや増す花あれば、見捨らる〳〵
一浮世にうつろひ易き君は恨みぬ、數ならぬ身ぞうらめしき
一嵐の外の友呼ぶ千鳥、君呼び返せ小夜ふけぬまに
一年たけて見るも二世までの契、幾千代なれや小夜の中山

かはりぬめり歌

一君が來ぬにて枕な投げそ、投げそ枕に科もなや
一狩場の鹿は明日をも知らぬ、たはぶれ遊べ夢の浮世に
一ちはやふる神の前での鈴の音、神樂少女のさつ〳〵の聲

なり、漕がばいざ〳〵、漕がば浮れん對馬舟、浮れて三谷に著きにけり

一源氏狹衣あやめもいやよ、君の姿を花と見る

一君は照る日かわりや降る雪か、見れば心の消え〳〵と

一思ひだす夜は枕と語ろ、枕ものゆへ焦るゝに

一表みじかの更紗の小袖、うらみながらも著ておよれ

一枕屛風に書きおく程に、戀しかろ時や起きて見よ、

一すゞぐまいもの形見の小袖、馴れし昔が薄くなる

一神や佛を恨むは輪廻(りんゑ)、過去の因果よ是非もなや

一君を見たさに行きてはかへり、何の因果の末ぢややら

一夢に見てさへそさまの事を、はらと泣いては消え〳〵と

一逢うた其夜の明六つ鐘を、まつりかへたや暮六つに

かぶろおもはく踊

わりや―我は

およれ―御寢あれ

そさま―そなたさま

はらと泣いて―はら〳〵と涙をこぼし泣く





定家、家隆、玉葛、西尾、薄雲、紅葉(高尾をいふ)對馬、生田、坂田、萬よ、千よ、初山、清原、たのむ、まさつね、こよし—遊女の名

常磐、こむらさき、やしほ、外山相撲、初音—同前、前條參照

わがかいて—若楓の誤か

ぬしかづ—誤字あるか

かほよ花—杜若

末、心の定家家隆のもとに行き、日頃手馴れしはやり歌、參らせ上させ給ふにより、三味線などにのせられて、ながうた貫く玉葛、掛けてぞ賴むと思ひしに、西を高瀨に薄雲や、さこそ紅葉出ぬらんあゝ面白や、こがれこがるゝ對馬せんじゆ、生田坂田のかりぶしも、寢られぬまゝに辿り行き、萬よ千よもかはらじと、夜每に通ふ初山の、心淸原賴むとて、まさつねならぬ我思ひ、こよしのよしある戀衣

かはり美人揃

一まんよとも千代の世長し松が枝の、緣のわかさ常磐にて、岸の藤波ぬれ〳〵て、こむらさき添ふ花の香を、初山吹の花衣、こよしのかはる一節に、籬々の忍び戀、敵に語るなわがかいて、やしほ山いろおもはく三味線、ぬしかづの恨みの玉葛、たまかに見ゆる外山のだけや流れん、和泉なる深き姿玉川や、高瀨の浪となりぬべし、西を遙に見渡せば、相撲せいしゆに吉田の里、淸原高尾因幡山、正つね坂田生田の森、吉野初瀨に花さきよ、河内に八橋かほよ花、花のさそふ時鳥、あたら初音の咎は告げぬぞ恨み

ふかみ―ふかの(深野)の衍、山家鳥虫歌にも此唄あり

ゆへ―いへの訛

吉野、染川、高瀬、初瀬、因幡、松が枝、藤波、河内、八橋、和泉、玉川、千手、花さき、若狭、あかしゅ(丹州也、あかしやは衍なるべし)利生、若山、せいしゅ(勢州)、吉田―いづれも遊女の名

一見れば見渡す棹さしやとゞく、なぜに我戀とゞかぬぞ

一聲は聞けども姿は見えじ、君はふかみのきり〴〵す

雲井のろうさい

一文はやりたし我身は書かず、物をゆへかし白紙が

一思ひ捨つるな叶はぬとても、縁と浮世は末を待て

一花は散りても又春咲くが、君と我とは一さかり

吉原（かはり名よせ）たゞのり

一花を吉野と見る人の、戀路に迷ふ三谷のはて、情に思ひ染川や、末を高瀬と聞くからに、同じ初瀬の浪枕、君もろともに因幡山、松が枝花の藤波や、河内八橋をりを得て、われは思ひにやせわたる、わかれ〳〵和泉の玉川や、されば千手の誓にも、枯れたる木にも花さきや、若狭は二度となきものをと、何歎くらん思ひあかしやと、御利生あるこそ嬉しけれ、めては若山せいしゆの君、げにや誠に痴話事の、ころは吉田のなりの

さきよ—ききよう(桔梗)の訛か

おりん—松虫の聲はりん〳〵と鳴けば也

ふるくさ—深草の訛なるべし

常磐—常世の訛か

かたばちかはりぶし

一一方ならぬ思ひをすれば、枕もきけよ夜こそ寝られね

一さす盃は三世の機縁、二世まで契るさすぞ盃

一短夜の月よ、語りも足らぬ山時鳥、初音こひしや．

一あこがれて我はさきよの花よ、情に一夜宿をかるかや

一夢の間の浮世死んではいらぬ、お情あらば命あるうちに

一あらなつかしの松虫の聲や、聲きくたびにおりん戀しや

一つれなき君に相馴れそめて、浮名は龍田思ひふるくさ

一怨みのあるも思ひのあまり、思はぬ君には怨みなやつらや

一空飛ぶ雁は常盤へ行くか、我等も故郷都戀しや

一破れた橋は渡るが大事、主あるきさまを引くが大事よ

一寺々の鐘は撞きても鳴るが、縁つきぬればならぬものかな

一行平(ゆきひら)の事を松風に問へば、一村雨ごとに涙ばかりよの

一あの君さまは稻荷の紅葉、色薄けれどはまに深草の、見れば心も消え〲と

すゞむし

一うらめしの鈴虫松虫、鳴くべき原では鳴きもせで、君さまとわれとの間を、きれんやきれ、あんれきれきれ、ちんからころりと鳴くのにくさよ

葛の葉

一我戀は葛の裏葉のきり〲す、うらみては鳴きうらみては鳴く

人目の關

一思へども人目の關にとめられて、心ばかり通ひきぬらん

坊の津

一名の立つをしさに出て見れば、庭の雪に跡あり、これこそ形見よ、雪消えな〱

一坊の津の中の妹背はかはるとも、君もかはらじ我もかはらじ

はまに—たまに(偶)の衍か

うらみ—恨、裏見

えいー感詞

かへろうー鹿の鳴聲「かへろ」に「歸らう」をかく

音や夜嵐の、悲みの聲虫の音の、まじりて落つる露涙、ほろ〳〵はら〳〵といづれ砧の、聲やらん〳〵

かはり伊勢ぶし

ひきよく

一我庵は都の巽しかぞすむ、世をうぢ山と、えい人はいふなり喜撰法師よ

一天下泰平長久に、治る峯の松風、雛鶴はちとせふる、谷の流に龜遊ぶ

一桐壺の更衣の、比翼連理の契も、定めなき世の習ひとて、夢のうちぞ悲しき

一たそや此夜中にまぎれ、板戸を叩くは、雲井の雁がねか、水雞の告ぐる聲々

一うらめしき我緣、薄雪の契か、消えにし人の形見とて、涙ばかりや殘るらん

一行き暮れて旅の道、うらぞ淋しき浪の音、かへろうと鹿の鳴く聲に、我も夜すがら泣きあかす

一武藏の野邊に月の出づべき山もなし、町よりいでて町にこそ入れの

きたりて―來と著とにかく問ふべきと―問ふべきぞの衍か

きぬたのまき歌浄瑠璃

一衣におつる松の聲、夜さむを風や散らすらん、おとづれの〳〵稀なる中の秋風に、憂きを知らする夕かな、面白のをりからや、頃しも秋の夕つかた、小鹿の聲も物すごし、見ぬ秋風を送り來て、梢はいづれ一葉散る、空すさまじき月影の、軒の荵にうつろひて、露の玉だれかゝる身の、思ひをのぶる夜もすがら、嵐の音を殘すなよ、今の砧の聲そへて、君がそなたに吹けや風、あまりに吹きて松風よ れいぜい節 わが心通ひて人に見ゆならば、よその夢ばし守るなよ、破れて後は此衣、たれかきたりて問ふべきと、きて問ふならばいつまでも、衣はたちもかへなん 下歌 夏衣うすき契はいまはしや、君が命は長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣うたうよ、彼の棚機の契には、一夜ばかりのかり衣、天の川波たちへだて、逢瀬かひなき憂き秋の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしぼるらん、水かけ草の露ならば、波うちよせようたかたの、その はうたぶし 文月の曉や、八月九月げにまさに、長き夜の〳〵、月の色風けしきまで、砧の

き事こそいたはしけれ、いつかがやうに彼の方と、一夜なりともわがまゝになさば、などかは今の思ひは有明の、月まつ程のうたゝ寢も、ならぬ此身はそもいかに、いつの世の報いぞや、とは思へども御身と我身かはらずば・末は逢瀬となるべしと、思ふ心をたよりにて、少しの憂きを凌ぎけり、かゝる所にいづくともなく、物音高く聞えしは、もしも籬の音なるか、いて見給へとありしかば、しばたちいで其方のかたを眺むれば、砧の音こそ聞えける、げにや我身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ふぞや、唐土にそみんといつし人は、胡國とやらんに捨ておかれしが、故里にとゞめ置きたる忍び妻、そさむの寢覺を思ひやり、高樓に登つて砧を打つ、思ひの末の通りけるか、萬里の外なるかそみんが方に、故里の砧聞えけり、それゆゑ憂きをも凌ぐかなれば、わらはも思ひや通らんと、とても淋しきくればどり、綾の衣を砧に打ち、少しの思ひを晴らさんと、薄雲きぬを取り出だし、いざ〳〵砧うたんとて、馴れてふすまの床の上、涙かたしく狹筵に、紫たちより諸共に、怨みの砧うつとかや

いて見給へ—往て見給へ
しばたちいでて—しばしたちいでての誤か

そさむ—前にそみんとあり、原本のまゝ
かそみん—かのそみんの誤か

薄雲—遊女の名

紫—同前

ともうけへ—誤字あるべし

なほすな—直すのは

たへかいちかいに—互ひちがひにの意か

おもはく—情人

なきこの酒—なさけの酒の誤か

には、憂きもつらきも君とわれ、同じ冥途の苦みは、ともうけへはうらめしや

ほそりづくし

一ほそりのやれ出所は大和の壺坂、その節なほすな美濃の谷汲、おしやれば誠にのうさて美濃の谷汲

一われも他國よ、貴所さまも又他國よ、たへかいちかいに、のうさてお目をくださありよ、おしやれば誠にのうさてお目をくださりよ

一城の御門で今朝見た又若衆は、筆がな墨がな、のうさて硯紙がな、給に書き寫して、のうさて國の土産に、おしやれば誠に、のうさて國の土産に

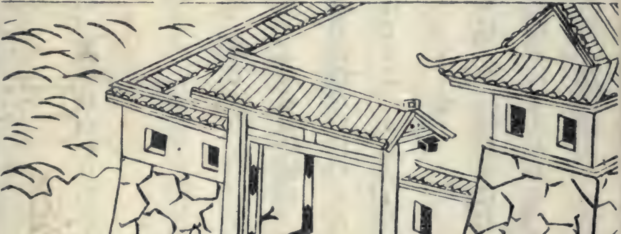
れんぼのきぬた

一あはれなるかな人々は、勤も今はうか〳〵と、只いたづらになり給ふ、ある夕暮の事なりしに、あまり彼の方戀しさに、いざやそもじをおもはくと名づけて一夜あかさんと、傍輩ながらたはぶれて、なきこの酒と名づけつゝ、さいつさゝれつ諸共に、くど

一まハさらしのおもて
せきのやしらじこうて
月ハうき雲の浮ふ
ゆられて立ゐそち
とうしん形くるしれ
一ゆふべよ月ハねさ
草の浮世をふみ分け
あのすりうに志どろ
むどろく來ゆへぞる
生んぞむろれつれし
一よぎり
一すゑ山と雲ると
忍れハゆきでハあそで
よれの花のふゞきよの
こぼれ乃
一きえてあすべしてゆ



あさけの花ハあふと見
なうりつれよされしぞ
おわれしわ命し
一昔も今もこひする
人にわたつまされて
はおもひ出ろよあ
二十あや六のさうきの
かぎりしやでやくれ
よんにおのかざるよあ
あかそからまし
これそられからへのくえ
ゆるゆきまおきくれ
すみだ川あしまつく
かきそてそれらゑ
のあみかきをと
きんびのもりけり



れんれゝれつれ—はやし詞
れんぼ—戀慕
背戸や—やは接尾辭
一節切—一夜限にかけていふ
いのたけ—心のたけの誤なるべし
けうとげ—氣疎氣にて淺ましやの意

れゝれつれ

一ゆふべ〳〵に身は淺草の、露を踏みわけあの吉原に、しどろもどろと君ゆゑ辿る、れんぼれゝれつれ

ひとよぎり

一吉野の山を雪かと見れば、雪ではあらで、これの花の、吹雪よの、これの

一なれ〳〵茄子背戸やの茄子、ならねば嫁の、これの嫁の名の立つに、これの

一君があそばす尺八を、其名は誰かつけつらん、一節切とうらめしや、千代萬代のよをこめて、いのたけはかはるなよ、ふし〴〵なれば、名の立つに〳〵

夢の通路ひらくくずし

一人の身を露の命といふ事は、終には野邊におけばなれ、百の媚ある姿をば、けうとげ野らに捨てられて、骸は浮世にとまれども、こんな冥途に行く道の、あらさびし此旅の空、誰に問はまし道芝の、露か涙かうらめしや、とは思へども二世かねたるしるし

の誤

かんたどの—かんどり(梶取)殿の意か、閑吟集には「人買舟は沖をこぐとても賣らるゝ身を只靜にこげよ船頭殿」とあり

あの君さま—此唄「梨の木育ちゆすれど落ちぬ梨の木よ」の誤か

まし—ぶしの誤なるべし

あらし—近江の誤か、近江菅笠は名産也

笠もて—笠買ての誤か

一昔見し月の光をしるべにて、今宵や君西にゆくらん
一淺き契に相馴れそめて、中々今はすむまじきぞ我心
一あの君さまに久しうて見れど、白玉椿色も變らぬよ
一あの君さまはなめの木の育ちゆなれど、落ちぬめなしの木よ
一情の花は逢ふ時ばかり、別れになれば萎れ萎るゝ
一昔も今も戀する人は、身につまされていとしう御座るよの
一十五や六の座敷のかざり、芍藥牡丹庭のかざりよの

あふみかはりまし

一これから見れば上野(うへの)が見ゆる、湯島淺草隅田川、あらしにつゞく笠もてたもれ、上野編笠を

れんぼのかはり

一君は五月雨(さみだれ)おもはせぶりや、いとゞ焦るゝ身は浮舟の、浪にゆられて島磯千鳥、れん

よのさま—かのさまの誤なるべし

久よ、ためよ、植ゑよ—いづれも「よ」は「し」の衍、詞花集「君が代の久しかるべき例にや神も植ゑけん住吉の松」

住よこ—住よし

吉原はやり小歌そうまくり

さかなはうたづくし

一ゆくする廣き武藏野の、廣き惠みのくをりなれや

一槇の戸よりて明石の月を見つ人心、天津乙女のへだてなく、思ひ思はず物がたり、長き夜すがら幾秋も

一くるくとめぐり合ひ、はやよのさまにいつか逢瀬の浪枕

一あめが下皆うるほひて、二葉の松もはえそへて、千代の初めにく

一君が世の久よかるべきためよにも、かねてぞ植ゑよ住よこの松

一山烏たれを恨みて墨染に、淺き契に相馴れそめて、中々今は中々に

一人買舟かうらめしや、とても賣らるゝ身ぢや程に、靜に漕ぎやれかんたどの

此本右に序あり浅草大門口衣紋坂五十間道の茶屋の板元にて…
…し摩滅してよめかたきゆへ…
元板ハ万治二年庚子より寛文二年壬寅まで…
寛政の比…を再板し寿鶴堂…と…

加へしものなり

万治二年

新よし原へ駄ちん附

一 日本ばしより大門まで
　馬奴（まご）二人にてのりかけ　白馬駄ちん　三百四十

一 浅草田町より　大門まで
　馬奴二人にてのりかけ鞍白馬駄ちん　三百廿文

一 浅草観音前より大門まで　駄ちん　百三十二文
　馬子二人にてのりかけ白馬だちん　二百四十八文

石上古き世の物を見れば、其比はとありけんかゝりけんと、萬の事どもしのばれてすゞろにゆかしくなん、爰に同じ心の友人琢玉齋の翁今より百とせあまり六十年ばかりあなた萬治三年といふとし板にゑりたる新吉原のゑざうしの、たまさかにやれ殘りて友だちのひめ置きしを、此度せちに乞ひ求め寫しとりぬとて、もてきませるを見れば、今樣とは事かはりいたく古代にて、遊女のかた小歌のさまみやびかにをかしう、さらに〳〵目とまる双紙なりけり、かゝる珍かなるものをいたづらにせんも惜らしきわざなれば、同じくは昔慕ふともがらの爲に、再び板にゑらんとて、おのれにはし書乞はるゝを、稲舟のといらへつれど、しひてもよほさるればすべなう、聊その故よしかいつけぬ、文政二年といふとしの彌生のはじめ

古代よし原小歌鹿の子

文祿二年八月日

自庵
隆達

只置いて―此唄閑吟集にあり

そなたよりこそ―そなたより此方にこそ怨みはあれ

うき世もめされ―浮世狂ひ卽ち色遊びもせよと也

一只置いて霜に打たせよとかいの、夜ふけて來たが憎い程に

一思ひよらずの腹立て顔や、怨みは數々そなたよりこそあるものを

一叩く妻戶はあけもせで、まづは明けたよ、ほの〴〵と明けた

一數ならぬ身には思ひのなかれかし、人なみ〳〵に物思ふ

一八島の磯の荒波かそなたは、寄せつ打ちのけ物思はする

一ぬれてこそ歸るらう君は朝露に、我袂もかわかぬものを

一鳥と鐘とは思ひの種よ、とは思へども人によりけ

一ふりよき君の情のないは、冴えゆく月にかゝる叢雲

一逢ふまでの命もがなと思ひしに、くやしや君のつらければ

一すみかとて柴のいほりもなつかしや、都なれども旅は憂いもの

一後生を願ひうき世もめされ、朝顔の花の露よりあだな身を

一心なしとはそれけよ、冴えた月夜に黑小袖

鐘打たう―仕馴れたる業をはたとやむる事をいふ、佛家の儀式の合圖より起りし語なり

うらみね―怨寝、浦見ね

一日ぐれ〳〵にかどに立ち見てゐ、君をよそながら

一咲く花も千よ九重八重櫻、何ぞ我身のひとはな心

一よそのつらさを見ればこそ君のお情の思ひ知らるれ

一逢ひも見もせぬ咎もなき我に、悋氣めさるゝ、鐘打たうかのそなたに

一逢はぬ程こそ頼みなれ、今朝の別れの、お物憂や

一君ゆゑにかゝる憂名の立田山、もみぢ葉よ只色にでて

一夢になりとも情はよいが、人のつらさを聞くもいや

一君ゆゑならば雪の野に寝よゝ、よしや此身は消ゆるとも

一いやとおしやるも頼みあり、青柳よりも雪をれの松

一富士や淺間も何ならん、君思ひ寝の胸のけぶりは

一底は打解けてうはの空するふりは猶いとをしい

一君は月思ひ明石のうらみねは、すまの浦波須磨の浦

わざくれ—まゝよ

目には見て—伊勢物語の歌

一寝ても覺めても忘れぬ君を、焦れ死なぬは異(い)なものぢや

一夢に見えつうつゝに馴れつ、お笑止とさらぬ面影や

一闇にさへならぬ、月にはとても、あら鈍(どん)なお人や

一山の端にこそ月はあれ、戀の道には月もなや

一夢の浮世の露の命の、わざくれ成次第よの、身は成次第よの

一色よき花の匂ひのないは、うつくし君の情ないよの

一月の夜にさへ來ぬ人を、なか〱待たじ雨の夜に

一ひとりも行きれ、ふたりも行く、殘りとゞまれと思ふ人も行きれ

一目には見て手には取られぬ月のうちの、桂の如き君にぞありける

一來ぬ人をまつの葉に降る白雪の、消えこそかへれ消えこそかへれ

一とはれぬ程は曇らば曇れ、つひにうつさん袖の月影

一思はゞ思へ恨めしのふりや、報(むくい)の早き世にありながら

かたびら雪—大びらの雪をいふ

寝ならし—寝巻をいふ

礒にすむまじ—此唄閑吟集に、「みる〳〵戀となる物を」とありみるめ—海松、見る目

なほ—尚一層面白かるべし

一忘るゝものを又ふりかゝる、かたびら雪の消えもせで

一帯をやりたれば、しならしの帯とて非難をおしやる、帯がしならしならば、そなたの肌は寝ならし

一つゝめども色は涙にあらはれて、袖にとく〳〵とくとくとくと

一千夜もゝよは及びなや君、いなの小笹（をざさ）のせめてひと夜を

一つゝめども色には出るぞ、これ見よ袖の涙を

一礒にはすむまじ、さなきだにみるめに戀のまさるに

一逢へば人知る、逢はねば肝（きも）がいらるゝ、あ笑止やの

一いとはるゝ身となりはてば、せめて我身の咎も身の咎も身の咎もがな

一初夜かと思うた、あ憂（う）や、別れの六つぢやもの

一おもしろのお月や、ふたり見ばなほ

一君の情の深きゆゑか、思ひし程は名も立たぬ

一曇らばくもれ照るとても、君を思ひの晴るゝでもなし

一又も逢はうずは不慮でれ、優曇華の花今ばかり

一花を嵐のさそはぬさきに、いざおりやれ花をみ吉野へ

一花を嵐の散らすやうな雪に袖打拂ひ、誰（たれ）かおりやらうぞの

一花が見たくば吉野へおりやれの、吉野の花は今がさかりぢや

一あるはいやなり成るもいやなり、思ふは成らず、扨もよしなやな、なとせうぞの

一立たば立て我名、君ゆゑならば惜しからぬ命

一悋氣心か枕な投げそ、投げそ枕に咎（とが）はよもあらじ

一いや〳〵は思ひの餘りのうら、合せてたまうれ合せてたまうれ、とにかくに思ひ切れとよ

一ちたびもゝたびおしやるとも成るまじものを、うつゝなのそなたや、我にぬしある、

一たとへ事には便（びん）なけれども、身の影法師（かげぼふし）に君をなして添はいで

なと―何と

便なけれども―不都合なれども

ひとよぎり—一節切
わが—輪が、我

一思ひきりたる雨の夜に、夢かや君のおとづれは
一手に手をしめてほと〳〵と叩く、我はそなたの小鼓か
一誰(たれ)かつくりし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ
一誰か再び花さかん、あたゞ夢のまの露の身に
一ひとりおよらばまゐらうずものを伽に、雨降り眞(しん)の闇(やみ)なりと
一夢にも見ゆらんとまどろめば、笑止と雨の枕うつ音
一まどろまば夢にも見るべきに、うつゝなや戀には目も合はぬものか
一忍ぶ中よそへ漏すな、かはるとも、添はぬは憂世、名こそ惜しけれ
一君かや闇には訪ひもこで、月にはあらはれて名の立つにの
一尺八のひとよぎりこそ音(ね)もよけれ、君と一夜(ひとよ)は寝も足らぬ
一情かけうもの、くやしやな、なんぼう戀には身が細る
一人はよいものとにかくに、やぶれ車よわがわるい

のかいはなさい—のけはなせ

落つる—戀におつるをいふ

色には出ぬ—出ぬは出さぬと讀むべきか

一のかいはなさい帶がとくる、今にかぎらうか逢はうものを

一獨寢もよやの、あかつきの別れ思へばの

一ひとり寢はいやよ、あかつきの別れありとも

一竹ほど直(すぐ)なる物はなけれども、雪々積れば末は靡くに

一月もろともに立ちいでて、月は山の端に入る、われは妻戸に

一亂れそめては人目もいらぬ、馴れぬ昔に思案せうずもの

一忍ぶ身にさへ悋氣をめさる、忍ばぬ身ならば扨何とあらうぞの

一そなた忍ぶと名はたちて、枕ならぶる間(ま)もなやの

一つれなのふりや、すげなの顏や、あのやうな人がはたと落つる

一忍ぶ身なれば色には出ぬ、あたゞ心をつくすよの

一八重だつ雲の上人に、馴れてくやしや捨てらるゝ

一人には馴れて馴れまじものを、今此思ひ何にたとへん

賴むぞ云々―我傍なる扇も帶も願はくば祕密を洩す勿れ

いつもあかつき―閑吟集に、「めぐる外山に鳴く鹿は逢うた別れか逢はぬ恨みか」

心氣―心のいらだち惱ましきこと

一人は知るまじ我中を、賴むぞそばの扇も帶も

一とても消(き)ゆべき露の身を、夢のまなりと夢のまなりとも

一いつもあかつき鳴く鹿は、逢はで鳴く音(ね)か、逢うて別れを鳴く音か

一いへば世にふる世にふるゝ、いはねば憂人(うきひと)のそれと知らばや

一此春は花にまさりし君持ちて、青柳のいと亂れは

一心氣(しんき)の花は夜々に咲く、情の花のひと夜咲かぬか

一鐘も鳴る夜も更けは、あぢきなの我身や、獨寢をする

一鐘さへ鳴ればもいなうとおしやる、こゝは佛法東漸のみなもと、初夜後夜の鐘はいつも鳴る

一長の枕に廣のしとねや、明けぬ夜や、さて捨てらるゝ憂身は

一生るゝも育ちも知らぬ人の子を、いとをしいは何の因果ぞその

一夏の夜を寢ぬに明くるといふ人は、物を思はぬか物を思はぬかの

やれ笠―破笠
きもせで―來と著とにかく、此唄閑吟集に、「身は破れ笠よのう、きもせでかけておかるゝ」とあり

一思ひよらずの會釋(ゑしやく)のふりや、恨みのこともはたと忘れた

一面影は手にもたまらず又消えて、そはぬ情の怨みかずかず

一雨のふる夜の獨寢はいづれ雨とも涙とも

一引かば靡けとよ糸薄、枯野になればいらぬ憂身を

一怨みたけれども、いや身の程もなや、惣じて怨みも人によりけれ

一しばし待て硯の上のうす氷、打ちとけてこそ文もかゝるれ

一身はやれ笠きもせで、すげなの君や掛けて置く

一しぐれけれもの神無月、晴れては曇りふりごころ

一君の心が變れかし、つれなき心の

一梅は匂ひよ木立はいらぬ、人は心よ姿はいらぬ

一武藏野のひともと薄、獨寢も憂やつれもなや

一とても名の立たば宵からおりやれ、よそへ忍びの歸るさはいや

しゆんな―身にしみ〲感ずる意か
みゝゆる―會見する
程―際限

一よしや思はじと思へども、心まかせにならぬよの
一志賀の浦とてしほはないが、顔のゑくぼは十五夜の月
一物のしゆんなはの春雨、猶もしゆんなは旅のひとりね
一花に嵐の吹かば吹け、君の心のよそへ散らずば
一ひとり寝てふたりぬる夜の有樣を、語るな人に、のう枕
一みゝゆると情(なさけ)あれかし、夢にさへつれなの振(ふり)や、のう君は
一月は濁りの水にも宿る、數ならぬ身に情あれ君
一花よ月よと暮せ只、程は無いもの憂世は
一憂世は夢よ消えてはいらぬとかいのう、とけてとかいの
一せめて詞をうらやかにの、今歸るわれに何の怨みぞ
一夢は隔てず海山をこえても見ゆる、夜な〱に
一月待つ月はさえもせで、君待つ月はさゆるよの

よの—感詞

歸る姿を—此唄閑吟集に、「うしろ影を見んとすれば霧がのう朝霧が」とあり

身はならはし—小町家集、「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける」閑吟集に「ふたり寢しものひとりもねられけるぞや身は習はしよのう身は習はしの物かな」

一なう亂れそよの糸薄、いとゞ心の亂るゝに

一みめがよければ心も深し、花に匂ひのあるもことわり

一君も見るやと眺むれば、うはの空なる月もなつかし

一待てとはそなたのそら情(なさけ)心(ごころ)よ、いや待つまじや待つまじ

一明日(あす)をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうらやかに

一歸る姿を見んと思へば、霧がの、朝霧が

一ひとりも寢けるもの寢られけるもの、習はしよの、身はならはしのものかの

一笑止や憂世やうらめしや、思ふ人には添ひもせで

一袖を引くとて腹なな立てそ、深山(みやま)石坂の坂のいばらを人のひかばや

一月夜のうさよ〳〵、闇なるべくは曇らじをくもらじを

一ちとせ經(ふ)るとも散らざる花と、心の變らぬ人もがな

一そなた故にぞ身を焦す、さらばけぶりと消えもせで

みるめ—見る目、海松
ひるま—干る間、晝間
よる—寄る、夜
ちやうはんかね—未詳

一枕の海は浪立つばかり、さらばみるめのありもせで
一逢はぬ恨みはつもれども、見れば言の葉もなし
一うらみあるこそ頼みなれ、思はぬ中はふらずふられず
一逢ふは稀よ獨寝はしげし、あの君ゆゑにあらぬ名の立つ
一逢ふ時は秋の夜もはや明けやすや、ひとりぬる夜の長の夏の夜
一縁さへあらば又もめぐり逢はうか、命に定めない程に
一野分山おろしも身にしまぬ、宵々ごとに君を待つには
一比翼連理のかたらひも、心かはれば水に降る雪
一思はゞ君よ、しほひるまにも、必ず波のよるとなしとも
一問へば問ふとてふらるゝ、とはねばつらるゝ
一君待ちて待ちかねて、ちやうはんかねの其下での、した〳〵した〳〵した〳〵をふむ
一いかにせん〳〵とぞいはれける、物思ふ時の獨言には

隆達小唄集

一君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巌となりて苔のむすまで

一思ひ切れとは身のまゝか、誰かは切らん戀の道

一雪折れ竹をそのまゝ垣に、世は皆人のいひなし

一月夜の烏はほれて鳴く、我も烏かそなたに惚れて泣く

一不審(ふしん)ならば鐘(かね)打たう、いや鐘(かね)も無益(むやく)、たゞふりにて知るものを

一そなた故にこそ憂名(うきな)の立つに、のう驚けよの、まづはおよるよの

一相思ふ中さへかはる世の習ひ、ましてやうすき人な頼みそ

一種とりて植ゑじ、植ゑなば武藏野もせばくやあらん、わが思草

一みるめばかりに波立ちて、鳴渡(なると)舟(ぶね)かやあはでこがるゝ

世は皆人のいひなし—世に節の意をかけ、言ひなしに結ひ成しをかく
ふり—擧動
驚け—目をさませ
およる—眠る
あはてこがるゝ—逢はて焦るゝ、阿波で漕がるゝ

隆達小唄集

近代歌謡集 目録

本集校訂にあたり、讀者の便宜を謀りて、句點をつけ、假名遣を一定し、漢字を宛てたれども、聊にても文意の疑はしきもの、發音に差異を來すべきもの、淸濁の轉訛等、すべて歌ひ物として注意すべき所は、一切原本のまゝにして改訂を加へず。

大正四年七月　　校訂者　藤井紫影

一松の葉　組歌長歌端歌吾妻淨瑠璃投節等を結集し、採錄頗る廣く、俗謠集中最も著名なるものにして、元祿十六年秀松軒の編する所なり。

一增補松の落葉　寶永七年扇德の編にて、松の葉に漏れたる吾妻淨瑠璃踊歌歌舞妓芝居の唱歌等を收む。

一若みどり　寶永三年靜雲閣主人の編にて、長歌端歌吾妻淨瑠璃等の新曲を收む。正德三年此書を續松の葉と改題したるも、たゞ吾妻淨瑠璃に「かよひぢ」の一曲を增加したるのみにて、其他は全く相同じ。

一松月鈔　琴の組歌の註釋書中最も古きものにして、元祿七年吉田邑琴子の著なり。元祿十二年出版の知音之媒といふ書は、これを剽竊したるものにて、挿畫を改め頭註の辭句を少しく改竄して別册に移したるに過ぎず。

一三阮歌曲解　上方唄の散紅葉と雪との評釋なり。こは萬葉集古義の著者として知られたる鹿持雅澄がすさびなり。

文といふは誤也と斷言せり。とにかく初板を萬治三年再板を寛文二年といふは疑問なり。玆には文政二年琢玉齋の覆刻本を採用せり。

一山家鳥虫歌　京都大學藏本にて上下二册あり。（下巻は寫本にて補足）諸國盆踊唱歌の外題にて我自刊我書中に收めたるものの原本と思はる。我自刊我本（之によりたる國書刊行會本も）は近江美濃飛驒信濃上野の部を闕き、尙其他三首合計二十三首を脱せり。我自刊我本の原本としたる種彦舊藏本（和田維四郎氏所藏）は山城の部に一首不足したるのみにて、其他は遺漏なしとの事なれば、刊行の際寫しおとしゝなるべし。

一糸竹初心集　一節切琴三味線の手引として著されたるもの、寛文四年版と寛文十二年版（山形屋吉兵衞板）とあり、尙挿畫を改めたる零本を發見したれば、都合三版あるものの如し。本書頭註に再版本といへるは、寛文十二年版をさすものと知られたし。

一當世こうた揃　紙數十四丁の小本にて五ヶ所に遊女の繪を挿み、簡單なる詞がきを添へたり。原本は京都大學の藏本にて笠亭仙果の影寫にかゝる。元祿頃の刊行なるべきか。

緒　言

本集は隆達小唄集以下十種を收め、近世俗謠の主要なるものを網羅せり。

一隆達小唄集　慶長より天和の頃まで隆達節とて專ら世に行はる。隆達の事蹟は堺鑑（天和三年著）に「高三（タカザウ）隆達、元は日蓮宗の僧、當津顯本寺の寺内に住す、故ありて還俗し、高三氏の家に往て藥種を商ふ、年を經て小歌の節を一流謳ひ出すより、世俗隆達流とて謳ひ賞翫す」とある外所見なし。某氏所藏の肖畫に「自在院隆達慶長十六年十一月二十五日寂八十五歳」と記したれどいかゞにや。慶長元和頃の年月日を記し自庵隆達と署名せる節付の寫本往々世に存す。（寛文の書籍目録にりうたつのうた一冊とあれば刊本もありしなるべし）就中大槻如電氏の藏本歌數最も多きを以て之に據れり。

一吉原小歌總まくり　北里に流行したる小歌を集む。萬治板といふもの今存せず、所謂寛文板なるもの二本を見たれども、序跋も刊行年月もなく、只紙末に「江戸さかい町中島屋伊左衛門」と版元の名あるのみなり。種彦は其著足薪翁之記に天和二年印行とし、寛

近代歌謠集

全

